

# 京都市内遺跡発掘調査報告

令和5年度

2024年3月

京都市文化市民局





1 柱穴1 遺物出土状況（南東から）



2 柱穴1 動物遺存体検出状況（南西から）



1 山田桜谷1号墳 1区全景（東から）



1 赤色立体地図における山田桜谷1号墳の直線地形



2 1区墳輪列検出状況（東から）



1 西櫓台全景（北東から）



2 西櫓台東面石垣及び土坑1（東から）



1 西櫓台西面階段（北西から）



2 下段石垣と西櫓台（東から）

## 例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁の国庫補助を得て実施した、令和5年度の京都市内遺跡発掘調査報告書である。本書では令和4年度・令和5年度に実施した発掘調査成果を報告する。
- 2 調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体となり、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。
- 3 調査地・調査期間・調査面積・調査担当者は、下記のとおりである。
  - I 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（受付番号 22K472・22K580・22K588）  
京都市上京区千本通下立売下る小山町908-29の一部、908-29、908-102  
2023年4月3日～5月12日 65㎡ 赤松佳奈
  - II 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（受付番号 23K091）  
京都市上京区榎木通千本東入る小山町877-3  
2023年6月26日～7月14日 20㎡ 赤松佳奈
  - III 円宗寺跡（受付番号 22S448・22S449）  
京都市右京区御室小松野町18-6、18-10  
2022年11月28日～12月28日 80㎡ 佐藤拓
  - IV 植物園北遺跡（受付番号 23S225）  
京都市北区上賀茂南大路町18  
2023年10月2日～11月2日 143㎡ 奥井智子
  - V 雲林院跡（受付番号 23S087）  
京都市北区紫野雲林院町13、14合地  
2023年6月29日～8月25日 212㎡ 八軒かほり
  - VI 中臣遺跡（第95次）（受付番号 22N639）  
京都市山科区勸修寺東栗栖野町68-5、68-6、68-7  
2023年5月10日～5月26日 73㎡ 佐藤拓
  - VII 石見城跡、長岡京右京一条四坊十・十五町跡（右京第1259次）  
（受付番号 22A007）  
京都市西京区大原野石見町324-1、329、330  
2022年11月14日～12月21日 242㎡ 黒須亜希子
  - VIII 長岡京跡隣接地（溝路遺跡）（受付番号 22A011）  
京都市南区久世殿城町190-1、191-1  
2023年2月13日～3月3日 57㎡ 八軒かほり
  - IX 山田桜谷古墳群（受付番号 22A009）  
京都市西京区山田桜谷町





# 本文目次

## I 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（1）

1. 調査経過	1
2. 遺跡	1
3. 遺構	3
4. 遺物	11
5. まとめ	13

## II 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（2）

1. 調査経過	17
2. 遺跡	17
3. 遺構	19
4. 遺物	21
5. まとめ	22

## III 円宗寺跡

1. 調査経過	24
2. 遺跡	24
3. 遺構	26
4. 遺物	31
5. まとめ	37

## IV 植物園北遺跡

1. 調査経過	38
2. 遺跡	39
3. 遺構	42
4. 遺物	48
5. まとめ	52

## V 雲林院跡

1. 調査の経緯と経過	54
2. 遺跡	56
3. 遺構	59
4. 遺物	71
5. まとめ	77

## VI 中臣遺跡（第95次）

1. 調査経過	78
---------	----

2. 遺 跡	79
3. 遺 構	80
4. 遺 物	82
5. まとめ	83
VII 石見城跡、長岡京右京一条四坊十五町跡（右京第1269次）	
1. 調査に至る経緯と経過	84
2. 位置と環境	86
3. 調査成果	88
4. まとめ	97
VIII 長岡京跡隣接地（溝路遺跡）	
1. 調査の経緯と経過	99
2. 遺 跡	99
3. 遺 構	103
4. 遺 物	107
5. まとめ	108
附章. 長岡京跡隣接地（溝路遺跡）から出土した動物遺存体	109
IX 山田桜谷古墳群	
1. 調査の経緯	111
2. 地理と歴史的環境	113
3. 過去の調査	114
4. 遺 構	115
5. 遺 物	121
6. まとめ	126
X 周山城跡	
1. 調査経緯	130
2. 遺 跡	133
3. 遺 構	134
4. 遺 物	142
5. まとめ	142

# 図 版 目 次

## 巻頭図版 1 長岡京跡隣接地（溝路遺跡） 遺構

- 1 柱穴 1 遺物出土状況（南東から）
- 2 柱穴 1 動物遺存体検出状況（南から）

## 巻頭図版 2 山田桜谷古墳群 遺構

- 1 山田桜谷 1 号墳 1 区全景（東から）

## 巻頭図版 3 山田桜谷古墳群 遺構

- 1 赤色立体地図における山田桜谷 1 号墳の直線地形
- 2 1 区埴輪列検出状況（北東から）

## 巻頭図版 4 周山城跡 遺構

- 1 西櫓台全景（北東から）
- 2 西櫓台東面石垣及び土坑 1（東から）

## 巻頭図版 5 周山城跡 遺構

- 1 西櫓台西面階段（北西から）
- 2 下段石垣と西櫓台（東から）

## 図版 1 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（1） 遺構

- 1 3 区第一面全景（北東から）
- 2 3 区瓦溜り検出状況（北東から）

## 図版 2 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（1） 遺構

- 1 3 区整地土断面（西から）
- 2 1 区西壁断面（南東から）

## 図版 3 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（2） 遺構

- 1 1 区第 1 面全景（北から）
- 2 1・2 区下層確認トレンチ全景（南東から）
- 3 1・2 区西壁断面 オルソ図面

## 図版 4 円宗寺跡 遺構

- 1 1 区第 2 面全景（東から）
- 2 1 区第 3 面全景（東から）

## 図版 5 植物園北遺跡 遺構

- 1 第 1 面全景（東から）
- 2 ピット 3 断面（西から）
- 3 ピット 9 断面（西から）
- 4 第 1 面整地土下部検出状況（北西から）

図版6 植物園北遺跡 遺構

- 1 第1面整地土下部石敷き状況（東から）
- 2 第1面整地土下部石敷き状況（西から）
- 3 整地土下部石敷き土器出土状況（北西から）
- 4 整地土下部石敷き土器出土状況（北から）

図版7 植物園北遺跡 遺構

- 1 第2面全景（南西から）
- 2 東壁断面及び南北断割り状況（南西から）

図版8 雲林院跡 遺構

- 1 第4面南半全景（北東から）
- 2 第4面SD95から大徳寺通（旧大宮通）を望む（東から）

図版9 雲林院跡 遺構

- 1 第4面SD95・SX84断面（西から）
- 2 第4面SD95検出状況（西から）
- 3 第4面SX84遺物出土状況（南から）
- 4 第3面SX60・77検出状況（北から）
- 5 第3面SP78藁縄検出状況（北東から）

図版10 雲林院跡 遺構

- 1 第3・4面全景（北東から）
- 2 第2面全景（東から）

図版11 雲林院跡 遺構

- 1 第1面全景（南東から）
- 2 第1面SX5完掘状況（西から）
- 3 礎石3断割状況（南東から）
- 4 礎石4断割状況（南から）
- 5 礎石5断割状況（南から）

図版12 雲林院跡 遺構

- 1 礎石1・2・8・9全景（北東から）
- 2 礎石1・8断割状況（南西から）
- 3 礎石2・9断割状況（南西から）

図版13 中臣遺跡（95次）遺構

- 1 1区全景（西から）
- 2 2区全景（西から）

図版14 長岡京跡隣接地（溝路遺跡）遺構・遺物

- 1 調査区全景（北東から）

- 2 調査区南半全景（東から）
  - 3 調査区拡張部全景（南から）
  - 4 柱列（柱穴1・2）完掘状況（南東から）
  - 5 柱穴1出土遺物 墨書土器
- 図版15 山田桜谷古墳群 遺構
- 1 墳丘側1区全景（北東から）
  - 2 1区全景（東から）
  - 3 1区葺石検出状況（東から）
- 図版16 山田桜谷古墳群 遺構
- 1 1区埴輪列検出状況（東から）
- 図版17 山田桜谷古墳群 遺構
- 1 1区傾斜変換点A検出状況（南東から）
  - 2 1区傾斜変換点A検出状況（北東から）
  - 3 2区調査区全景（北西から）
- 図版18 山田桜谷古墳群 遺物
- 1 埴輪5
  - 2 埴輪41
  - 3 埴輪41底部裏面
  - 4 埴輪42
  - 5 埴輪42底部裏面
- 図版19 山田桜谷古墳群 遺物
- 1 埴輪35
  - 2 埴輪25
  - 3 形象埴輪45・49・44・43
- 図版20 周山城跡 遺構
- 1 虎口全景（南東から）
  - 2 西櫓台石垣南東隅（南東から）
- 図版21 周山城跡 遺構
- 1 西櫓台石垣南西隅と転落石（南西から）
  - 2 西櫓台東面石垣（北から）
  - 3 西櫓台北面石垣基底石据付状況（北から）
- 図版22 周山城跡 遺構
- 1 虎口階段及び土坑1（南から）
  - 2 下段石垣（西から）
  - 3 西櫓台南東隅の転落した鏡石（南から）

# 挿 図 目 次

Ⅰ	平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（1）	
図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査前風景（南から）	2
図3	重機掘削風景（北から）	2
図4	調査風景（南から）	2
図5	調査区配置図（1：400）	2
図6	周辺の調査事例	3
図7	基本層序模式図（1：40）	3
図8	1～3区西壁 断面図（1：80）	5
図9	4区東壁 断面図（1：40）	6
図10	第1面 平面図（1：80）	7
図11	平安時代の遺構（1：20）	8
図12	下層確認トレンチ配置図（1：80）	10
図13	水琴窟 平・断面図（1：40）、甕実測図（1：8）	11
図14	出土遺物実測図・拓影（土器・瓦1：4、土製品1：2）	12
図15	京都絵地図（文久2年）の千本丸太町周辺と京都所司代の位置推定図（1：6,000）	14
Ⅱ	平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（2）	
図1	調査地位置図（1：5,000）	17
図2	重機掘削風景（南から）	18
図3	作業風景（南東から）	18
図4	調査区配置図（1：200）	18
図5	西壁断面図（1・2区合成）（1：80）	19
図6	下層確認トレンチ配置図（1：80）	20
図7	1区第1・2面 平面図（1：80）	21
図8	出土軒瓦 実測図・拓影（1：4）	21
図9	SD1出土遺物 実測図（1：4）	22
図10	京都所司代の推定位置と調査地（1：6,000）	23
Ⅲ	円宗寺跡	
図1	調査地点と周辺調査（1：5,000）	24
図2	調査前全景（東から）	25
図3	1区重機掘削状況（北東から）	25
図4	1区検出状況（南西から）	25

図5	1区埋め戻し状況（南西から）	25
図6	調査区配置図（1：500）	26
図7	1区調査区断面図（1：80）	27
図8	1区平安～鎌倉時代の遺構（第3面）平面図（1：80）	28
図9	1区溝44断面図（1：40）	29
図10	1区近世前半（第2面）平面図（1：80）	29
図11	1区近世後半（第1面）平面図（1：80）	30
図12	1区ピット5断面図（1：20）	30
図13	2区柱状図（1：40）	30
図14	出土遺物 実測図（1：4）	32
図15	軒丸瓦実測図・拓影（1：4）	33
図16	軒平瓦実測図・拓影（1：4）	34
図17	丸瓦実測図・拓影（1：4）	35
図18	平瓦実測図・拓影（1：4）	36
IV 植物園北遺跡		
図1	調査地位置図（1：5,000）	38
図2	重機掘削風景（西から）	39
図3	遺構掘削及び測量風景（北西から）	39
図4	写真撮影風景（北西から）	39
図5	埋め戻し風景（北西から）	39
図6	調査区配置図（1：500）	42
図7	調査区周壁断面図（1：50）	43
図8	第1面平面図（1：100）	44
図9	第1面検出遺構断面図（1：40）	44
図10	第1面整地層下部礫敷き状況（1：100）	45
図11	整地層断面模式図（1：100）	45
図12	第2面平面図（1：100）	46
図13	第2面検出遺構断面図（1：40）	46
図14	整地層及び断割り断面図（1：50）	47
図15	出土遺物実測図1（1：4）	49
図16	出土遺物実測図2（1：4）	50
図17	出土遺物実測図3（1：4）	51
V 雲林院跡		
図1	調査地と周辺調査位置図（1：5,000）	54
図2	被災前建物（南西から）	54



図3	明治25年の調査地（明治25年仮製図）	54
図4	調査区配置図（1：400）	55
図5	現地説明会風景1（南西から）	55
図6	現地説明会風景2（南西から）	55
図7	平安京の北側（1：50,000）	56
図8	調査区断面図（1：60）	58
図9	第4面 平面図（1：100）	60
図10	第4面 SD95・SX84平面図（1：100）、断面図（1：20）	61
図11	第4面 SX84遺物検出状況（1：20）	62
図12	第3面 平面図（1：100）	63
図13	第3面 礎石建物1、SX60・77平・断面図（1：40）	64
図14	第3面 SP78出土藁縄の燃れ部分拡大像	65
図15	第2面 平面図（1：100）	66
図16	第1・2面 礎石1・2・8・9平・断面図（1：50）	67
図17	第2面 SX3・2平・断面図（1：50）	68
図18	第2面 SX1平・断面図（1：20）	68
図19	第1面 平面図（1：100）	69
図20	第1面検出の遺構と旧建物平面図 重ね合わせ図（1：300）	70
図21	第1面 SX5・礎石列3平・断面図（1：80）	70
図22	出土遺物 実測図1（1：4）	72
図23	出土遺物 実測図2（1：4）	73
図24	出土遺物 実測図3（1：4）	74
図25	出土遺物 実測図4（鉄釘1：4、銭貨1：200）	75
図26	雲林院跡関連遺構配置図（1：2,000）	76
<b>VI 中臣遺跡（第95次）</b>		
図1	調査地点と周辺調査（1：3,000）	78
図2	調査前全景（南東から）	79
図3	2区重機掘削状況（北東から）	79
図4	調査区配置図（1：400）	79
図5	調査区断面図（1：100）	80
図6	調査区平面図（1：100）	81
図7	建物1平・断面図（1：40）	81
図8	出土遺物実測図（土器1：4、金属製品1：2）	82
<b>VII 石見城跡、長岡京右京一条四坊十・十五町跡（右京第1269次）</b>		
図1	調査位置図（1：5,000）	84

図2	調査区配置図（1：400）	85
図3	壁断面実測状況（第3調査区）（東から）	86
図4	現地説明会開催状況（第2調査区）（東から）	86
図5	既往の調査位置図（1：5,000）	87
図6	基本層序模式図	88
図7	第1調査区 平・断面図（1：100）	90・91
図8	第2調査区 平・断面図（1：100）	92・93
図9	第3調査区 断面図（1：100）	94・95
図10	出土遺物実測図（1：4）	96
図11	石見城跡遺構復元図（1：1,000）	97
VIII 長岡京跡隣接地（溝路遺跡）		
図1	調査地位置図（1：5,000）	99
図2	調査区配置図（1：1,000）	100
図3	重機掘削（南東から）	100
図4	周辺の調査位置図（1：2,500）	101
図5	調査区断面図（1：80）	104
図6	調査区平面図（1：80）	105
図7	柱列（柱穴1・2）平・断面図（1：50）	106
図8	柱穴1 遺物出土状況（1：20）	106
図9	出土遺物 実測図（1：4）	107
図10	新遺跡範囲（1：5,000）	108
図11	保存処理後の動物遺存体（手前：下顎骨、奥：脛骨）	109
IX 山田桜谷古墳群		
図1	調査地位置図（1：10,000）	111
図2	調査区配置図（1：400）	112
図3	伐採風景（南から）	113
図4	作業風景（南から）	113
図5	葺石・埴輪列養生風景（北西から）	113
図6	1区埋め戻し完了風景（東から）	113
図7	1区平面図（1：80）	116
図8	1区南壁断面図（1：80）	117
図9	1区葺石平面図（上）・立面図（下）（1：50）	118
図10	出土埴輪平面・立面図（1：40）	119
図11	赤色立体地図の重ね合わせ図（1：1,000）	119
図12	2区断面図（1：500）	120

図13	出土埴輪実測図（口縁部）（1：4）	122
図14	出土埴輪実測図（胴部①）（1：4）	123
図15	出土埴輪実測図（胴部②）（1：4）	124
図16	出土埴輪実測図（底部）（1：4）	125
図17	出土埴輪実測図（形象埴輪）（1：4）	126
図18	墳丘復元図（1：400）	127
X 周山城跡		
図1	調査位置図（1：60,000）	130
図2	倒木状況（北東から）	131
図3	危険木伐採状況（北西から）	131
図4	倒木除去後状況（北東から）	131
図5	調査風景（西から）	131
図6	西櫓台養生状況1（北東から）	131
図7	西櫓台養生状況2（南東から）	131
図8	周山城跡縄張図及び調査位置図（1：6,000）	132
図9	遺構位置図（1：1,000）	134
図10	調査区平面図（1：150）	135
図11	西櫓台平面図（1：80）	136
図12	西櫓台石垣立面図1（1：80）	137
図13	西櫓台石垣立面図2（1：80）	138
図14	西櫓台東西セクション（A-A'、B-B'）図（1：40）	139
図15	西櫓台南北セクション（C-D-E）図（1：40）	140
図16	下段石垣実測図（1：80）	141
図17	出土遺物実測図（瓦1：4、金属製品1：2）	143

## 表 目 次

I 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（1）		
表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	11
II 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（2）		
表1	遺構概要表	20
表2	遺物概要表	21
III 円宗寺跡		

表1	周辺の調査事例一覧（調査番号は図1に対応）	26
表2	遺構概要表	28
表3	遺物概要表	31
VI	植物園北遺跡	
表1	既存調査一覧	40
表2	遺構概要表	42
表3	遺物概要表	48
V	雲林院跡	
表1	周辺調査一覧表	57
表2	遺構概要表	59
表3	遺物概要表	71
VI	中臣遺跡（第95次）	
表1	遺構概要表	82
表2	遺物概要表	82
VII	石見城跡、長岡京右京一条四坊十・十五町跡（右京第1269次）	
表1	遺構概要表	89
表2	遺物概要表	89
VIII	長岡京跡隣接地（溝路遺跡）	
表1	周辺調査一覧表	102
表2	遺構概要表	103
表3	遺物概要表	107
IX	山田桜谷古墳群	
表1	遺構概要表	115
表2	遺物概要表	121
X	周山城跡	
表1	遺構概要表	134
表2	遺物概要表	142

# I 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（1）

## 1. 調査経過

本件は個人住宅建設にともなう発掘調査である。調査地は千本丸太町の交差点北東の上京区小山町に位置し、平安宮大極殿院の東回廊跡に該当する（図1）。今回調査地の南側で平成28年度に東回廊及び東軒廊の延石抜取穴を確認したこと（図5・6）から、その延長部を確認するため発掘調査を実施することとなった。当該地は1つの宅地であったが、3分割されてそれぞれに住宅が建つ計画（22K472・22K580・22K588）であったため調査区を3区設定した。また調査の後半に補足調査区として4区を設けた。調査は令和5年4月3日から5月12日まで実施し、面積の合計は65㎡である

## 2. 遺跡

### （1）地理的環境と歴史的環境

平安宮・大極殿は、政の場である朝堂院の正殿であり、北・東・西の三面を回廊で囲む。今回の調査地は東回廊の推定地に該当し、東回廊西端が検出されることが予測された。

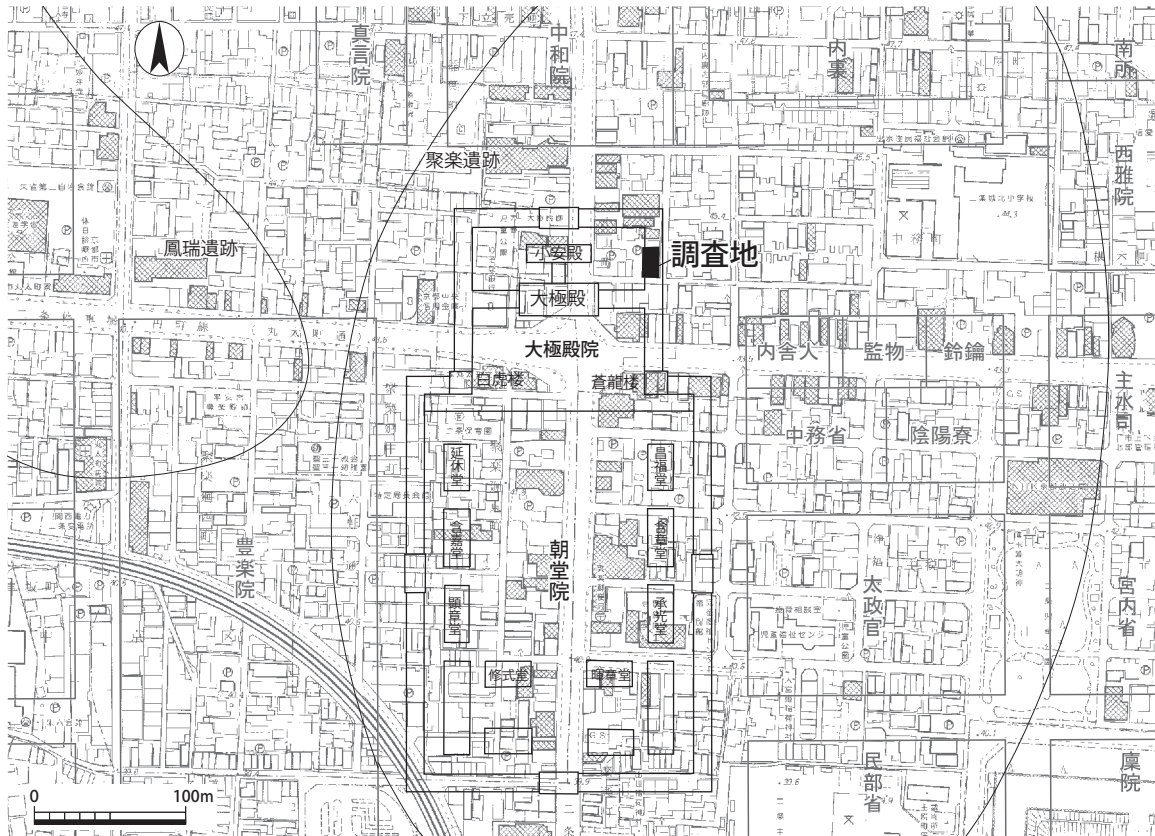


図1 調査地位置図（1：5,000）



図2 調査前風景（南から）



図3 重機掘削風景（北から）

大極殿院の回廊跡についてはこれまで7箇所  
で痕跡を確認しており（図6）、およその規模や細  
かな位置が明らかになりつつある。ただし、大極  
殿跡や小安殿跡をはじめ、多くの地点では中・近  
世に大きく攪乱されていることが明らかになっ  
ている。

遺構が良好に残っていたのは、千本通に面した  
東側の敷地で行われた昭和58年の調査（図6-  
7）<sup>1)</sup>で、北面回廊の基壇北縁部が部分的ではあ  
るが原位置を保った状態で確認された。凝灰岩製  
の延石・地覆石・束石・羽目石からなる壇上積  
基壇が一部組み合ったままの状態出土し、回廊  
の推定位置を決める上でも大きな成果となった。

昭和60年度（図6-9）、平成28年度（図6  
-18）の調査<sup>2)</sup>では東軒廊の北縁および南縁が確  
認された。とくに平成28年度の調査では東廻廊  
と軒廊の取りつき部の延石抜取穴を検出し、昭和  
60年度に確認された軒廊の幅を追認するととも  
に、これまで見つかっていなかった東廻廊西端の  
位置が明らかになった。

1) 木下保明「Ⅲ平安宮大極殿院」『平安京跡発掘調  
査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所 1985

2) 鈴木久史「Ⅱ平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡  
(2)」『京都市内遺跡発掘調査報告平成28年度』京都  
市文化市民局 2017



図4 調査風景（南から）

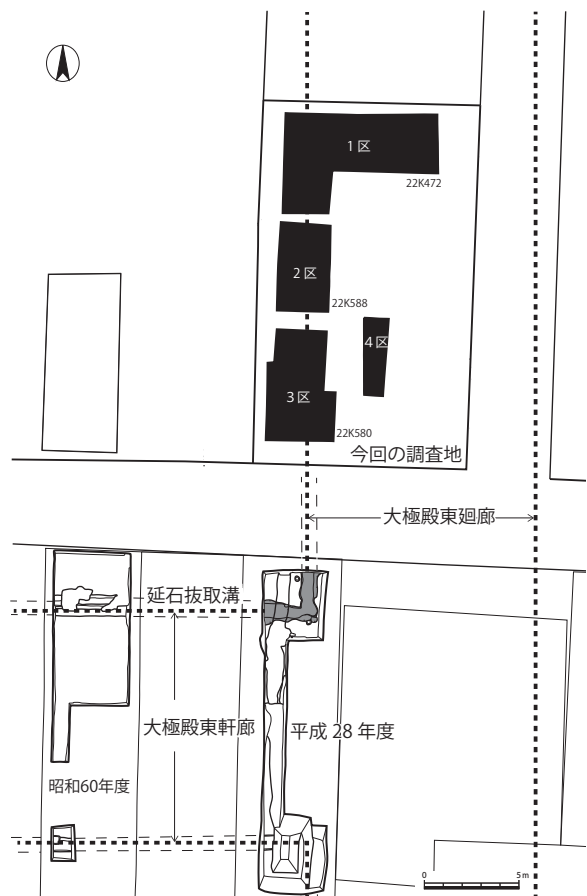


図5 調査区配置図（1：400）

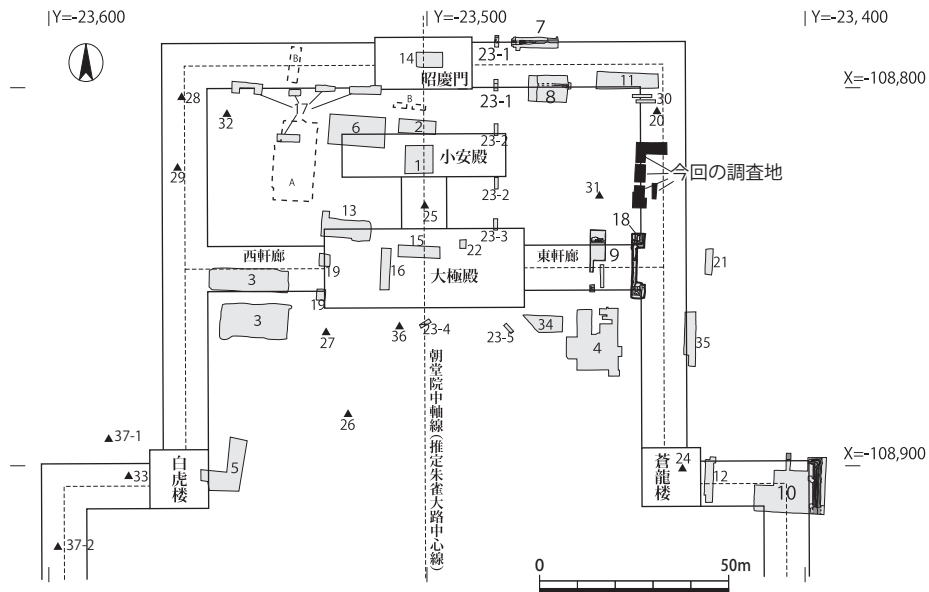


図6 周辺の調査事例 (1 : 2,000)

### 3. 遺 構 (図版1・2)

#### (1) 基本層序 (図7～9)

今回の調査地は、中・近世に大きく攪乱されており、層序の残りは良くなかったが、3区の南西隅で部分的に平安時代の遺構や地層を検出した。

当該地の基本層序(図7)は、GL-0.6mまで現代盛土、GL-0.6～-1.1mで褐灰色砂礫(層2)、-1.1m以下黄褐色系のシルト(層3～5)であった。周辺の調査成果から褐灰色砂礫・黄褐色シルトとも地山と考えらえる。部分的に残っていた平安時代の整地層(層1)はGL-0.6～-1.0mまで確認し、砂礫の地山を掘り込んで地業されたと推測される。

なお、GL-1.1m以下で検出した黄褐色系のシルトは江戸時代以降に「聚楽土」と呼ばれた建材であり、平安宮跡の発掘調査では平安時代から現代までの土取り穴が多数検出されている。今回の調査でも敷地の大部分が大規模な土取りによって攪乱されていた。

土取り後の層序を1区西壁(図8)で例示するとGL-0.5mまで現代盛土、-0.5mで暗灰黄色泥砂(近世～近代)、-0.7mで灰黄褐色砂礫、-0.8m以下-2.2mまで砂礫をベースとする整地層(層5～17)、-2.2m～-2.7mまで泥砂の整地層(層18～20)、-2.7～-3.3mまでブロック土を含むシルトからなる埋土(層21・22)、-3.3mで黄褐色シルトの地山(層23)であった。

調査区の北側3分の2は同様の層序で、大規模な土取りと埋め戻しの状況を確認した。詳細は、後述する。

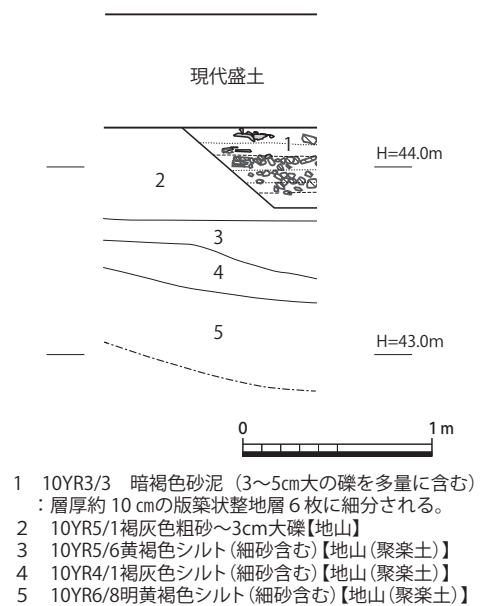
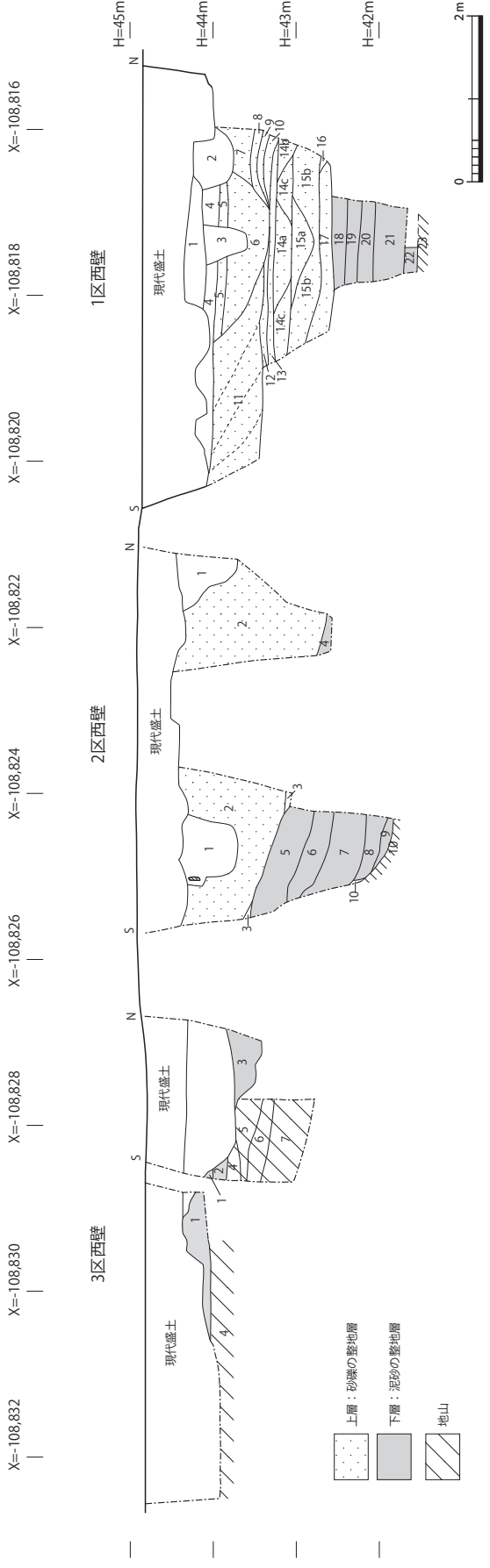


図7 基本層序模式図 (1 : 40)

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査位置	調査方法	調査年度	所在地 (上：上京区 中：中京区)	調査概要	文献番号
A	小安殿西側	発掘	1959	中・聚楽廻東町 35-1	平安時代前～後期の瓦を多量に含む層を検出。	1
B	大極殿院北面回廊	発掘	1960	中・聚楽廻東町 35-1 他	GL-1.8m以下で遺物や粘土塊を含む厚い細礫層を確認。	
1	小安殿	発掘	1975	上・小山町 877-3	検出遺構なし。	2
2	小安殿北縁	発掘	1975	上・小山町 887	近世以降の土取りにより検出遺構なし。	3
3	大極殿院西軒廊	発掘	1975	中・聚楽廻東町 3	攪乱のみ。	4
4	大極殿南東側	発掘	1975	上・小山町 908-893	江戸時代の溝状遺構。	5
5	朝堂院西面回廊	発掘	1977	中・聚楽廻東町 3-1	近世以降の土取りにより検出遺構なし。	6
6	小安殿北西側	発掘	1978	上・小山町 877	GL-4.6mまで地山も確認できず。大規模な濠状遺構が存在か。	7
7	大極殿院北面回廊	発掘	1983	上・小山町 884	GL-0.2mにて回廊基壇北縁を検出。基壇は、延石・地覆石・羽目石・東石で化粧されていた。	8
8	大極殿院北面回廊	発掘	1985	上・小山町 880	GL-0.4mにて回廊基壇南縁を検出。	9
9	大極殿院東軒廊	発掘	1985	上・小山町 908-53	基壇北縁底部と凝灰岩延石採取痕跡、基壇南縁跡を検出。東軒廊の基壇幅が約12mの4 丈幅であることが判明。	10
10	朝堂院回廊北東側	発・試	1990	上・中務町 491-44 他	東回廊と北回廊のコーナー部に関する遺構を検出。	11
11	大極殿院北面回廊	発掘	1991	上・小山町 908	近世以降の土取りにより検出遺構なし。	12
12	朝堂院北面回廊	発掘	2005	上・中務町 491-55 他	回廊基壇に伴うと考えられる溝状遺構を検出。	13
13	大極殿北西縁	発掘	2008	中・聚楽廻東町 32-6・7・9	平安時代の建物掘込地業と考えられる遺構を検出。	14
14	昭慶門	発掘	2008	上・小山町 879	GL-3m以上の大土坑により地山も確認できず。	15
15	大極殿	発掘	2014	上・小山町 873	検出遺構なし。	16
16	大極殿	発掘	2014	中・聚楽廻東町 32-5	GL-0.7mにて地山。近世以降の土取り穴を確認。	17
17	大極殿院北面回廊	発掘	2015	中・聚楽廻東町 35-1 他	平安時代の瓦を多量に含む層を確認。	18
18	大極殿院東面回廊・東軒廊	発掘	2016	上・小山町 908-30	両基壇延石の採取溝を検出。	19
19	大極殿西縁	試掘	1987	中・聚楽廻東町 32	GL-1.6mまで近世以降の土取り穴。	20
20	大極殿院東面回廊	試掘	1988	上・小山町 908-71	江戸時代の包含層。	21
21	大極殿院東面回廊東側	試掘	1988	上・小山町	GL-0.7mにて平安時代の瓦溜を検出。	22
22	大極殿	試掘	1994	上・小山町地内	GL-0.3mで基壇を確認。	23
23-1	大極殿院北面回廊	試掘	1994	上・小山町地内	回廊基壇北縁の延石を原位置を保った状態で検出。回廊基壇南縁では、凝灰岩採取痕跡を確認。	24
23-2	小安殿南縁・北縁	試掘	1994	上・小山町地内	検出遺構なし。	
23-3	大極殿北縁	試掘	1994	上・小山町地内	攪乱のみ。	
23-4	大極殿南縁	試掘	1994	中・聚楽廻東町地内	GL-0.42mで、大極殿南縁の階段南端と考えられる版築状の基壇と、凝灰岩延石掘付痕跡を検出。	
23-5	大極殿南東側	試掘	1994	上・小山町地内	攪乱のみ。	
24	朝堂院蒼龍楼	試掘	1997	上・中務町 491	検出遺構なし。	25
25	大極殿北廊	試掘	2007	上・小山町 875-1	GL-0.4mにて地山。南北方向に続く湿地状堆積を確認。	26
26	龍尾壇北側	立会	1982	中・聚楽廻東町地内	江戸時代の土取り穴。	27
27	大極殿南西側	立会	1985	中・聚楽廻東町 1	検出遺構なし。	28
28	大極殿院西面回廊	立会	1985	中・聚楽廻東町 31-18	GL-1.1mにて江戸時代の土層。	29
29	大極殿院西面回廊	立会	1988	中・聚楽廻東町 31-4	GL-0.35mにて江戸時代の包含層。	30
30	大極殿院東面回廊	試掘	1988	上・小山町 908-71	GL-1.7mまで江戸時代の土取り穴。	31
31	大極殿院東面回廊西側	立会	1989	上・小山町 908-73	盛土のみ。	32
32	大極殿院東面回廊東側	立会	1990	中・聚楽廻東町 31-28	検出遺構なし。	33
33	朝堂院北面回廊	立会	1996	中・聚楽廻中町 41-9	GL-0.18mにて平安時代の土坑を確認。瓦多量。	34
34	大極殿南東側	立会	2006	上・小山町 871-3	GL-0.2mにて平安時代の整地層。	35
35	大極殿院東面回廊東側	立会	2006	上・中務町 491-72	平安時代中期頃の瓦溜、聚楽第関連と推察される堀跡を検出。	36
36	大極殿南側	立会	2008	上・聚楽町地内	GL-0.5mにて地山。	37
37-1	白虎楼北西側	立会	2012	中・聚楽廻東町 3-17	平安時代前～後期の瓦を多量に含む瓦溜を3基検出。	38
37-2	朝堂院西面回廊	立会	2012	中・聚楽廻中町 43-26	平安時代前期の瓦を多量に含む層を検出。	





3区西壁

1. 2.5Y5/6黄褐色砂礫(泥土混)
2. 10YR4/2灰黄褐色砂泥(土師器片含む)
3. 10YR3/1黒褐色砂泥(土師器片含む)
4. 10YR5/1黄灰色粗砂~3cm大礫【地山】
5. 10YR5/6黄褐色シルト(細砂含む)
6. 10YR4/1褐灰色シルト(細砂含む)
7. 10YR6/8明黄褐色シルト(細砂含む)

2区西壁

1. 10YR3/2黒褐色泥砂(5~10cm大の礫多量に含む)
2. 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫(泥砂混じる)
3. 10YR5/4にぶい黄褐色シルト混砂泥
4. 10YR3/2黒褐色砂泥(土師器片、灰含む)
5. 10YR3/2黒褐色泥砂(炭、土師器片、小礫含む)
6. 10YR3/3暗褐色泥砂(10YR4/4褐色シルトブロック多量に含む)
7. 10YR3/2暗褐色泥砂(シルトブロック多量に含む)
8. 10YR4/2灰黄褐色泥砂(瓦片含む)
9. 10YR3/1黒褐色シルト(粗砂、2~3cm大の礫含む)
10. 10YR6/6明黄褐色シルト【地山】

1区西壁

1. 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂(2~5cm大の礫多量に含む)
2. 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂(土師器片含む)
3. 2.5Y5/6黄褐色砂泥(シルトブロック多量に含む)
4. 10YR4/2灰黄褐色砂礫(泥土含む)
5. 10YR4/2灰黄褐色泥砂
6. 10YR3/2黒褐色泥砂(2~5cm大の礫含む)
7. 10YR4/2灰黄褐色泥砂(シルトブロック・2~5cm大の礫含む)
8. 10YR5/1褐灰色砂泥
9. 2.5Y6/4にぶい黄色シルト(細~中砂多く含む)
10. 10YR4/1褐灰色砂泥
11. 2.5Y5/3黄褐色砂礫(泥土含む)
12. 2.5Y5/4黄褐色泥砂(2~10cm大の礫多量に含む)
13. 10YR5/2灰黄褐色泥砂(2~10cm大の礫多量に含む)
14. 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫(泥土含む)
15. 10YR4/2灰黄褐色砂礫(泥土混じる)
16. 10YR4/1褐灰色泥砂(10~20cm大の礫多量に含む)
17. 10YR4/1褐灰色泥砂(10~20cm大の礫多量に含む)
18. 2.5Y5/6黄褐色シルトブロック+10YR3/2黒褐色シルトブロック【固く締まる】
19. 10YR3/2黒褐色砂泥(シルトブロック多量に含む)
20. 10YR4/2灰黄褐色泥砂(2~3cm大の礫・瓦片・凝灰岩片含む)
21. 10YR3/1黒褐色シルト(砂礫・瓦片・凝灰岩片含む)
22. 10YR3/2黒褐色シルト(粘土ブロック含む)
23. 2.5YR5/6黄褐色シルト(細砂少量含む)【地山】

図8 1~3区西壁 断面図 (1:80)

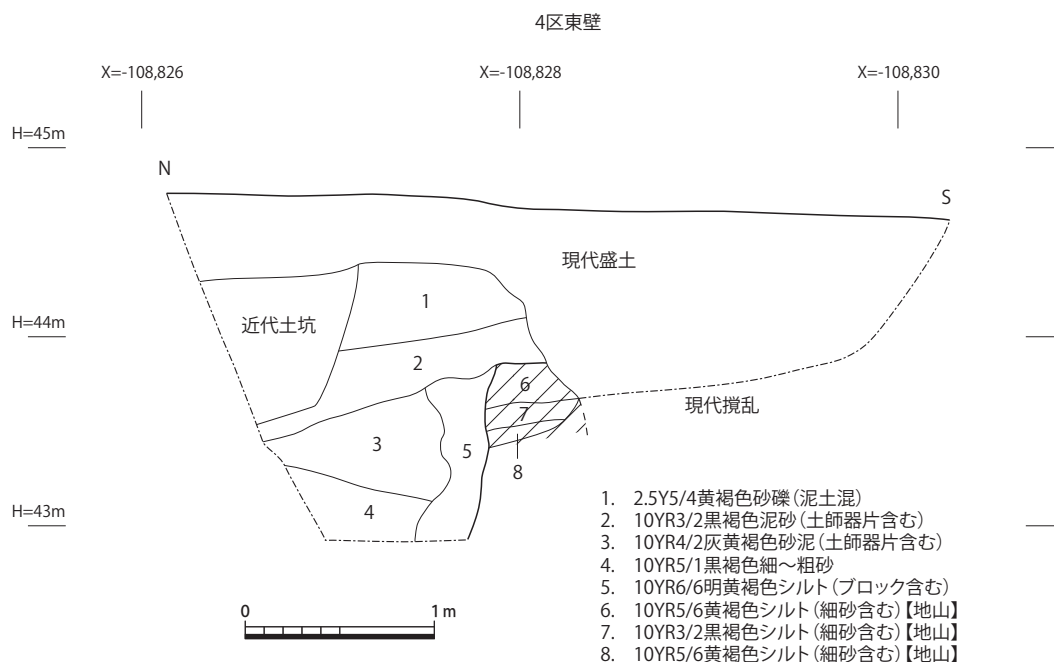


図9 4区東壁 断面図(1:40)

## (2) 遺構(図9～13)

今回の調査では3区の北端部よりも北側の全てが大規模な土取りに攪乱されていたため、平安時代の遺構は限られた範囲でしか検出できなかった。また3区でも江戸時代の土取穴や現代攪乱で東側の大部分が攪乱されていた。大極殿東面回廊の延石抜取溝の延長部については近世の土取穴によって削平されており検出されなかった。

ただし、回廊に近接する位置で平安時代の瓦溜り、整地層、土坑を検出した。

### 平安時代の遺構

**瓦溜り：**3区中央西側で検出した瓦溜りで、南北約3m東西約1.4mの範囲に瓦が集中的に分布していた。顕著な掘方などは検出できなかった。埋土は2層に分かれ、上層は暗褐色泥砂、下層は礫を含む黒褐色泥砂であった。瓦は上層に含まれていた。瓦のほかに凝灰岩片や土師器片を含む。直上までを近世および現代に削平されており、次に述べる整地層との切り合い関係は不明であった。上層の底のレベルが南側で検出した整地層の底に近いことから整地の一環の可能性もあるが、整地層を切り込んで廃棄された瓦の可能性もある。遺構の時期は10世紀前半である。

**整地層：**3区南端で検出した整地層で南北約1.5m、東西約1.5mの範囲を確認した。凝灰岩片を多量に含む。北側で確認した砂礫の地山(模式図層2)を掘り込んで成立している。多量の礫を含

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
平安時代	瓦溜り、整地層	
江戸時代以降	土取穴、水琴窟	

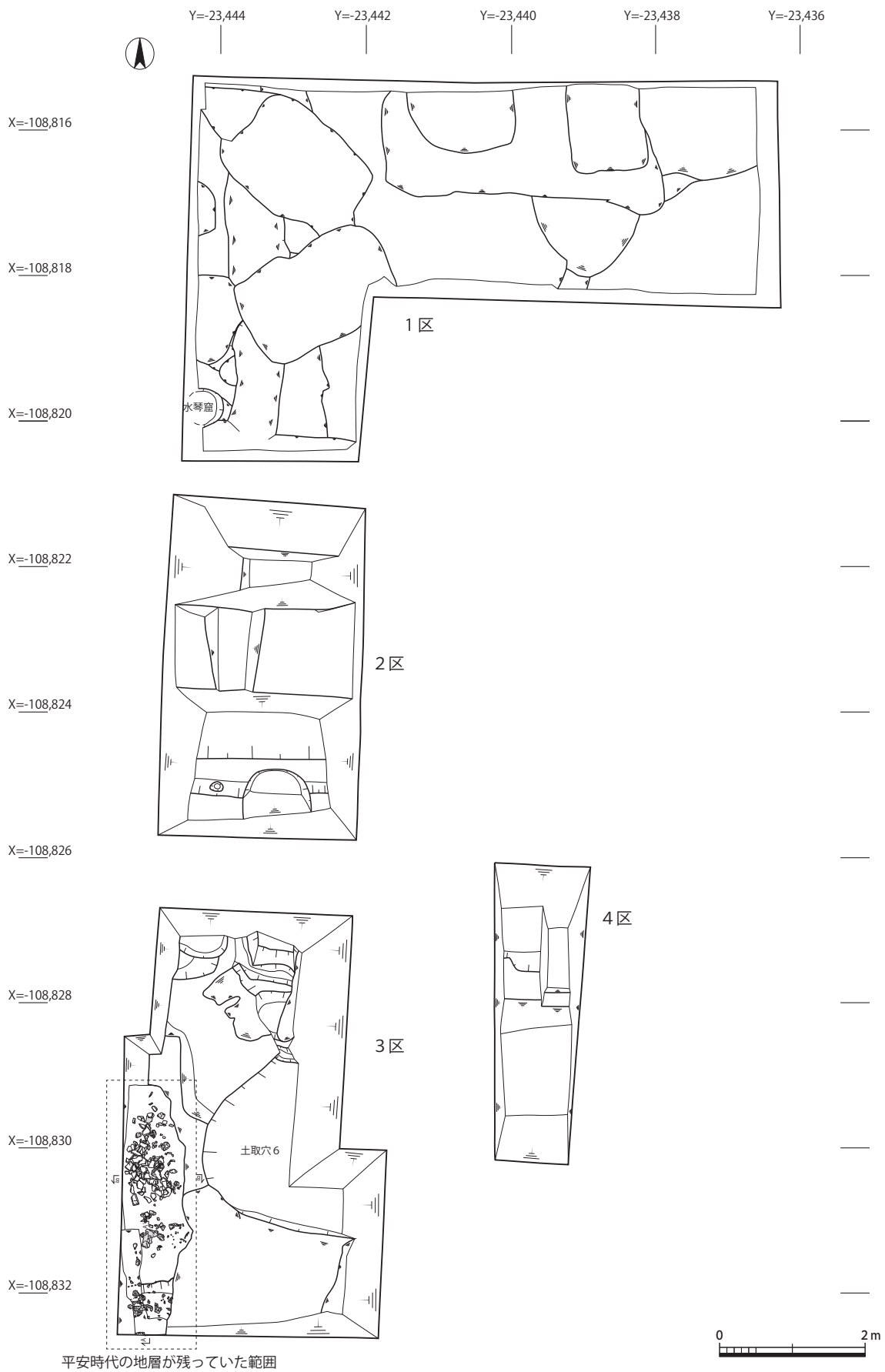


図10 第1面 平面図 (1 : 80)



- 1. 10YR3/2 黒褐色砂泥（凝灰岩片・瓦片多量を含む）
  - 2. 10YR3/2 黒褐色泥砂（砂礫多量を含む）
  - 3. 10YR3/3 暗褐色砂泥（3～5 cm大の礫を多量を含む）
  - 4. 10YR3/3 暗褐色砂礫【地山】
- ：層厚約10 cmを基本単位とする版築状整地層6層に細分される。

- 1. 10YR3/3 暗褐色泥砂（瓦多量を含む）
- 2. 10YR3/2 黒褐色泥砂（2～5 cm大の礫多量を含む）
- 3. 10YR3/2 黒褐色砂礫【地山】



図11 平安時代の遺構（1：20）

む暗褐色砂泥からなる層厚約10cmの地層を1単位として6層に細分される。版築工法によると考えられる。四周全てを攪乱されていたため分布範囲や性格は不明だが回廊に伴う整地と推定される。凝灰岩片や瓦片が多量に含まれるため、平安時代中期以降の再建に伴うものと推測される。

土坑1：整地層を切って成立する。南北1.4m、東西1.0mを検出した。南側は調査区外にのび、他は近世・現代に壊されているため、溝か土坑かは不明だが、整地層を切っていることや回廊との位置関係からここでは土坑と報告しておく。深さは約0.8mで埋土は2層に分かれる。上層は黒褐色砂泥からなり、瓦礫・凝灰岩片を多量に含む。下層は黒褐色泥砂からなり砂礫を多量に含む。

### 江戸時代の遺構

1区の北端から2・3区の範囲と4区の北半では、本来あるべき高さに黄灰色シルトの地山(聚楽土)が遺存しておらず、砂礫を多量に含む整地層に置き換わっていた。一番深い部分ではGL-3.3mまで掘削が及んでいた。これらは一連の営為で掘られたものと推測されるため「大規模土取り」として報告する。

大規模土取り：1区から3区北半で南北約24m、深さ約2.4mを確認した。埋土は大きく2層に分かれ、上層は砂礫をベースとする整地層で1～2区にかけて広く分布している。2区ではトレンチが狭く、細かい断面の観察ができなかったが、1区の状況を見る限り、大きく2回に分けて整地されている。土留めの役目を果たす山状の土盛り(図8-1区層9～11、層15c、層16b)とその間の凹みを埋めている(図8-1区層15a・b、層16a)状況が観察された。この工法は通常、広範囲を埋め立てる時にとられる工法であることから、今回確認したトレンチ範囲は狭いが、周辺を一体的に埋めた状況が想定される。

下層は、瓦・凝灰岩・砂礫を多量に含む黒褐色泥砂で黄褐色シルトの地山ブロックも多量に含まれる。この層には平安時代の瓦が多量に含まれるため、宮の遺構を壊して埋めた土と想定される。地山ブロックも多く含まれる状況からは土取り後の不要な土を埋め戻したようにも見える。なお、黒褐色泥砂(図82区-5ほか)の上面は平滑で、断面は南から北に向かって斜めに下がり、溝状を呈していた。上層の砂礫層との埋土の差は明瞭で、一時期は大きな溝(堀)として機能していた可能性もあるが、調査区が狭小のため、詳細は不明である。

下層の黒褐色泥砂(図8下層グレーアミカケ)には平安時代の瓦や土器の細片が多量に含まれているが細片である。また中世の瓦も含まれる。最上層の砂礫層からは江戸時代前期の遺物が出土した。大規模土取りの埋土からは平安時代の瓦や凝灰岩片は出土するが、特に上層には遺物がほとんど含まれていない。近世中期以降の土屋による土取り穴は、周辺の調査例では、ゴミ穴として利用されることが多く多量の遺物が出土する傾向にある。この点でも大規模土取りはこれまでの土取り穴とは特徴が異なっている。掘削の時期や性格は不明だが、最終的な埋め戻し時期は江戸時代前期と考えられる。

土取穴6：3区中央で検出した土坑である。直径約2.5mの不定円形を呈し東半は調査区外に延びている。埋土は茶褐色泥砂である。個人住宅への影響を考慮して、掘削を途中でとどめたため深さ

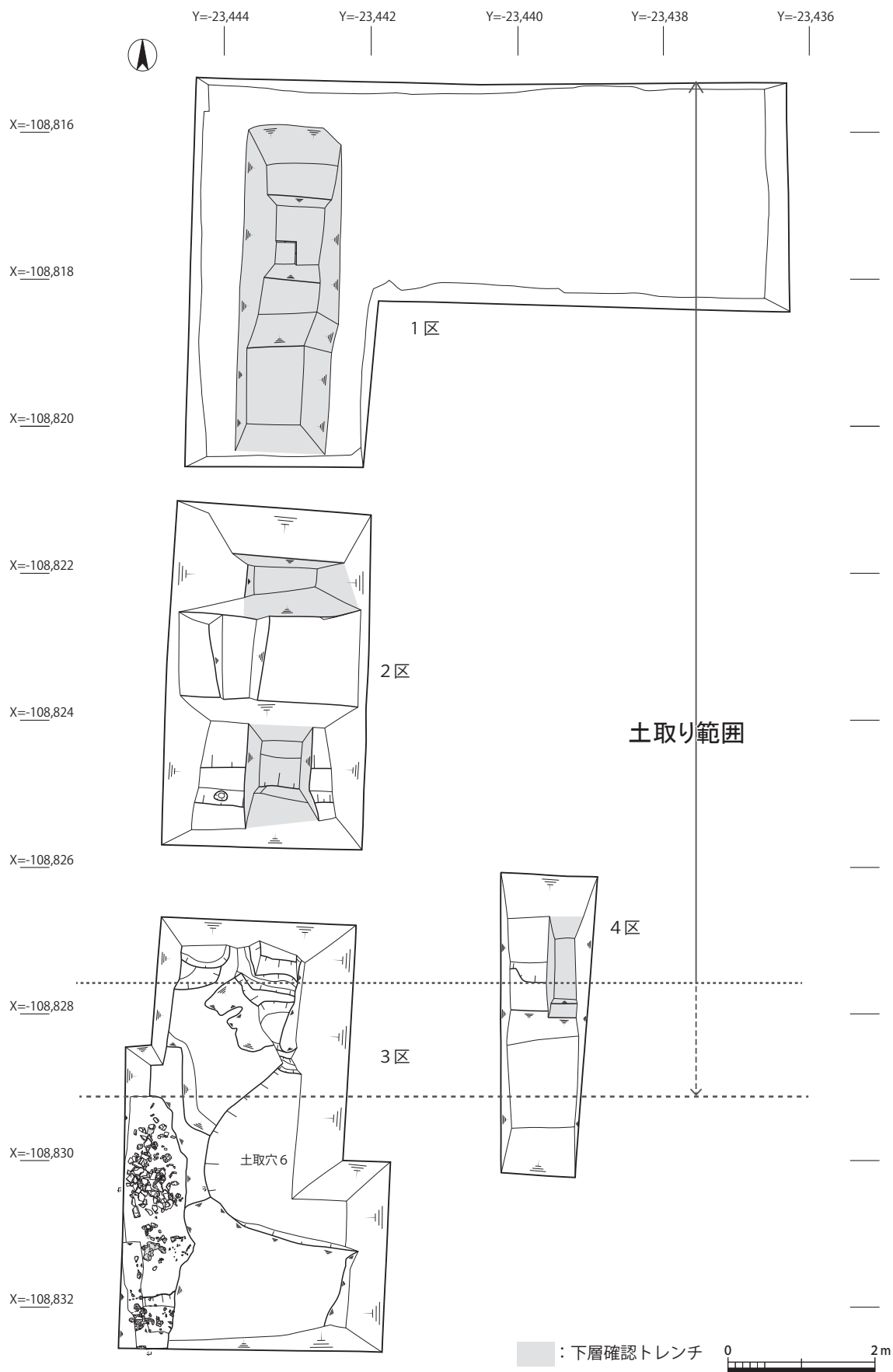


図12 下層確認トレンチ配置図 (1 : 80)

は不明だが、検出面から1 m以上掘り込まれている。近世中頃の土器・陶磁器・瓦などが多量に出土した。

3区の北端をのぞいた範囲には大規模土取りが及んでおらず、黄褐色シルトの地山—「聚楽土」を含む地層が残っていることを確認した。出土遺物の時期は17世紀後葉で、周辺の調査例でも多数検出される近世の土取り穴と考えられる。

### 水琴窟

1区の西壁際で検出した土坑である。石と瓦で組んだ構造部の上に底部に穴の空いた甕を天地逆

で設置していたことから水琴窟と推定される。掘方は直径約0.8mの不定な円形を呈し、深さは0.6 mであった。下段は石2個と瓦2個を組み合わせて土台を作り、底にはシルトが貼られていた(図13層2)。このシルト層に有機物が溜まっていたことから水が溜まる仕組みになっていたと想定される。この土台の上には「○に鷲尾」の印が押された産地不明の国産陶器甕が天地逆さにして据えられていた。また甕の周りには瓦片と石が多数詰められていた。詳細は不明だが江戸時代末から明治時代のも

のと推測される。

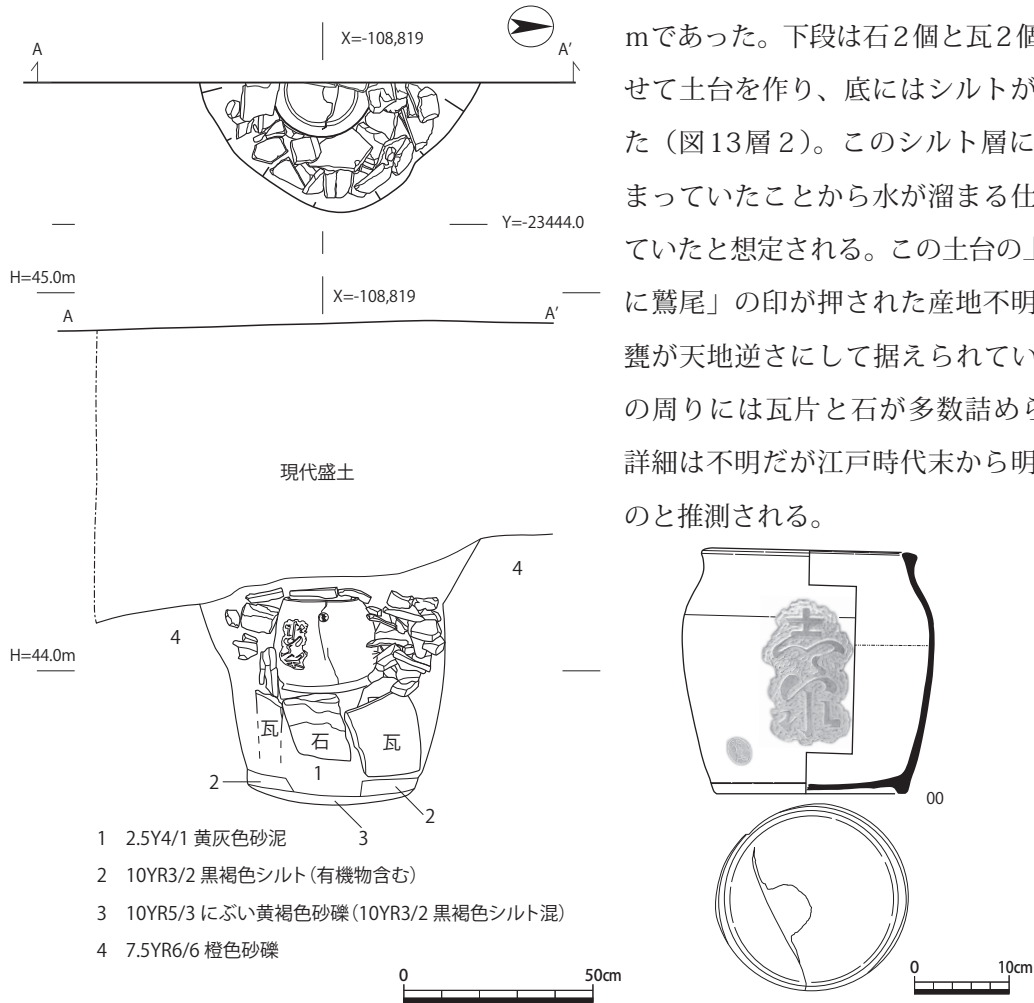


図13 水琴窟 平・断面図(1:20)・甕実測図(1:8)

## 4. 遺物(図14・表3)

瓦溜り 土師器杯・皿、軒平瓦、緑釉瓦、丸瓦、平瓦、凝灰岩片などが出土したがいずれも細片である。1・2は土師器杯細片、3は土師器皿細片である。器壁が薄く端部が肥厚する特徴から10世紀前半の遺物と考えられる。4は均整唐草文軒平瓦で唐草は中心から外側に向かって展開する。唐草は独立し、先端が巻き込む。出土例は西賀茂角社瓦窯及び鎮守庵瓦窯にみられ、年代観は平安時代前期である。このほかに瓦溜りからは細片のため図化できなかったが緑釉瓦やベンガラ

した軒平瓦の顎部細片などが出土した。

大規模土取り 土師器皿5は2区黒褐色泥砂層から出土した。6は均整唐草文軒平瓦で唐草は中心から外側に向かって展開する。複線で表現され主葉は独立し先端が大きく巻き込む。木村捷三郎収集図録の8と同文である。平安時代中期。7は犬型の土製品である。2区黒褐色泥砂層(図8-2区層5)から出土した。

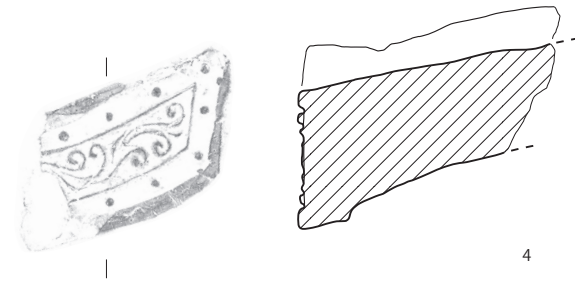
土取穴6 土師器、国産陶磁器、李朝陶磁、焼締陶器、丸瓦・平瓦などが出土した。

8は土師器皿Sで、口径10.5cmである。9は土師器焙烙である。11は瀬戸美濃焼黒釉陶器碗、12

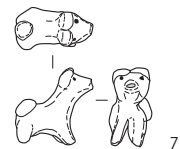
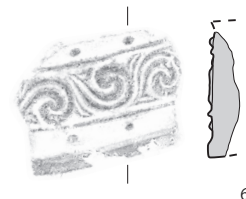
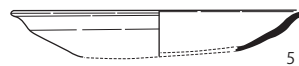
表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、瓦類		土師器3点、軒丸瓦2点		
江戸時代以降	土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦類、土製品		土師器2点、焼締陶器1点、施釉陶器3点、染付1点、李朝磁器2点、土製品1点		
合計		6箱	17点(1箱)	1箱	4箱

瓦溜り



大規模土取り



土取穴6

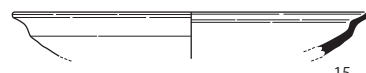
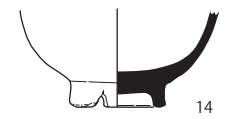
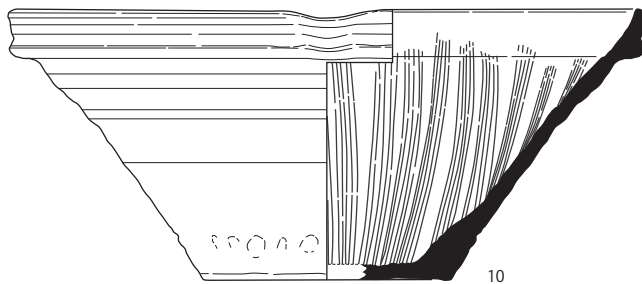
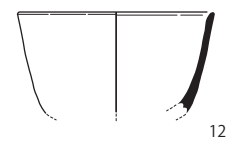
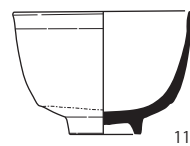


図14 出土遺物実測図・拓影(土器・瓦1:4、土製品1:2)



は肥前磁器で内面は透明釉、外面は青磁釉である。13は肥前磁器染付椀である。14は李朝磁器の椀である。釉薬はやや青みがかっている。高台に切り込みがある。15も李朝磁器の皿である。釉調は14によく似る。13は信楽焼の播鉢である。播り目は5条1単位で、底部内面にも斜め方向に細かく播り目が入る。17世紀後葉の年代観と推定される。

## 5. まとめ

今回の調査では、平安時代の整地層と瓦溜まりを確認することができた。瓦溜まりは掘方が検出されず、整地層と一連の土木工事の中で廃棄された可能性もある。出土した土師器は細片ではあるが10世紀前半のもので、瓦溜まりに廃棄された軒平瓦が平安時代前期の創建期のものであることも矛盾がない。

これまで検出されている宮の遺構は平安時代後期のものも多く、何度かあった建て替えについては未だ詳細が明らかになっていない。今回の調査地で確認できた整地層はわずかな範囲であるが、10世紀の前半であること、版築工法で整地されていることなどが明らかになった点は成果といえよう。

また、今回の調査では、当該地の大部分が大規模土取りで壊されていることが明らかになった。江戸時代の当該地は京都所司代千本屋敷の御用地内に当たり(図15)、堆積状況から埋め戻しは大規模に施工されたと考えられ、江戸時代前期に埋められたことを考慮すると京都所司代が関わっていた可能性もある。とはいえ狭小な調査区からわかる情報では推測の域を出ることは困難であった。周辺の調査事例が増えるのを待ちたい。

(赤松佳奈)

### 註

文献一覧(表1 周辺調査一覧表)番号は表1に準拠する

- 1 (財)古代学協会『古代文化』第3-10号~12号、1959年。
- 2 梶川敏夫ほか「平安宮小安殿跡推定地(Ⅱ)発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』京都市文化観光局文化財保護課、1976年。
- 3 甲元真之ほか「平安宮小安殿跡推定地発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1975』京都市文化観光局文化財保護課、1976年。
- 4 片岡 肇『平安宮大極殿跡の発掘調査 平安京跡発掘調査報告書 第1輯』(財)古代学協会、1976年。
- 5 鈴木忠司ほか『平安宮推定大極殿跡発掘調査報告書 平安京跡発掘調査報告書 第1輯』(財)古代学協会、1983年。
- 6 平田 泰「平安宮大極殿跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978 - Ⅱ』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1979年。
- 7 平尾雅幸「平安宮 小安殿跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所、1979年。
- 8 木下保明「大極殿院」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1985年。

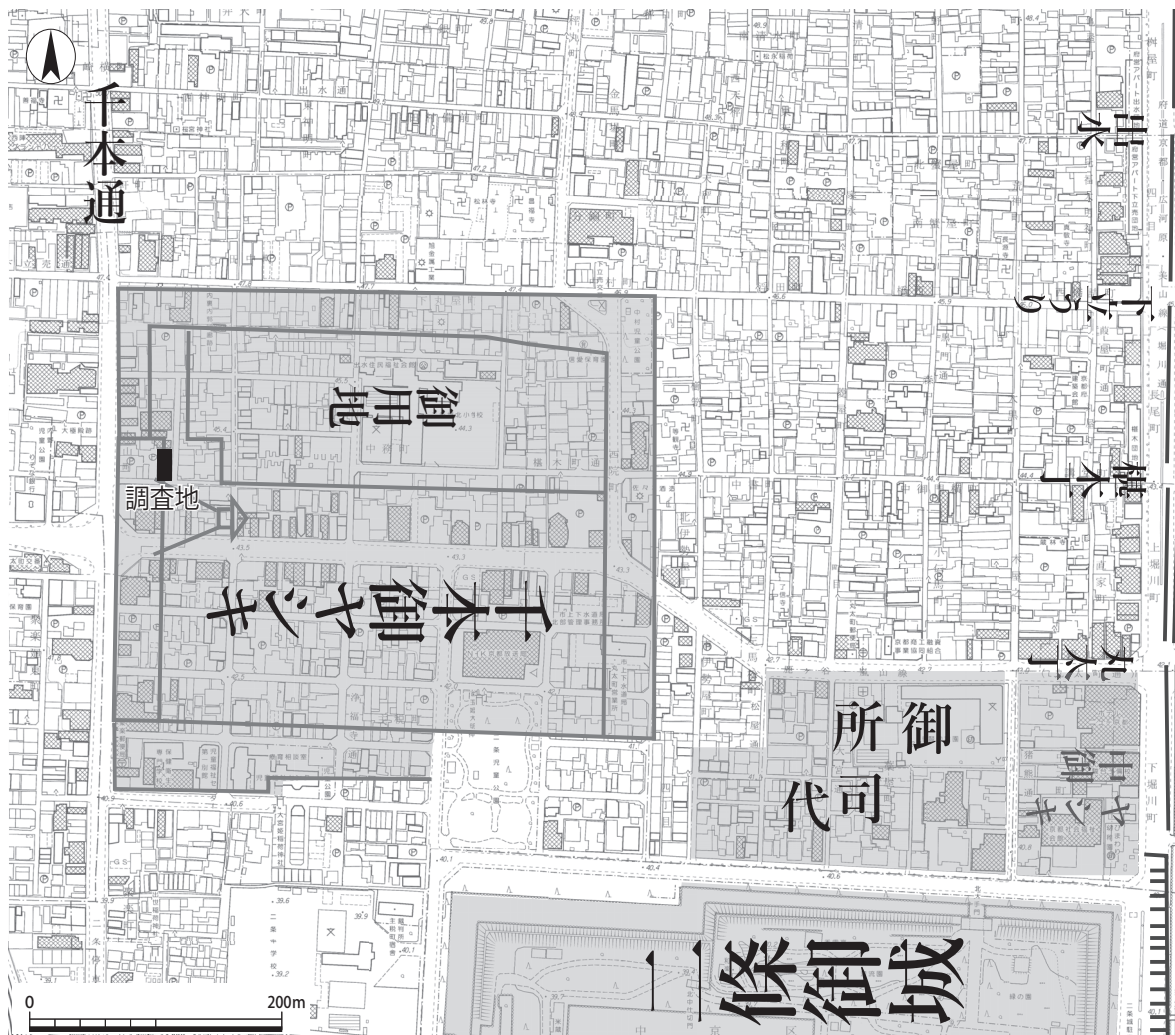
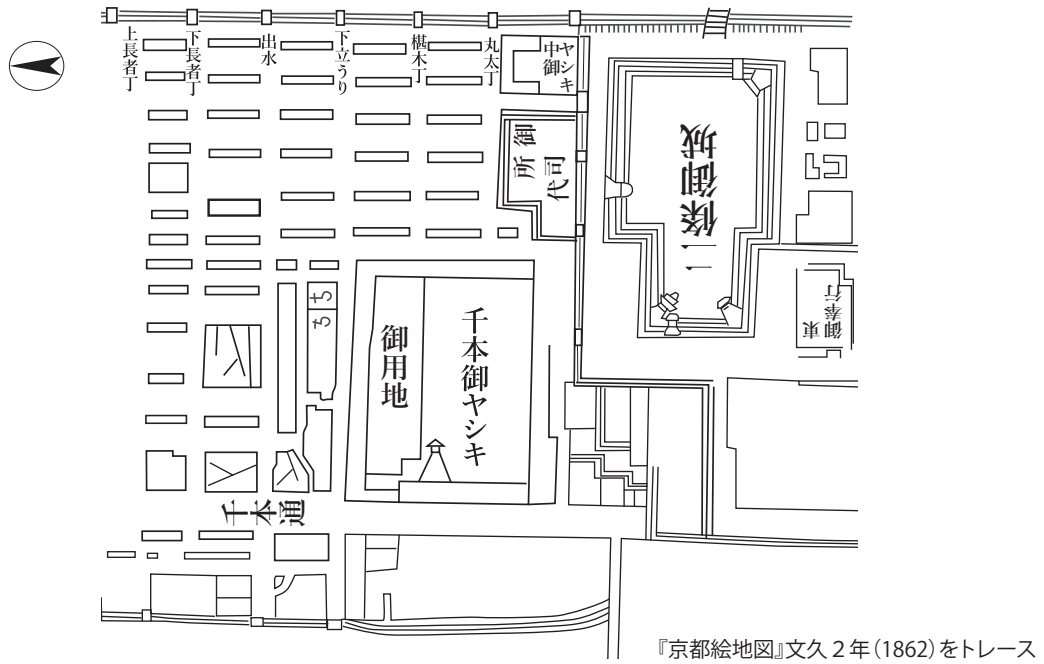


図15 京都絵地図（文久2年）の千本丸太町周辺と京都所司代の位置推定図（1：6,000）

- 9 辻 純一「平安宮大極殿院（1）」『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局、1986年。
- 10 梅川光隆「平安宮大極殿院（2）」『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局、1986年。
- 11 百瀬正恒「平安宮朝堂院跡（HQ25）」『京都市内試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局、1991年。
- 12 引原茂治「平安宮大極殿院跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第46冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター、1994年。
- 13 吉崎 伸「平安宮朝堂院跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局、2007年。
- 14 上村和直「平安宮朝堂院大極殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局、2011年。
- 15 網 伸也「平安宮朝堂院昭慶門跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局、2011年。
- 16 熊谷舞子「平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局、2016年。
- 17 熊谷舞子「平安宮大極殿跡・聚楽遺跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局、2016年。
- 18 熊谷舞子「Ⅰ 平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局2017
- 19 鈴木久史「Ⅱ 平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成28年度』京都市文化市民局2017
- 20 家崎孝治「平安宮大極殿跡（HQ49）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局、1988年。
- 21 「88BBHQ077」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局、1989年。
- 22 家崎孝治「平安宮大極殿院跡（HQ12）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局、1989年。
- 23 鈴木久男「付章41 朝堂院跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1995年年。
- 24 伊藤 潔「付章45 朝堂院跡一内蔵寮跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊、（財）京都市埋蔵文化財研究所、1995年。
- 25 「28」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成9年度』京都市文化市民局、1998年。
- 26 「28」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、2008年。
- 27 家崎孝治「朝堂院・豊楽院跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所、1984年。
- 28 「85BBHQ056」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局、1986年。
- 29 「85BBHQ105」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局、1987年。
- 30 「88BBHQ077」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局、1989年。
- 31 「89BBHQ004」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局、1992年。
- 32 「89BBHQ007」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局、1992年。
- 33 「90BBHQ097」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局、1990年。

- 34 「96BBHQ454」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化観光局、1997年。
- 35 吉崎 伸ほか「平安宮朝堂院跡、聚楽遺跡（06HQ185）」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局、2007年。
- 36 能芝 勉「平安宮朝堂院跡、聚楽遺跡（06HQ350）」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局、2007年。
- 37 吉本健吾「平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（08HQ242）」『京都市内遺跡立会調査報告 平成21年度』京都市文化市民局、2010年。
- 38 柏田有香ほか「平安宮朝堂院跡・聚楽遺跡（12HQ61・183）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成24年度』京都市文化市民局、2013。

## Ⅱ 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡（2）

### 1. 調査経過

調査地は千本丸太町の交差点北東の上京区小山町に位置し、平安宮大極殿院跡に該当する。この場所で地盤改良をとまなう個人住宅建設が計画されたため文化財保護法93条第一項に基づく届出が提出された。当該地は復元図では東回廊と大極殿の間の空間地に位置するが、本書Ⅰ章の西隣接地に当たり平安時代の整地層が遺存している可能性があったことから、発掘調査を実施した。調査は南端から開始し（1区）、後半に一部を埋め戻した後、北側へ拡張を行った（2区）。調査期間は令和5年6月26日から令和5年7月14日までで、調査面積は計20㎡である。

### 2. 遺跡

#### （1）地理的環境と歴史的環境

平安宮・大極殿は、政の場である朝堂院の正殿である。今回の調査地は本書Ⅰ章の西隣接地にあたるため、地理的環境及び周辺の調査事例については省略する。

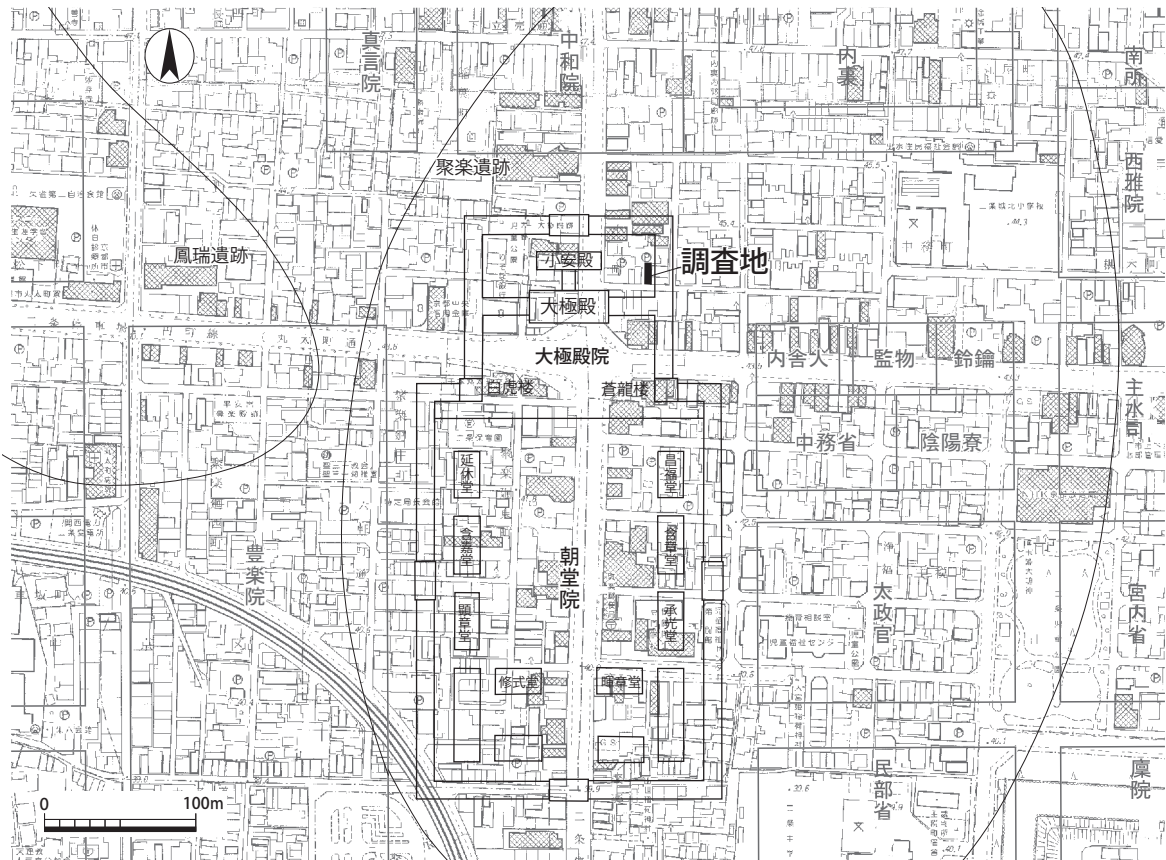


図1 調査地位置図（1：5,000）

江戸時代の当該地は京都所司代千本屋敷に付属する御用地であった(図10)。千本屋敷については江戸幕府の京都御大工頭である中井家に伝わった文書(「中井家文書」)に絵図が残されているが(現在は京都府歴史館が所蔵、年代は不明)、御用地については特に記載がなく、所司代関連の施設は詳細が不明な点が多い。

周辺の調査例は本書1章にまとめた。大極殿院跡では多数の発掘調査や立会調査が行われており、宮に関する遺構が多数確認されているが、その他の多くの調査では、現代の削平を受けているか、近世の土取りによって攪乱されていることが多い。これは宮域の地山が、所謂「聚楽土」と呼ばれる安定した地盤のため、遺構面までが浅く壊されやすいことと建材として利用価値が高いことによる。例えば小安殿跡は比較的広い範囲が



図2 重機掘削風景(南から)



図3 作業風景(南東から)

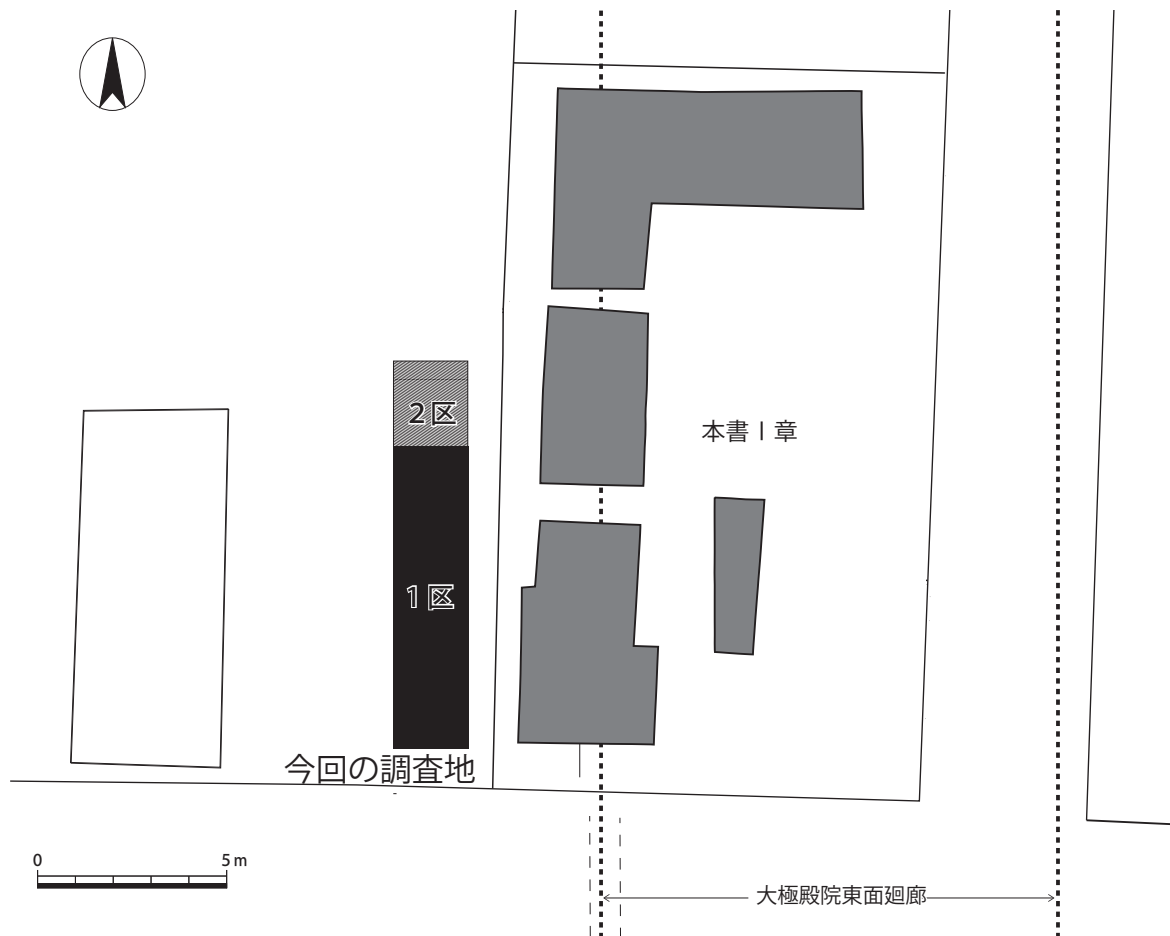


図4 調査区配置図(1:200)

調査されているが、これまでの成果では調査区の全域が大規模な土取りによって攪乱されていることがわかっている<sup>1)</sup>。

こうした土取りによる攪乱はこれまでは個別の近世土取りと評価されてきたが、本書 I 章および当該地で検出した土取りは規模が大きく、近世以降の「土屋」による土取りとは別種のものである可能性が高い。なおこの大規模な土取りは北隣接地の昭和63年度の試掘(88K723)(本書 I 章30)の共同住宅建設にともなう試掘調査でも検出されており、そこではGL-1.7 mまで近世の土取りを確認している。

1) 「IX 平安宮小安殿跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』京都市文化市民局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所1979

### 3. 遺 構 (図8・9、表2、図版3)

#### (1) 基本層序

当該地の基本層序は現代盛土以下、GL-0.4 mで明黄褐色砂礫からなる整地層(図5層5・7)、-0.8 m以下大規模土取り後の埋土(図5層8~19)、-2.4 mで明黄褐色砂礫からなる地山(図5層20)であった。調査区の全域に土取りが及んでおり、平安時代の地層は遺存していなかった。このため今回の調査では平面的な精査を層5の上面および層7を除去した状況で行い(図7)、調査区の中央に設けた深掘りトレンチ(図6)で土層の確認を行った。

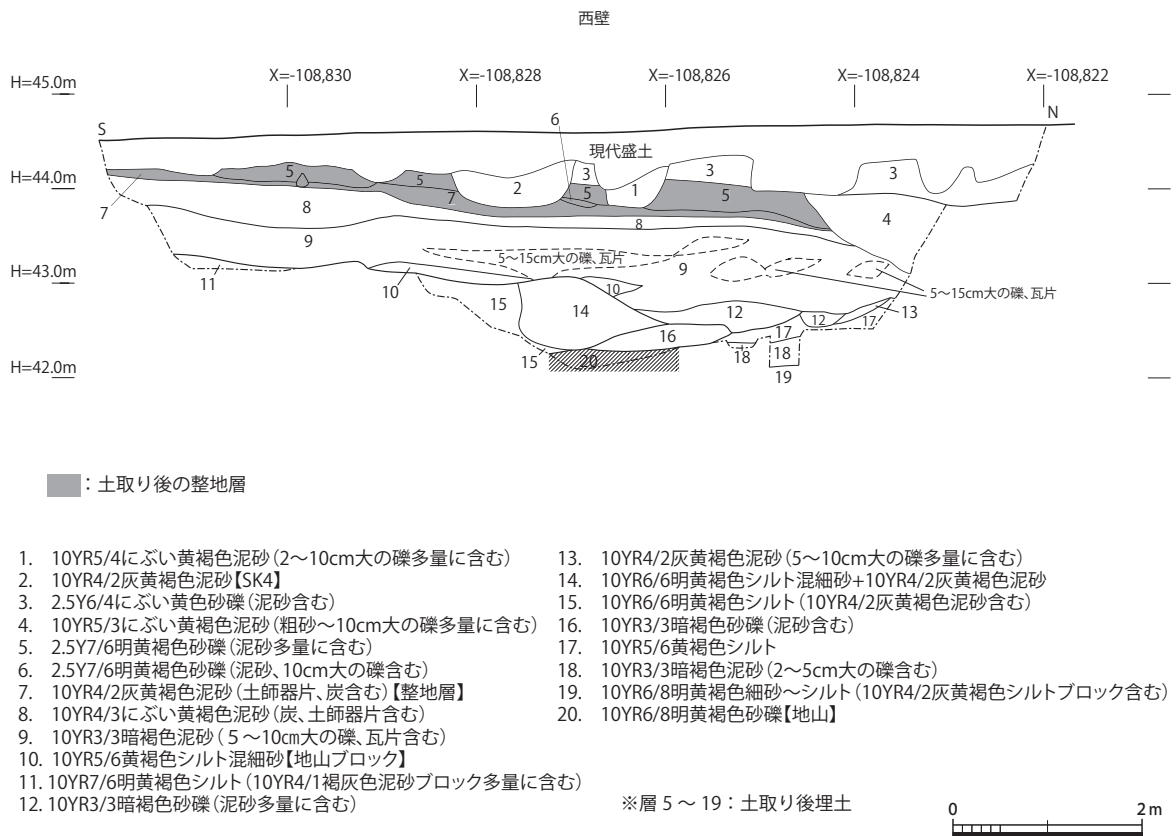


図5 西壁断面図(1・2区合成)(1:80)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代以降	土取穴、溝、土坑	

(2) 遺構 (表2)

大規模土取り

今回調査区の全域に展開する。平面的な範囲は不明である。トレンチ調査の結果、深さはGL-0.4～2.4mまでの2m以上に及ぶ。本書1章では、榎木町通に近い範囲(本書1章3区)では地山や平安時代の整地層を確認したが、今回の調査区では南端まで全てに土取りが及んでいた。埋土は大きく4層に分かれ、最上層は明黄褐色砂礫からなる整地層(図5層5・7)、上層はにぶい黄褐色泥砂層(層8)、下層は礫や瓦を塊で含む暗褐色泥砂層(層9)、最下層は暗褐色砂礫(層12)や明黄褐色シルト(層15)などの様々な土がブロック状に入る状況を呈している。トレンチが狭く部分的に確認したのみであるが、図5層20は明黄褐色砂礫層からなる地山であった。

なお、今回調査では大規模土取りの最上層(整地層)が整地層であったためその除去面(層7除去面)で平面精査を行った(第2面)が、顕著な遺構は見つからなかった。調査区の中央で畝状の痕跡を確認したが性格は不明である。

江戸時代後期

大規模土取りに伴う埋土最上層の上面(第1面)で検出した遺構には、溝や土坑がある。江戸時代後期から近代までの土坑などが検出された。

SD1 調査区の中央で検出した東西方向の溝である。西端をSK4に切られている。幅1.2m、検出長は1.3mである。深さは0.1mで埋土は灰黄褐色泥砂であった。近世後期の染付などが出土した。

SK4 調査区の中央で検出した土坑である。南北1.3m、東西0.6mで西半は調査区外に延びる。深さは0.4mで埋土は灰黄褐色泥砂である。

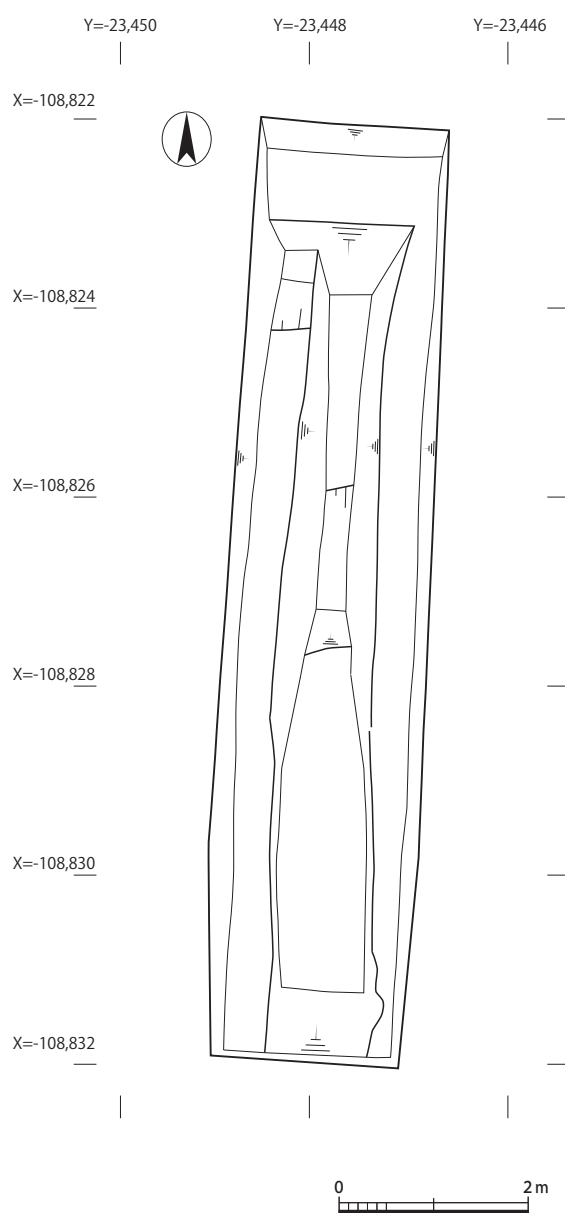


図6 下層確認トレンチ配置図(1:80)



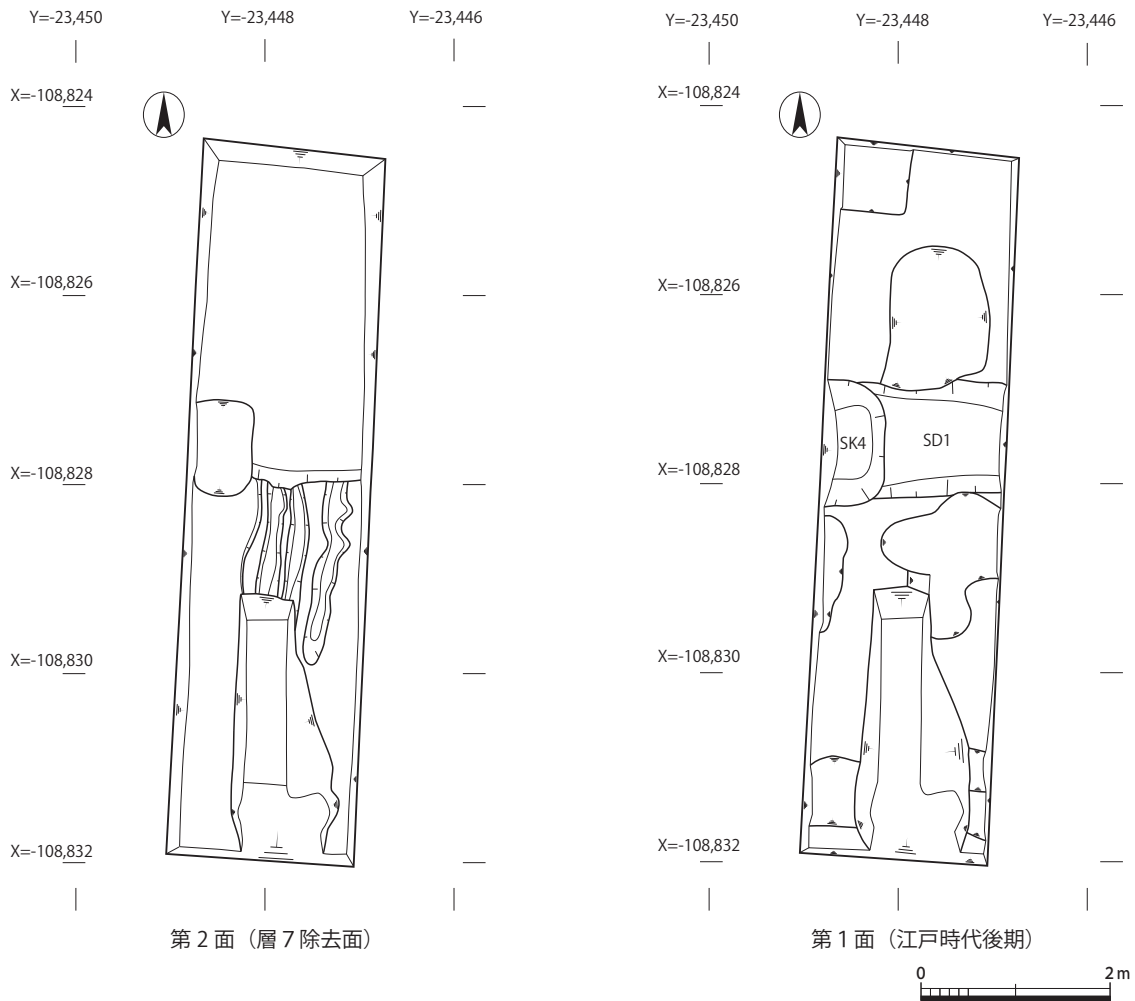
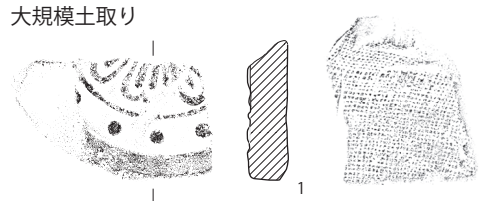


図7 1区第1・2面 平面図(1:80)

この他、第一面では近代の土坑などが掘り込まれていた。江戸時代の当該地は京都所司代の御用地であったが江戸後期以降には陶磁器などが廃棄される状況から居住地として使用されていた可能性もある。



#### 4. 遺物(図8、表3)

大規模土取り 土取り穴の埋土からは、平安時代の瓦が多量に出土した。大多数は丸・平瓦であったが、図化した軒瓦のほか緑釉瓦の細片も出土している。1

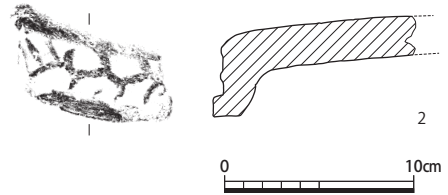


図8 出土軒瓦 実測図・拓影(1:4)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	瓦類		軒丸瓦1点、軒平瓦1点		
江戸時代以降	施釉陶器、染付、輸入陶磁器		施釉陶器2点、染付7点、 輸入陶磁器1点		
合計		9箱	15点(1箱)	1箱	7箱

SD 1

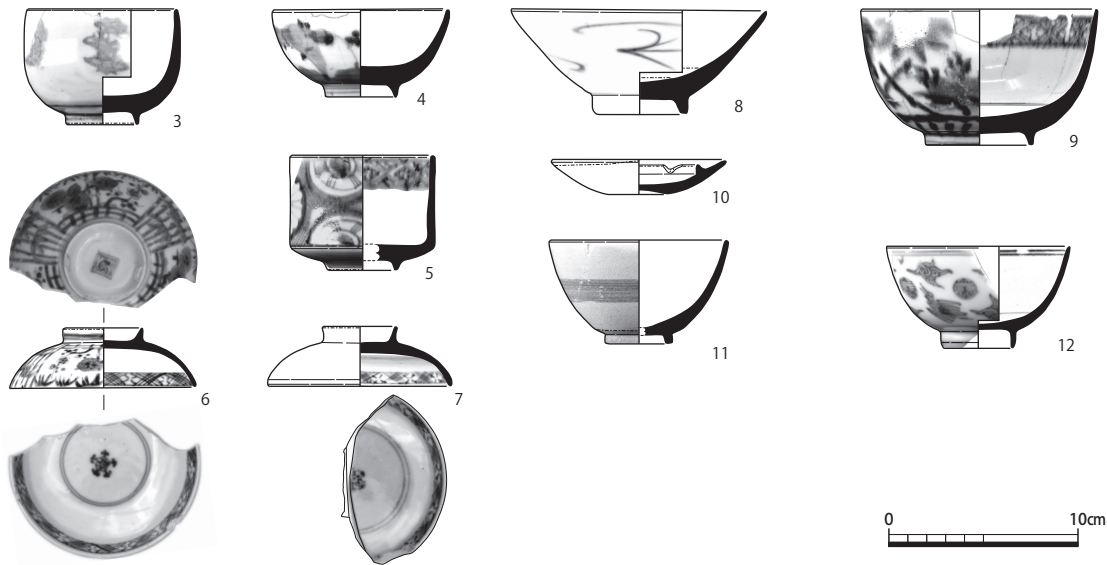


図9 SD1出土遺物 実測図（1：4）

は複弁蓮華文軒丸瓦である。花卉は複弁で内区と外区を圏線で区分する。外区には珠文が巡る。瓦当裏面に布目があり瓦当側縁はケズリであることから「横置成形台による一本作り」で成形されている。平安時代中期。2は唐草文軒平瓦で唐草は連続し支葉を配す。生産・使用年代は平安時代後期である。

SD 1 土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。時期がわかる代表的なものを図化した。1～6は肥前磁器染付である。1・2は椀、3は筒型椀、4・5は蓋である。5は青磁染付で外面は青磁釉がまわる。4・5の内面の絵付けは同文である。6は内面が輪状に釉剥ぎされている。7は国産染付の椀である。絵付けが滲んでいる。8は京・信楽焼の灯明皿、9は椀である。10は中国産の染付椀である。これらの遺物の年代観は18世紀後半である。

## 5. まとめ

今回の調査では、敷地の全域に土取りが及んでいることを確認した。当該地は江戸時代を通して京都所司代千本屋敷の管轄地である（図10）。土取り後の整地層上面で検出された江戸時代の遺構は、東西方向の溝と土坑のみで柱穴などは見つからなかった。江戸後期より遡る時期の遺構は確認できず、埋め立てた後は長く空閑地であった可能性もある。大規模土取りは本書1章で確認したもののよりも南に広がるが、埋め戻しなどの規模は同じで一連のもの可能性が高い。

所司代の御用地がどのように確保されたか、江戸時代を通じて何に使用されたかは不明だが、大掛かりな埋め戻しは所司代の仕事であった可能性が高い。宮内でこれまで確認されてきた土取り穴の中には今回確認した大規模土取りに関連するものもあって考えられ、今後新たな視点で調査を行えば、聚楽第や所司代に伴う開発が中世を通じて禁野であった「内野」に及んでいった状況が明らかになることも可能であろう。

（赤松 佳奈）

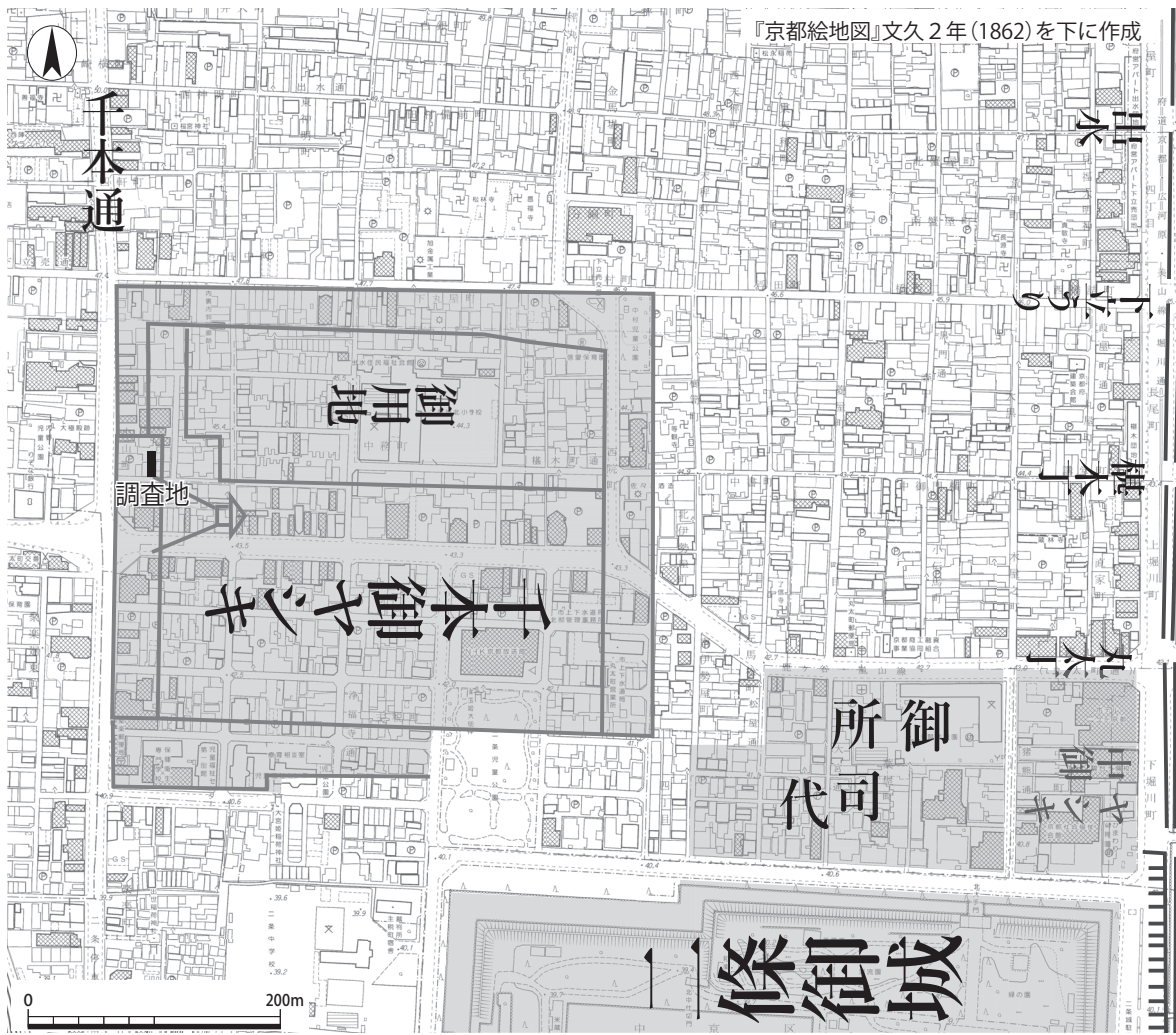


図10 京都所司代の推定位置と調査地 (1 : 6,000)

### Ⅲ 円宗寺跡

#### 1. 調査経過

調査地は、右京区御室小松野町 18-6、18-10 に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「円宗寺跡」に該当する。当該地では、宅地造成工事に先立ち試掘調査が実施されており、平安時代の遺構を確認している<sup>1)</sup>。今回、造成された敷地の一部で個人住宅新築の計画がなされ、令和4年11月17日付で文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。これを受けて、文化財保護課は試掘調査成果に基づいて、記録保存のための発掘調査を実施した。調査は令和4年11月28日から12月28日まで実施し、調査日数は延べ23日、調査面積は80㎡である。

#### 2. 遺 跡

##### (1) 立地と歴史的環境

調査地は、双ヶ岡の東北麓にあり、丘陵上に位置する。この丘陵は、仁和寺北方にある住吉山（大内山）を頂点とし、北から南に向けて緩やかに傾斜する。また、いくつかの小流路が谷地形を形成



図1 調査地点と周辺調査 (1 : 5,000)



図2 調査前全景（東から）



図3 1区重機掘削状況（北東から）



図4 1区検出状況（南西から）



図5 1区埋め戻し状況（南西から）

しながら南流する。

延暦13年(794)、桓武天皇により平安京へ遷都すると、双ヶ岡周辺地域は平安京の西郊として貴族の別業や寺院が造営され、開発が進むこととなる。仁和4年(888)には、宇多天皇の御願により仁和寺が造営され、これを契機として仁和寺南部一帯を中心に、院家と呼ばれる子院が立ち並ぶようになる。また、天皇の御願により創建されたもののうち、特に規模の大きな4寺は、いずれも寺名の頭に「円」が使われていることから、「四円寺」と呼称されている<sup>2)</sup>。

延久2年(1070)に、後三条天皇の御願により造営された円宗寺は、造営当初、金堂・講堂・法花堂を備えていた。さらに、翌年に五仏堂(常行堂)・灌頂堂、永久3年(1115)には五大堂が供養され、他にも経蔵・塔・鐘楼等の存在が知られている。延久4年(1072)には法華会、永保2年(1082)には最勝会が行われるなど、国家的な仏事も数多く行われ、同時期に造営された六勝寺と並んで、主要寺院として認識されていたようである<sup>3)</sup>。

しかし『民経記』天福元年(1233)五月五日条には金堂・南大門を残し荒廃しているとの記述があり、応安2年(1369)に大風により倒壊したのを最後に、復興することなく廃絶した<sup>4)</sup>。伽藍配置等を示した絵図は確認されておらず、その正確な所在地は明らかになっていない<sup>5)</sup>。

円宗寺の廃絶後、正確な時期は不明ではあるが、調査地一帯は仁和寺領となったようである。

## (2) 周辺の調査事例(図1・表1)

これまでに、円宗寺の推定地内では発掘調査は行われていないが、試掘・詳細分布調査では、複

表1 周辺の調査事例一覧（調査番号は図1に対応）

調査	種別	調査年	遺跡	調査概要	文献
1	発掘	1973	円乗寺跡	北で西に偏る平安時代の築地・小路・側溝を検出。	畑美樹徳「四円寺跡推定地の調査」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993年
2	発掘	1987	円乗寺跡	調査1で検出した側溝の延長を検出。埋没時期は10世紀中葉以前。	埋文研『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1991年
3	試掘	2005	円宗寺跡	GL-1.15mで近世以降整地土、-2.15mで地山。	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』、2006年
4	試掘	2005	円宗寺跡	現代盛土直下のGL-0.1~-1.3mで地山。地山上面で南北溝を検出。	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』、2006年
5	試掘	2018	円宗寺跡	現代盛土直下のGL-0.25~-0.5mで地山。調査4で確認した南北溝が、近世の遺構であることを確認。	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』、2019年
6	試掘	2022	円宗寺跡	平安時代の遺構を複数確認。	京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 令和4年度』、2023年
7	立会	1986	円宗寺跡ほか	平安時代の溝・井戸や流路等多数の遺構を確認。	埋文研『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1989年

凡例 埋文研…財団法人京都市埋蔵文化財研究所

数の遺構が確認されている。今調査に先立って行われた試掘調査では、円宗寺に関連する可能性のある遺構が確認された（図1-調査6）。また、水道管敷設工事時に行われた立会調査では、推定地内を南北に貫く旧流路や、寺域北限と推定される溝等を確認している（図1-調査7）。また、各調査地点からは大量の瓦が出土しており、周辺に瓦葺建物が存在したことを物語っている。調査地周辺では古くから瓦が採集されており、円宗寺との関連が注目されている<sup>4)</sup>。

円宗寺の推定地外では、複数の発掘調査が行われている。今調査地の北東で行われた円乗寺推定地の調査では、四円寺建立以前のものと思われる道路跡を検出した（図1-調査1）。この道路は現在の仁和寺東隣接道路南延長線上に位置し、北で西に6度振っている。この傾きは条里の影響とみられ、当地の地割を反映しているものとみられる。

一帯で行われた調査によって、周辺で平安時代に瓦を用いる建造物が存在した蓋然性が高まっている。しかし、肝心の円宗寺関連遺構の検出例は限られており、実態は未だ明らかとされていない。

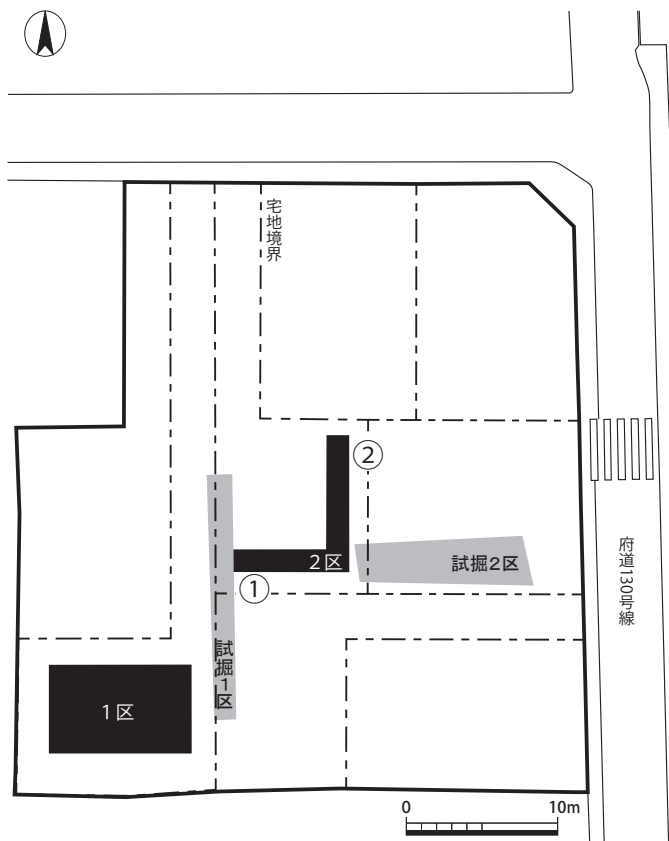


図6 調査区配置図（1：500）

### 3. 遺 構（図版4）

#### （1）基本層序（図7）

調査区は計画建物範囲内に2箇所設け、南西側を1区、北東側を2区とした。ここでは、良好に地層が遺存していた1区の東壁を代表して述べる。

発掘調査直前に、宅地造成・既存建物解体に伴う分厚い盛土がされていた。盛土以下GL-1.7mで旧耕作土（図7-東壁1層）、-1.9mで暗灰黄色細砂の近世後半整地土（図7-東壁3層、第

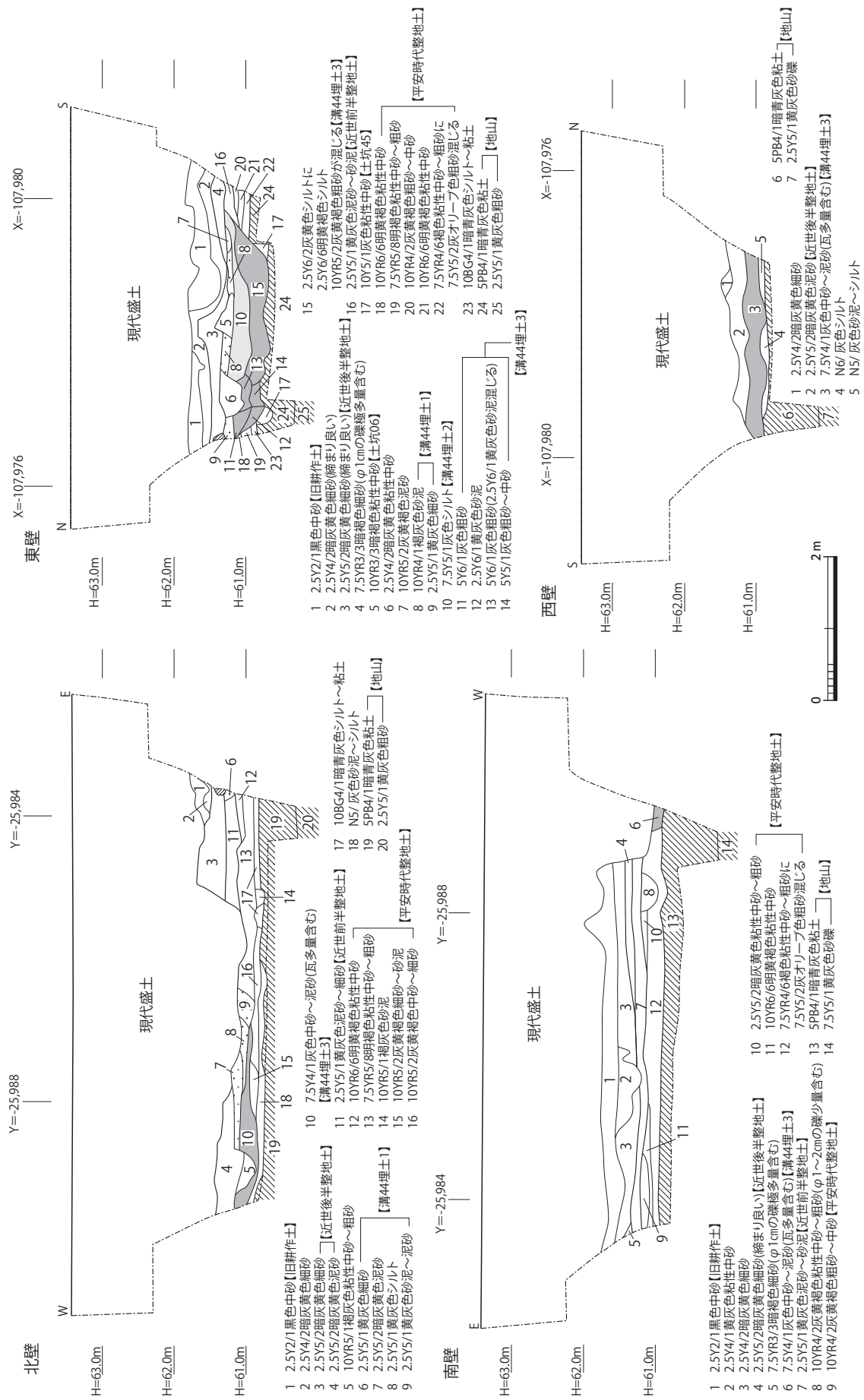


図7 1区調査区断面図 (1:80)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
近世後半	ピット5、土坑6、整地土	
近世前半	溝44、整地土	
平安～鎌倉時代	土坑45、整地土	

1面)、-2.1mで黄灰色泥砂～砂泥の近世前半整地土(図7-東壁16層、第2面)、-2.2mで灰黄褐色粗砂～中砂と明黄褐色粘性中砂～粗砂などの平安時代整地土(図7-東壁19～22層、第3面)、-2.45mで暗青灰色粘土の地山(図7-東壁24層)に至る。地山は湿地状の堆積である。調査地周辺ではいくつかの小流路が南流していたことが知られており、今回の調査地もこのような流路が形成する谷状地形に位置しているものとみられる。地山上面でも検出を行ったが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

(2) 1区

**平安～鎌倉時代の遺構(図8)**

標高61.1mの灰黄褐色粗砂～中砂と、明黄褐色粘性中砂～粗砂などの上面で、平安～鎌倉時代の遺構を検出した(第3面)。なお、第2面で検出した溝44により、大半が削平されていた。

整地土 調査区の南端で、南北0.5m、東西4.3mの範囲を確認した。また、溝44に削平されており平面上では検出できていないが、北壁でも東壁から4.4m地点まで確認している。平面上で検出できた南端では、東西で構成する地層が異なる状況を確認した。西側では、灰オリーブ色粗砂が

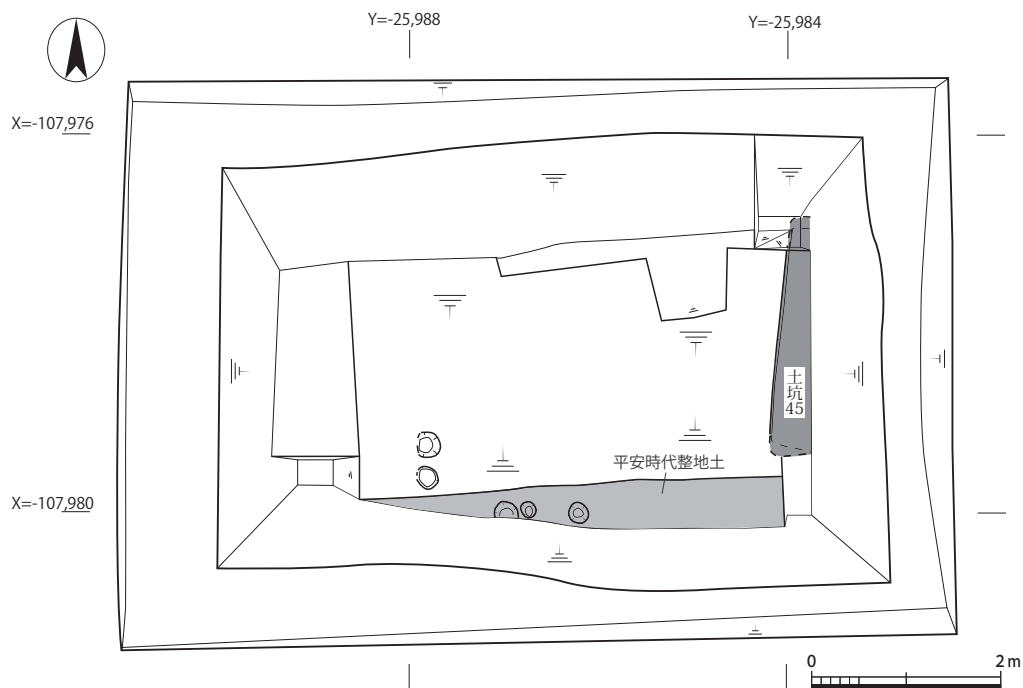


図8 1区平安～鎌倉時代の遺構(第3面)平面図(1:80)



混じる褐色粘性中砂～粗砂層（図7-南壁12層）だが、東側ではこの上に明黄褐色粘性中砂層（図7-南壁11層）や灰黄褐色色粗砂～中砂層（図7-南壁9層）が堆積する。整地土の層厚は0.2mを測る。下層は湿地状の堆積であり、これを覆うように平坦に整地されている。北壁でも確認していることから、本来は調査区全体に分布していたとみられる。整地土中には、平安時代の所産とみられる土師器細片と、瓦片が含まれていた。

土坑45 調査区の東端で、溝44の直下で検出した。平面形は隅丸方形で、西辺と北西角・南西角のみ検出した。西辺は2.6m、深さ0.25m以上を測る。埋土は灰色粘性中砂（図7-東壁17層）の単層で、埋土からは平安時代後期から鎌倉時代の瓦が出土した。上部が溝44に切られているが、検出状況や出土遺物から第3面の遺構と判断した。

### 近世前半の遺構（図10）

標高61.3mの黄灰色泥砂～砂泥層上面で、近世前半の遺構を検出した（第2面）。

溝44（図9） 調査区のほぼ全体を、東西方向に貫く溝状の遺構である。南北幅2.6m、検出した東西長は5.4m以上を測る。なお、東壁付近で幅が拡大しており、3.1mを測る。深さは調査区西側から東側に行くにつれ深くなり、西壁では0.3mを、東壁では0.6mを測る。東で北に約5度振る。埋土は大きく3層に分かれ、上層から埋土1（褐灰色砂泥ほか、図7-東壁8・9層）、埋土2（灰色シルト、図7-東壁10層）、埋土3（灰黄色シルトほか、図7-東壁15層）となる。埋土1は調査区中央付近が最も厚く、埋土2は東に行くにつ

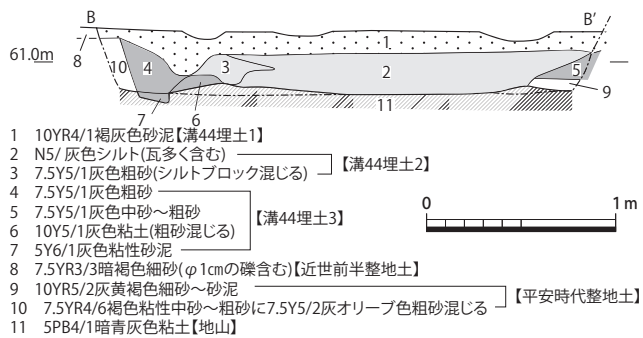


図9 1区溝44断面図（1：40）

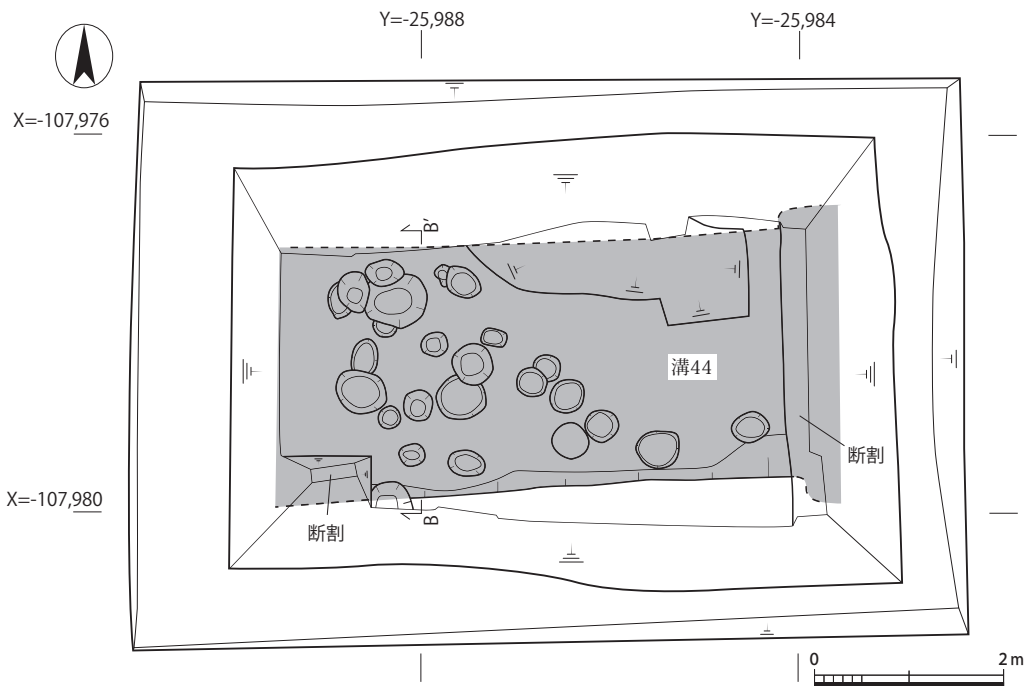


図10 1区近世前半（第2面）平面図（1：80）

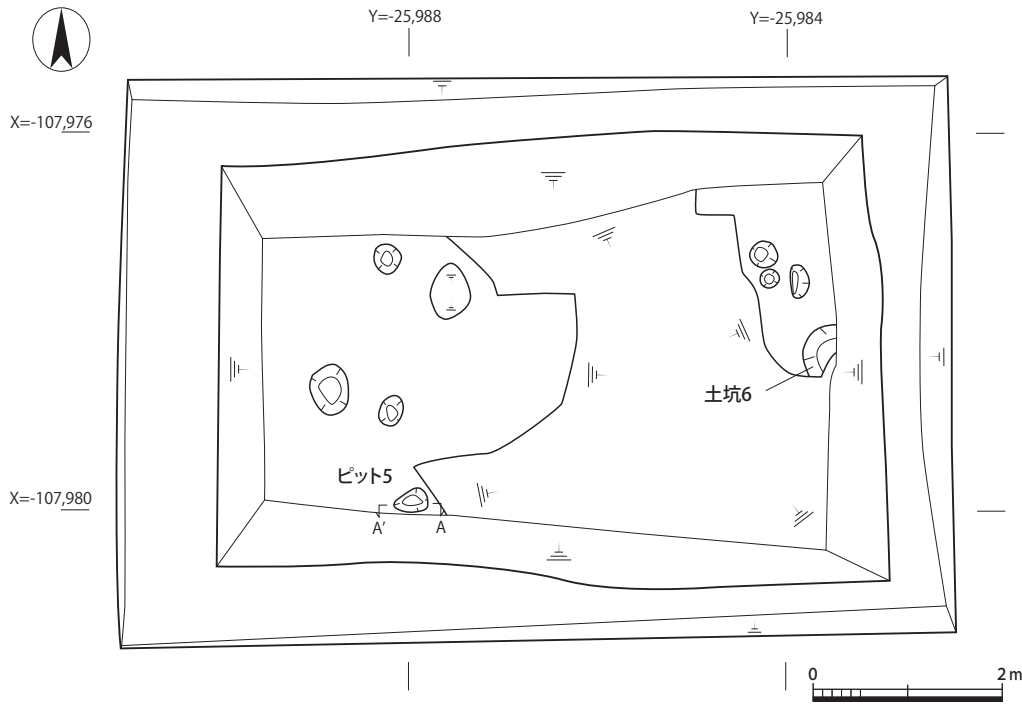


図11 1区近世後半（第1面）平面図（1：80）

れ厚く堆積する。埋土1は褐灰色砂泥層からなり、他の埋土より締まっている。埋土2は灰色シルト層からなる湿地状の堆積である。一時期、滞水していたものとみられる。埋土3は、明黄褐色シルトや灰黄褐色粗砂などが、ブロック状に堆積する。人為的に埋め立てたものとみられる。

いずれの埋土からも、近世の遺物に混ざって平安・鎌倉時代の瓦が多量に出土した。細片のため図化に耐えられなかったが、一点のみ緑釉が施された瓦が含まれていた。

### 近世後半の遺構（図11）

標高61.5mの暗灰黄色細砂層上で、近世後半の遺構を検出した（第1面）。既存建物体体時の攪乱による影響が大きく、平面上で検出できたのは、調査区西半と北東側の一部に留まる。

ピット5（図12） 調査区の南西側で検出した。平面形は楕円形で、東西0.4m、南北0.2m、深さ0.08mを測る。埋土は灰黄褐色粘性砂泥の単層で、陶製模造品が出土した。

土坑6 調査区東側で検出した。平面形は円形で、径0.6m以上、深さ0.25m以上を測る。埋土は暗褐色粘性中砂の単層で、土師器や施釉陶器が出土した。

### （3）2区（図13）

2区では、既存建物体体時の盛土が、本来の地山上面以深まで及んでいることを確認した。遺構・遺物ともに確認できなかった。

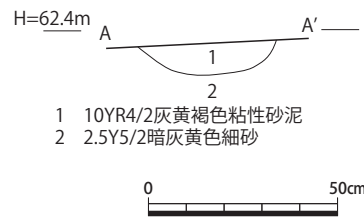


図12 ピット5断面図（1：20）

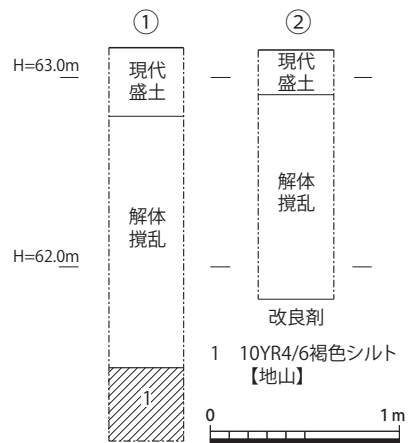


図13 2区柱状図（1：40）  
※各地点番号は、図6と対応

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、灰釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦		土師器2点、灰釉陶器2点、軒丸瓦8点、軒平瓦5点、丸瓦3点、平瓦4点		
近世	土師器、陶磁器、軒平瓦、陶製模造品、金属製品		土師器2点、施釉陶器2点、青磁1点、軒平瓦1点、陶製模造品1点、金属製品1点		
合計		16箱	32点(2箱)	1箱	13箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

## 4. 遺物 (表3、図14～18)

調査終了時点で、整理箱15箱分出土した。時期としては平安時代、近世のものが多く、中でも溝44などから出土した瓦が大半を占める。

### (1) 土器・金属製品

#### 溝44 (図14)

1は土師器皿Acである。残存高0.9cmを測る。口縁部のみがのこる。2は灰釉陶器瓶である。口径5.6cm、残存高2.9cmを測る。外面全体と、内面上部に薄く灰釉がかかる。ロクロで成形されており、頸部には2条の突線がめぐる。3は青磁皿である。底径9.0cm、残存高2.9cmを測る。接地部を除き、内外面に厚く釉がかかる。高台は削り出しで、接地部付近に離れ砂が付着する。内面に草花文が陰刻される。4は施釉陶器鉢である。底径9.0cm、残存高8.5cmを測る。唐津産と思われる。接地部を除いて内外面に釉がかかる。高台は削り出しで、接地部周辺に離れ砂が付着する。見込みに渦巻を描き、放射状に直線が伸び、笹の表現を描く。5は土師器皿Aである。器高1.5cmを測る。体部に横ナデの痕跡が明瞭にのこる。6は灰釉陶器椀である。底径6.6cm、残存高2.7cmを測る。高台は貼り付けで、内外面にロクロナデを施す。7は金属製の棒状品である。展開長23.2cm、径0.4cmを測る。材質は黄銅と思われる。断面形は円形で、両端部は細くなる。用途は不明だが、何らかの金具が想定される。近世の所産か。1～4は埋土2、5～7は埋土3から出土した。

#### ピット5 (図14)

8は陶製の馬形模造品である。全長6.2cm、幅2.6cm、残存高5.2cmを測る。四肢と顔の一部が欠損する。粘土を付帯させることにより、側頭部には耳、胴部上面には鞍、横面には泥障の表現がなされる。全体に施釉されるが、鞍・泥障と後頭部が濃緑色に発色するのに対し、胴部横面は灰色、首部などは素地の白色が見える。共伴遺物に恵まれないが、近世の所産と思われる。

#### 土坑6 (図14)

9は土師器皿Nである。口径5.9cm、器高1.5cmを測る。手づくねで成形する。10は土師器皿Sである。口径9.8cm、残存高2.0cmを測る。焼成は良好だが、表面は風化する。底部に圏線を持つ。11

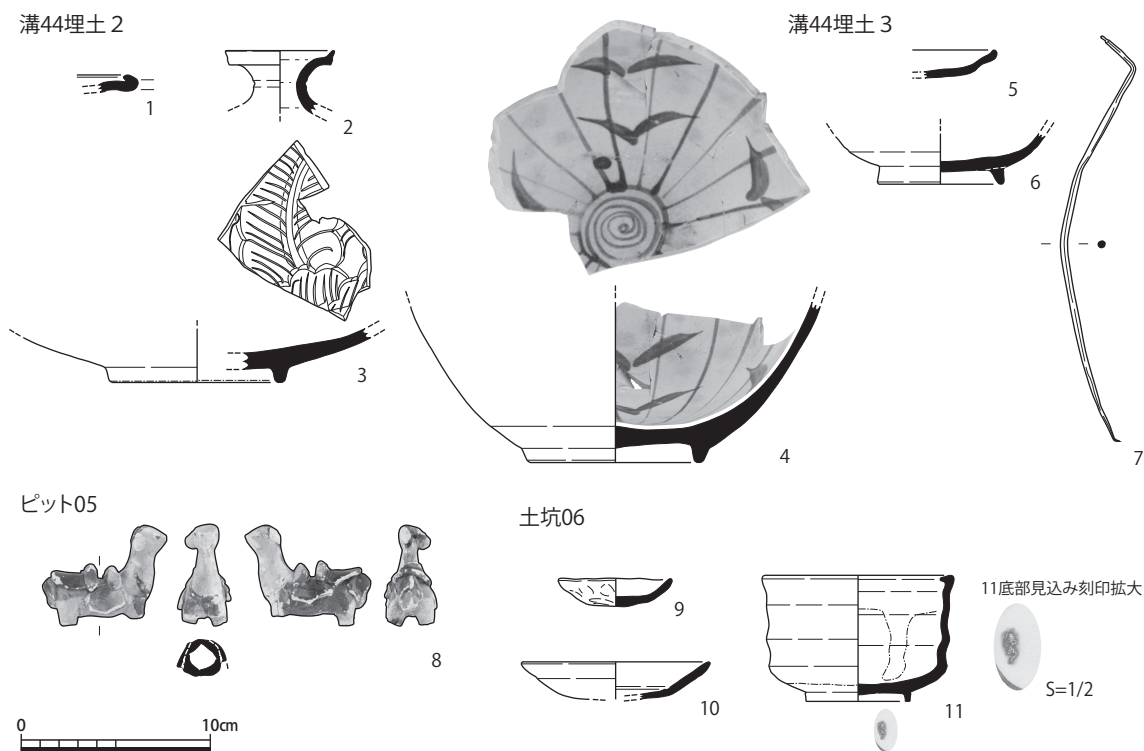


図14 出土遺物 実測図(1:4)

は施釉陶器香炉である。口径9.8cm、底径5.1cm、器高6.7cmを測る。外面と内面上部が施釉され、底部と内面下部が露胎する。釉は灰白色を呈し、内面で底に向かって垂れる。胎土は浅黄橙色を呈する。高台は削り出し、体部はロクロで成形する。底部に「清水」銘の刻印を持つ。いずれも近世の所産である。

## (2) 瓦類

出土遺物の大半は瓦である。溝44をはじめとした、多数の遺構から出土した。これらの瓦の多くは、平安時代後期～鎌倉時代のものと思われる。

周辺で行われた立会調査では、平安時代の瓦が多数出土し、報告されている。今回出土した軒瓦の中には、これらと同文のものが多く含まれている。以下、立会〇と表記するものについては、註6文献報告の瓦番号と対応するものとする。

### 軒丸瓦(図15)

瓦1～8は、軒丸瓦である。瓦1は複弁6葉蓮華文軒丸瓦である。中房には1+4の大型の蓮子を配す。蓮子は盛り上がらない。複弁間の区別は不明瞭。界線は二重で、珠文は持たない。大和産か。立会67と同文である。瓦2は複弁6葉蓮華文軒丸瓦である。周縁部が剥離しているが、瓦1と同文と思われる。瓦当部裏面に指圧痕がのこる。瓦3は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房の蓮子は1+6か。周囲に雄芯が巡り、蓮弁は丸みを帯び短い。界線は一重で、珠文を持つ。瓦当部側面と裏面にはナデを施す。瓦4は単弁蓮華文軒丸瓦である。中房には1+4の蓮子を配す。芯弁はやや長く、先端は丸みを持つ。瓦当部裏面にナデを施す。瓦5は複弁蓮華文軒丸瓦である。弁数は8弁、

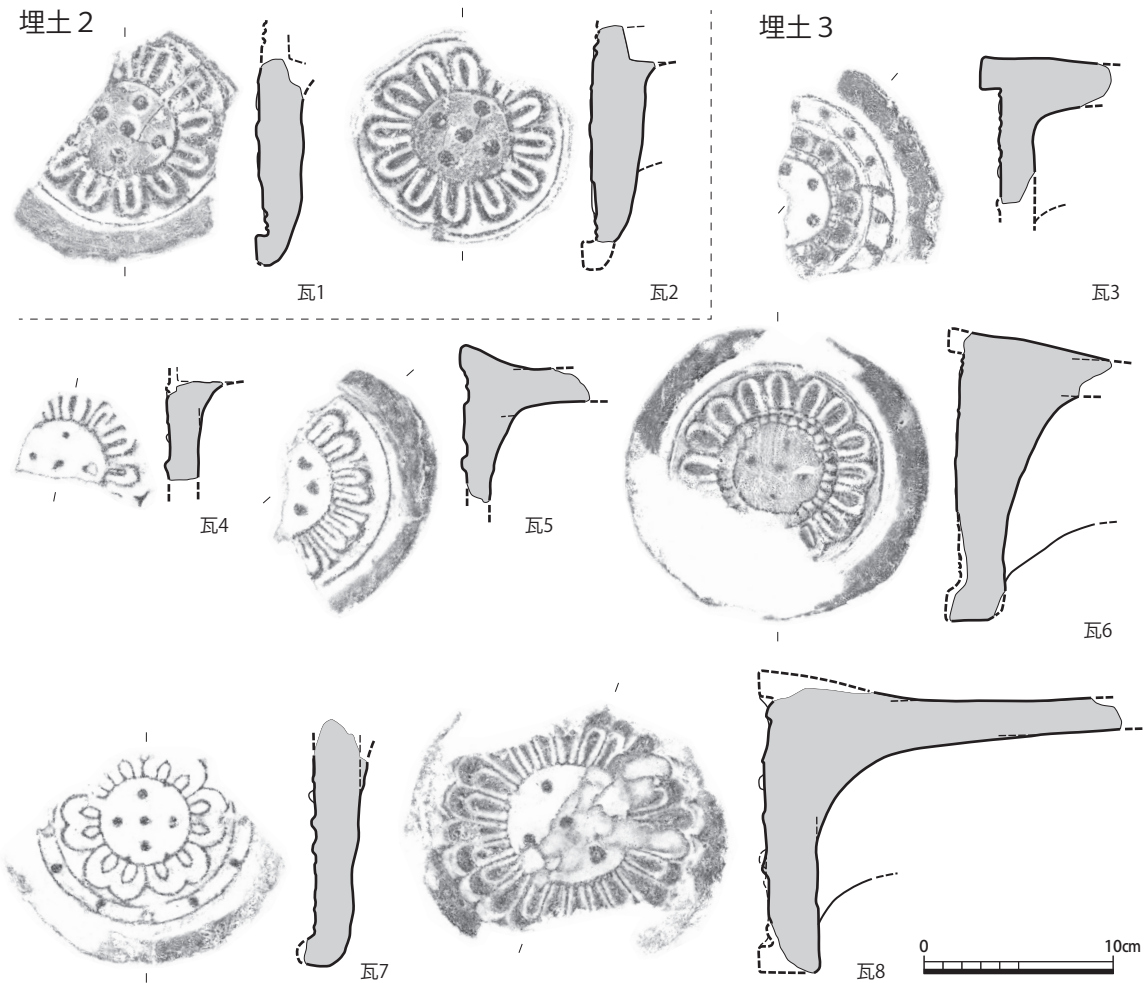


図15 軒丸瓦実測図・拓影(1:4)

中房の蓮子は1+6か。花卉の輪郭は明瞭で、界線は一重である。立会68と文様構成は似るが、珠文を持たない。山城産か。瓦当部側面と裏面にはナデを施す。瓦6は単弁16葉蓮華文軒丸瓦である。中房は1+4の蓮子を配す。蓮子は盛り上がらない。周囲に雄芯を巡らす。芯弁はやや細長く、先端は丸みを持つ。界線は一重で、珠文は持たない。大和産か。立会66に文様構成はよく似るが、雄芯の幅が異なる。瓦当部側面にはケズリを施した後にナデを、裏面にはナデを施す。瓦7は複弁6葉蓮華文軒丸瓦である。中房は1+4の蓮子を配す。蓮弁・子弁は線状で表現され、間弁を持たない。界線は一重で、珠文がやや粗く巡る。南庄田瓦窯跡で同文瓦が採集されている<sup>7)</sup>。瓦当部側面にはケズリを、裏面にはナデを施す。瓦8は複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。中房は1+4の蓮子を配す。外区を持たず、花卉の先端は周縁に重なる。立会74と同文か。瓦当部側面にはケズリを、裏面にはナデを施す。大和産か。瓦1・2は溝44埋土2、3~8は溝44埋土3から出土した。

#### 軒平瓦 (図16)

瓦9~14は、軒平瓦である。瓦9は唐草文軒平瓦である。唐草は太く、界線を持たない。瓦当部凹面と顎下部にはケズリを、顎部裏面はナデを施す。平瓦部が剥離している。瓦10・11は均整唐草文軒平瓦である。瓦10は唐草が太く、瓦11は比較的細いという差異はあるが、同文である。中心飾りは2本の山形の線で結ばれた背向C字形で、その上端から唐草が左右に展開する。界線の

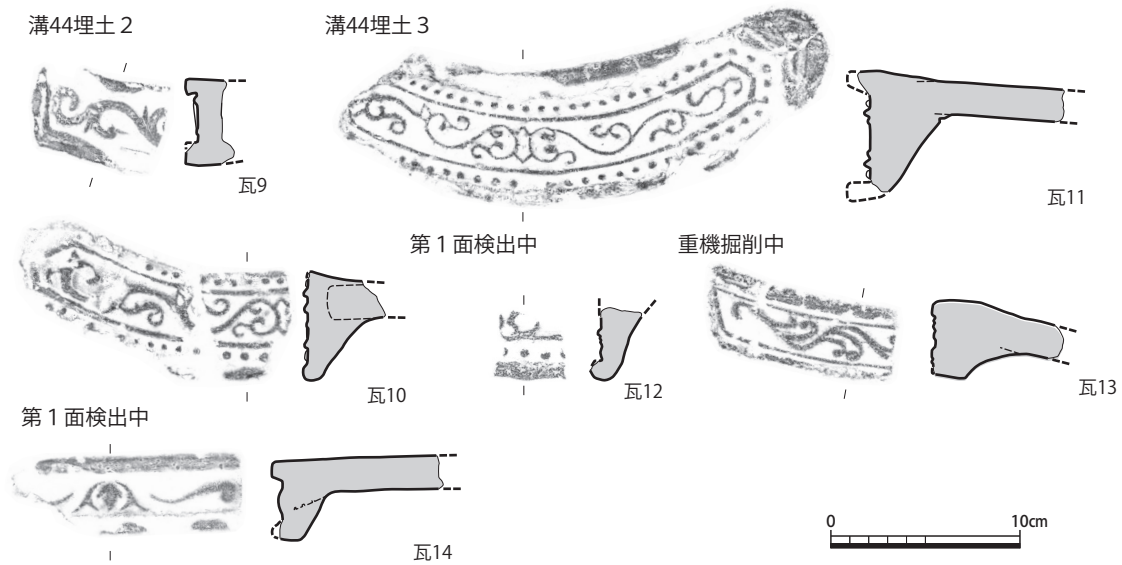


図16 軒平瓦実測図・拓影（1：4）

外には珠文が密に巡る。両脇区は三角形に張り出す。播磨産。立会58と同文である。いずれも、瓦当部凹面と顎裏面にはナデを施す。瓦12は唐草文軒平瓦か。唐草は界線に接する。外区に珠文がめぐる。顎裏面にはナデを、顎下部にケズリを施す。瓦13は内行唐草文軒平瓦である。唐草の単位は連続し、珠文は持たない。顎下部にケズリを施す。瓦14は道具瓦である。上弦・下弦が直線状を呈す。顎下部にはナデを施す。棟込瓦の類か。近世の所産である。

瓦9・10は溝44埋土2、瓦11は溝44埋土3、瓦12・13は第1面検出中、瓦14は重機掘削中に出土した。

#### 丸瓦（図17）

瓦15～17は丸瓦である。瓦15は凸面に縄タタキ後にナデを施し、凹面に布しぼり目がのこる。瓦16は凸面はケズリを施し、凹面に布目がのこる。側縁はケズリを施し、広縁には藁圧痕がのこる。瓦17は凸面に縄タタキ目、凹面に布目がのこる。玉縁と丸瓦部凸面の境にはナデを、狭端にはケズリを施す。

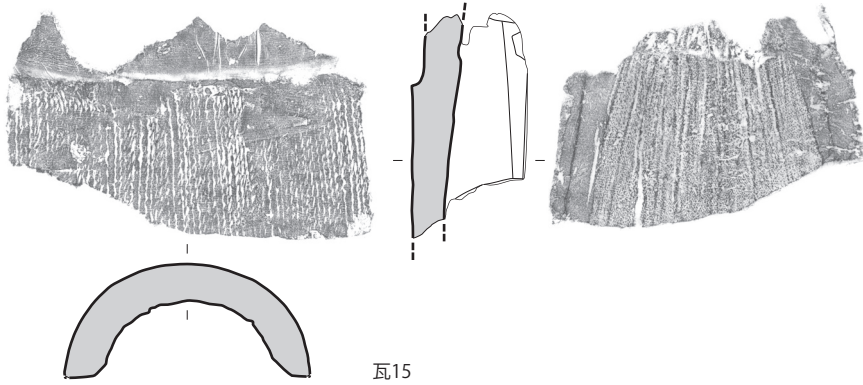
瓦15は溝44埋土2、瓦16・17は溝44埋土3から出土した。

#### 平瓦（図18）

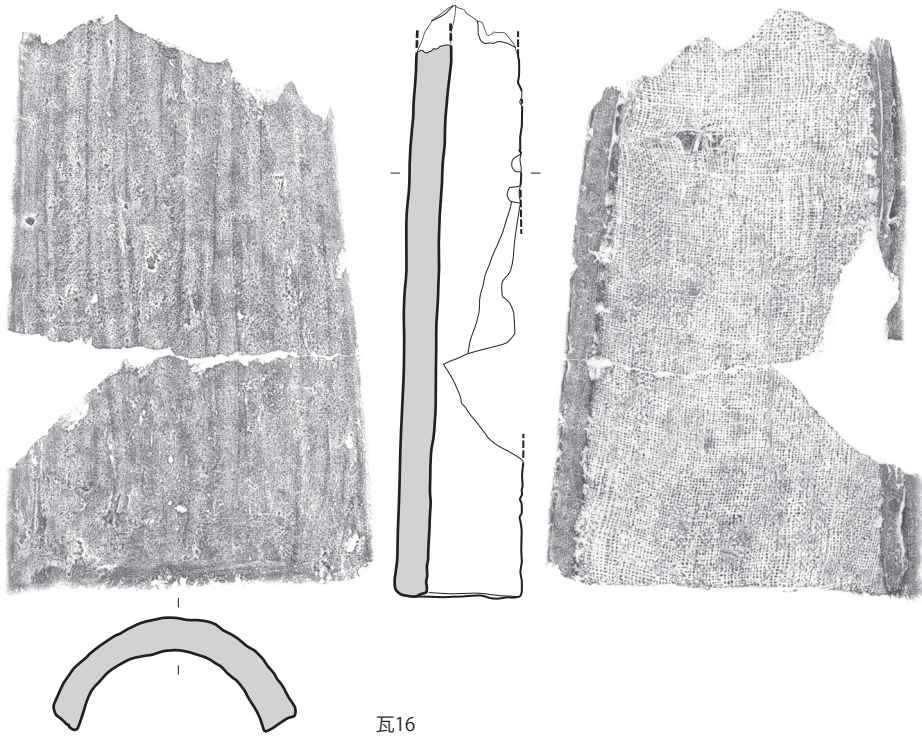
瓦18～21は平瓦である。瓦18は凸面に「A」字形と三角形を二つ、砂時計形に繋ぎ合わせたものを組み合わせた形状のタタキを不規則に施す。凹面には布目がのこる。側縁にはケズリを施す。瓦19は凸面に斜格子タタキ目、凹面に布目がのこる。側縁にはナデとケズリを施す。瓦20は凸面にナデを施し、凹面に「天」字の陽刻がのこる。瓦21は凸面に矢羽状のタタキを施した後、武田菱状のタタキを施す。凹面には布目がのこる。側縁はケズリで面取りする。

瓦18は平安時代整地土中、瓦19・20は溝44埋土2、瓦21は第1面検出中に出土した。

溝44埋土2

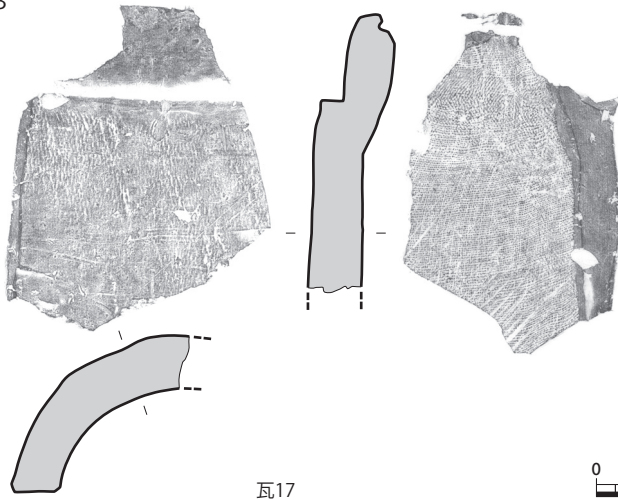


瓦15



瓦16

溝44埋土3



瓦17



图17 丸瓦実測図・拓影(1:4)

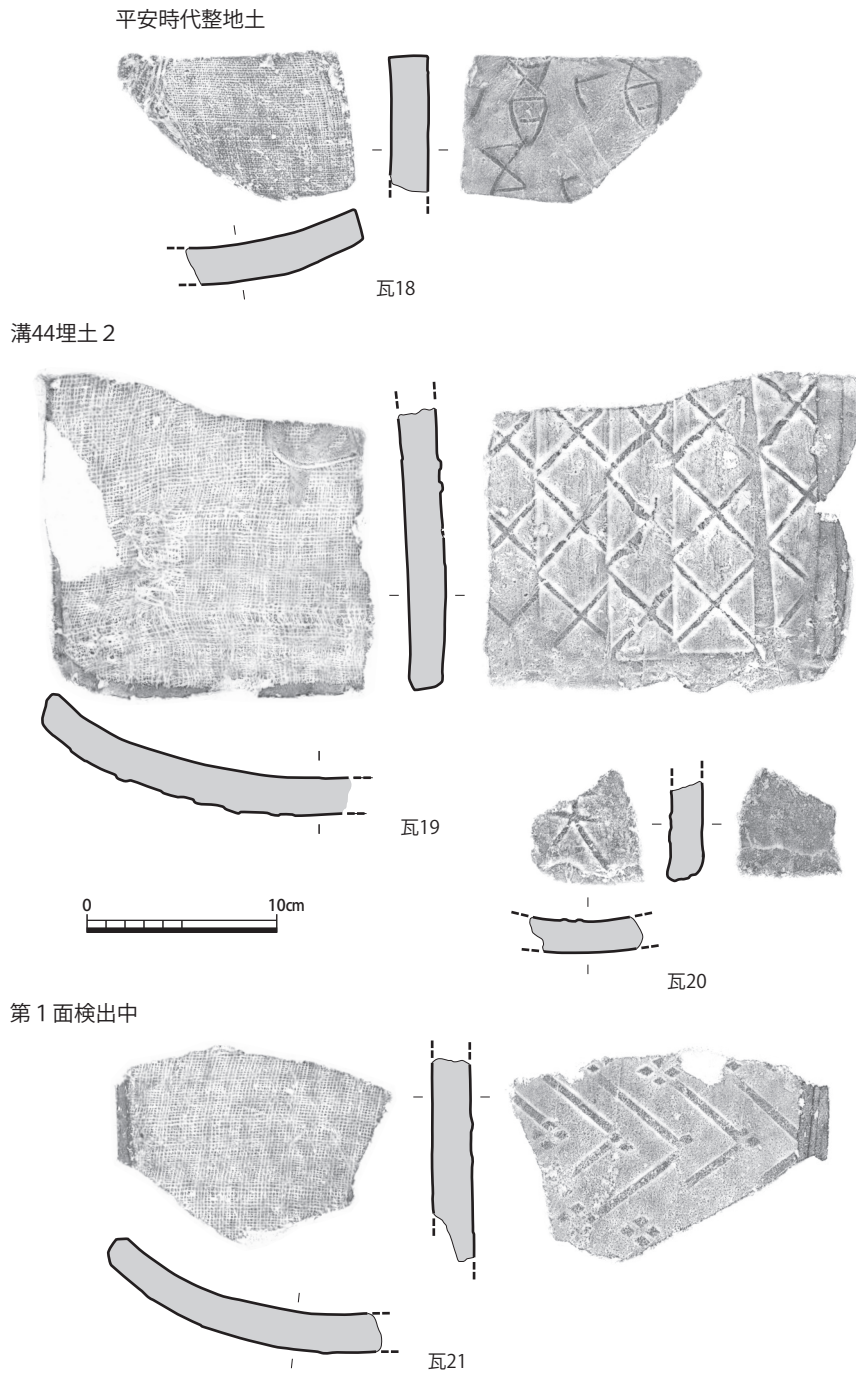


図18 平瓦実測図・拓影（1：4）

### 小結

今調査で出土した瓦は、瓦12を除き、平安時代後期～鎌倉時代のものが大半を占める。これまでに円宗寺推定地内の調査で出土した平安時代後期の瓦は、丹波・大和・播磨産の瓦が主体を占めるとされており<sup>8)</sup>、今調査でも大和産（瓦1・瓦6・瓦8）や播磨産（瓦10・瓦11）の瓦が出土した。なお、瓦3・瓦7・瓦9・瓦14は、円宗寺推定地内で初めて確認したものである。概ねこれまでの見解を追認し、さらに新たな資料を加える形となった。



## 5. まとめ

今回の発掘調査では、平安時代の土坑や整地土、近世の遺構、近世に埋没した溝を確認した。

平安時代の整地土は、本調査地周辺では仁和寺内を除き確認されておらず、本調査で初めて確認された。ただ、遺存範囲が狭小であり、詳細な時期の特定には至らなかった。この整地土が円宗寺に伴うものか、あるいはその他の施設に伴うものかは、周辺調査事例を積み重ねる中で判断する必要がある。今後周辺で同様の整地土が確認されるのを待ちたい。また、円宗寺関連遺構の検出は、土坑45と平安時代整地土がその可能性を指摘できるに留まった。これまでの検出事例もまだ限られたものであるが、このような痕跡の積み重ねにより、円宗寺の実態を明らかにしていきたい。

近世に埋没した溝44からは、古瓦が多量に出土した。出土状況から、瓦は意図的に埋納されたものではなく、投棄されたような状況が推定される。近年まで周辺に瓦が散布していたという証言<sup>6)</sup>もあり、散在していた瓦を集めて投棄したものと考えられる。瓦の時期は平安時代後期から鎌倉時代が大半を占め、円宗寺が隆盛していた時期と符合する。平安時代後期から鎌倉時代に、多量の瓦を用いる建築物が周辺に存在していた蓋然性は高い。周辺の調査成果を裏付ける結果となった。

調査地の北西にある仁和寺は、応仁の乱の戦火により応仁2年(1468)に焼失した後、寛永11年(1634)に再興する。仁和寺再興後、周辺は門前町として栄えたのであろう。今回の調査でも、近世の遺構・遺物が確認されており、人々が活動していた様子がうかがえる。

以上、今回の調査成果を報告した。今調査で確認した遺構や瓦は、円宗寺の実態解明に必要な資料となる。今後の調査の進展に期待したい。

(佐藤 拓)

註

- 1) 新田和央「円宗寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和4年度』京都市文化市民局、2023年。
- 2) 円宗寺のほかは円融天皇による円融寺(永観元年、983)、一条天皇による円教寺(長徳4年、998)、後朱雀天皇による円乗寺(天喜3年、1055)がある、なお、円宗寺は供養当初は「円明寺」であったが、翌年に「円宗寺」に改称される。
- 3) 円宗寺の伽藍来歴については、古藤真平「仁和寺の伽藍と諸院家(上)」『仁和寺研究』第一輯、古代学協会、1999年、上村和直「御室地域の成立と展開」『仁和寺研究』第四輯、古代学協会、2004年に詳しい。
- 4) 註3)に同じ。
- 5) 註3)に同じ。
- 6) 坂東善平「京都市円宗寺址の瓦について」『古代学研究』第58号、古代学研究会、1970年。
- 7) 畑美樹徳「四円寺跡推定地の調査」『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会、1993年。
- 8) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『京都嵯峨野の遺跡-広域立会調査による遺跡調査報告-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊、1997年。
- 9) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
- 10) 上村和直「御室地域における造営と瓦-平安時代後期を中心として-」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会、2002年。

# IV 植物園北遺跡

## 1. 調査経過

調査地は北区上賀茂南大路町に所在する（図1）。この辺りは、賀茂別雷神社（以下、上賀茂神社）の社家が明神川沿いに建ち並び、社家町としての美しい街並みを今も残しており、一部区域は、重要伝統的建造物群保存地区にも選定されている。対象地は、上賀茂神社の末社である藤ノ木社のある、明神川と南大路辻子が交差する地点の南東部にあたり、明神川に面する敷地の北側と南大路辻子に面する敷地の西側には土塀が築かれ、南大路辻子に向かい伝統的建造物の選定を受ける腕木門を構える屋敷地である。

この地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「植物園北遺跡」の北西部に該当する。ここに個人住宅新築工事の計画がなされ、令和5年7月31日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が行われた。この計画に対し、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、調査を行うこととなった。調査期間は令和5年10月2日から11月2日、調査面積は143㎡である。

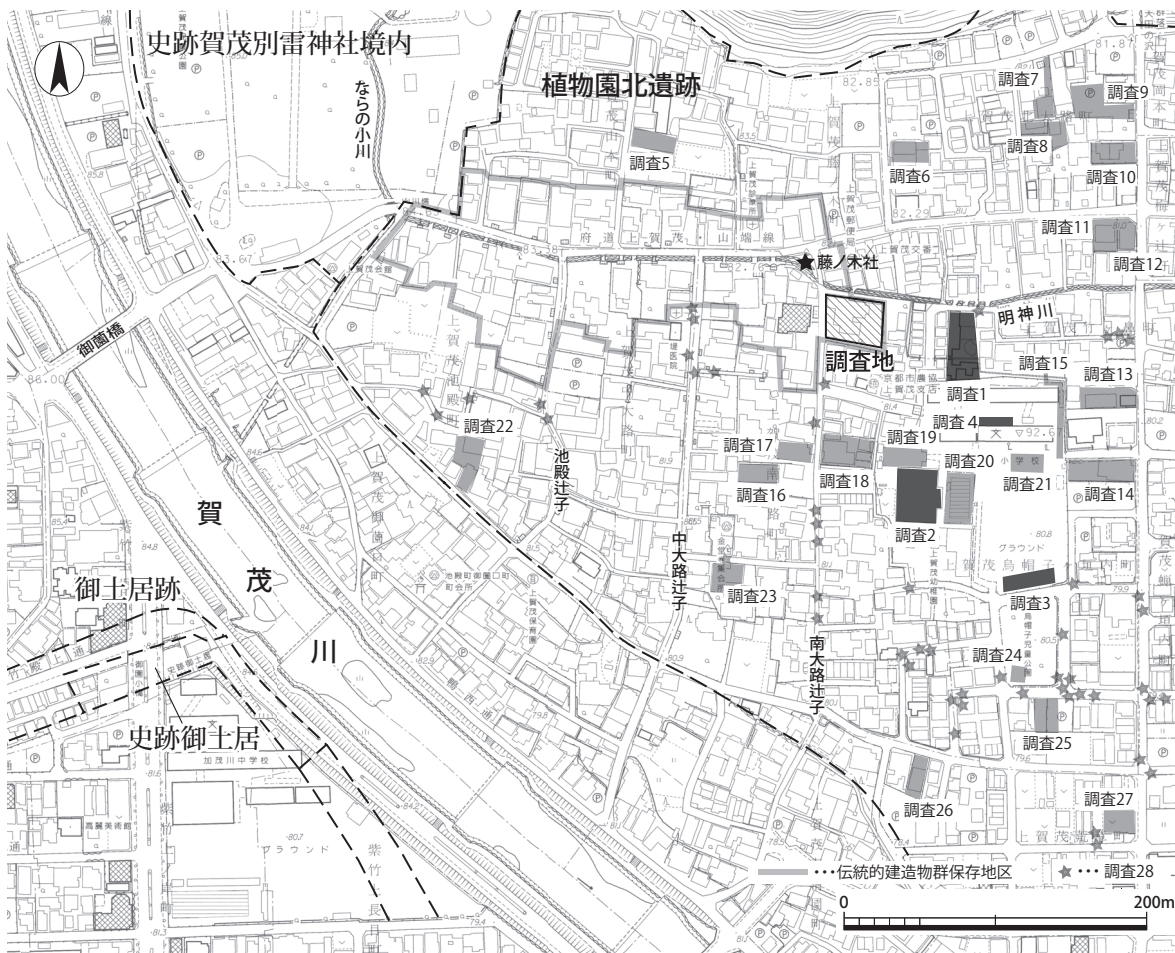


図1 調査地位置図（1：5,000）



図2 重機掘削風景（西から）



図3 遺構掘削及び測量風景（北西から）



図4 写真撮影風景（北西から）



図5 埋め戻し風景（北西から）

## 2. 遺 跡

### （1）地理的環境と歴史的環境

植物園北遺跡は、京都盆地の平野部北端、賀茂川と高野川が合流する地点の北西に位置している。上賀茂神社付近を北西端として、北西から南東方向に緩やかに傾斜する賀茂川の扇状地上に広がる遺跡で、これまで数多くの調査が行われており、弥生時代から古墳時代を中心とする縄文時代から鎌倉時代の集落遺跡であることがわかっている。近隣の遺跡としては、上賀茂本山遺跡では旧石器時代の尖頭器、ケシ山遺跡ではナイフ形石器が確認されており、北側の丘陵部に旧石器時代から縄文時代の遺跡が点在している。この丘陵には古墳時代になると、林山古墳群、西山古墳群など多くの古墳が築かれ、居住域である植物園北遺跡に対する墓域としての様相が窺える。また遺跡の北西には、創建が7世紀後半までに遡るとされる上賀茂神社があり、神社の南東には上賀茂神社の社司や氏人が集住した社家町が広がっている。社家町の形成については、寛仁元年（1017）に後一条天皇が母后（藤原彰子）とともに賀茂社に行幸した際に、所領の寄進をすることになったのが発端となる。翌年、賀茂（河上）、小野、錦織（岡本）、大野（小山）の四郷が寄進され、鎌倉時代には、賀茂六郷と呼ばれる荘園が成立する。これにより百姓や町人などが集住するようになり、特に神社付近には神主家筋にあたる社司と一般社家の氏人など、神職を継承する人々で社家町が形成された。鎌倉時代の中頃に後鳥羽天皇の皇子と称された氏久が社務職に就いてからその職を独占す

表1 既存調査一覧

調査No.	調査区分	検出遺構	出土遺物	出典	備考
1	発掘	古墳時代の竪穴建物、柱穴、土坑、鎌倉・室町時代の井戸、柱穴群、溝、集石土坑、桃山時代の石室、集積土坑、柱穴、江戸時代の土坑、柱穴などを確認。	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器など	『植物園北遺跡発掘調査概報』平成元年度京都市文化観光局	1990 88RH031
2	発掘	古墳時代の竪穴建物、流路、平安時代後期の掘立柱建物、土坑、鎌倉～室町時代の井戸、柱穴群、溝、集石土坑、江戸時代の土坑、柱穴などを確認。	土師器、須恵器、金銅仏など	「VI その他の遺跡 22植物園北遺跡1」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1996
3	発掘	弥生時代後期～古墳時代の流路、掘立柱建物、柱穴、室町時代～後期の土坑、柱穴、江戸時代以降の畦畔、杭跡などを確認。	弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶器、棧瓦など	『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2002
4	発掘	古墳時代の竪穴建物、平安時代の掘立柱建物、柱穴列、鎌倉・室町時代の土坑。	土師器須恵器、緑釉陶器、瓦質土器、瓦など	『植物園北遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2022-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2022
5	詳細分布	GL-0.27mまで盛土。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成19年度』京都市文化市民局	2008 07RH296
6	詳細分布	GL-0.3mまで盛土。	なし	「VI 調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告令和2年度』京都市文化市民局	2021 20RH204
7	詳細分布	GL-0.4mまで盛土。	なし	「V 調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成29年度』京都市文化市民局	2018 17RH241
8	詳細分布	No.2 : GL-0.8m、室町後期の包含層（土師器皿、瓦器火鉢）。No.3 : GL-0.75m、室町末期の包含層（土師器皿）、-1.4m、室町後期の包含層（土師器皿）を確認。	土師器皿	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成14年度』京都市文化市民局	2003 02RH187
9	詳細分布	GL-0.55mまで盛土。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成19年度』京都市文化市民局	2008 07RH257
10	詳細分布	GL-0.23mで暗褐色シルト（近世包含層・締まり悪い）、-0.37～-0.4mで黒褐色礫混シルト。	なし	「V 調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成29年度』京都市文化市民局	2018 17RH369
11	詳細分布	GL-0.35mまで盛土。	なし	「VI 調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告令和元年度』京都市文化市民局	2020 19RH455
12	詳細分布	GL-0.25m、近世以降の包含層。	なし	「V 調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成25年度』京都市文化市民局	2014 12RH382
13	詳細分布	GL-0.2mまで盛土。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成8年度』京都市文化市民局	1997 96RH323
14	詳細分布	GL-1.0m以下、オリブ色砂礫の無遺物層。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成6年度』京都市文化市民局	1995 93RH464
15	詳細分布	GL-0.75mまで盛土。	なし	「VI 調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告令和3年度』京都市文化市民局	2022 21HR416
16	詳細分布	盛土のみ。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度』京都市文化観光局	1990 88RH032
17	詳細分布	盛土のみ。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度』京都市文化観光局	1990 89RH005
18	詳細分布	GL-0.16mで褐色泥砂を検出。遺構・遺物は検出できず。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成9年度』京都市文化市民局	1998 07RH419
19	詳細分布	GL-0.46mで中世の包含層。	土師器片	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成9年度』京都市文化市民局	1998 97RH354
20	詳細分布	GL-0.4m以下、褐色砂泥の無遺物層。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成6年度』京都市文化市民局	1995 94RH382
21	詳細分布	GL-0.3mまで現代盛土。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告平成9年度』京都市文化市民局	2009 97RH192
22	詳細分布	平安後期の土器溜りを検出。	多量の土師器皿	「IV その他の遺跡 1 植物園北遺跡」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成30年度』京都市文化市民局	2015 14S029・14RH156
23	詳細分布	GL-0.42mにて室町・時期不明の土坑を各1。	土師器片	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度』京都市文化観光局	1990 89RH006
24	詳細分布	GL-1.07m以下、褐色砂泥の地山。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成14年度』京都市文化市民局	2003 01RH345
25	詳細分布	GL-0.3mまで盛土。	なし	「V 調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告平成30年度』京都市文化市民局	2019 17RH634
26	詳細分布	盛土のみ。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度』京都市文化観光局	1990 89RH026
27	詳細分布	GL-0.1mまで盛土。	なし	「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成13年度』京都市文化市民局	2002 01RH225
28	詳細分布	上賀茂地域一帯の埋設工事に伴う詳細分布調査。縄文時代の落込み、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物、土坑、溝、柱穴、古墳時代後期の竪穴建物、土坑、溝、平安時代中期の土坑、柱穴、平安時代後期から鎌倉時代の土坑、溝、室町時代の土坑、溝、柱穴を確認。	縄文土器、石器、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、白磁、石製品など	「III その他の遺跡 2 植物園北遺跡」『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2011 図1中の★は主要遺構が確認された地点を示す。

るようになり、社司と氏人との対立が芽生え、その後、対立が深まり、文明8年(1476)には、上賀茂神社の社殿が焼亡してしまう「文明の一社騒乱」にまで発展した。天文年間(1532～1555)には「構」が築かれるようになり、それらの「構」に対して置文によって維持管理するための条文が定められている。近世になるとより人口が増加し、社家・寺家分や農民のほか、大工などの職人も集住するようになり、対象地周辺は大規模な門前集落へと発展していくこととなる。

## (2) 周辺の調査

周辺では数多くの調査が行われており、表1には調査地を含む植物園北遺跡の北西部の事例を示しておく。その中でも特に3件の発掘調査(調査1～3)と広域の詳細分布調査(調査28)で成果が挙がっており、以下に述べる。

植物園北遺跡の種別の判明および遺跡範囲拡大の契機となった昭和53・54年に行った公共下水道敷設工事に伴う詳細分布調査(調査28)では、縄文時代の落込み、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物、土坑、溝など、古墳時代後期の竪穴建物や土坑、溝など、平安時代中期の土坑、柱穴、平安時代後期～鎌倉時代の土坑、溝、室町時代の土坑や溝、柱穴など、集落跡が確認されている。この調査により当時、遺跡範囲外であった今回の調査地周辺でも、縄文時代の落込みや古墳時代後期の竪穴建物、平安時代以降の土坑、溝などの遺跡が展開していることが明らかになった。

平成元年の調査(調査1)では、古墳時代の竪穴建物、柱穴、土坑、鎌倉・室町時代の井戸、柱穴群、溝、集石土坑、桃山時代の石室、集石土坑、土坑、柱穴、江戸時代の土坑、柱穴などが確認されている。特に室町時代の東西方向の溝(溝1)や南北方向の溝(溝4)は、宅地や集落を画する溝と考えられることから、文明年間に築かれ、維持管理されていた「構」の可能性が高く、社家町の様相を知る上で貴重な資料である。

平成5年に上賀茂小学校内で行われた発掘調査(調査2)では、古墳時代の竪穴建物、流路、平安時代後期の掘立柱建物、土坑、鎌倉～室町時代の井戸、柱穴群、溝、集石土坑、江戸時代の土坑、柱穴などが確認されている。この調査では、既存建物による攪乱が著しかったが、平安時代の遺構が想定より密に展開していたことが分かった。また、調査地内で西側ほど土質が砂礫から粘質土に変化していくこと、古墳時代の遺構の広がり土質がより粘質土に近い方に多い傾向があることが明らかになった。

同じ上賀茂小学校敷地内南東部で行った平成14年の調査(調査3)では、弥生時代後期～古墳時代の流路、掘立柱建物、柱穴、室町時代中～後期の土坑、柱穴、江戸時代以降の畦畔、杭跡などが確認されており、遺構が広範囲に広がっていたことが明らかになっている。また調査3の弥生時代後期～古墳時代の流路は、調査2で確認されている流路と同一流路である可能性があり、広く展開している集落のまとまりを考えるうえで重要な遺構である。

## (3) 対象地の来歴

調査地は上賀茂神社に近く、また末社である藤ノ木社と明神川の交差点に近い場所にあたる

ことから、上賀茂神社関連の絵図にて一部その様子が窺える。古くは宝永2年（1705）の「洛中洛外絵図」（京都府総合資料館蔵）にて、建物が立ち並ぶ様子が確認できるものの、詳細は不明である。享保4年（1719）の「社領絵図」では、藤ノ木社の東に瓦葺きの蔵がある。明神川を挟んだ蔵の南側には草葺屋根入母屋造の建物が3棟描かれている。『壬申地券字引絵図』（京都市歴史資料館）には調査地をふくむ敷地に「小学校」の記載が確認できる。この小学校は、明治6年（1873）に古家を転用して開校したとされる上賀茂学校（明治20年（1887）に上賀茂尋常小学校に改名。後の市立上賀茂小学校）を示すものと考えられ、少なくとも、明治27年（1894）に市立上賀茂小学校が現在の位置に移るまで、小学校として利用されていたことが分かる。昭和4年（1929）の都市計画図では更地となり、昭和28年（1953）には住宅の姿が確認できる。近年解体された建物は昭和60年の都市計画図に記載されており、敷地の南東側には大きな池のある庭をもつ住宅であったことが分かる。

### 3. 遺 構(図版5～7)

今回調査を行うにあたり事前協議の際、南東側の池があった場所については、深さ約1.5mまで解体の影響が及んでいるとの報告があった。このため、調査区は計画建物範囲内の西側を中心に設定した。調査区の南西部は現代攪乱及び近代の大規模な土坑が地山まで及んでおり、遺構の遺存状況はあまり良くない。

#### (1) 基本層序

現代盛土以下、GL-0.23～-0.35mで暗灰黄色粘質土や浅黄色シルト（時期遺物包含層：図7-9、-10層）、-0.5～-0.7mでにぶい黄

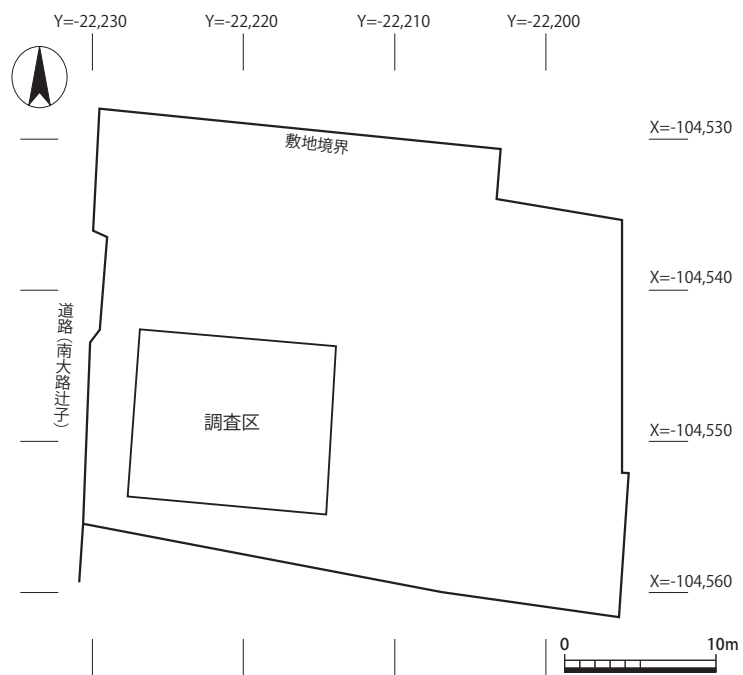


図6 調査区配置図(1:500)

表2 遺構概要表

時代	遺 構	備 考
室町時代	ピット24・29・30・31・35、柱穴36、整地層など	
江戸時代前半	ピット1～3・6～9、土坑22など	
江戸時代後半～明治	廃棄土坑2・3など	

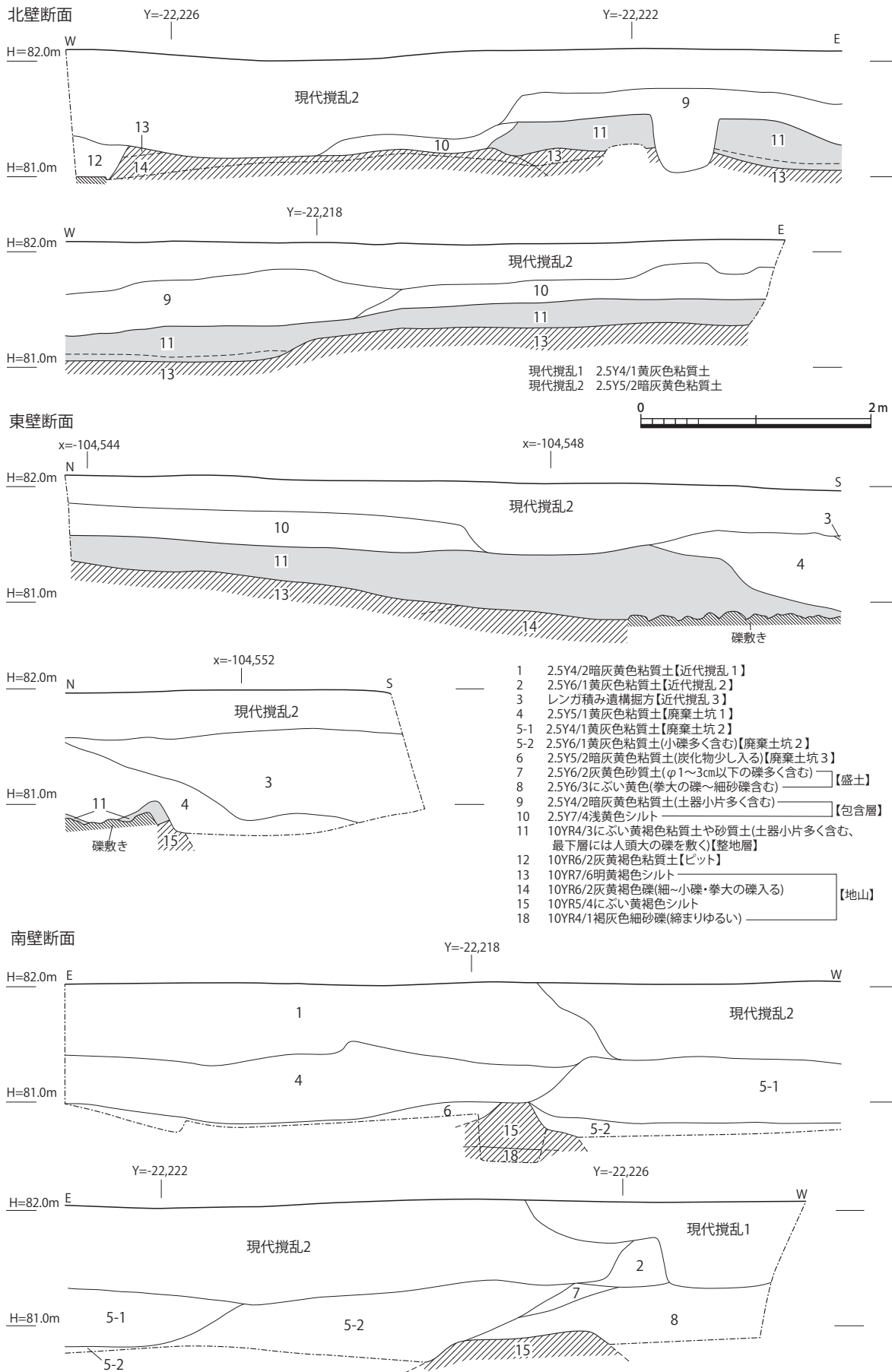


図7 調査区周壁断面図 (1 : 50)

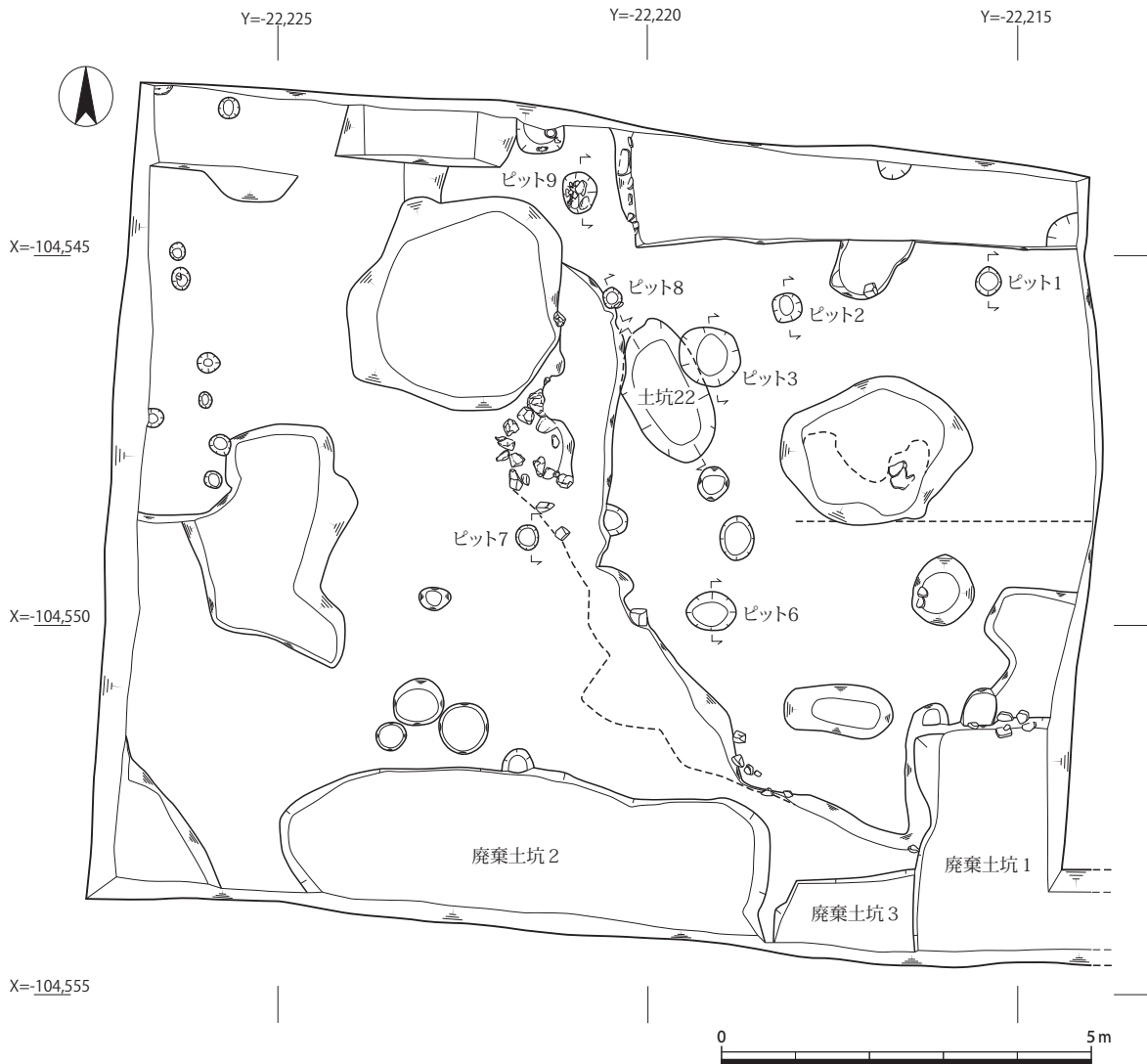


図8 第1面平面図 (1:100)

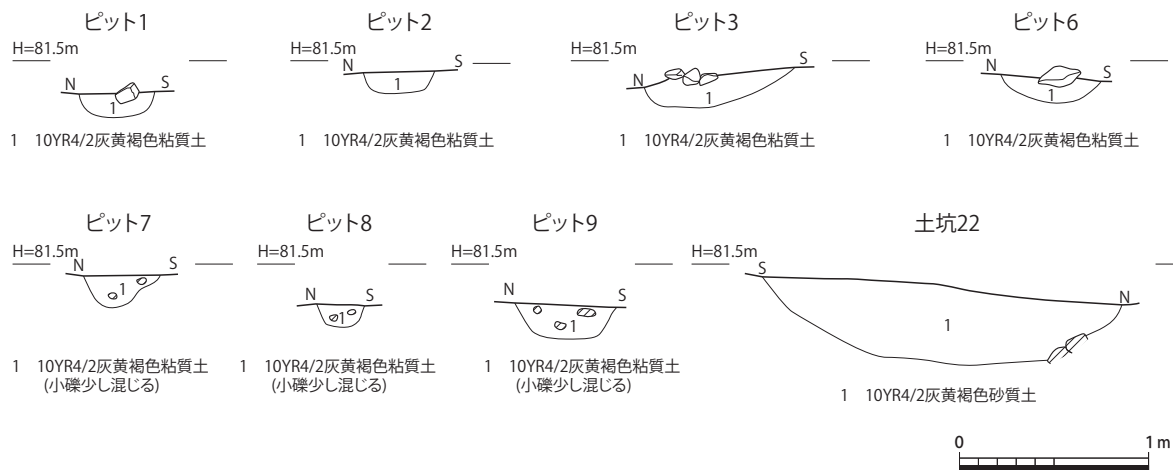


図9 第1面検出遺構断面図 (1:40)

褐色粘質土や砂質土(図7-11層)、-0.75~-1.2mで明黄褐色やにぶい黄褐色シルトの地山に至る。にぶい黄褐色粘質土や砂質土の上面は非常に締まっており、整地土(整地層)であると考えられる。遺構検出は、整地層上面を第1面、整地層除去後の地山上面を第2面として行った。



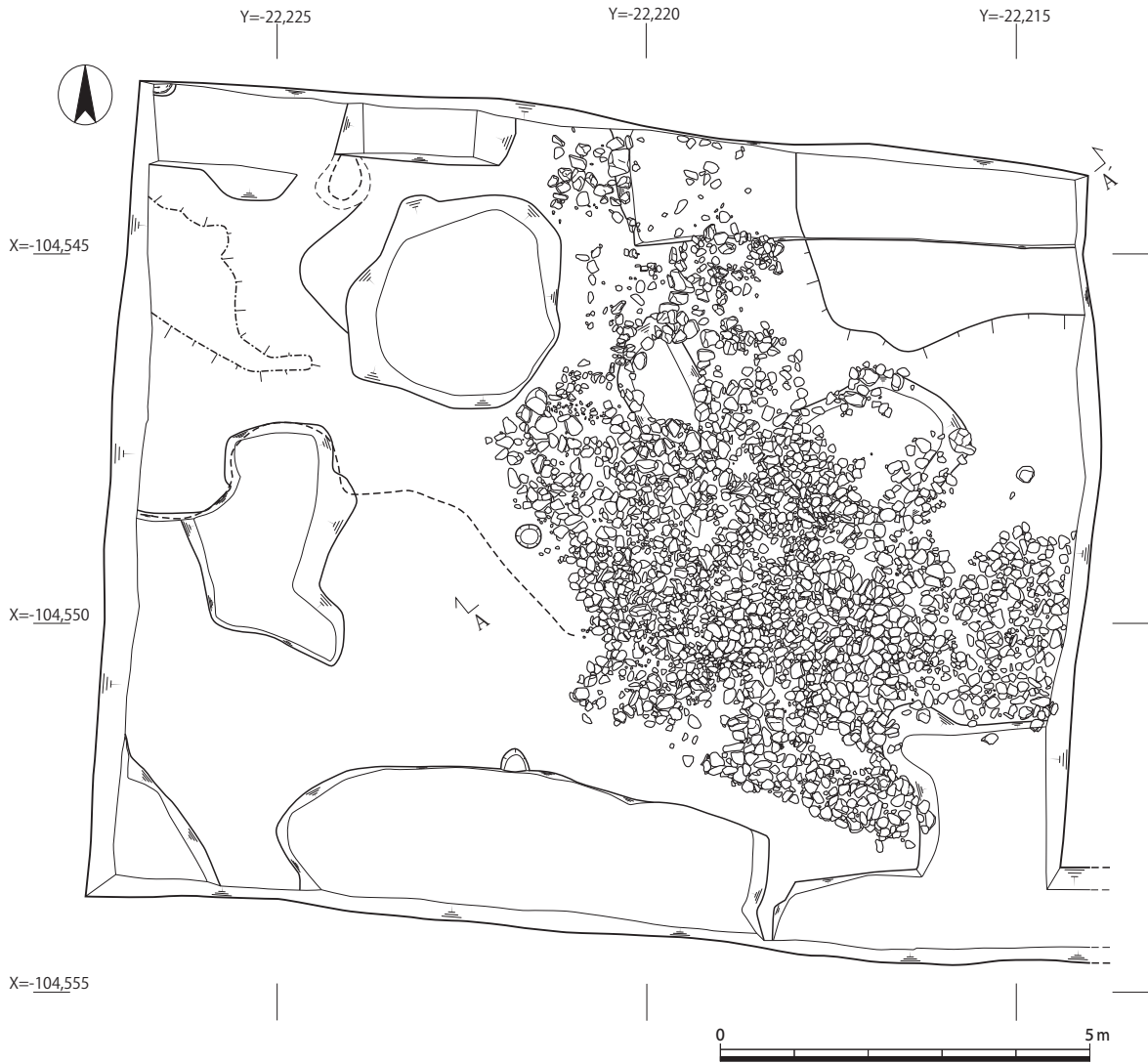


図10 第1面整地層下部礫敷き状況（1：100）

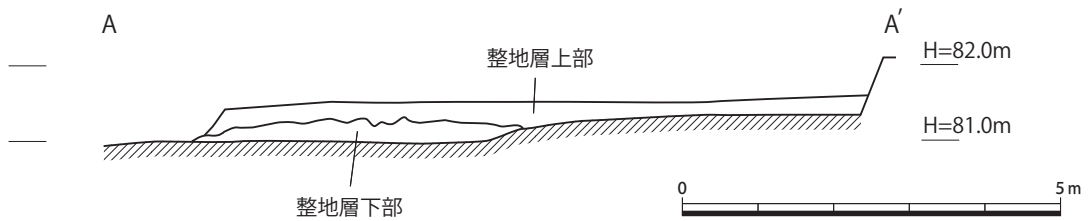


図11 整地層断面模式図（1：100）

## （2）第1面検出遺構

にぶい黄褐色粘質土や砂質土の整地層上面で土坑やピットなどを検出した。土坑やピットはいずれも単層で、根石などは確認できなかった。ピットもその配置からは、建物や柵などは想定できない。遺物量は少なく、いずれも細片で詳細は不明だが、江戸時代前半と考えられる。

この他、南壁沿いで江戸時代後半頃の大型土坑（廃棄土坑2・3）を2基、確認した。ともに多量の遺物が出土した。炭化物も混じるがその量は全体に少ない。廃棄土坑と考えられる。

整地層 調査区の北東部で確認した整地層である。検出規模は、東西9.0m以上、南北9.0m以上で、西側、南側はともに後世の土坑にて削平を受けており確認できなかった。整地層は大きく上



図12 第2面平面図 (1:100)

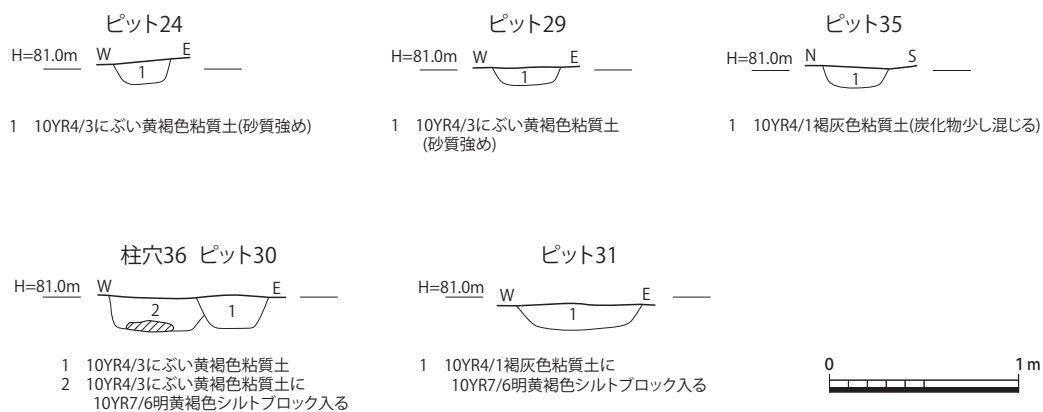


図13 第2面検出遺構断面図 (1:40)

下に区分でき、上部は土器片などが混じるにぶい黄褐色粘質土や砂質土、下部には拳～人頭大の礫が敷き詰められている。礫は調査区中央部分で確認でき、北西から南東に帯状に広がっている。検出幅は0.3～0.65 m以上、検出長は10.5 m以上である。上部の堆積土は非常に締まっていた。断面観察を行ったものの、土の細かな選定や規則性を見いだすことはできなかった。下部の礫は、いずれも河原石が用いられている。花崗岩、頁岩、チャートなどが見られるが、凝灰岩は認められな

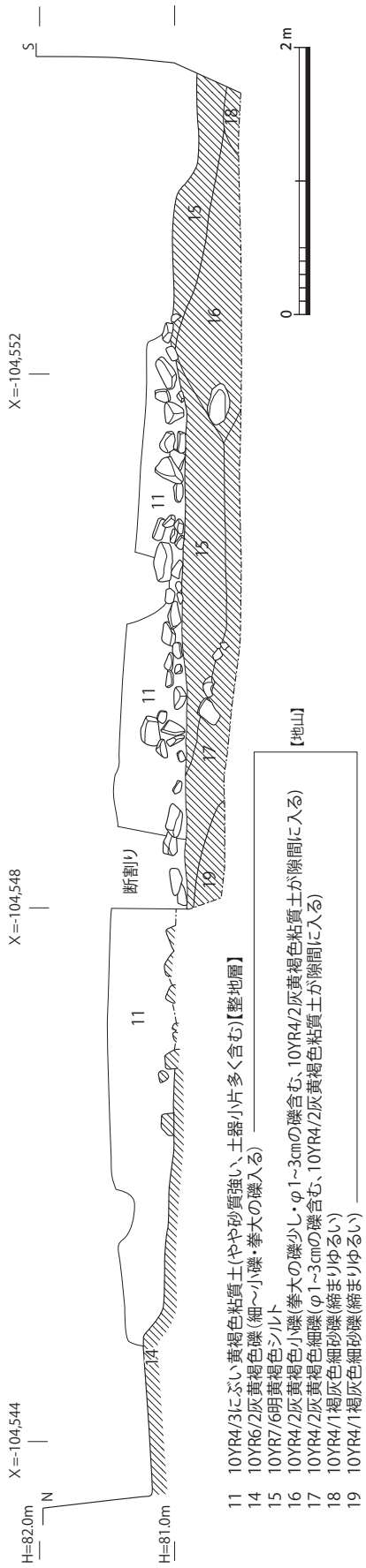


図14 整地層及び断割り断面図 (1:50)

い。賀茂川上流域では、凝灰岩を産出する岩脈が確認されないことも踏まえると、用いられた礫は賀茂川河川敷から採取し、用いられたと考えられる。調査区西側は攪乱の影響が大きい、地山の検出状況から礫が確認できる範囲には浅い落込みが認められ、浅い谷状の自然地形が確認できる。礫の確認範囲はこの浅い谷状の自然地形の範囲と重なっていること、礫の充填された高さも凹み部分のみで収まることから、排水や湿気対策のために礫が敷き詰められたものと考えられる。礫除去後の地山は概ね平坦であるが、礫による凹みが確認できることから、直接、地山に敷かれたと思われる。ただ石と地山の間に土壌化した堆積土は確認できず、礫を敷く前に除去したのと考えられる。

(3) 第2面検出遺構

整地層下部の礫敷きを除去した後、地山上面で遺構検出を行い、柱穴を数基検出した。これらは規模や埋土から大きく2群に区分できる。ピット24・29・30・35は、いずれも円形で、直径0.3~0.35m、深さ0.1~0.2mである。埋土はにぶい黄褐色や褐灰色粘質土である。ピット31・柱穴36はともに円形で、直径0.55~0.65m、深さ0.15~0.2mである。埋土はにぶい黄褐色や褐灰色粘質土であり、かつ明黄褐色シルトの地山ブロックが混じる。柱穴36の底部には根石が確認できる。ピット30と柱穴36の重複関係や埋土の違いから新旧の2時期が想定できるものの、いずれも配置に法則性は認められず、建物復元には至らない。いずれの柱穴も遺物量は多くない。遺物は細片で詳細は不明だが、室町時代と考えられる。

断割り 下層確認のため、礫敷き中央に設けた南北畦に沿うように断割りを行った。その結果、整地土下部の礫敷き直下より、明黄褐色シルト、灰黄褐色小礫、灰黄褐色細礫、褐灰色細砂礫の堆積を確認した。いずれの層からも石器などを含め遺物は確認できなかった。なお、断面観察から地山上面に土壌化した土層は確認できなかった。

## 4. 遺物 (表3、図15～17)

今回の調査では、コンテナ10箱分の遺物が出土した。出土遺物の大半が室町時代の整地層や江戸時代の廃棄土坑から出土したものであり、この遺構以外の遺物は量は少なく、細片で図化できるものも少ない。以下では、江戸時代の廃棄土坑や室町時代の整地層を中心に報告する。

1～24は廃棄土坑2より出土した。1～20は土師器皿である。1～12は皿Nである。1～10の口径は4.6～5.2cm、11は6.4cm、12は6.8cmである。11・12の底部中央部は上方に押し上げられる。いずれにも調整痕跡は認められるが、9～11の外面には連続した指オサエ痕跡が絞り痕跡のように残る。いずれも固く焼き締まる。13～17は皿S、18・19は皿S bである。13～15の口径は9.0～9.4cm、16・17の口径は11.4cmである。いずれも口縁部を上方にナデ上げ、端部を内側に丸く収める。底面は平底ながらやや丸みを帯びる。見込みと立ち上がりの境には、圏線が認められる。18の口径は7.6cm、19の口径は9.6cmである。口縁部と底部の境は明瞭でなく、全体に丸い器形をなす。5・12・14・16・17には煤が付着しており、燈明皿としての役割を果たしていたものもある。20は口径19.0cm、器高3.7cmである。口縁端部は上方に短く立ち上がり、端部はヨコナデを施す。底部中央は上方に押し上げられる。煤は内外面ともに付着していた。先述の土師器皿と同様の使用方法が想定できるが、詳細は不明である<sup>1)</sup>。21は信楽焼の播鉢である。口径は30.4cm、器高は11.2cmである。口縁端部は肥大し、端部外面には2条の条線が施される。22～24は肥前磁器(染付)である。22・23は椀、24は小瓶である。23の見込みには五弁花が施される。12B段階に相当すると考えられる。

25～38は廃棄土坑3より出土した。25～35は土師器皿である。25～28は皿Nである。口径

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代以前	石器		サヌカイト片1点		
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器、須恵器		須恵器7点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器など		灰釉陶器1点		
平安時代末 ～ 室町時代前半	土師器、須恵器、山茶椀、 輸入陶磁器、瓦質土器、 焼締陶器、国産陶器、石製品 瓦など		土師器76点、東播系須恵器3点、 山茶椀1点、白磁5点、青磁5点、 瀬戸・美濃3点、瓦質土器10点、 常滑焼1点、信楽焼1点、 軒平瓦1点、石製品1点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、国産陶器、 陶磁器、瓦、土製品、銭貨など		土師器31点、陶磁器5点、 信楽焼1点、土製品1点		
明治時代以降	土師器、焼締陶器、国産陶器、 陶磁器、瓦など				
合計			13箱		

※コンテナ箱数の合計は、Aランクの遺物の抽出などの整理を行ったため、出土時より3箱多くなっている。

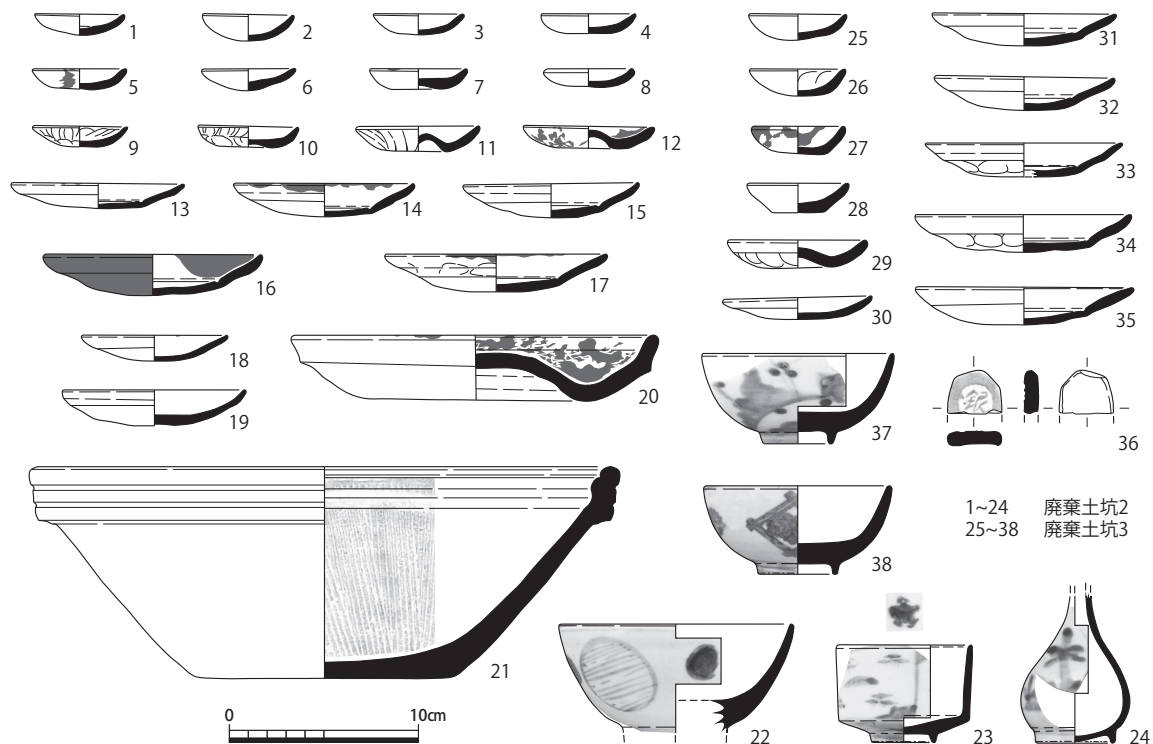


図15 出土遺物実測図1 (1:4)

は5.0～5.2cmで、器壁も0.4～0.5cmと厚い。27の内外面には煤が付着しており、燈明皿として使用されていたと考えられる。28の底は丸みがなく、やや平坦面が広いが、成型後よく乾く前に台の上に置かれた際に底面に板が当たった痕跡が確認できる。29～35は皿Sである。口径は7.2～7.8cmと9.4～11.4cmの大小がある。いずれも口縁部を上方にナデ上げ、端部を内側に丸く収める。31～35の見込みと立ち上がりの境には、圏線が認められる。36は「銀」の字が押される泥面子である。12A～12B段階に相当すると考えられる。

39～152は整地層より出土した。39～109は土師器皿である。39・40は皿Acである。口縁端部を短く内側へ折り返し、丸く収める。いわゆる「コースター」型である。41～86は皿Nである。44～48は口径が5.0～6.5cmと7.6～8.0cmの2種類あり、器壁は厚い。いずれも褐色～赤褐色である。49～56は口縁を外側に引き上げ、底部はやや丸みを帯びる。54～56は赤褐色である。65～71の口縁部は外反し、端部は丸く収める。49～56の口径は7.8～8.8cm、57～61・65～67・73～78の口径は9.2～10.8cm、62～64・68～72・79・80の口径は11.2～13.6cmであり、小・中・大の3種類に区分できる。87～96は皿Shである。口径は6.3～7.4cmで、底部中央を下から押し上げる。いわゆる「へそ皿」である。97～108は皿Sである。97の口径は9.8cm、98～107の口径は10.9～13.4cmであり、2種類に区分できる。44・58・80には煤が付着しており、燈明皿としての役割を果たしていたものもある。109の口径は5.6cm、器高は2.3cm。底部は糸切りを施す。110は土師器の小壺である。口径1.5cm、器高2.1cmである。いわゆる「ツボツボ」である。111は土師器の蠟燭立てである。112・113は土師器の鍋である。口縁部を内側に曲げ、端

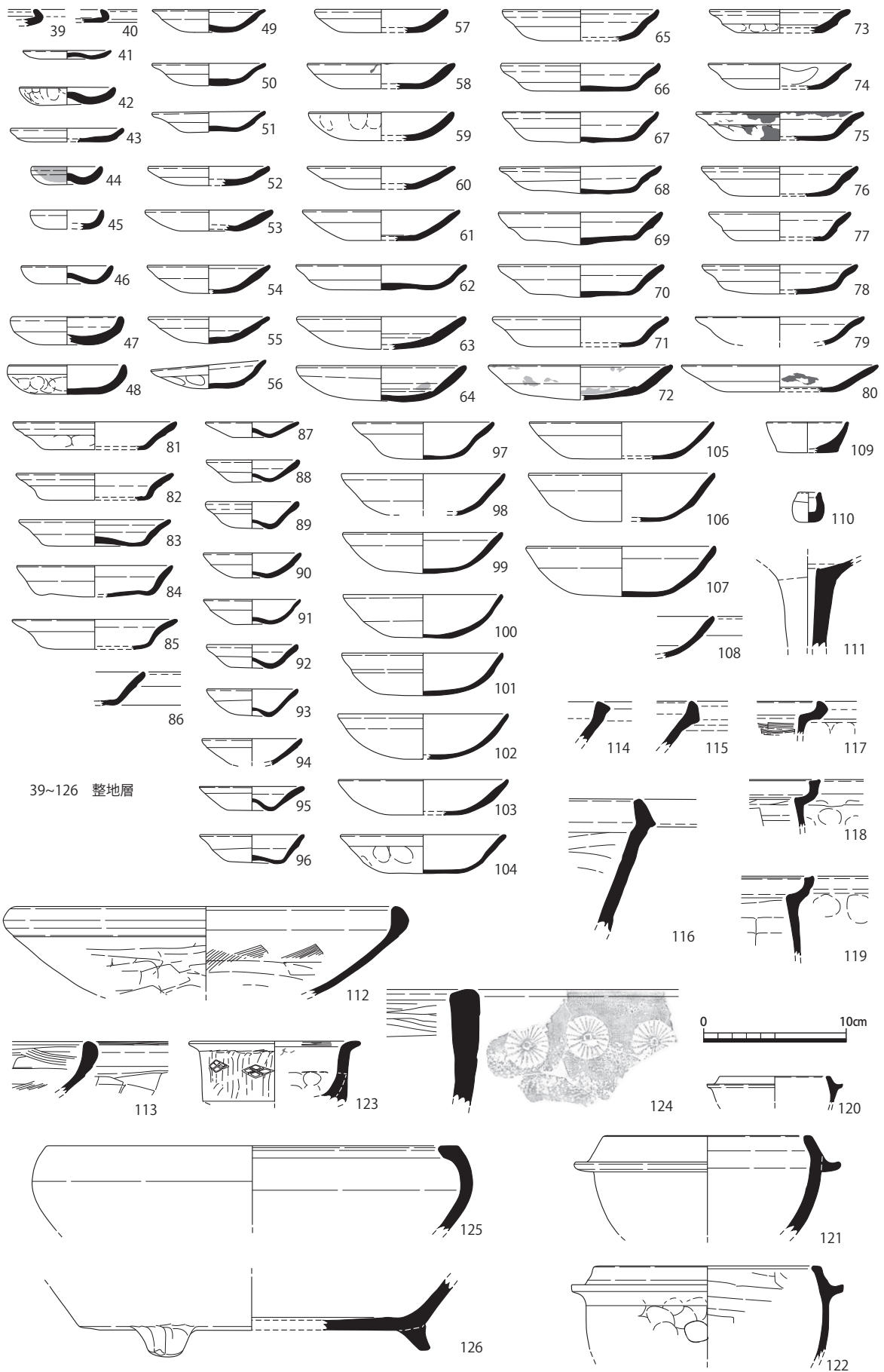


图16 出土遺物実測图2 (1:4)

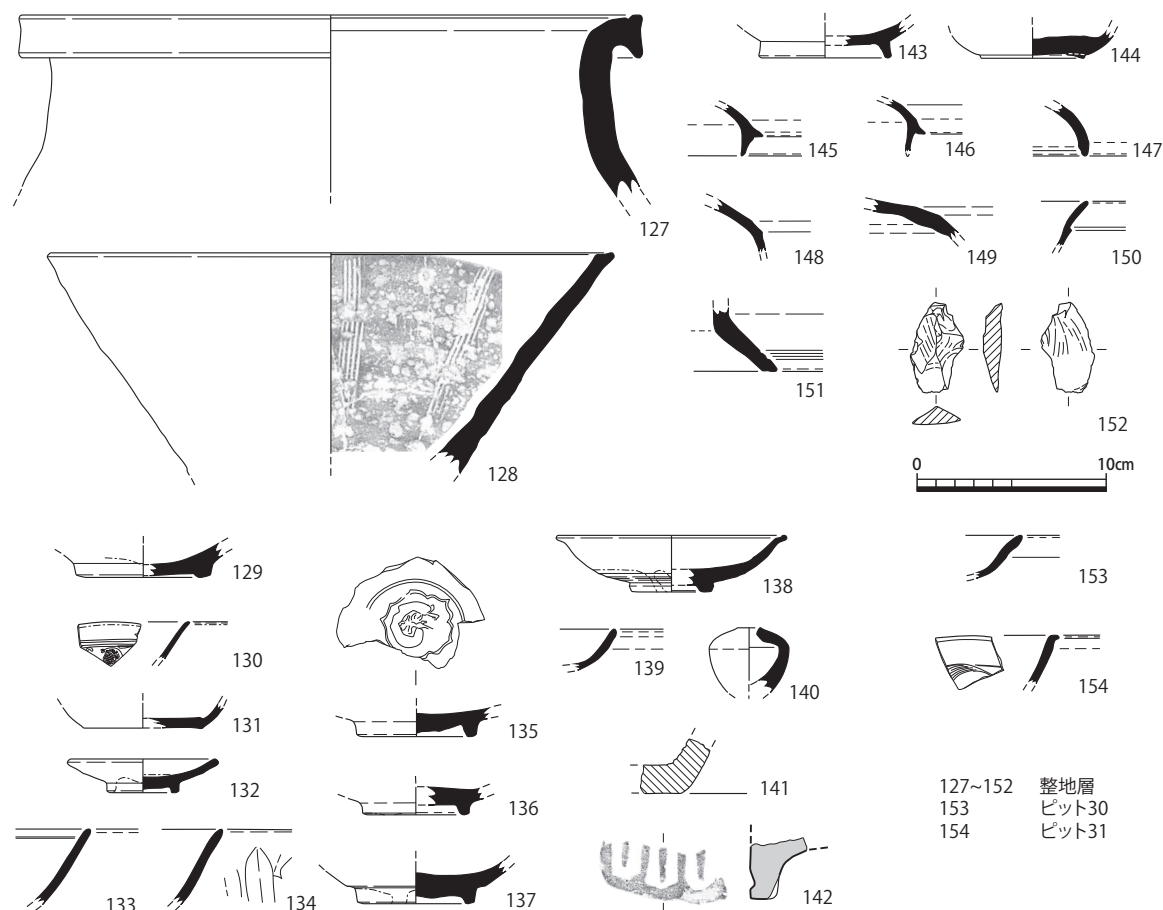


図17 出土遺物実測図3 (1:4)

部をやや肥大させる。体部外面にはケズリを施す。形状は炮烙に近い。近江地域からの搬入品である。114～116は東播系須恵器コネ鉢の口縁部である。117～126は瓦質土器である。117～119は鍋である。口縁端部は上方に折り曲げ、受け口状に仕上げる。120～122は羽釜である。120は7.8cm、121・122ともに口径は14.6cmである。いずれも口縁部は短く内傾させ、鏝は口縁部に近い位置に施す。120は小型品である。123～126は火鉢である。123は口縁端部を外反させ、外面に花菱文を施す。小型品である。124の外面には菊花文のスタンプが施される。127は常滑焼の甕の口縁部である。口縁部帯をやや拡張させ縁帯がめぐる。肩部外面に自然釉がかかる。128は信楽焼のスリ鉢である。口縁部は直線的に立ち上がる。内面には5条一単位が10条施される。内面は器表がはがれているところが多いが、底に近い範囲では、スリ目が摩滅していることから、スリ鉢として使用頻度が高かったことが分かる。129～132は白磁である。129は椀の高台部分である。130は口禿皿の口縁部である。器壁は薄く、白色が強い。内面には細かな植物の陰刻が施される。131は平底の皿の底部、132は小皿である。見込内面には釉は施されず、露胎である。133～137は青磁椀である。133・134は口縁部、135～137は高台部分である。134の外面には鎬蓮弁が施される。134の見込みには崩れた花文印が施される。138～140は瀬戸・美濃産の施釉陶器である。138・139は皿、140は小壺である。141は石鍋の底部小片である。142は軒平瓦である。瓦

当には陰刻の剣頭文が施される。周縁は素文である。瓦頭部は折り曲げ成形と考えられる。143は灰釉陶器碗の底部である。144は山茶碗の底部である。145～151は須恵器で、145～149は杯蓋、150は高杯の杯口縁部、151は高杯の脚部である。152はサヌカイト片である。

整地層より出土した土器は、44～48・134・142・144などの5B～6A段階に相当する一群、65～71、81～85、64～108、129～131など概ね7C段階に相当する一群、112・113・117～128・132などの9段階に相当する一群がある。これらの他に、143～151の古墳時代から平安時代の小片が混じる。

153はピット30より出土した。土師器皿の口縁部である。口縁部にはナデを施し、端部は丸く収める。破片であるが、7C段階に相当すると考えられる。

154はピット31より出土した。白磁碗の口縁部である。端部を短く外反させ、内面には陰刻の櫛描文が認められる。5B～6A段階に相当する。

整地層出土土器は、概ね5B～6A段階、7C段階、9段階の群に大別できる。整地層より下層にあたるピット30では7C段階、ピット31では5B～6A段階の土器が確認できていることから、整地層の形成時に、石器や弥生土器のほか、古墳時代や5B～6A段階、7C段階の遺構を削平し、大規模な整地が9段階頃に行われたことがわかる。

## 5. まとめ

今回の調査では、室町時代前半の柱穴や室町時代後半の整地層、江戸時代前半の柱穴や土坑、江戸時代後半以降の廃棄土坑などを確認した。管見の限りだが、当該地は少なくとも室町時代から江戸時代にかけては、社家町の一角として絵図に描かれている。史料からも文明の一社騒乱以前から現在の社家町一帯に氏人が集住していたと考えられ<sup>2)</sup>、当該地で室町時代後半（9段階）に大規模な整地が行われていたこと<sup>3)</sup>は、社家町としての形成過程を知るうえで貴重な成果である。これまで社家町の様相は、絵図や史料から推測されることが多かったが、今後、調査を積み重ね、平安時代から江戸時代の遺構の様相を丁寧に抽出することで、考古学的な復元も可能になるだろう。

なお周辺調査成果から、弥生時代から古墳時代の集落跡についても調査目的の一つとしていたが、直接関連する遺構は確認できなかった。しかし整地層からは室町時代後半の遺物に混じり、古墳時代の須恵器片、平安時代末～鎌倉時代初頭、鎌倉時代末～室町時代前半などを確認しており、本来これら複数時期の遺構が展開していたものと考えられる。

(奥井智子)

註

- 1) 京都大学の吉田南構内や医学部構内の調査では、14～15世紀代を中心に径が20cmを越えて底部が極端に上げ底となる大皿の出土が確認されている。この土器は、現在も上賀茂神社の神饌で用いられる「ヤツカサ」と呼称している皿形土器に酷似していることから、大ヤツカサ(オオヤツカサ)土器と称している。今回出土した図16-20の出土土師器皿もこの大ヤツカサ土器と類似しており、神事に関わる使用が



想定できる。『京都大学文化財総合研究センター設立40周年記念展示・文化財発掘Ⅳ 足もとに眠る京都 - 考古学から見た鴨東の歴史 - 飛鳥～室町時代編』京都大学文化財総合研究センター、2018年。

2) 文明の一社騒乱に関わる史料から、氏人の一人である伊勢守の屋敷が東西6丈、南北11丈、約150坪の規模で、その屋敷地が楠の大木（現：藤ノ木社）の辺りに所在していたと推定できる。また伊勢守の屋敷地の東隣に氏人と考えられる宮内少輔の敷地も想定できる。『上賀茂 町なみ調査報告』京都市都市計画局、1978年。

3) 調査1で室町時代の遺構が確認されている。確認された室町時代の遺構には新旧が認められ、少なくとも2時期が想定されている。今回の調査でも第2面目で室町時代の柱穴を確認しており、重複関係から2時期が想定できる。また整地層も室町時代後半と考えられ、少なくとも3時期が想定できることから、この時期に活発な土地利用が行われていたと推測できる。

#### 参考文献

『上賀茂 町なみ調査報告』京都市都市計画局、1978年。

京都市編 『史料京都の歴史6 北区』平凡社、1993年。

『京都の歴史第1巻 平安の新京』学芸書林、1970年。

『社領絵図』上賀茂神社絵図『賀茂別雷神社史料絵図』賀茂別雷神社、2008年。

林倫子ほか「上賀茂社家町の社家の住まいにおける池の機能と敷地配置」『景観・デザイン研究講演集 No.4』、2008年。

林倫子ほか「明治以降の上賀茂社家町における池と水路の水システムの変遷」『土木史研究講演集』Vol.28、2009年。

## V 雲林院跡

### 1. 調査の経緯と経過

#### (1) 調査の経緯

調査地は、北区紫野雲林院町13、14合地に所在し、平安時代前期に淳和天皇の離宮であった「雲林院跡」に該当する。当地において個人住宅建設の計画がなされ、令和5年5月11日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該地は大徳寺通（旧大宮通）と建勲北通の交差点南東角に位置し、雲林院の中央西端に想定されている。当課は、雲林院跡に関する遺構・遺物が確認できる可能性が高いことから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、調査を実施することになった。

発掘調査前年まで、当該地には歴史的風致形成建造物の指定予定であった建物があった

(図2)。2階の天井が低く、表に面した部分に虫籠窓がつく厨子2階建ての町家で、大屋根中央には煙出しなどの役割をもつ小さい屋根（越屋根）がのっていた。明治25年假製図(図3)に建物を確認できることから、それ以前に建てられたと考えられている<sup>1)</sup>。建物は野菜の卸売市場として使用された後、材木業が営まれ、事務所として使用されていたが、令和4年11月17日に焼失した。令和5年3～4月に、建物基礎の配置状況を確認するため、この被災家屋の解体時には詳細分布調査を行った。なお、発掘調査は、令和5年6～8月に実施した。

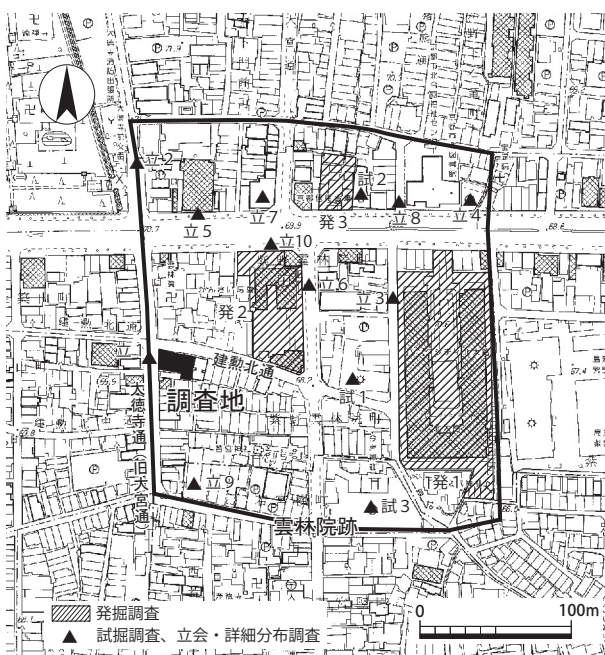


図1 調査地と周辺調査位置図(1:5,000)



図2 被災前建物(南西から)<sup>2)</sup>

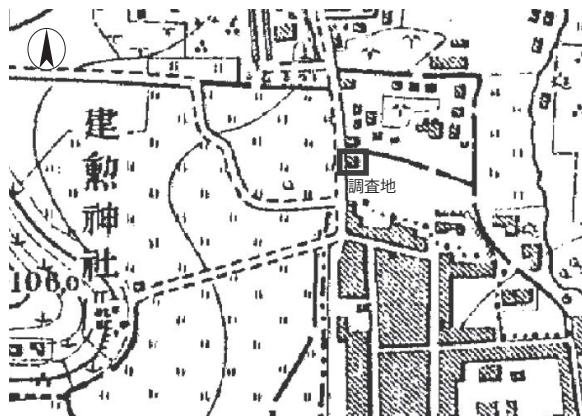


図3 明治25年の調査地(明治25年假製図)

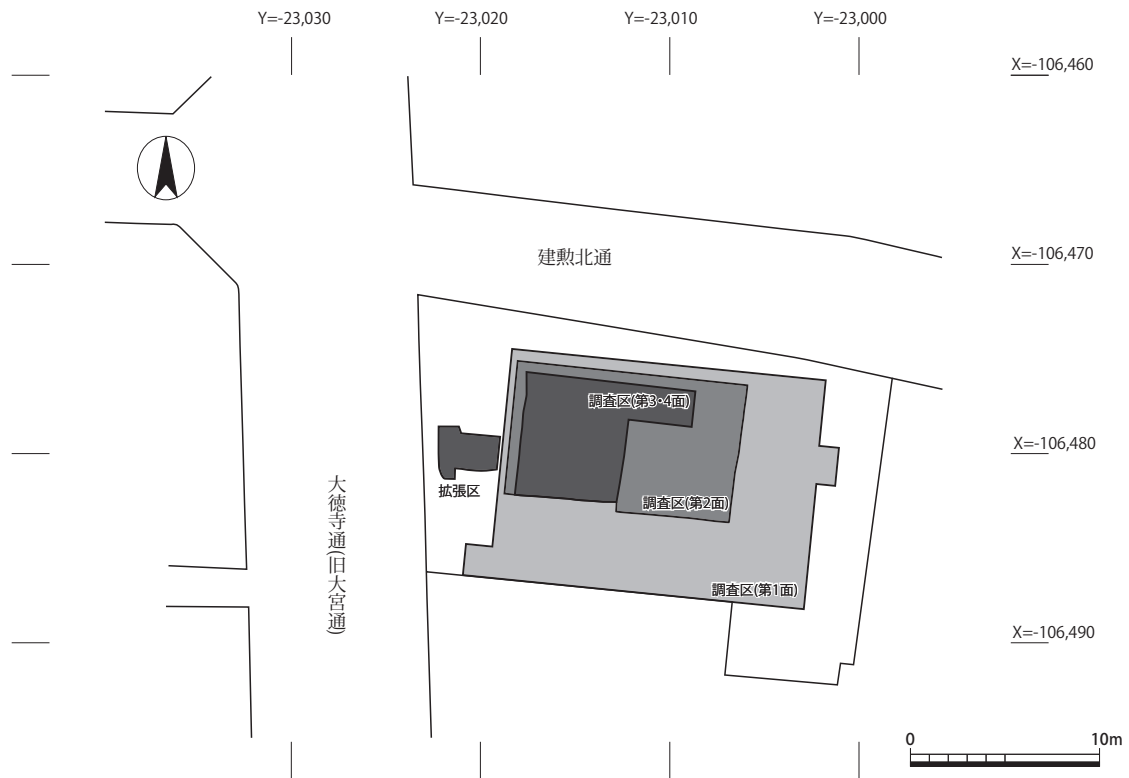


図4 調査区配置図 (1:400)



図5 現地説明会風景1 (南西から)



図6 現地説明会風景2 (南西から)

## (2) 調査の経過

詳細分布調査は令和5年3月24日～4月5日に行った。礎石などの被災家屋に伴う基礎構造を確認し、測量を実施した。

発掘調査は令和5年6月29日～8月25日に実施した。まず、被災家屋に伴う基礎構造(詳細分布調査で確認した遺構を含む)と黄灰色粘質土上面を第1面とし、調査を開始した。次に第2～4面への掘り下げを行った。排土置き場の確保のため各面で調査区を再設定し、調査を進めた。また、第4面で検出した平安時代の東西方向の溝の展開状況を確認するため、西側に拡張区を設けた。そのため、調査範囲は遺構面ごとに異なる(図4)。調査面積は合計212㎡である。

検出した遺構の地元向け現地説明会を、令和5年7月8日と8月5日の2回実施した。1回目は近代の建物（被災家屋）の基礎構造、2回目は近世以前を中心とした下層の遺構についてである。7月25日には、文化庁から調査官ほか1名にインターンの学生3名を含めた計5名が発掘調査現場の見学に訪れた。また調査中には、大学生ボランティアを受け入れた。

## 2. 遺跡

### (1) 位置と歴史的環境（図7）

当該地は大徳寺通（旧大宮通）と建勲北通の交差点南東角に位置する。西側には船岡山、北側には大徳寺がある。大徳寺から当該地に向かって緩やかに傾斜する。

平安時代、平安京大宮大路の北側延長部に雲林院があった。平安京の北側は紫野と呼ばれ、平安時代初期から天皇や貴族の遊猟や行幸の場所であった。天長6年（829）に、淳和天皇は紫野の離宮「紫野院」に行幸した。天長9年（832）に「紫野院」の一部を「雲

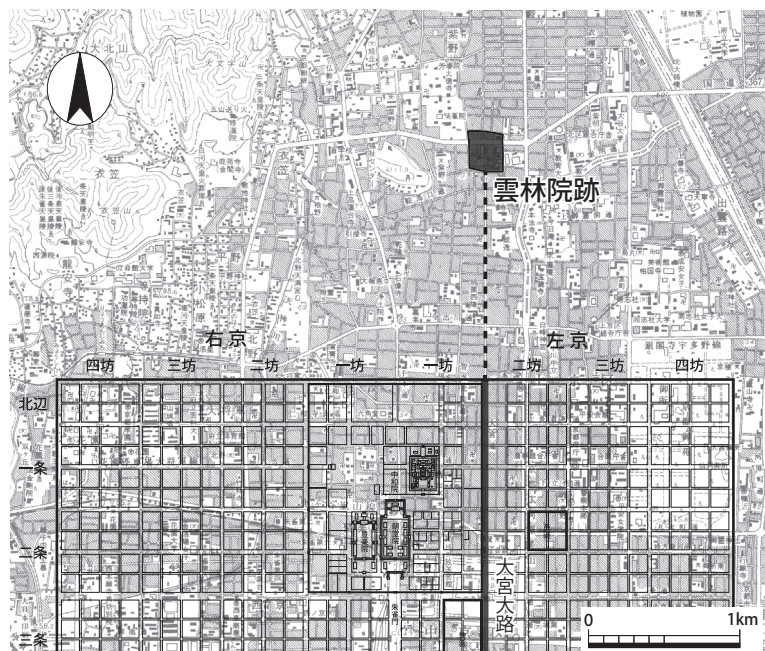


図7 平安京の北側（1：50,000）

林亭」と改称したのち、全体が「雲林院」と呼ばれるようになる。その後、仁明天皇の離宮となり、その皇子である常康親王に引き継がれ、貞観11年（869）には僧正遍照に与えられた。元慶8年（884）には天台宗元慶寺の別院となり、仏寺として機能していく。応和3年（963）には多宝塔が造立される。寛和年間（985～987）には雲林院境内に念仏寺が造営され、菩提講が催されるようになる。寛弘7年（1010）には藤原道長が雲林院に参詣するなど、貴族などが訪れる場所でもあった。また、桜や紅葉の名所で風雅を楽しむ場所としても知られていた。その後、雲林院の規模は縮小していく。応仁・文明の乱（1467～1477年）により焼失した後、宝永4年（1707）に再興され、大徳寺の塔頭となる<sup>3)</sup>。現在、雲林院は大徳寺通（旧大宮通）と北大路通の交差点を南下した場所にある。

### (2) 周辺の調査

雲林院跡では多くの調査が行われている。調査地点を図1に示し、調査概要を表1にまとめた。なお、立会・詳細分布調査は広範囲での調査のため、主要な地点を示している。

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査期間	調査概要	文献
発1	00/5/15～ 9/28	平安時代前期～中期の掘立柱建物2棟と園池遺構を確認。 土師器がまとまって出土。	『雲林院跡 京都市北区紫野雲林院町』 京都文化博物館調査報告書第15集 京都府京都文化博物館 2002年
発2	14/3/3～ 3/27	室町時代中期の東西方向の溝や築地状遺構を確認。 築地状遺構は溝に並行する。	『雲林院跡埋蔵文化財発掘調査報告書』 西近畿文化財調査研究所発掘調査報告書8 西近畿文化財調査研究所 2014年
発3	17/10/14～ 11/11	弥生時代～古墳時代前期の竪穴建物、室町時代以降の建物跡、 土坑などを確認。	『雲林院跡－紫野雲林院町の調査－』 古代文化調査会 2017年
試1	97/5/6	GL-0.8m でにぶい黄褐色砂泥の地山。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成9年度』 京都市文化市民局 1998年
試2	12/8/31	GL-0.35m のにぶい黄色砂泥の基盤層上面で土坑や柱穴を確認。 詳細分布調査で、基盤層を切って成立する落込みを確認。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』 京都市文化市民局 2013年
試3	17/4/28	GL-0.46m でにぶい黄褐色泥砂、-0.8m で地業、-1.68m で地山。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成29年度』 京都市文化市民局 2017年
立1	00/9/27～ 11/8	GL-0.17m で黒褐色砂泥粘質土、-0.33m で暗褐色砂礫。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
立2	00/11/27～ 01/3/8	GL-0.25～-0.5m で平安時代の包含層。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 京都市文化市民局 2002年
立3	10/10/22～ 11/15	GL-0.41m で黒褐色礫混じり砂泥、-0.74～-0.93m で黄褐色礫 混じり砂泥の地山。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成22年 度』京都市文化市民局 2011年
立4	13/6/3	GL-0.1m で黒褐色砂泥、-0.35～-1.0m で黄褐色砂泥の地山。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年 度』京都市文化市民局 2014年
立5	13/12/16	巡回時掘削終了。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成27年 度』京都市文化市民局 2016年
立6	18/5/1～24	GL-0.8～-0.9m で明黄褐色粘質土（礫多量に含む）	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成30年 度』京都市文化市民局 2019年
立7	18/6/22・25	GL-0.53m で黒褐色粘土、-0.80m でにぶい黄褐色粘土、-1.04 ～-1.10m で黄褐色砂礫を確認。北に向かって上がる。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成30年 度』京都市文化市民局 2019年
立8	19/4/15～ 20/3/3	GL-1.05m まで盛土。遺跡範囲外の北東側で、GL-0.18～ -0.48m で黒色シルトを確認。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和2年 度』京都市文化市民局 2021年
立9	21/5/7・10	GL-0.4m で暗褐色泥砂、-0.6～-0.84m で明黄褐色シルトの地 山。地山を切って黒褐色シルトの近世落込みを確認。	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 令和3年 度』京都市文化市民局 2022年
立10	23/5/24～	GL-0.33～-0.45m で褐色泥砂の中世の包含層、-0.45～-0.6m で明褐色砂礫の地山。	令和6年度の詳細分布調査報告に掲載予定。

※調査番号は、図1と対応。

雲林院の最盛期であった平安時代前期～中期の遺構が、平成12年度調査（発1）で確認されている。園池遺構、掘立柱建物、井戸跡などを検出し、土師器や瓦などの遺物が出土している。1×1間の掘立柱建物2棟が園池遺構に張り出す状態で建てられており、「釣殿」と考えられている。この2棟の建物は南建物から北建物に建て替えていることが確認されており、南建物は平安時代前期～中期、北建物は平安時代中期と考えられ、2時期あることが明らかになった。また、建物跡周辺からは土師器の皿などがまとまって出土している。

室町時代の遺構が、平成25年度調査（発2）で確認されている。室町時代中期の溝や築地状遺構が並行し東西方向にのびることを確認し、何らかの区画に伴う遺構であると考えられている。また、平成29年度調査（発3）では、室町時代以降の建物跡や土坑などを確認している。

以上から、雲林院跡東側で、平安時代前期～中期の遺構・遺物が確認され、雲林院が最盛期であった頃の様相が明らかになりつつある。当地においても、雲林院跡に関する遺構・遺物が確認できる可能性がある。



### 3. 遺 構 (図版8～12)

#### (1) 基本層序 (図8)

現地は、北西部で標高約68.5m、南東部で標高68.4mであり、南東方向に緩やかに傾斜する。西側と北側には被災家屋の延石・東石及び自然石の石列がL字状に巡る。一部、解体の影響を受けているが、基礎上面は標高約68.8mで揃えられている。黄灰色粘質土(図8-4層)の現地表面以下、GL-0.2mで灰黄褐色小礫混じり砂質土(図8-31層)、GL-0.28mで黄褐色粘質土混じり灰褐色粘質土(図8-35層)、GL-0.34mで明褐色粘質土(図8-39層)、黄褐色砂礫(図8-40層)の基盤層となる。基盤層は、西から東に向かって下がる砂礫の上に粘質土が堆積する。

延石・東石及び自然石などの基礎と黄灰色粘質土(図8-4層)上面を第1面、灰黄褐色小礫混じり砂質土(図8-31層)上面を第2面、明褐色粘質土(図8-39層)や黄褐色砂礫(図8-40層)の基盤層上面を第3・4面として調査を行った。基盤層上面で複数の遺構が切り合っている状況を確認し、遺構の新旧で2面(第3・4面)に分けて調査を実施した。

#### (2) 遺構

調査では、平安時代～近代の遺構を検出した。第1面は詳細分布調査と発掘調査で確認した礎石建物や地下室、第2面は江戸時代後期の礎石建物や土坑など、第3面は室町時代～江戸時代前期の礎石建物や土坑など、第4面は平安時代の溝や土坑などがある。以下、主要な遺構について年代の古い順から報告する。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	溝、土坑、ピットなど	
室町時代 ～江戸時代前期	礎石建物、土坑、ピットなど	
江戸時代後期	礎石建物、土坑、土取穴など	
近代	礎石建物、地下室	

#### 平安時代 (第4面) (図9～10)

明褐色粘質土や黄褐色砂礫の基盤層上面で確認した、平安時代の遺構である。溝、土坑、ピットなどを検出した。

SD95(図10) 調査区南側で検出した、東西方向の溝である。上面の一部がSX84に切られている。主軸は北に3°傾く。検出長は9.0m以上、幅は1.0～1.1m、深さは0.2～0.3mである。底面は西から東に向かって傾斜する。埋土は、粘質系の土で5層に分けられる。東側は第1面SX5の削平を受けているが、検出状況から調査区外の東側へ続く。また、調査地西側の拡張区で、溝が西

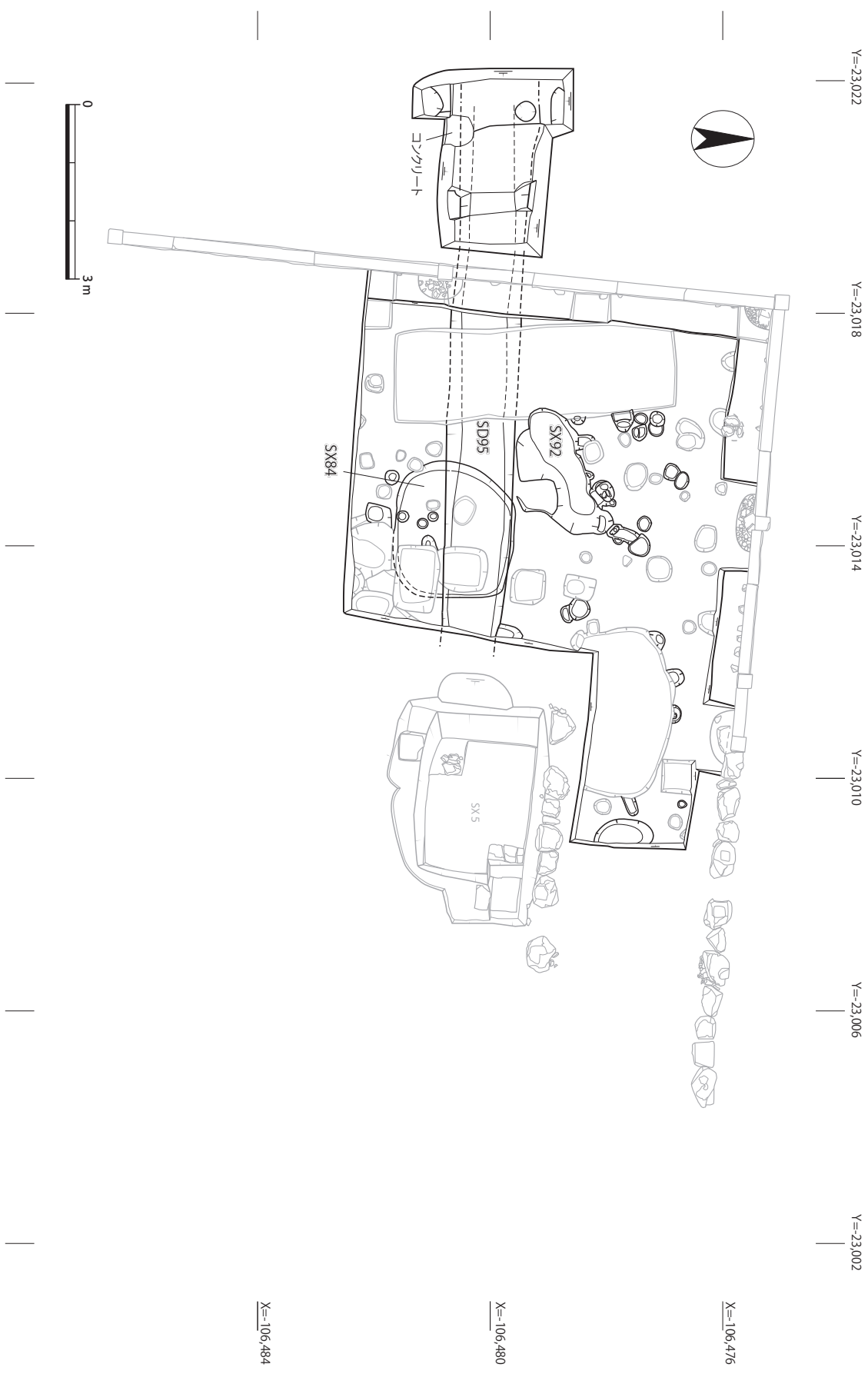
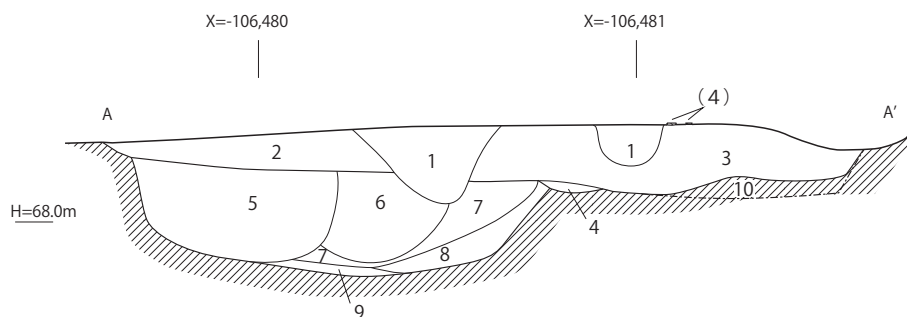
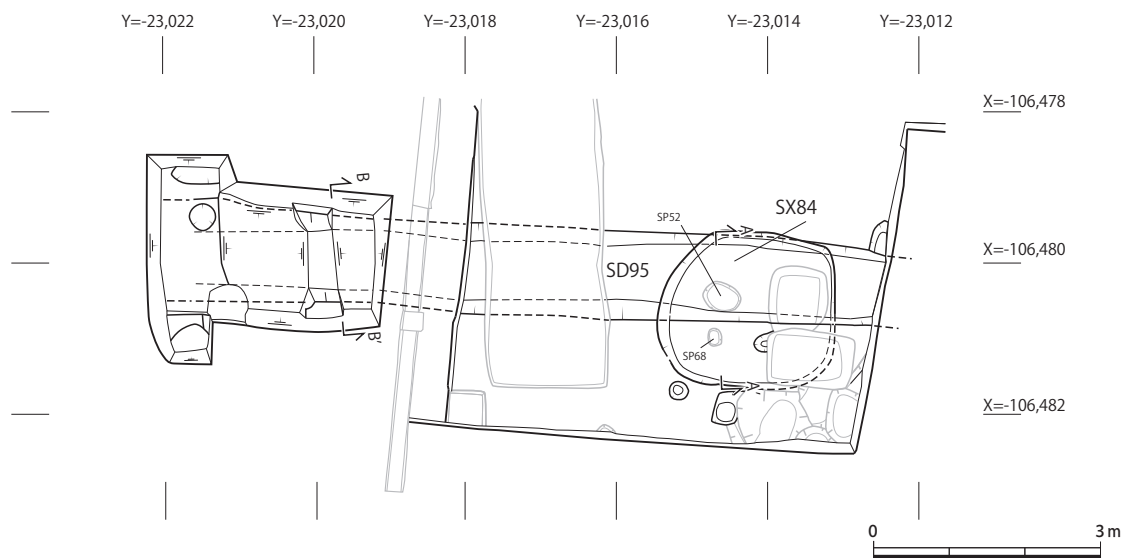
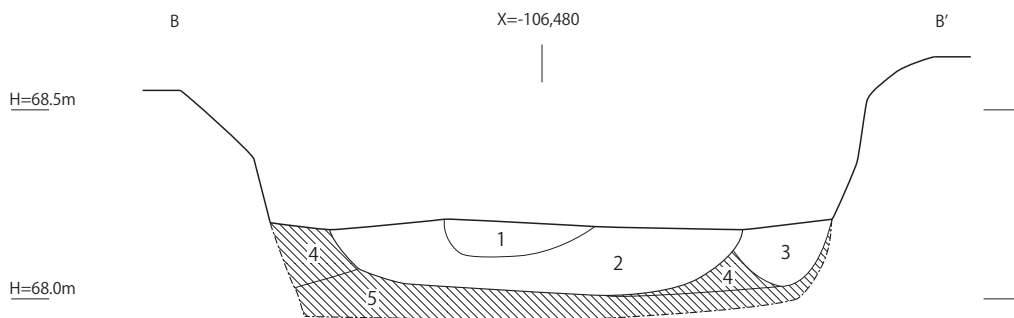


图9 第4面 平面图 (1 : 100)





- |   |   |        |   |
|---|---|--------|---|
| 1 | 2.5Y5/1 黄灰色粘質土混じり 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土         | 5      | 10YR3/1 黒褐色粘質土                            |
| 2 | 7.5YR4/1 褐灰色粘質土                           | 【SD95】 |   |
| 3 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土<br>(10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック入る) |        |   |
| 4 | 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土                           | 6      | 2.5YR4/4 にぶい赤褐色粘質土混じり 7.5YR3/2 黒褐色粘質土     |
|   | 【SX84】                                    | 7      | 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土                         |
|   |   | 8      | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土<br>(10YR6/6 明黄褐色粘質土ブロック入る) |
|   |   | 9      | 10YR2/2 黒褐色粘質土混じり 2.5Y7/8 黄色粘質土           |
|   |   | 10     | 7.5YR5/6 明褐色粘質土 【基盤層】                     |



- |   |                                      |   |                 |
|---|--------------------------------------|---|-----------------|
| 1 | 10YR5/6 黄褐色粘質土混じり 10YR3/1 黒褐色礫混じり粘質土 | 4 | 7.5YR5/6 明褐色粘質土 |
| 2 | 5YR3/2 暗赤褐色礫混じり粘質土                   | 5 | 10YR5/6 黄褐色砂礫   |
| 3 | 10YR4/1 褐灰色砂質土                       |   | 【基盤層】           |



※(番号)は遺物掲載番号

図10 第4面 SD95・SX84平面図(1:100)、断面図(1:20)

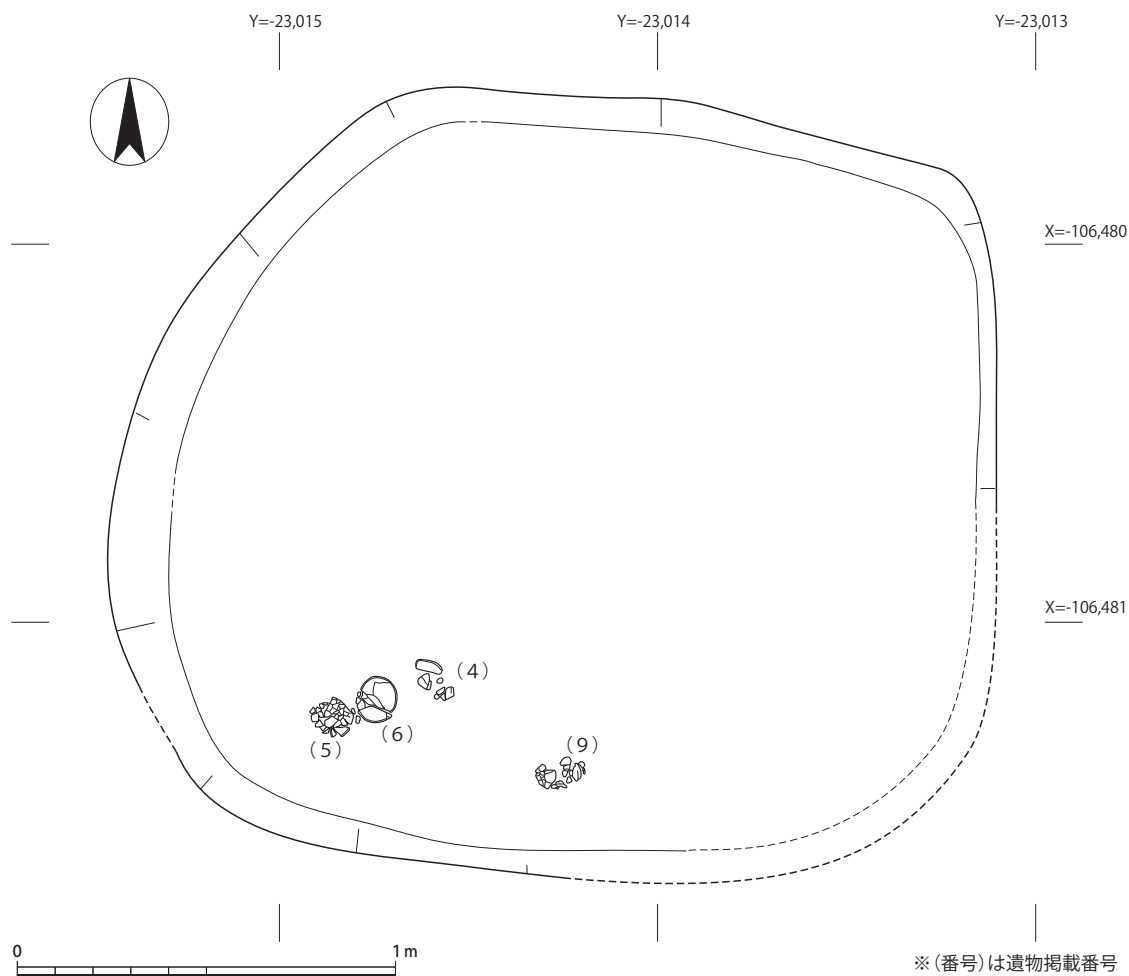


図11 第4面 SX84遺物検出状況（1：20）

側に続くことを確認した。平安時代前期に属する軒丸瓦や、10世紀代に属する土師器、黒色土器などが出土した。SX84との関係から10世紀後半までには埋まったと考えられる。

**SX84**（図10・11） 調査区南側で検出した土坑である。SD95を切り込んで成立する。東西約2.3m、南北約2.0mの楕円形で、深さは約0.2mである。南東側は第3面のSX60・77の削平を受けている。南側の上面で、10世紀後半に属する土師器皿がまとまって出土した。ほかに平安時代前期に属する軒丸瓦などが出土した。

**SX92** 調査区南側のSD95北隣で検出した土坑である。一部削平を受けており全体は不明であるが、東西2.0m以上、南北約1.0mの不定形で、深さは約0.4mである。検出状況から、SD95が埋まった後に成立した土坑と考えられる。

### 室町時代～江戸時代前期（第3面）（図12～14）

明褐色粘質土や黄褐色砂礫の基盤層上面で確認した、室町時代～江戸時代前期の遺構である。礎石建物、土坑、ピットなどを検出した。

**礎石建物1**（SP58・59・64・76・79）（図13） 調査区南西側で検出した、東西1間以上、南北間の礎石建物である。東西1.2m以上、南北2.7mで、正方位を向く。礎石据付穴を5基確認し

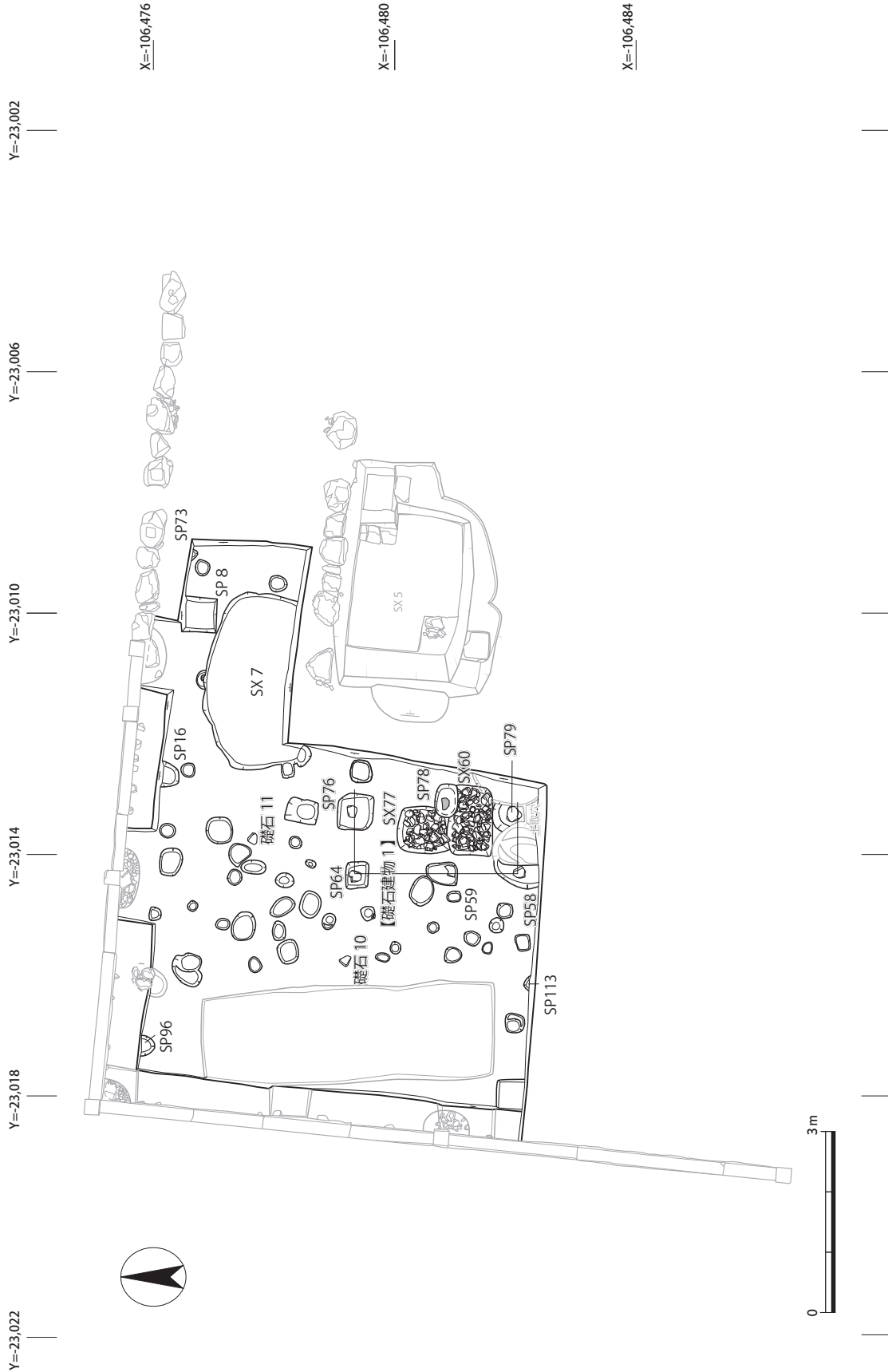


图12 第3面 平面图 (1 : 100)

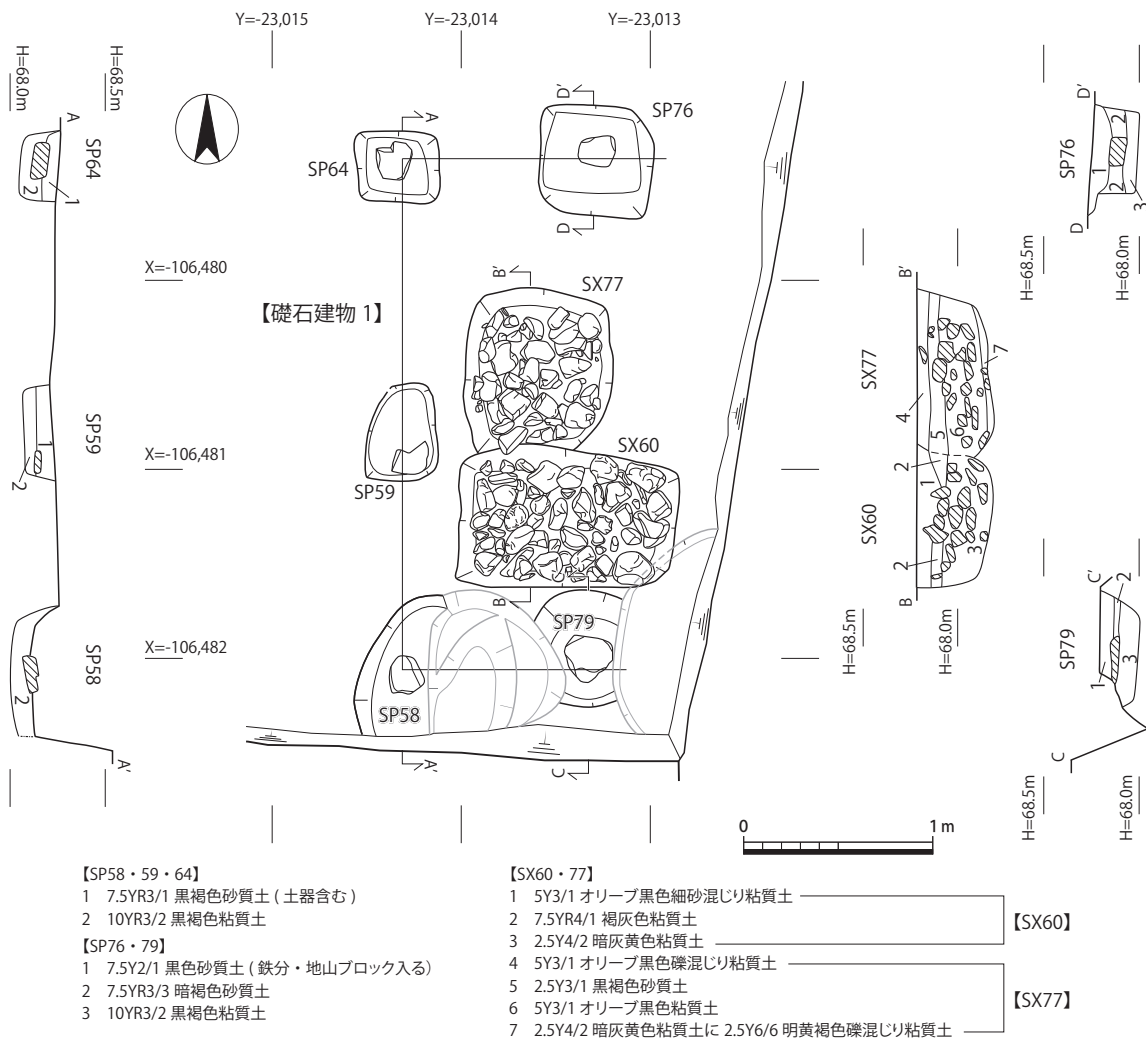


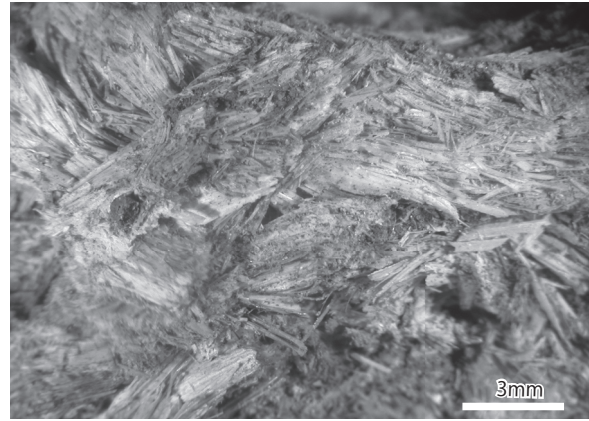
図13 第3面 礎石建物1、SX60・77平・断面図(1:40)

た。SP59は、東西約0.40m、南北約0.52mの長方形で、深さは約0.18mである。SP64は、一辺が約0.42mの隅丸方形で、深さは約0.20mである。SP76は、一辺が約0.60mの隅丸方形で、深さ約0.24mである。SP58・79は一部削平を受けており全体像は不明であるが、直径0.6～0.7mの円形で、深さは0.2～0.3mである。20cm大で厚さ10cmの礎石がそれぞれの掘方埋土内に据えられている。建物は東側の調査区外に続くと考えられるが、第1面SX5で削平を受けているため、詳細は不明である。時期のわかる遺物は、SP59から出土した13世紀後半から14世紀に属する青磁のみであるが、SX60・77との関係から礎石建物1は16世紀代と考えられ、古い時期の遺物が混入したものとみられる。

SX60・77(図13) 調査区南西側で検出した集石土坑である。礎石建物1の内部に収まる。上部は一部SP78に切り込まれている。SX60は、東西約1.15m、南北約0.75mの長方形で、深さは約0.40mである。SX77を切っている。SX77は、一辺が約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.4mである。ともに、5～10cm大の石が全体に敷き詰められている状況を確認した。礎石建物1に伴う土坑と考えられるが、明確な用途は不明である。土師器、瓦などが出土した。細片の土師器から、

16世紀代に属すると考えられる。

SP78 (図14) 調査区南側で検出したピットである。直径約0.50mの円形で、深さは約0.15mである。暗褐色粘質土の埋土から、白く灰状の藁縄を東西20cm、南北10cmの半球状で、厚さ6cmの範囲で確認した。遺存状況が良好でなかったため、サンプルを一部採取した。顕微鏡観察によると、「燃れ」が部分的にみられ、イネ科のプラントオパールも確認したため、出土した遺存



体はイネ科の藁縄であると想定される<sup>4)</sup>。他に遺物は出土しておらず時期は不明であるが、SX60・77との関係から16世紀以降と考えられる。

図14 第3面 SP78出土藁縄の燃れ部分拡大像

SP8 調査区北東側で検出したピットである。一辺が約0.6mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。土師器が出土した。

SX7 調査区東側で検出した土坑である。東西約2.9m、南北約1.5m以上の半円形で、深さは約0.4mである。染付などの近世の遺物を確認したため、土取穴の可能性はある。ほかに土師器などが出土した。

礎石10・11 調査区北西側で検出した。約20cm大の礎石2石である。上面は標高約68.0mであった。掘方は確認できなかった。2石のみの検出であるため関係性は不明である。

### 江戸時代後期 (第2面) (図15～18)

灰黄褐色小礫混じり砂質土の上面で検出を行った。江戸時代後期の遺構である。礎石建物、土坑、土取穴などを検出した。

土取穴 調査区南側中央で検出した。調査の都合上、第3面で検出をしたが、第2面に伴う遺構である。東西約1.7m、南北約1.2mの不定形で、深さは約0.5mである。16世紀後半から17世紀に属する土師器皿などが出土した。

SX4 調査区南東端で検出した土坑である。一部礎石9で切られ、南側は調査区外になるため全体像は不明であるが、東西約1.4m、南北約1.6m以上の不定形で、深さは約0.3mである。施釉陶器や焼締陶器、染付、貝類などが多量に入っているのを確認し、廃棄土坑と考えられる。

礎石建物2 (図16) 調査区全体で検出した礎石建物である。北側の第1面礎石列1の束石直下で検出した礎石3～5、中央東側の第1面礎石列3の東隣と西隣で検出した礎石6・7、南東側の第1面礎石1・2の直下で検出した礎石8・9、西側の第1面礎石列1の束石直下で検出した礎石抜取穴で成り立つ。礎石の上面は標高約68.8mで揃えられている。それぞれの礎石には掘方があることを確認した。主軸は北に6°傾く。礎石6・7・8・9それぞれの柱間は約3.8mで、礎石5・6の柱間は約2.8mで、礎石3と礎石抜取穴の柱間は約5.7mである。礎石8・9と礎石抜取穴は東西の位置がずれているため、南側の調査区外にも建物が続くと考えられる。なお、掘削は、安全面

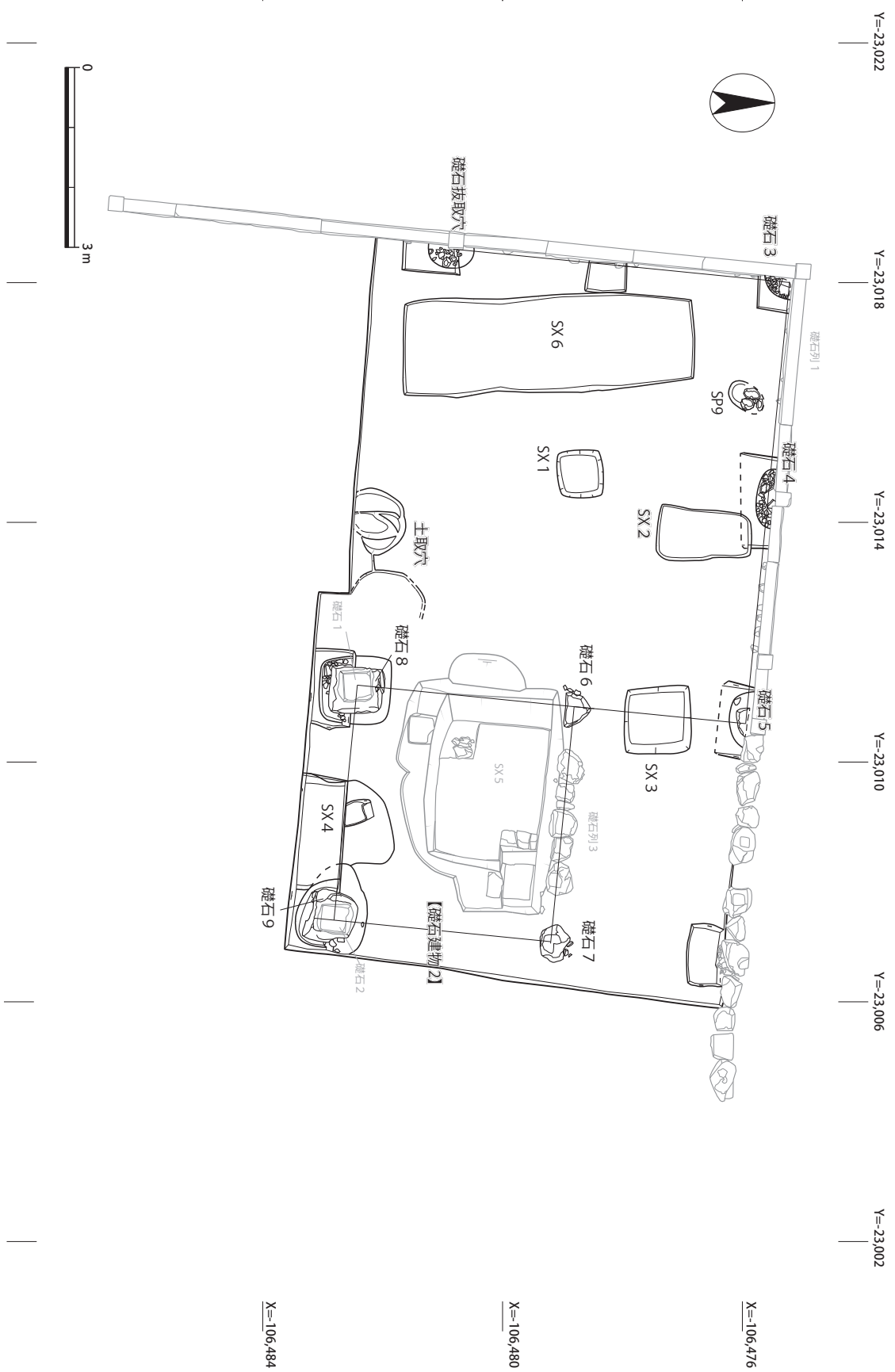


图15 第2面 平面图 (1:100)

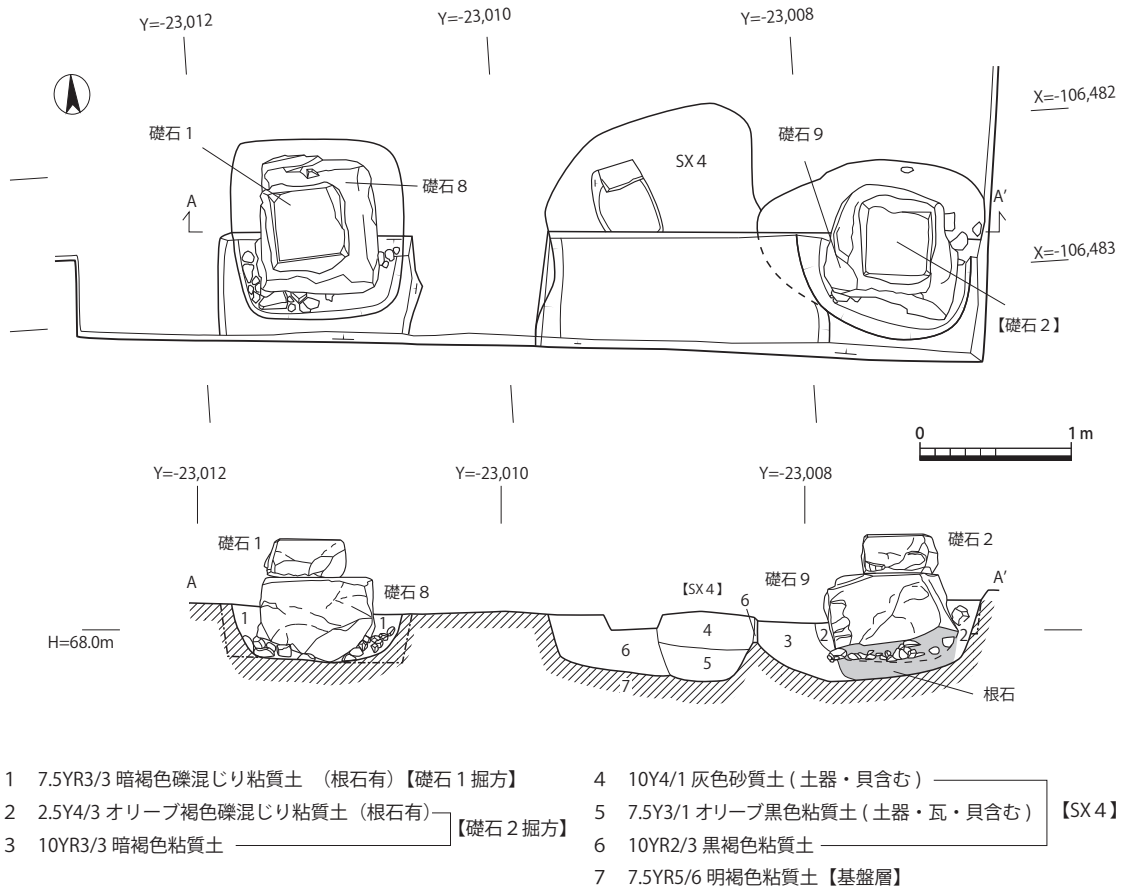


図16 第1・2面 礎石1・2・8・9平・断面図(1:50)

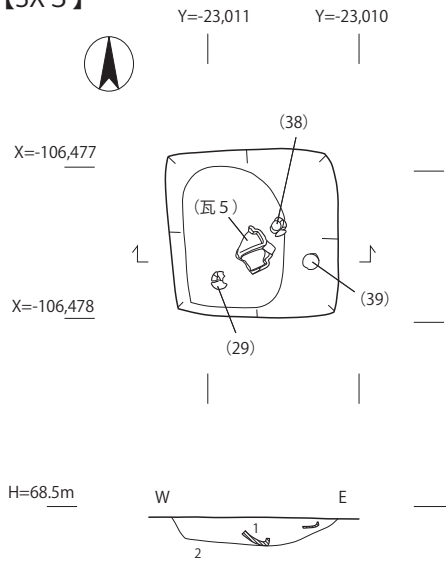
の確保から最小限にとどめている。

礎石3～5の大きさは、幅が50～54cm、高さが32～40cmである。掘方は約1.0mの円形であると考えられる。礎石5の掘方からは、施釉陶器が出土した。礎石6・7の大きさは、約60cm大である。礎石6の掘方は、約1.0mの円形か方形と考えられる。礎石8の掘方は、一辺が約1.2mの隅丸方形で、深さが約0.4mである。70cm×80cm×100cm大の石材が据えられていた。礎石西側面には幅6.0cm×高さ10.0cm×奥行1.5cmの矢穴を8箇所、北側面には幅8.0cm×高さ11.0cm×奥行2.0cmの矢穴を1箇所確認した。礎石9の掘方は、一辺が約1.2mの隅丸方形で、深さが約0.4mである。70cm×80cm×110cm大の礎石が据えられていた。礎石に矢穴の痕跡を確認できなかった。また、礎石の下には暗褐色系の土とともに拳大の根石が入っていることを確認した。礎石8の掘方から、施釉陶器、染付などが出土した。礎石9の掘方からは、染付などが出土した。礎石抜取穴は、上部は攪乱で削平を受けていたが、一辺が約0.8mの円形で、深さは約0.1mである。拳大の根石が多量に入っているのを確認し、礎石は抜き取られたと考えられる。遺物は出土しなかった。

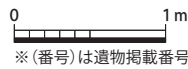
**SX6** 調査区西側で検出した土坑である。第3面で検出したが、第2面に伴う遺構である。東西約4.8m、南北約1.6mの長方形で、深さは約0.6mである。正方位を向く。施釉陶器や染付などが出土した。

**SX3** (図17) 調査区中央北側の礎石5・6の間で検出した土坑である。一辺が約1.2mの隅丸

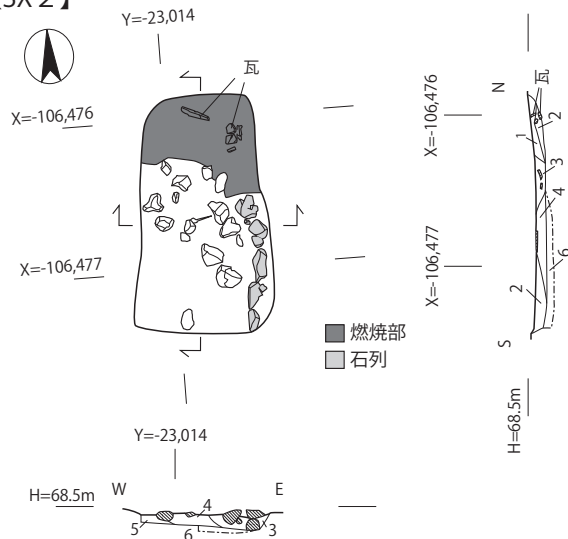
【SX 3】



- 1 10YR3/3暗褐色粘質土(土器・瓦含む)
- 2 10YR4/2 灰黄褐色小礫混じり砂質土(土器含む)



【SX 2】



- 1 【焼成部】
- 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (瓦含む)
- 3 【炭層】
- 4 5YR5/8 明赤褐色砂質土【焼土】
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ色粘質土
- 6 10YR4/2 灰黄褐色小礫混じり砂質土 (土器含む)

図17 第2面 SX3・2平・断面図(1:50)

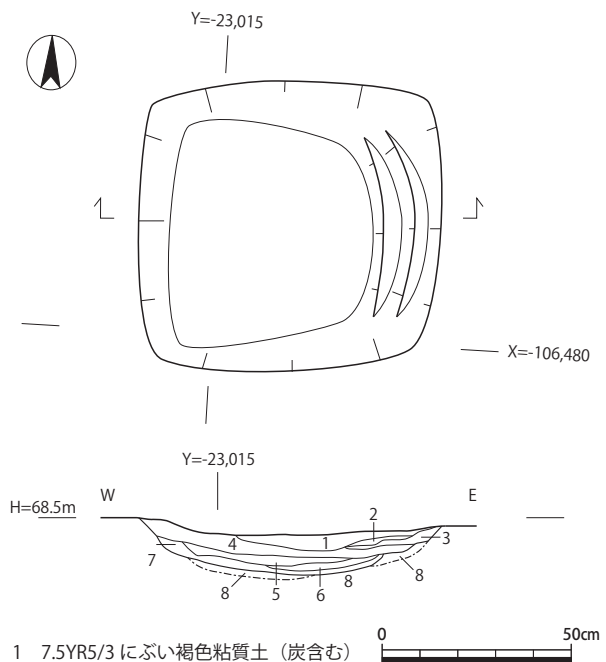
方形で、深さは約0.2mである。土師器・染付・瓦などの遺物とともに石が入っている状況を確認し、廃棄土坑であると考えられる。

SX2(図17) 調査区中央北側で検出したカマドである。東西約0.9m、南北約1.6mの長方形で、深さは約0.2mである。北側で焼土が広がっていることを確認し、焼成部であったと考えられる。また、東端では、縦一列に15~20cm大の石が並んでいた。土師器、施釉陶器、磁器、瓦などが出土した。

SX1(図18) 調査区西側で検出した土坑である。一辺が約0.8mの隅丸方形で、深さは約0.12mである。遺構全体に炭や焼土が多量に入っている状況を確認した。染付などが出土した。

近代(第1面)(図19~21)

建物解体時の詳細分布調査と発掘調査で確



- 1 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土(炭含む)
- 2 5YR4/6 赤褐色粘質土(焼土含む)
- 3 【炭層】
- 4 7.5YR4/3 褐色粘質土(炭多量に含む)(焼土含む)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土(炭含む)(焼土含む)
- 6 5YR6/8 橙色粘質土(焼土含む)
- 7 7.5YR4/2 灰褐色粘質土と2.5YR5/3 にぶい赤褐色粘質土
- 8 10YR4/2 灰黄褐色小礫混じり砂質土(土器含む)

図18 第2面 SX1平・断面図(1:20)



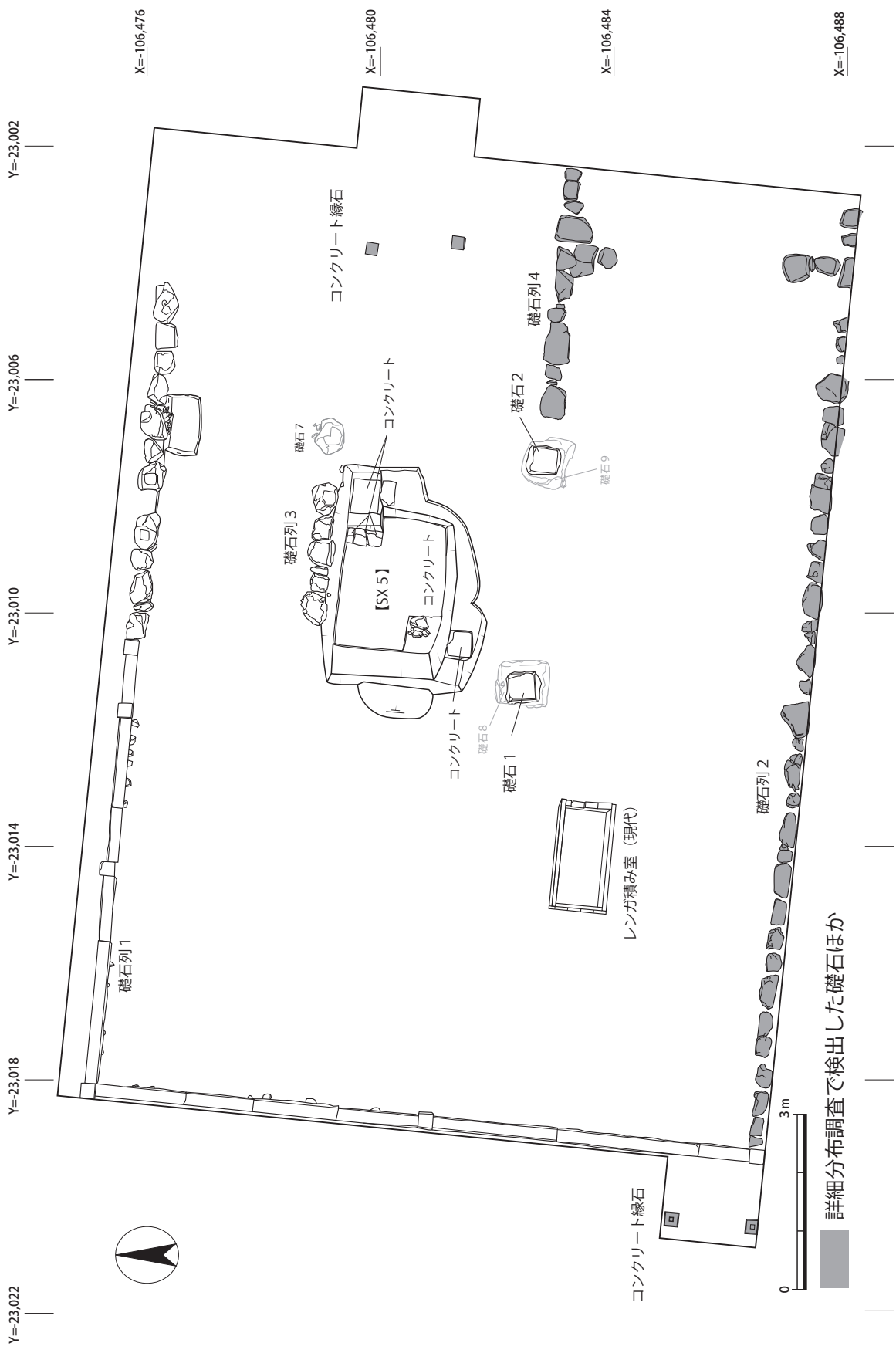
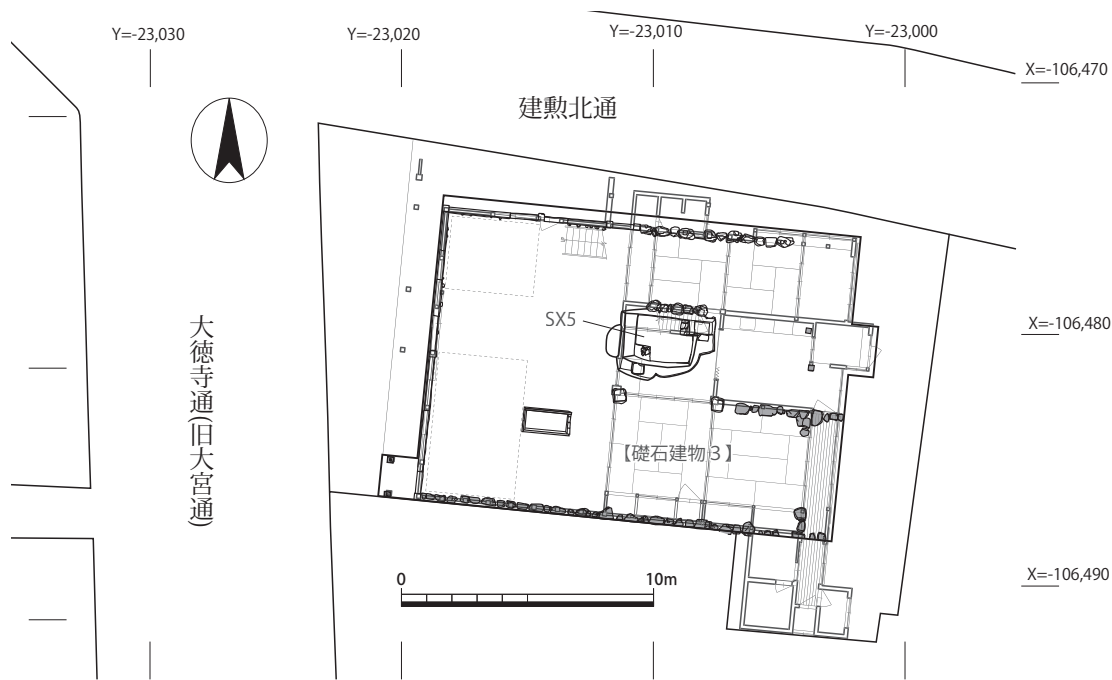


図19 第1面 平面図 (1:100)



(下図:公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター『歴史的風致形成建造物等への指定に係る調査資料 岩井木材』2021掲載の配置図兼1階平面図を一部改変)

図20 第1面検出の遺構と旧建物平面 重ね合わせ図 (1:300)

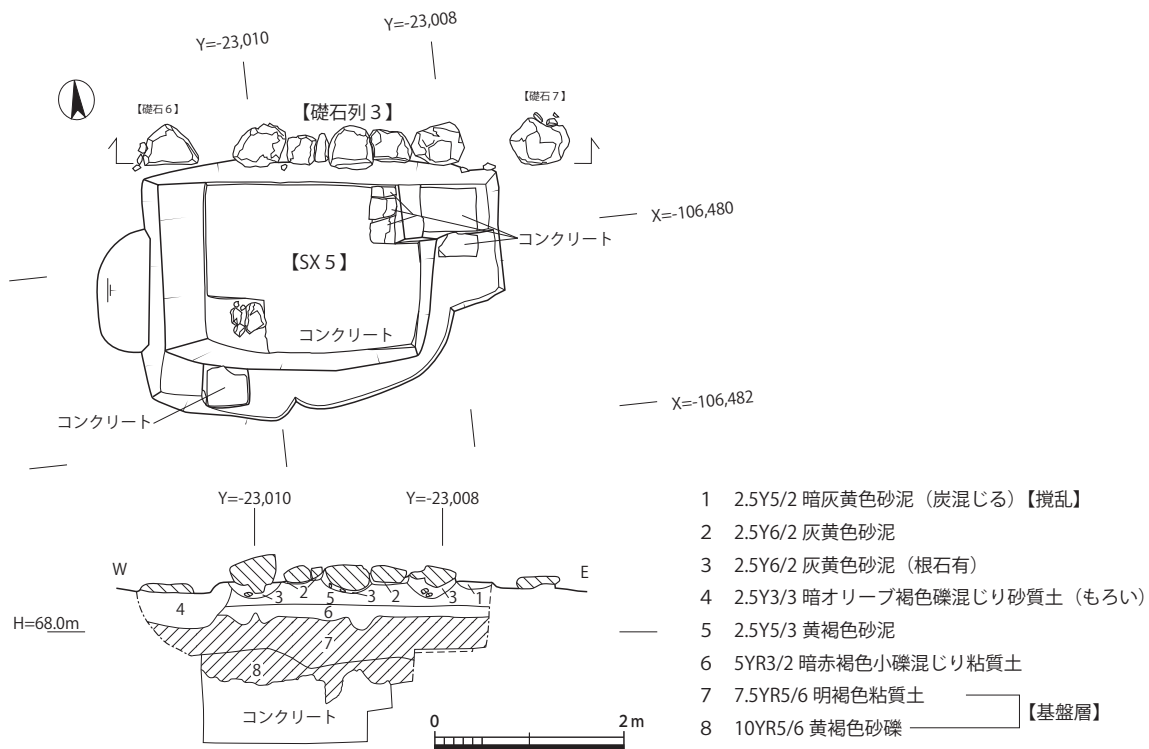


図21 第1面 SX5・礎石列3平・断面図 (1:80)

認し、黄灰色粘質土の上面で検出した、近代の遺構である。礎石建物、土坑などを検出した。

礎石建物3 (図16) 調査区全体で検出した礎石建物である。礎石列1~4、礎石1・2を確認した。大半は詳細分布調査と発掘調査の両方で確認したが、一部、詳細分布調査のみで確認した。主軸は東に6°傾く。

礎石列1は、調査区西側と北側西半で、長さ110～250cm、幅20cm大の延石と、一辺が約20cmの方形の東石がL字状に巡り、北側東半で約50cm大の自然石が5石と少し離れて7石並ぶ。一部、自然石の中心に一辺が約20cmの方形の窪みを確認した。柱当たりと考えられる。礎石列2は、調査区南側で検出し、南隣の建物に接するように自然石が東西方向に並んでいた。礎石列3は、調査区中央北寄りで検出し、30～60cm大の自然石が6石、南側に面を揃えて東西方向に並ぶ。礎石列4は、礎石2から4.5m東側で検出し、30～70cm大の自然石が10石、北側に面を揃えて東西方向に並ぶ。礎石1・2は、調査区中央南寄りで検出し、第2面礎石建物2で確認した礎石8・9の上一回り小さい礎石が据えられていた。礎石1・2は、一辺が約50cmの方形で高さが約25cmの石で、縁は面取りをしている。掘方は確認していない。

SX5（図21） 調査区東側で検出した土坑である。第1面礎石列3南隣で確認した。東西約3.7m、南北約2.0mの方形で、深さは約1.7mである。東側に階段が4段ついている。壁面や床面はコンクリートで補強していることを確認した。地下室として使用されていたと考えられる。

## 4. 遺物

今回の調査では、コンテナ5箱分の遺物が出土した。遺物は、土師器、黒色土器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦、釘、銭貨などである。以下、図化できた資料について、報告する。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦		土師器10点、黒色土器2点、軒丸瓦2点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、施釉陶器、青磁		土師器4点、青磁1点		
江戸時代後期	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、染付、瓦、金属製品、木製品 他		土師器5点、施釉陶器8点、焼締陶器1点、染付12点、丸瓦1点、隅軒平瓦1点、棟端瓦1点、釘2点、銭貨6点、藁縄(サンプル)1点		
合計		5箱	57点(2箱)	1箱	2箱

### (1) 土器 (図22・23)

#### 第4面

SD95 1は土師器の甕である。口縁部～体部片で、体部は直で立ち上がり、口縁部は外上方へ外反し、端部は内傾する。体部外面にタタキが残る。内面には煤が付着する。2・3は黒色土器の甕である。2は口縁部～体部片で、体部はやや丸く、口縁部は外上方へのび、端部は丸く収まる。内黒である。3は頸部～体部片で、体部はやや丸い。頸部外面に煤が付着する。内黒である。10世

紀代に属する。

SX84 4～12は土師器の皿Aである。「て」の字状の口縁で、端部は内傾しつまみ上げる。4～7は口径が10.30～11.30cm、高さが1.45～1.75cm。8は口径が13.0cmで、高さが1.20cm。10世紀後半に属する。

### 第3面

SP59 13は青磁の椀で、外面に蓮弁文がある。龍泉窯系である。残高が2.3cm、底径が3.6cm。13世紀後半から14世紀に属する。

SP8 14～17は土師器である。14・15は皿Sで、口縁部は外上方へのび外反し、端部は丸く収める。14の口径は8.0cm、高さは1.7cm。16・17は皿Sbで、口縁部は外上方へのび、端部は丸く収める。16の口径は9.0cm、高さは1.6cm。16世紀代に属する。

### 第2面

土取穴 18は土師器の皿Nである。口径は5.5cm、高さは1.4cm。16世紀後半から17世紀に属する。

SX4 19～23は施釉陶器である。19は瀬戸・美濃焼の皿である。色調は黄色で、口縁部外面から内面にかけて透明釉がかかる。見込に目跡を3箇所確認した。口径は10.2cm、高さは2.7cm、底径は4.8cmである。20は唐津焼の鉢である。外面に沈線が2本ある。口縁部外面から内面にかけて褐釉がかかる。口径は11.4cm、高さは3.5cm、底径は6.2cm。21は唐津焼の椀である。外面に白土で円形の文様を描いている。口縁部外面から内面にかけて褐釉かかる。22は瀬戸焼か京焼の壺の口縁部～頸部片である。白化粧をしており、緑釉が全体にかかる。口縁部は直に立ち上がり、端部は外側に折れ曲がる。23瀬戸・美濃焼の鉢である。口縁部外面から内面にかけて褐釉がかかる。口径は24.6cm、高さは6.7cm、底径は11.4cm。24は焼締陶器で、信楽焼の播鉢である。25～28は国産染付、肥前焼の椀である。25・26は外面に草花が絵付されている。高台端部に釉剥ぎ、見込に蛇目釉剥ぎの痕跡がみられる。27・28は外面に二重網目文、内面に菊花文と網目文、28は高台底部にも絵付している。27の口径は9.6cm、高さは5.2cm、底径は3.8cm。2つは類似しているため、セットであった可能性がある。

SX3 29～32は土師器である。29～31は皿で、口縁部は内湾し、端部は丸く収める。内面に圈線がまわる。29の口径は11.3cm、高さは2.0cm。19世紀前半に属する。32は焼塩壺の蓋である。

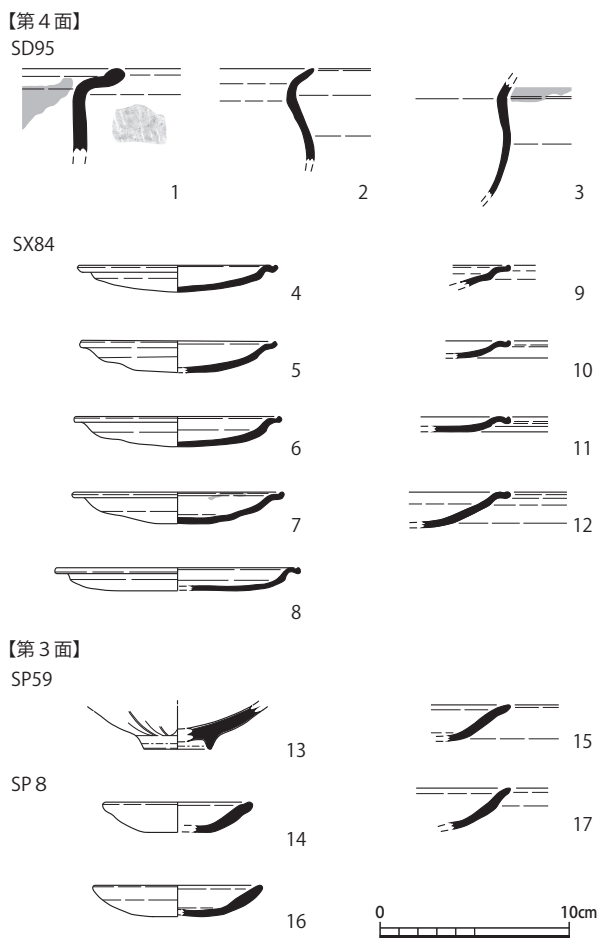


図22 出土遺物実測図1 (1:4)

土取穴



18

SX4



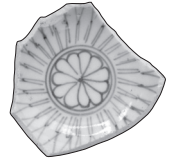
19



25



27



28



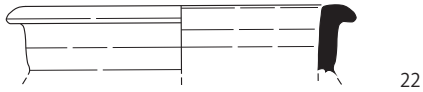
20



21



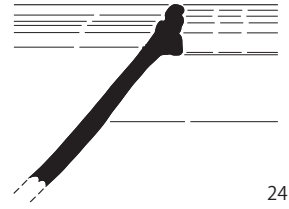
26



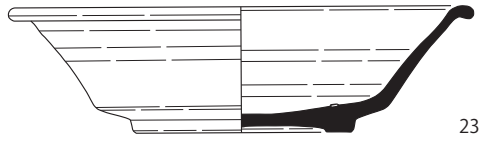
22



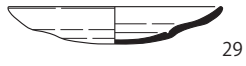
23



24



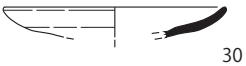
SX3



29



31



30



33



36



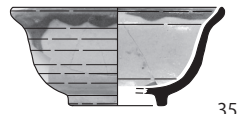
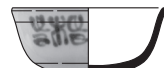
39



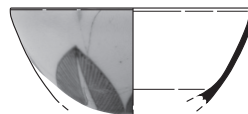
32



34



35



37

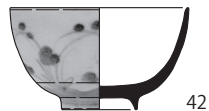


礎石 5 掘方

礎石 9 掘方



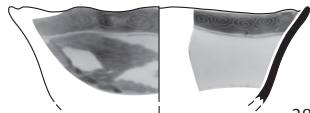
41



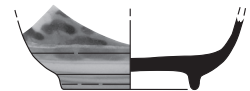
42



43



38



40



图23 出土遺物実測図2 (1:4)

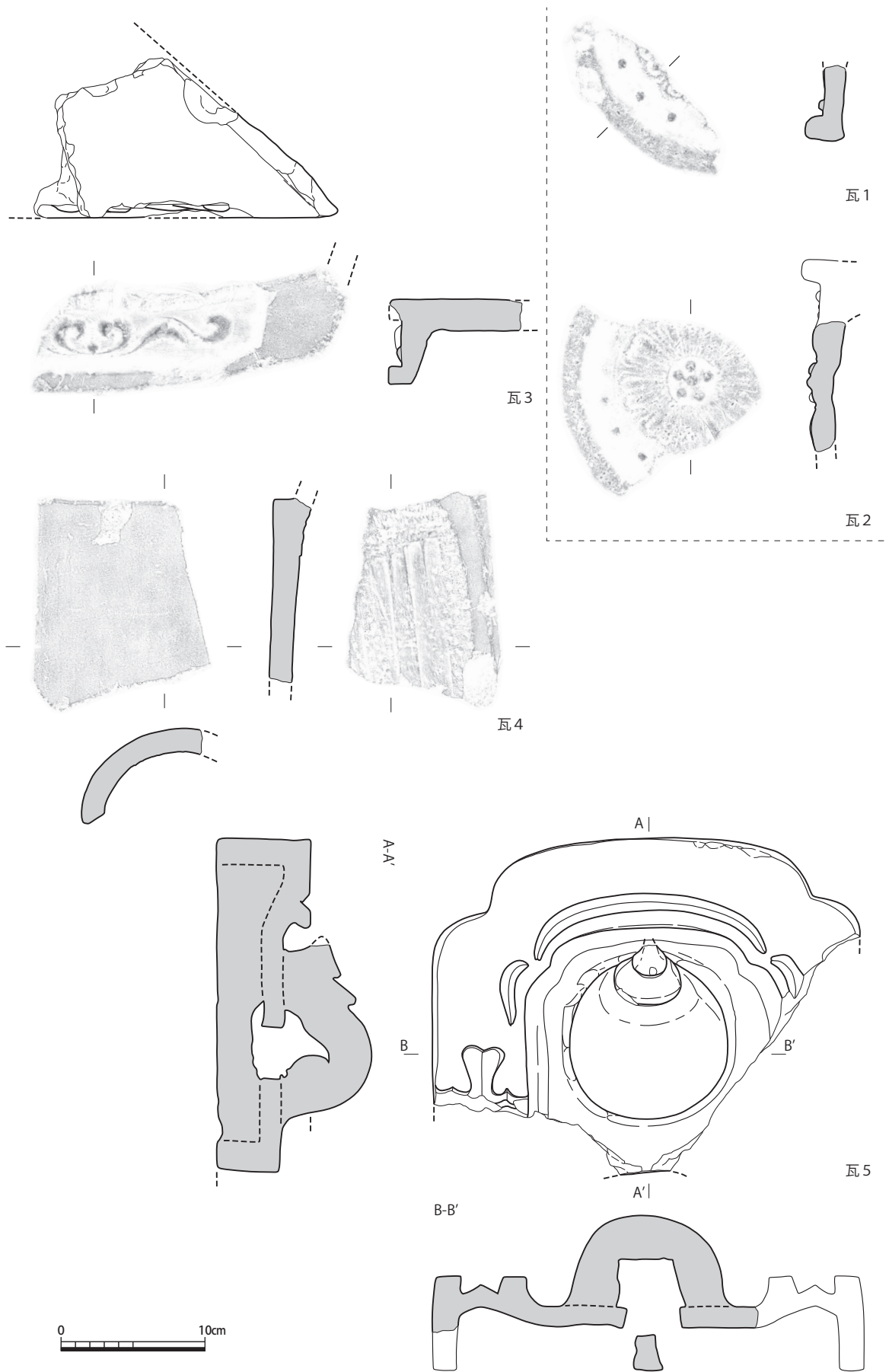


图24 出土遺物実測図3 (1:4)

外面はナデで、内面には布目が残る。口径は6.1cm、高さは1.22cm。33・34は施釉陶器である。33は京・信楽焼のミニチュアの壺蓋である。頂部外面に褐釉がかかり、他は露胎している。口径は3.2cm、高さは1.4cm。34は瀬戸・美濃焼の皿で、内面から口縁部外面にかけて施釉している。口縁部外面に煤が付着し、灯明皿として使用していた可能性がある。35～40は国産染付である。36～38は瀬戸・美濃焼である。36は小椀で、口径は8.1cm、高さは4.0cm、底径は3.2cmである。37・38は椀である。38は、輪花の口縁部は外上方へのび、端部は丸く収める。金継ぎをしている。39・40は肥前焼の椀である。39の口径は10.5cm、高さは6.1cm、底径は3.6cm。35は小椀である。口縁部はやや外反し、端部は内傾する。口径は11.2cm、高さは5.2cm、底径は5.2cm。

礎石5掘方 41は施釉陶器である。京・信楽焼の蓋である。全体に釉がかかり、外面には文様を描いている。

礎石9掘方 42・43は国産染付、肥前焼の椀である。42の口径は9.5cm、高さ5.5cm、底径は4.0cm。

## (2) 瓦 (図24)

瓦1・2は、複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。瓦1は花卉・間弁ともに盛り上がり、外区には珠文が巡る。調整は不明。胎土は少量の砂粒を含み、焼成はやや軟質。瓦2の中房は凸面で、1+5の連子を配す。花卉・間弁ともに盛り上がり、外区には珠文が巡る。調整は不明。胎土は粗く、焼成は軟質。上庄田瓦窯産のKS102型式<sup>5)</sup>で、平安時代前期に属する。

瓦3は、唐草文隅軒平瓦である。中心飾りに二葉を配し、外側に向かって2回反転する。曲線顎。平瓦部凹面ナデ、顎部裏面摩滅している。凹面の側面側には、瓦当に向かって棧がつく。側面は斜めに削られている。胎土は少量の砂粒を含み、焼成はやや軟質。近世。

瓦4は、丸瓦の胴部片である。凸面はミガキ、凹面は細長い工具によるタタキ、側面はケズリである。近世に属する。

瓦5は、宝珠文棟端瓦である。残存部分で、縦は約23.2cm、幅は約49.7cm、最大厚さ10.7cmで

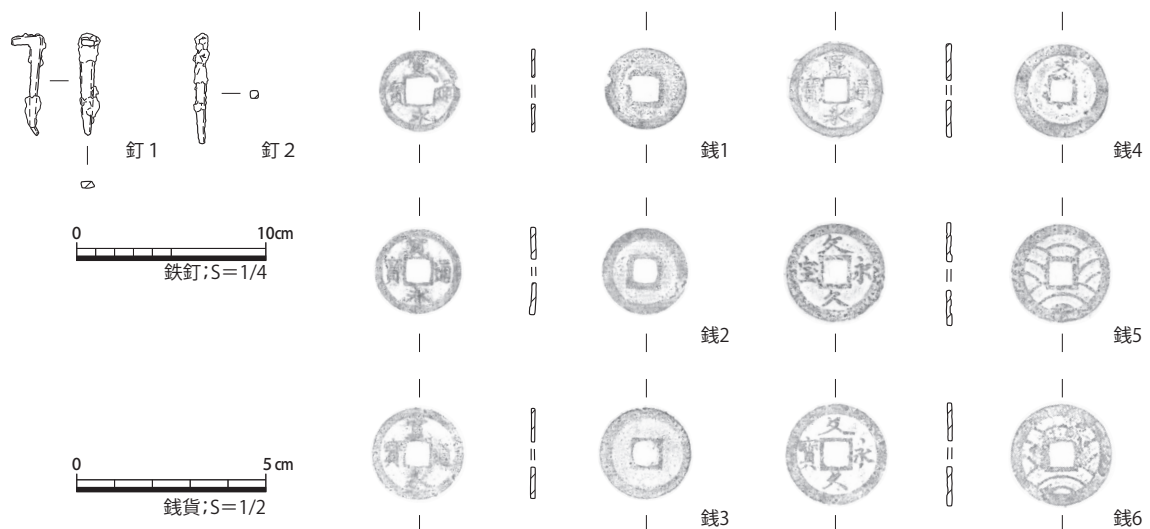


図25 出土遺物実測図4 (鉄釘1:4、銭貨1:2)

ある。中央に宝珠文を貼り付けている。近世に属する。

瓦1はSD95、瓦2はSX84、瓦3・4はSX4、瓦5はSX3から出土。

### (3) 金属製品 (図25)

釘1・2は、鉄釘である。釘1は長さが5.3cmで、釘頭がL字状に折れ曲がる。釘2は長さが5.85cmである。ともにSX3からの出土。

銭1～6は、銭貨である。銭1～4は「寛永通宝」である。銭4の裏面上部には、「文」の文字がある。銭5・6は「文久永宝」である。裏面に草文がある。銭1～3・6は第1面精査中、銭4・5は図8断面31層の掘り下げ時から出土。

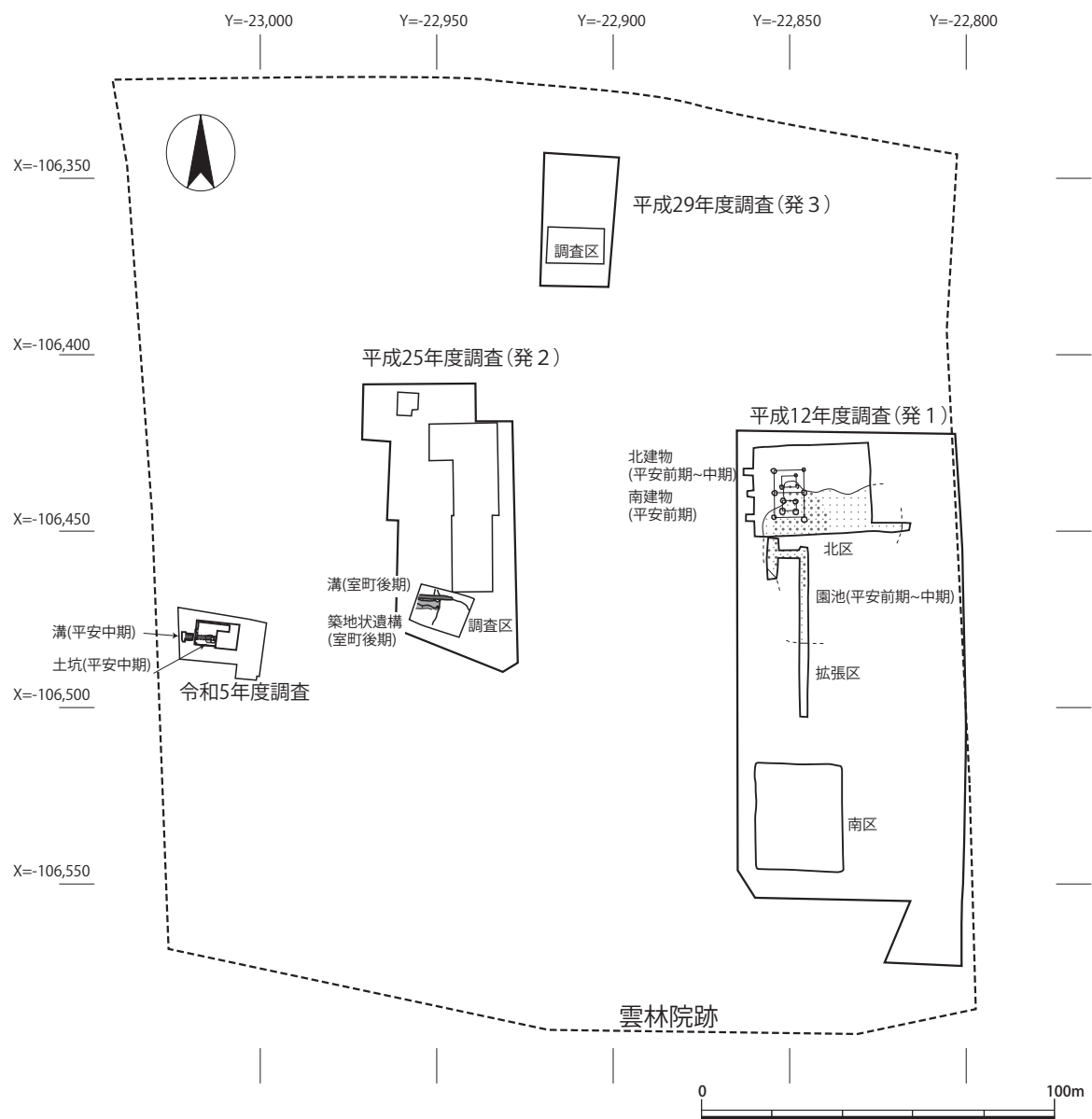


図26 雲林院跡関連遺構配置図 (1:2,000)



## 5. まとめ（図26）

今回の調査では、平安時代から近代までの溝や土坑、建物跡など、複数時期の遺構を検出した。

そのなかで特筆すべき成果としては、平安時代中期の溝（SD95）と土坑（SX84）を確認したことである。溝（SD95）は東西方向で、埋土からは10世紀代の土器などが出土した。また、土坑（SX84）の上面からは10世紀後半に属する土師器皿などが出土した。溝（SD95）は、土坑（SX84）に切られているため、10世紀後半までに埋没したと考えられる。少なくとも、雲林院が最盛期の平安時代中期の遺構に位置付けられる。雲林院で計画的な区画整理がなされていた可能性がある。周辺で平安時代の雲林院に関わる遺構は、平成12年度調査（発1）の平安時代前期～中期の園池遺構と掘立柱建物2棟がある。今回検出した遺構同様に雲林院が最盛期であった時期の遺構である。しかし、雲林院跡の西端と東端と離れているため、関係性まではわからなかった。

また、室町時代後期の礎石建物1や土坑（SX60・77）などを検出した。北東側の平成25年度調査（発2）で検出した室町時代後期の東西方向の溝と築地状遺構は、雲林院に関連する遺構と考えられている。今回検出した室町時代の遺構は、雲林院とどのように関連するかまでは明確にできなかったが、同時期のものであることから、何らかの関係性があったと考えられる。

ほかに、江戸時代後期の礎石建物2と、近代の礎石建物3を確認した。これらは、礎石などの位置関係が同じであり、礎石建物2を利用して、建物を作り変えている可能性が高い。

以上、当地は、平安時代から近代まで、長期に渡って土地利用がされてきたことが明らかになった。今回、平安時代の雲林院に関する遺構を確認し、雲林院の様相がわかる手がかりを得ることができた。今後、周辺での調査が進むことで、平成12年度調査（発1）と今回の調査で確認した平安時代の遺構の関係性が見い出せるかもしれない。さらなる調査に期待したい。

（八軒 かほり）

今回の調査では、下記の方々から多岐にわたる御指導、御協力を得ました。末筆ではありますがここに記し、感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

一瀬和夫、岩井清、尾池光太郎、関晃史、高原光、京都市景観政策課、北部環境共生センター

註

- 1) 公益財団法人 京都市景観・まちづくりセンター『歴史的風致形成建造物等への指定に係る調査資料 岩井木材』 2021年。
- 2) 出典は、註1文献。
- 3) 竹貫元勝『紫野 大徳寺の歴史と文化』淡交社 2014年。
- 4) 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の関晃史氏からご教授を得た。
- 5) 京都市文化市民局『令和3年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 上庄田瓦窯跡 出土品』 2022年。

## VI 中臣遺跡（第95次）

### 1. 調査経過

調査地は、山科区勸修寺東栗栖野町68-5、68-6、68-7に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「中臣遺跡」に該当する。この地に個人住宅新築の計画がなされ、令和5年3月17日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。当該地の東を南北方向に走る西野道拡幅工事に先立つ発掘調査（第77次）では、7世紀頃の掘立柱建物をはじめとした遺構が確認されており、当該地でも関連する遺構が展開する可能性が想定された。計画建物によりこれらの遺構に影響が及ぶおそれがあることから、記録保存のための発掘調査を実施した。調査は令和5年5月10日から26日まで実施し、作業日数は延べ10日、調査面積は73㎡である。

なお、調査前に既存建物解体の影響で、敷地の大部分が削平を受けていた。そのため、まず削平された箇所に露出していた西壁断面の記録を行い、残存遺構確認のための調査区（1区）、地層が遺存している箇所に設けた調査区（2区）の2つの調査区を設け、調査を実施した。

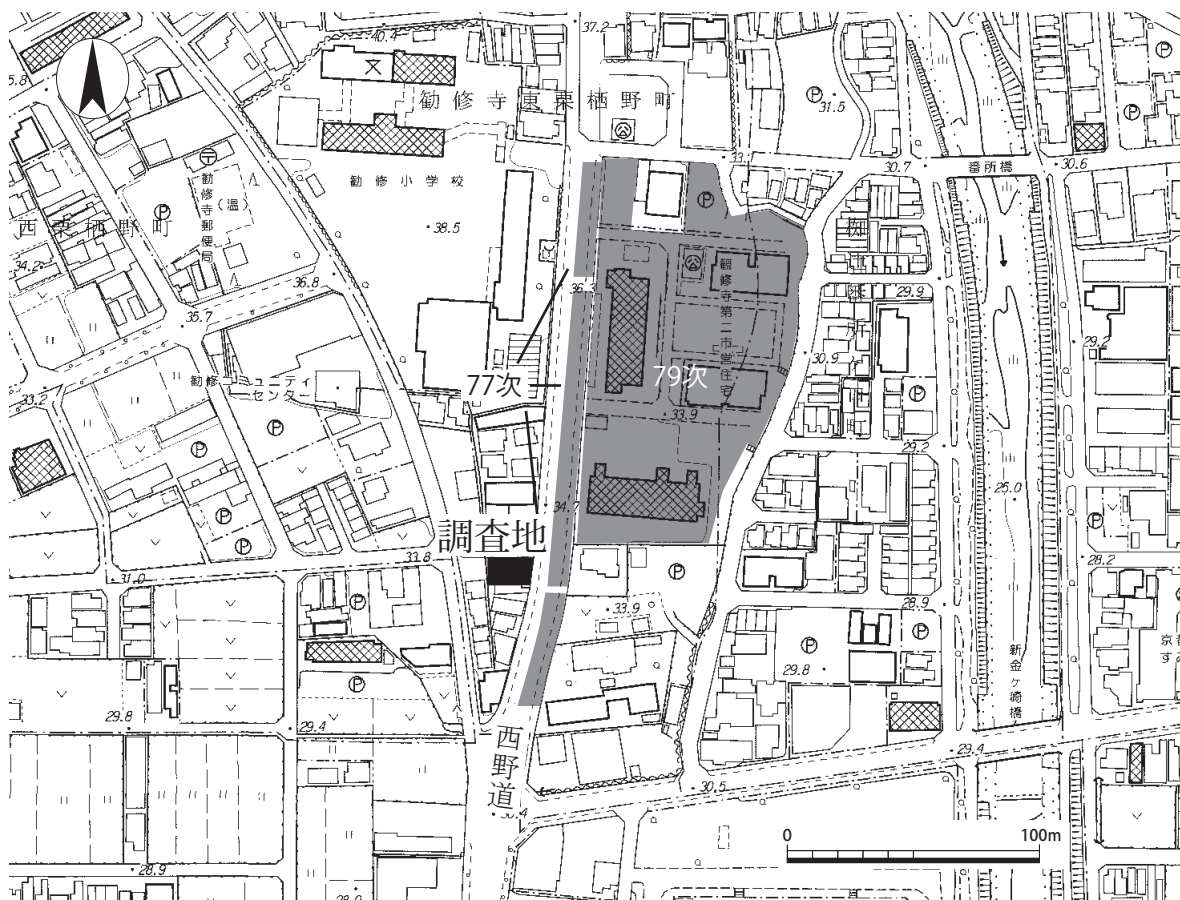


図1 調査地点と周辺調査（1：3,000）



図2 調査前全景（南東から）



図3 2区重機掘削状況（北東から）

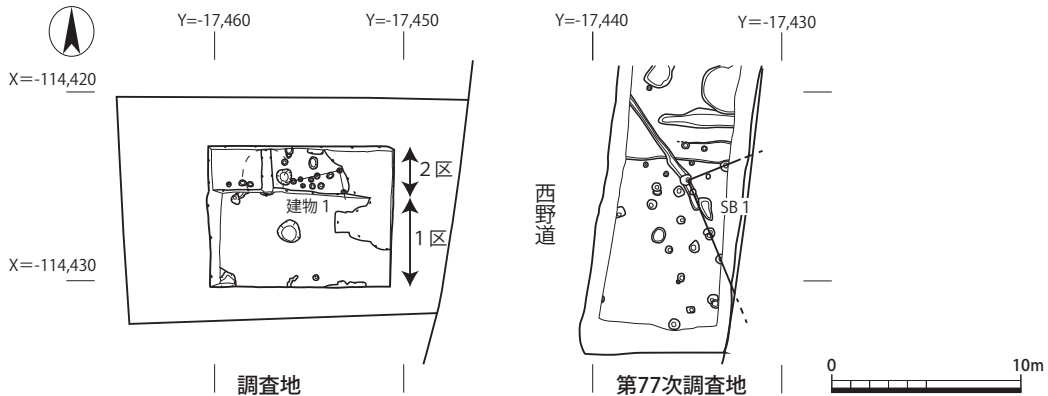


図4 調査区配置図（1：400）

## 2. 遺跡

### （1）位置と歴史的環境

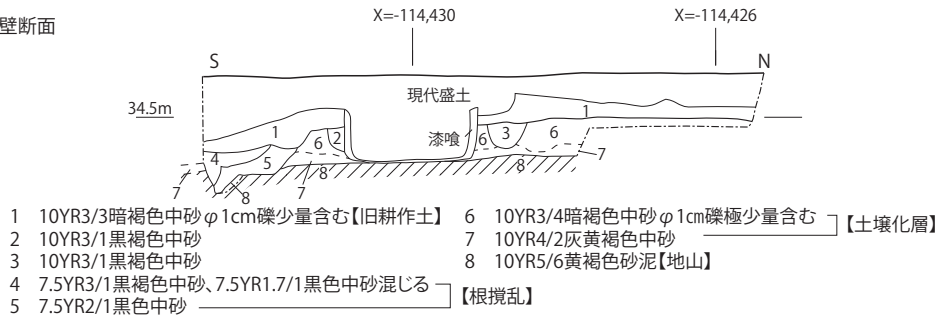
中臣遺跡は、東を流れる山科川と、西を流れる旧安祥寺川に挟まれた丘陵地に所在する、旧石器時代～中世の複合遺跡である。昭和46年（1971）に第1次調査以降、多数の調査が行われており、今回の調査が第95次調査となる。これまでの調査により、主に弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期～飛鳥時代の集落遺跡であることがわかっている。弥生時代後期～古墳時代初頭には丘陵裾部の平坦地に、古墳時代後期～飛鳥時代には丘陵上部と裾部の平坦地に集落が展開していた状況が確認されている<sup>1)</sup>。

### （2）既往の調査（図1）

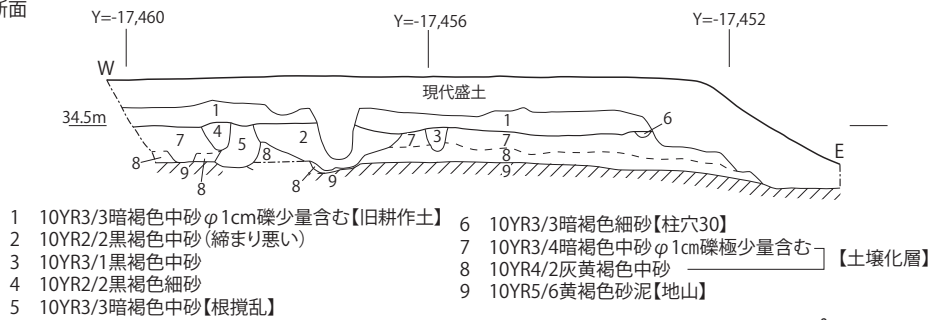
今調査地の周辺では、市営団地建設に先立つ調査と、区画整理事業に先立つ調査が行われている。調査地北東で行われた勸修寺第二市営団地建設に先立つ調査（第79次）では、縄文～平安時代の遺構が確認され、特に古墳時代中期の古墳群と、古墳時代末～飛鳥時代にかけての建物群の検出が特筆される<sup>2)</sup>。西野道拡幅工事に先立つ調査（第77次）では、今回の調査地東隣接地付近で、飛鳥時代の掘立柱建物が確認されている<sup>3)</sup>。

今調査地は丘陵上部の平坦地南端付近に位置し、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構の検出が想定された。

1・2区西壁断面



1区北壁断面



2区北壁断面

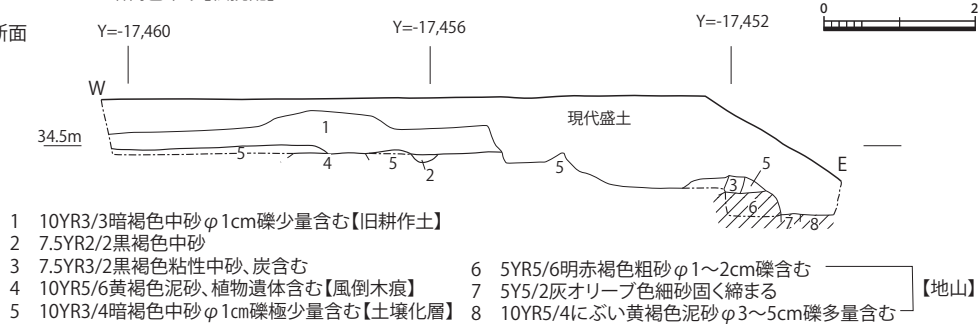


図5 調査区断面図 (1:100)

### 3. 遺構 (図版13)

#### (1) 基本層序

基本層序は現代盛土以下、GL-0.4mで暗褐色中砂の旧耕作土、-0.7mで暗褐色中砂の土壤化層、-1.2mで黄褐色砂泥の地山に至る。既に削平を受けていた1区では黄褐色砂泥の地山上面で、2区では暗褐色中砂の土壤化層上面で検出を行った。土壤化層上面の標高は34.3mを測る。

#### (2) 遺構 (図5・6・7)

1区は既に削平を受けていたが、地山上面で検出を行った結果、複数の土坑状の落ち込みを検出した。いずれも遺物が出土せず時期は不明である。埋土に根状の炭化物が含まれ、平面形が不定形であるものが多いことから、検出した落ち込みは根攪乱や風倒木痕とみられる。

2区では、暗褐色中砂層上面で検出を行い、複数の柱穴を確認した。

掘立柱建物1 調査区東半で検出した。概ね東西方向に並ぶ柱穴25、27、28の3基と、柱穴28から南に90度振った位置にある柱穴30の、東西2間、南北1間分を確認した。柱間は約1.2mを測る。南北方向の柱列は、北で西に10度振れる。それぞれの柱穴の平面形は円形で、径0.3m、深

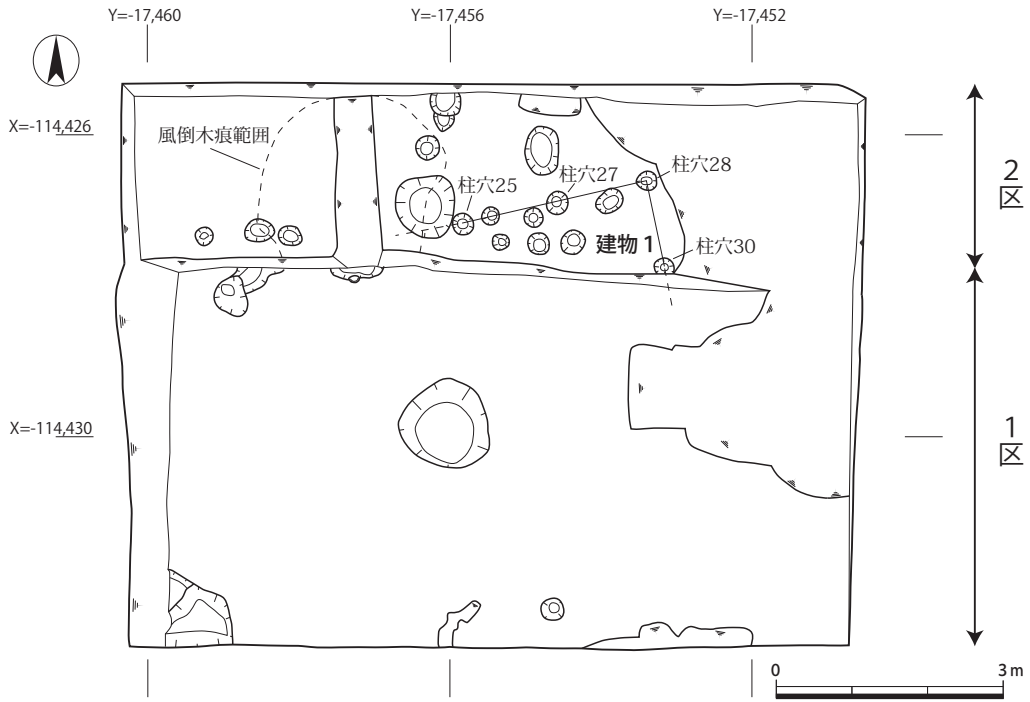


図6 調査区平面図 (1:100)

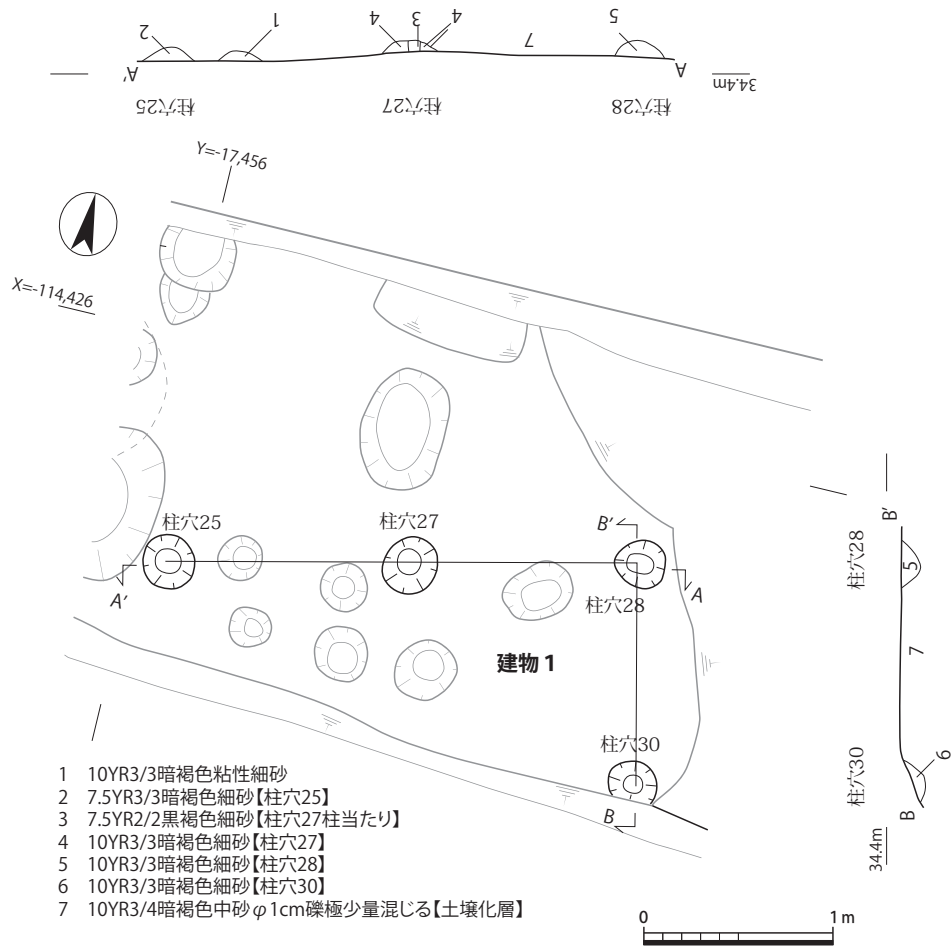


図7 建物1平・断面図 (1:40)

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
時期不明	建物1	

さ0.06～0.1mを測る。埋土は暗褐色細砂で、柱穴27では径0.06mの柱当たりを確認した。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。

## 4. 遺物(表1、図8)

調査終了時点で、整理箱1箱分の遺物が出土した。2区重機掘削中、あるいは2区旧耕作土掘削中に出土した遺物である。図化に耐えるものを抽出し、報告する。

1は土師器甕である。胴上部の一部のみがのこる。内面にヨコナデ、外面にハケを施す。2は土師器甕の口縁部である。内面にヨコナデ、外面は摩滅しており、調整は不明である。飛鳥時代の長胴甕口縁部の可能性があるが、細片のため断定できない。3は須恵器杯の底部である。底部の半分がのこる。底径8.0cmを測る。内面に一方向のナデを施した後、横ナデを施す。4は土師器皿である。内面にわずかにナデの痕跡がのこるが、大部分が摩滅している。器形から近世頃の所産と思われる。5は不明鉄製品である。一部が欠損する。断面は長方形だが、欠損部から0.7cmまで両刃の刃部状に成形されており、茎部の可能性がある。しかし、肉眼観察では目釘穴が確認できなかったことや、利器としては薄いことから、その器種は断定できない。1～3は2区重機掘削中に、4・5は2区旧耕作土中から出土した。

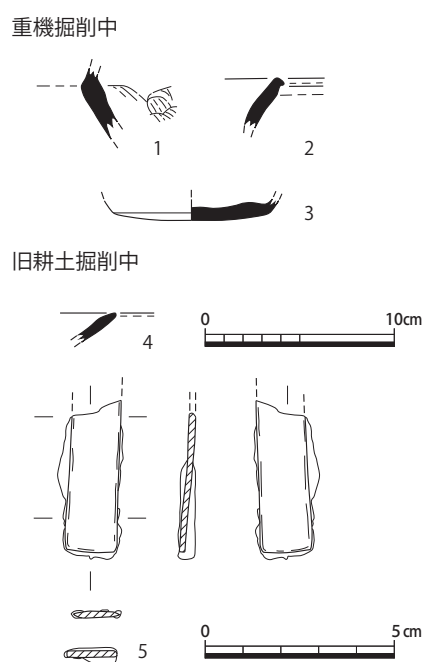


図8 出土遺物実測図  
(土器1：4、金属製品1：2)

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代～飛鳥時代	土師器、須恵器		土師器2点、須恵器1点		
近世	土師器		土師器1点		
時期不明	鉄製品		不明鉄製品1点		
合計		2箱	5点(1箱)	0箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

## 5. まとめ

今調査では、掘立柱建物を一棟確認した。遺物が出土しなかったことから詳細な時期は不明だが、第77・79次調査では、古墳時代後期～飛鳥時代の建物は北に対し東または西に振って、奈良時代の建物は正方位に建てられていることが確認されている。これを勘案すると、建物1は古墳時代後期～飛鳥時代の可能性があるが、第77次調査で確認されている建物が北で西に23度振っているのに対し、今調査で確認した建物1は北で西に10度振っており、傾きが異なることから時期の断定はできない。しかし、少数ではあるが飛鳥時代と思われる遺物が出土した点を踏まえると、この時期の遺構が今調査地周辺にまで広がっていた可能性は指摘できる。

調査範囲が狭少であったことから、検出した遺構に対する十分な検討が行えなかった。しかし、遺構・遺物を確認したことから、古代の集落範囲を考えるうえで重要な資料を得られた。今後の調査の進展に期待したい。

(佐藤 拓)

### 註

- 1) 中臣遺跡の集落変遷については、家原圭太「京都市所在中臣遺跡の性格と変遷-第一次調査の報告から-」『郵政考古紀要』第60号、郵政考古学会、2014年に詳しい。
- 2) 鈴木廣司ほか「15 中臣遺跡第77次調査」『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2000年。
- 3) 内田好昭ほか「12 中臣遺跡第79次調査」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

# VII 石見城跡、長岡京右京一条四坊十五町跡 (右京第1269次)

## 1. 調査に至る経緯と経過

### (1) 調査に至る経緯

石見城跡は、西京区大原野石見町内に存在する中世の平城跡である。桂川・小畑川の流域には中世の在地土豪や国人が築いたとされる城館の推定地が多数残されており、石見城跡もその一つとされている。在地土豪の一人であった野田泰忠が、応仁の乱の戦果を記した『野田弾正忠泰忠軍忠書』には、文明2年(1470)に「石見館」を焼いたとする記述があり、これが現在、埋蔵文化財包蔵地である石見城跡に比定されている<sup>1)</sup>。当地には、城の土塁や堀を想起させるような凹凸が地表に現れており、早くから城館跡として目されていた<sup>2)</sup>。

平成16年(2004)、微高地の西側で道路建設に先立つ発掘調査が行われ、鎌倉時代から室町時代の遺構群が多数発見された。これらは東の微高地へ広がる様相をみせており、城館跡が微高地上に存在した可能性が高まった。

令和2年(2020)、当課は石見町の現集落及びその周辺を対象として航空レーザー測量を行い、微地形の詳細把握を試みた。その結果、地表面の細かい凹凸が明確に映し出され、これらが人為的

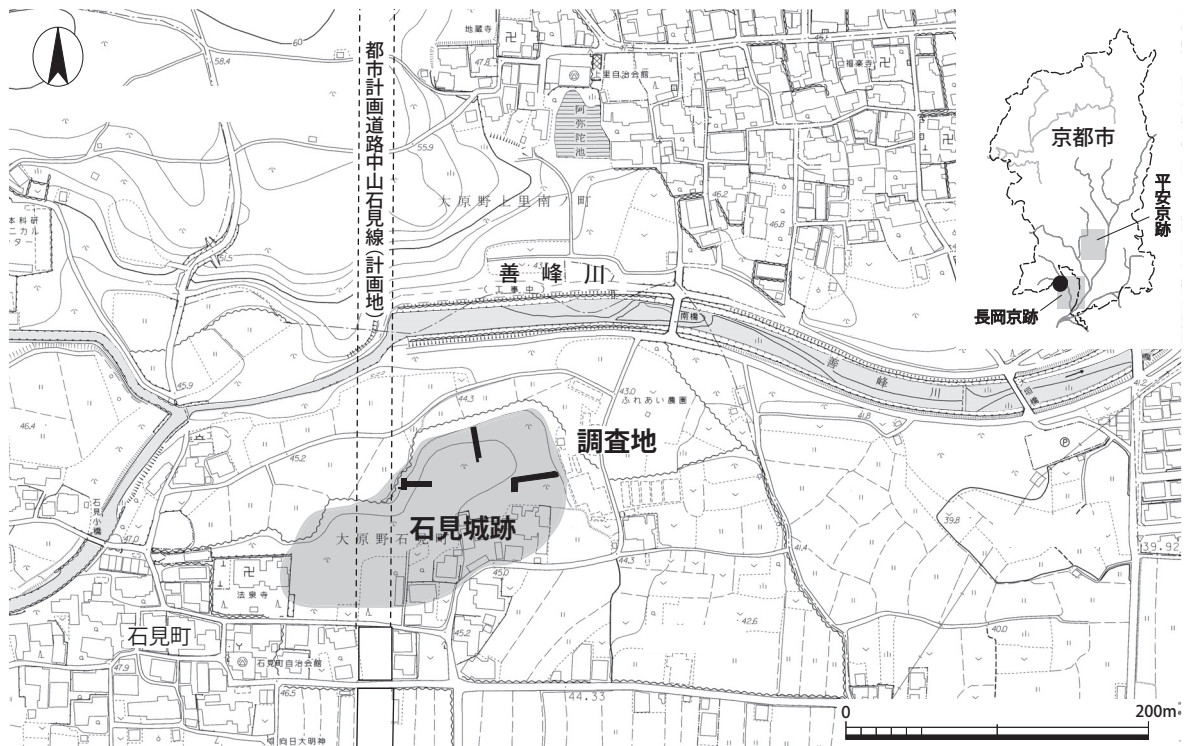


図1 調査位置図(1:5,000)



な造作である可能性が一層濃厚となった。このため、当課は文化庁及び京都府と協議を行い、数箇年に及ぶ遺跡保存を目的とした範囲確認調査を計画した。

令和3年(2021)、土地所有者の協力を得て本発掘調査に着手した(第1次調査)。その結果、微高地の北西隅において、鎌倉時代・室町時代の堀跡を検出した。これにより当該地の地中に、中世の城館が残存することが明らかとなった。続く令和4年には、微高地の縁辺部3箇所において発掘調査を行い、同じく鎌倉時代・室町時代の遺構を確認した。本文では、この成果の概要を報告する<sup>3)</sup>。

## (2) 調査の経過と調査方法

現地調査は、令和4年11月14日～12月21日のうち28日間実施した。作業は雑木(主にタケ)の伐採と処分から着手し、調査区設定、重機掘削、人力掘削、記録保存、埋め戻しの順に進めた。

調査区は、遺跡縁辺部における遺構の残存状況を広く確認するため、微高地の西・北・東の3箇所を設定した(図1・2)。西に設定した第1調査区は、当初は20.0m×3.0mの規模で計画したが、微高地から低地へ下がる傾斜面の堆積状況を確認する必要が生じたため、西端の一部を拡張した。調査面積は71.0㎡である。第2調査区は、微高地北辺に設定した。堀と想定される凹部の断面観察を目的としたもので、当初は20.0m×3.0mの規模で計画し、後に南へ一部拡張した。調査面積は61.0㎡である。第3調査区は、土地所有者が昭和期に掘削した排水溝の跡地を利用したもので、幅3～4mの鍵形を呈する。面積は110.0㎡で、最終的な合計調査面積は、合計242.0㎡と

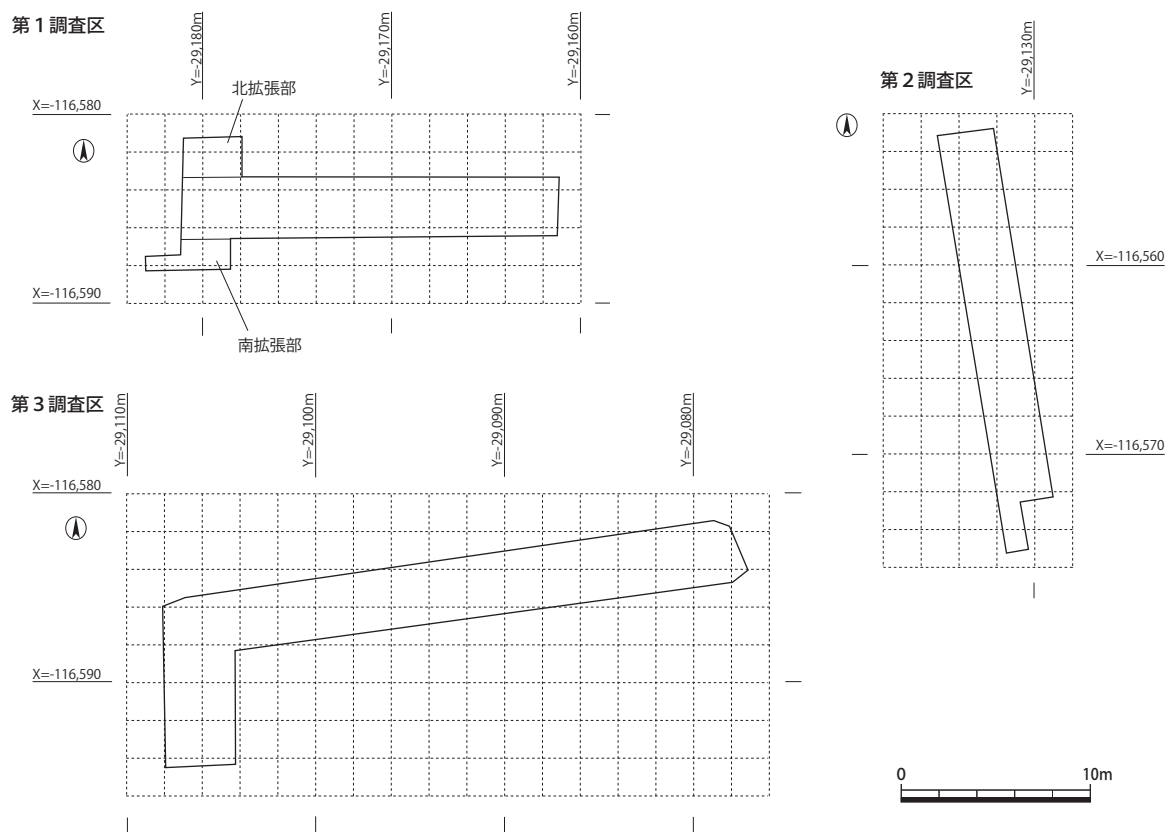


図2 調査区配置図(1:400)



図3 壁断面実測状況（第3調査区）（東から）



図4 現地説明会開催状況（第2調査区）（東から）

なった。

第1調査区では、近世遺構面と古墳時代後期～室町時代遺構面の計2面を検出した。また拡張部の深掘により古墳時代前期遺構面の存在を確認した。第2調査区では、鎌倉・室町時代の堀と土塁を検出した。第3調査区では断面観察を通して古墳時前期から現代までの土層堆積を把握した。

検出した遺構面では、全体写真撮影のほか検出遺構の個別撮影、平面図の作成、標高値の計測、遺構実測等、一連の記録作業を行った。また、壁断面を図化し、土層堆積の記録を行った。出土遺物は、層序及び遺構ごとに収集し、登録した。なお、今回の調査は遺跡の保存を目的とするため、遺構の掘削は最小限とし、中世以前の遺構については半裁もしくは小規模なトレンチ掘削による断面観察に止めた。

現地では、12月17日に近隣住民を対象として現地説明会を開催し、計60名の参加を得た（図4）。また調査後の整理作業は、令和4年12月22日～令和5年1月27日まで実施した。

## 2. 位置と環境

### （1）周辺の調査成果

調査地周辺では、都市計画道路中山石見線の建設等に先立ち、試掘調査及び発掘調査が複数行われている（図5）。このうち、大原野石見遺跡発見の契機となった調査1（右京第746次）では、縄文時代後期に遡る流路が確認され、突帯文土器の深鉢や小型石棒が出土した。また調査2（右京第772次）では、縄文時代晩期後半の土器棺墓3基、土坑墓4基が確認されている。

弥生時代の遺構は、同じく調査2において方形周溝墓や流路が検出されている。報告された出土土器は弥生時代後期に限られているが、石鏃や石包丁の出土から集落の始まりが弥生時代中期以前に遡ることは確実である。上里遺跡の居住域はさらに北東側で発見されており、当該地は墓域として使用されたと見られる。

古墳時代の遺構は、調査1・3（右京第879次）で確認されている。調査1では古墳時代前期の流路が、調査3では同じく前期の土坑群が検出されており、土師器甕、高杯が埋納された状態で出土した。調査地の南に位置する芝古墳群のうち、唯一の前方後円墳である芝1号墳（調査4）は、

最大長32.3mを測る墳丘に周溝を巡らせた構造で、6世紀に築造された首長墓のひとつと認識されている。

長岡京期の遺構は、調査1で一条間南小路の側溝が、調査2で一条大路側溝と西三坊大路側溝及び宅地内の内溝が検出されているほか、掘立柱建物や井戸、柵列等、都城に関連する遺構群が複数報告されている。このほか、調査5でも総柱建物を含む掘立柱建物が確認されている。

## (2) 石見城跡の既往の調査

中世の遺構は現在の石見町集落付近に集中する。調査5では鎌倉時代～室町時代にかけて計3面の遺構面が確認されている。いずれも掘立柱建物や井戸、門等を備える屋敷跡で、時期ごとに建物の軸を違えて配置されている。このうち、室町時代前期(14世紀後半～15世紀初頭)の遺構群が、今回の調査地である微高地の北辺ラインに近い方向軸をもつ。

令和3年度の範囲確認調査(調査6)では、G L-0.3mという浅い深度において鎌倉時代～室町時代の遺構面を確認した。最大幅5.5mを測る溝を検出し、これが微高地北辺ラインに並行すること、また低地へ流出せず、微高地内で閉じることを確認した。微高地の形状を城の外郭として成形したものとするならば、この溝はその内側に設けられた内堀と推測される。

堀には新旧2時期があり、埋土や肩口からは13～16世紀所産の遺物が出土した。調査5で確認

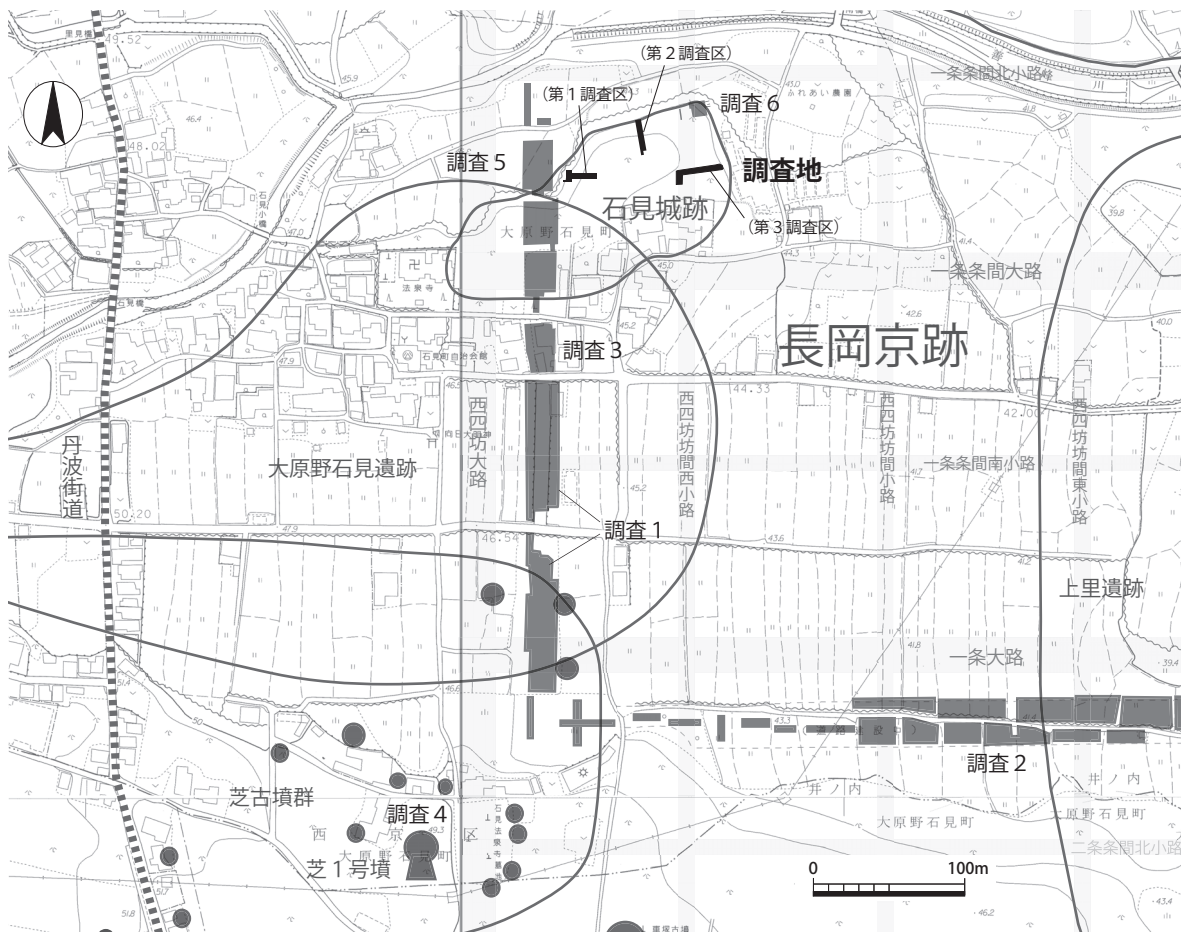


図5 既往の調査位置図(1:5,000)

された建物群とほぼ同時期である。

### 3. 調査成果

#### (1) 基本層序

調査地の標高は、46.0m程度で、西が高く東へ向かって緩やかに下がる。

第1調査区では、GL-0.3mで暗褐色礫混じり砂質シルトの近世堆積層(第1層)、-0.5mでにぶい暗褐色礫混じりシルトの中世包含層(第2層)、-0.6mでにぶい黄褐色粗砂混じりシルトの古墳時前期包含層(第4層)、-1.0mで褐色細砂混じり粘土質シルトの地山に至る。第2層と第4層の間には流路とそのオーバーフローと解される砂礫の広がりがあり、これを第3層とした。第1調査区では、第1層除去面(GL-0.5m)が近世後期遺構面、第2層除去面(GL-0.6m)が古墳時代後期～中世遺構面である。また拡張部の深掘では、第3層の除去面(GL-0.7m)で古墳時代前期遺構面を確認した。

第2調査区のうち北東部では、GL-0.3mで褐色微砂～シルトの近世堆積層(第1層)、-0.5mで褐色細砂混じり砂質シルトの中世包含層(第2層・整地層)、-0.65mで褐色微砂まじりシルトの基盤層を確認した。ここでは、第1層除去面(GL-0.5m)が近世遺構面、第2層除去面(GL-0.65m)が鎌倉～室町時代遺構面である。調査区南西部では、GL-0.2mで暗褐色細砂混じりシルトを主体とする土塁盛土(図8-25～48)、-1.2mで褐色細砂混じりシルトの基盤層を確認した。基盤層上面では焼土の広がりを確認した。中央の凹部には、近世堆積層の両脇に中世の堀の埋土があり、-1.5mで褐色砂礫を主体とする地山に達する。

第3調査区は西から東へ傾斜しており、調査区の西端と東端で層厚及び遺構面のレベルが異なる。

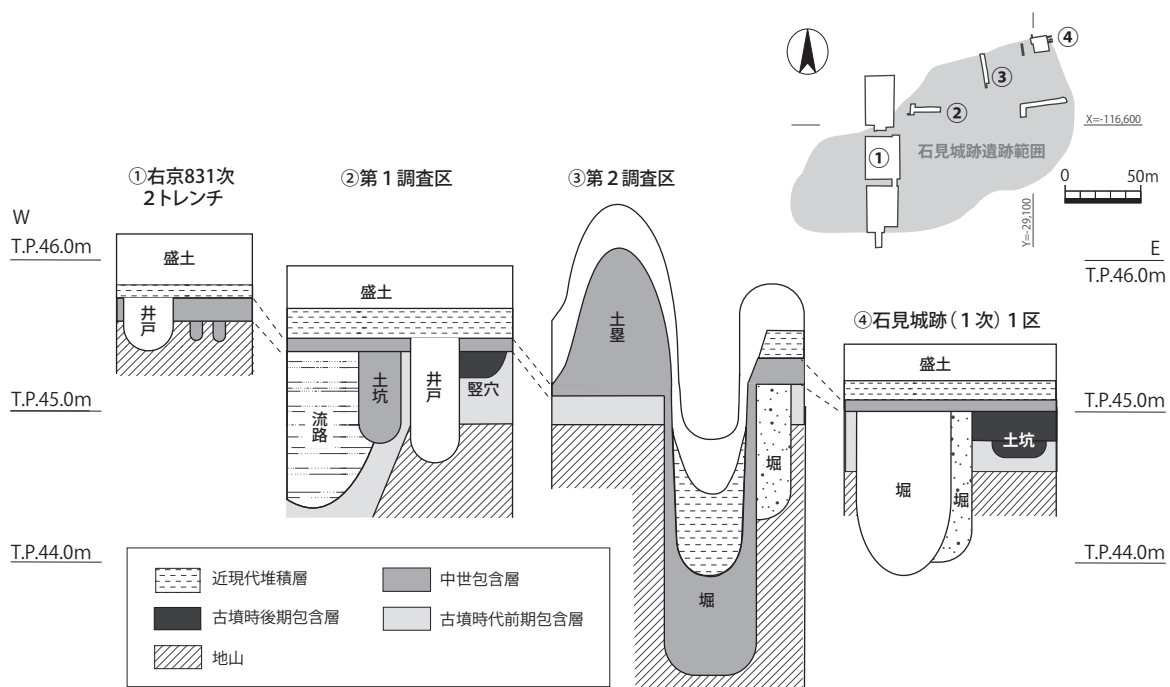


図6 基本層序模式図

る。調査区西端では、GL-0.2mで褐色細砂混じりシルトの近世堆積層（第1層）、-0.35mでにぶい黄褐色細砂混じりシルトの室町時代包含層（第2-1層）、-0.5mでにぶい黄褐色微砂混じりシルトの鎌倉時代包含層（第2-2層）、-0.65mでにぶい黄褐色微砂混じりシルトの古墳時代後期包含層（第3層）、-0.8mでにぶい黄褐色微砂混じりシルトの古墳時代前期包含層（第4層）、-1.2mでにぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトの基盤層となる。一方、東端部では、GL-0.4mで近世堆積層、-0.8mで室町時代包含層、-1.0mで古墳時代後期包含層、-1.2mで弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内期）の流路堆積となる。第3調査区では遺構面を検出していないが、壁断面からは-0.35～.04mで近世遺構面、-0.5～-0.8m室町時代遺構面（土塁上面）、-0.8～1.1mで古墳時代後期遺構面、-1.2mで古墳時代前期遺構面の広がりが見込まれる。

## （2）遺構と遺物（表1・2、図10）

### 第1調査区（図7）

調査区東半部では、江戸時代の溝、井戸、室町時代のピット、溝、土坑、古墳時代後期の竪穴建物を、西半部では鎌倉時代の溝、古墳時代前期の竪穴を検出した。

**溝1** 調査区東半部で検出した概ね南北方向にのびる小溝である。検出長1.6m、最大幅0.6m、最大深度は0.15～0.3mを測る。底面は南へ向かって大きく下がるため、排水溝の可能性はある。埋土から近世平瓦が出土した。

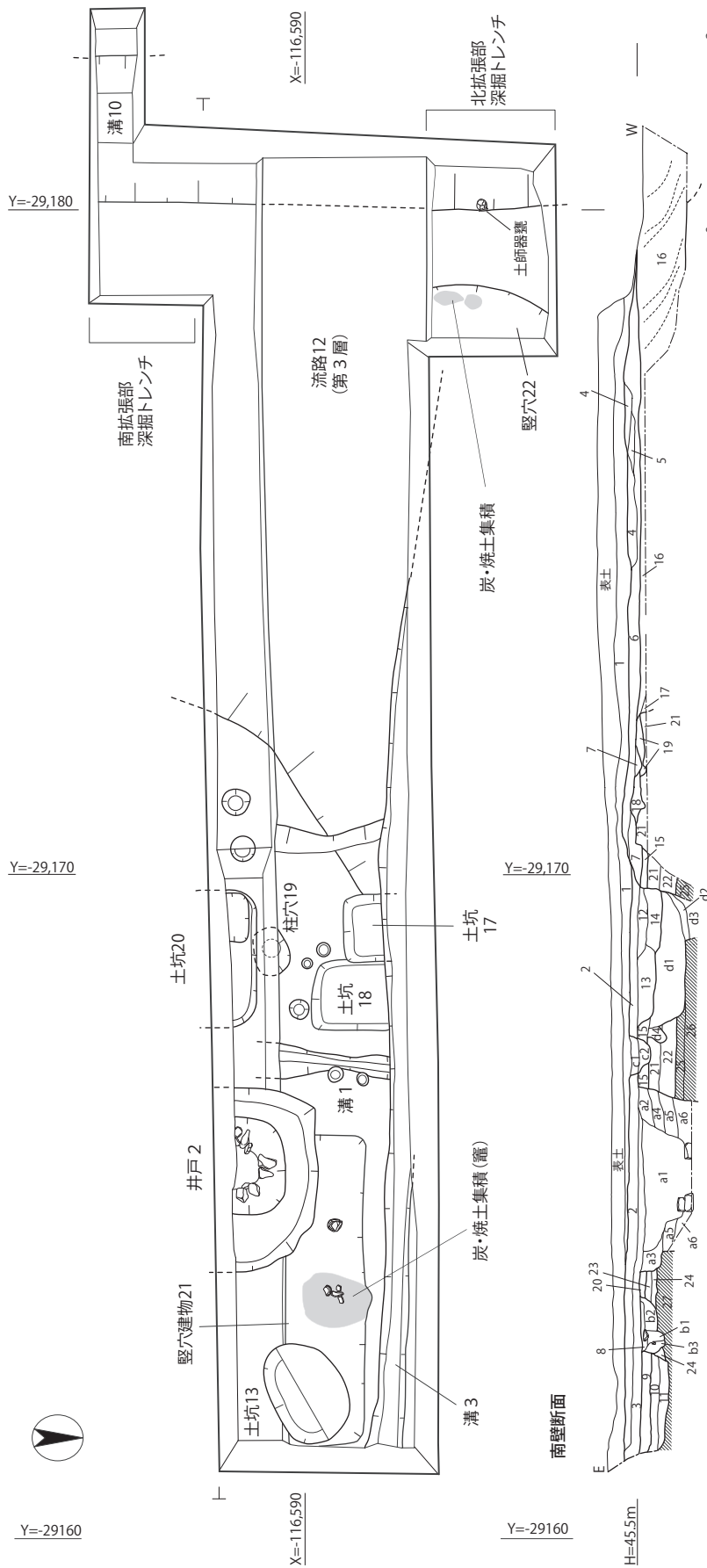
**井戸2** 調査区東半部で検出した石組みの井戸である。井戸掘り方の平面形状は崩れた隅丸方形で、検出規模は南北長1.3m以上、東西幅2.7mを測る。石組みの上位は失われているものの、残存する内径は0.7m程度である。井戸内部からは土師器皿（近世）、施釉陶器碗の破片が出土した。また、掘り方からは須恵器の破片など基盤層に由来する遺物が出土した。最終埋没は近世前半であるが、開鑿は中世に遡る可能性がある。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
古墳時代前期	竪穴 22	
古墳時代後期～古代	柱穴 19、土坑 20、竪穴建物 21、溝 30	
鎌倉・室町時代	溝 1・4・201、土坑 13・17・18、ピット 14・15・16・202、溝（堀） 211・212、流路 12、土塁 213	土塁・溝（堀）には時期差がある
江戸時代	井戸 2、溝 3	

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ総数（箱）	Aランク箱数（点数）	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器（庄内式・布留式）、須恵器	3	古式土師器 4点、須恵器 7点、土師器 3点、瓦器 8点、焼締陶器 5点、施釉陶器 1点、銭 1点	0	2
長岡京期・平安時代	緑釉陶器、須恵器				
鎌倉・室町時代	土師器、瓦器、瓦質土器、磁器、施釉陶器				
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、染付、瓦、銭				
	合計	3箱	29点（1箱）	0箱	2箱



- 1) 10YR3/4 暗褐色礫混じり砂質シルト 径2cm未満の礫多量入る (近世堆積層)
- 2) 10YR4/3 にぶい、黄褐色礫混じり砂質シルトに 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック30%程度入る 径3cm未満の礫少量入る やや締まり悪い (近世堆積層)
- 3) 10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片入る やや締まり悪い (近世堆積層)
- 4) 10YR4/4 褐色礫混じりシルト 拳大の礫多量入る 締まり良い (中世包含層)
- 5) 10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片入る やや締まり悪い (中世包含層)
- 6) 10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締まり悪い (中世包含層)
- 7) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締まり悪い (近世堆積層)
- 8) 10YR4/3 にぶい、黄褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い (中世包含層)
- 9) 10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る 炭化物・土器片入る 締まり悪い (中世包含層)
- 10) 10YR4/3 にぶい、黄褐色細砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルトブロック10%程度・炭化物・土器片入る 締まり悪い (古墳時代後期包含層)
- 11) 10YR4/3 にぶい、黄褐色細砂混じりシルト 地山ブロック20%程度入る 締まり悪い (古墳時代後期包含層)
- 12) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルトブロック10%程度入る やや締まり悪い
- 13) 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片多量入る 締まり悪い やや軟質
- 14) 10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る やや締まり悪い
- 15) 10YR4/4 褐色微砂混じり砂質シルトに 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルトブロック10%程度入る 炭化物・マンガン粒入る 締まり悪い (古墳時代後期包含層)
- 16) 10YR4/3 にぶい、黄褐色細砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る 締まり良い (流路12)
- 17) 10YR4/3 にぶい、黄褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る やや締まり悪い (流路12)
- 18) 10YR4/3 にぶい、黄褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る やや締まり悪い (古墳時代後期包含層)
- 19) 10YR4/3 にぶい、黄褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る やや締まり悪い (古墳時代包含層)
- 20) 10YR4/4 褐色微砂混じり砂質シルトに 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルトブロック10%程度入る (古墳時代包含層)
- 21) 10YR4/3 にぶい、黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルトブロック10%程度入る 径1cm未満の礫少量入る マンガン粒入る やや締まり悪い (古墳時代前期包含層)

- 22) 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルトに 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック 10%程度・炭化物・土器片入る やや締まり悪い (古墳時代前期包含層?)
- 23) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルト 炭化物・土器片入る (古墳時代前期包含層?)
- 24) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルトに 地山ブロック 10%程度入る 径1cm未満の礫少量入る やや締まり悪い
- 25) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック 5%程度入る 炭化物・マンガングラン粒入る 締まり良い (地山)
- 26) 10YR4/4 褐色細砂混じり粘土質シルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック 5%程度入る 炭化物少量入る 締まり良い (地山)
- 27) 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルト 締まり良い (地山)
- a1) 10YR3/4 暗褐色礫混じりシルト 径1cm未満小礫少量入る 側石の崩落あり (井戸)
- a2) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロックと 10YR4/4 褐色シルトブロックの混合層 炭化物・土器片入る 締まり良い
- a3) 7.5YR4/3 褐色細砂混じりシルトと 10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルトの互層 径3cm未満の礫少量入る 締まり良い
- a4) 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い
- a5) 10YR4/4 褐色シルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い
- a6) 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 拳大の礫少量入る やや締まり悪い
- b1) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い
- b2) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 締まり悪い
- b3) 10YR3/4 暗褐色細砂混じりシルトに 10YR4/4 褐色シルトブロック 10%程度入る 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い
- c1) 10YR4/2 灰黄褐色礫混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る 締まり悪い
- c2) 10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト 締まり悪い
- d1) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロックと 10YR5/3 黄褐色粘土質シルトと 10YR4/4 褐色細砂混じりシルトブロックの混合層 径3cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- d2) 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 径3cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- d3) 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 径3cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- d4) 10YR4/2 灰黄褐色礫混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る 締まり悪い

図7 第1調査区平・断面図(1:100)

溝3 調査区西辺を東西に通る溝である。検出長13m、最大幅0.5mを測る。最大深度は0.25mを測る。土地の境界線に並行することから、敷地境を示す区画溝の可能性はある。埋土から、焼締陶器、施釉陶器、染付等、江戸時代後期の遺物が多数出土した。

土坑13 調査区東端で検出した土坑である。平面形状は長径1.6m、短径1.1mの長円形を呈する。断面形状は最大深度0.4mを測る椀形で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトを主体とする。遺構内から、瓦器碗(図10-11)、土師器皿(15)、備前焼播鉢(26)、瓦質土器羽釜等が出土した。室町時代の遺構である。

竪穴建物21 調査区東半部で検出した。一辺4.6mの方形プランをもつ竪穴建物で、北辺中央に竈と見られる被熱痕跡を認める。埋土は炭と黄灰色ブロック土を含む灰黄褐色シルトを主体とする。竈の西側から、平たい河原石を上面に据えた須恵器甕の口縁が出土した(図10-6)。古墳時代後期の遺構である。

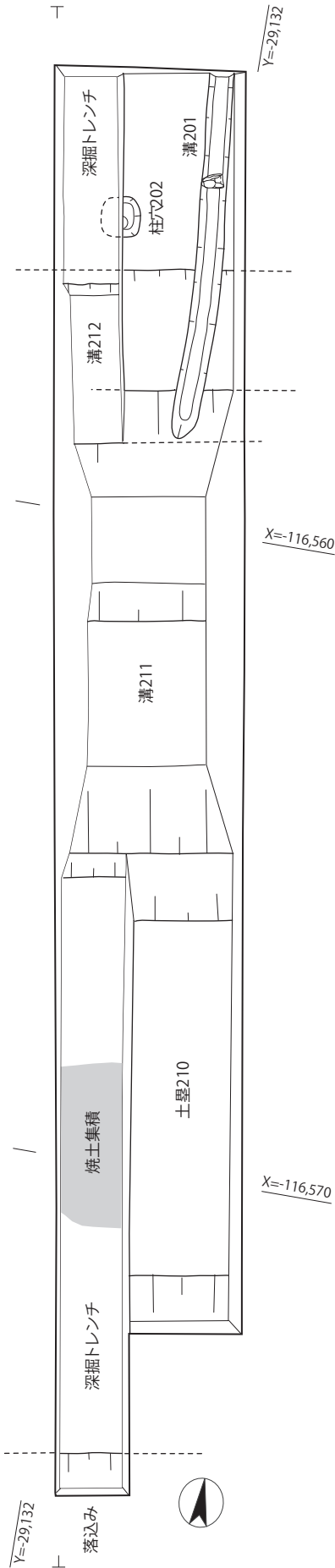
## 第2調査区(図8)

中央凹部では、堀と見られる大型溝を検出した。凹部北東側では小溝とピット、堀の肩口を検出した。また南西側では土塁の盛土を確認した。

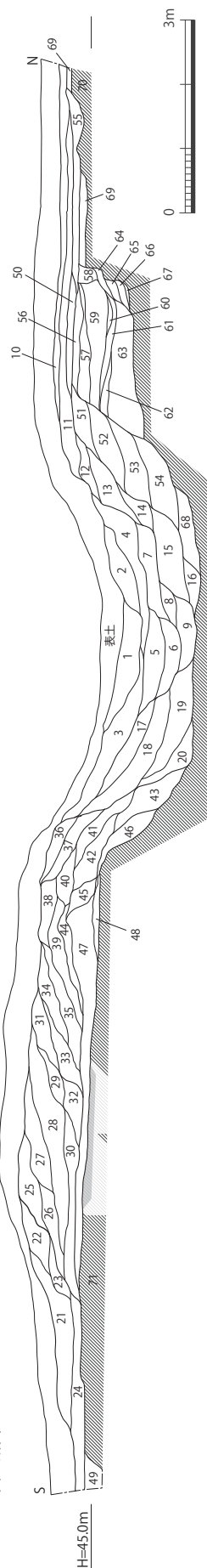
溝201 調査区北半部で検出した遺構である。検出長5.8m、最大幅0.4m、最大深度は0.1mを測る。やや湾曲しながら延び、北端は調査区外へ続く。埋土は礫を含む褐色微砂～シルトで、人頭大の自然石を1点含む。埋土から土師器皿、瓦質土器深鉢の蓋等が出土した。室町時代の遺構である。

柱穴202 調査区北半部で検出した遺構である。最大径0.6m、最大深度は0.4mを測る遺構で、埋土は褐色微砂～シルトを主体とする。中央に径20cm程度の柱あたりが残る。出土遺物は土師器細片のみで帰属時期は不明である。

土塁210 調査区南半部で検出した遺構である。平坦面の芯となる土(図8-47)を置き、その上へ土層を積み上げて土塁を作る。積土は、北もしくは南へ向かって下がる斜め堆積が顕著である。土質の違いから4グループに大別で



西壁断面



- 1) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る 灰化物・土器片入る 締まり悪い やや軟質
- 2) 10YR4/4 褐色微砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- 3) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり砂質シルト 径2cm未満の礫の流入あり 締まり悪い やや軟質
- 4) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- 5) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径4cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- 6) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 拳大の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- 7) 10YR4/4 褐色微砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 灰化物入る 締まり悪い やや軟質
- 8) 10YR4/4 褐色微砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- 9) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト 拳大の礫少量入る 土器片入る 竹根腐葉 締まり悪い (近世堆積層)
- 10) 10YR4/4 褐色微砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 灰化物・土器片入る 締まり悪い (中世包含層)
- 11) 10YR4/4 褐色微砂混じり砂質シルト 径2cm未満の礫少量入る 灰化物・土器片入る 締まり悪い
- 12) 10YR4/4 褐色微砂混じり砂質シルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い
- 13) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じり砂質シルト 径3cm未満の礫少量入る 締まり悪い
- 14) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じり砂質シルト 径2cm未満の礫少量入る 微砂の流入あり 締まり悪い
- 15) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト 径3cm未満の礫少量入る 微砂の流入あり 締まり悪い やや軟質
- 16) 10YR3/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト 拳大の礫少量入る 締まり悪い
- 17) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR4/3 暗褐色 粗砂混じりシルトブロックの流入あり 径2cm未満の礫少量入る 締まり悪い

- 18) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い 微砂の流入あり やや軟質
- 19) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締まり悪い 砂礫の流入あり
- 20) 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルトに 10YR4/3 暗褐色礫混じりシルトブロックの流入あり 締まり悪い
- 21) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルト 径4cm未満の礫少量入る 締まり悪い 竹根腐葉 (近世堆積層)
- 22) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 締まり悪い やや軟質
- 23) 10YR4/4 褐色微砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 微砂ブロックの流入あり
- 24) 10YR3/4 暗褐色微砂混じり粘土質シルト 径2cm未満の礫少量入る やや締まり悪い やや軟質
- 25) 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト～砂礫 径4cm未満の礫少量入る 締まり悪い
- 26) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック10%程度入る 径3cm未満の礫少量入る やや締まり悪い (整地層)
- 27) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR4/3 暗褐色砂礫ブロック入る 径2cm未満の礫少量入る 斜め方向の摂理あり
- 28) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト 拳大の礫少量入る 斜め方向の摂理あり 締まり良い
- 29) 10YR4/4 褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締まり良い
- 30) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 拳大の礫少量入る 締まり悪い
- 31) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト 径3cm未満の礫少量入る やや締まり悪い
- 32) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト 拳大の礫少量入る 締まり良い



- 33) 10YR4/4 褐色微砂混じりシルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック5%程度入る 径2cm未満の礫少量入る 締めり良い (整地層)
- 34) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 締めり良い (整地層)
- 35) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック10%程度入る 径1cm未満の礫少量入る 炭化物・土師器片入る 締めり良い (整地層)
- 36) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締めり悪い
- 37) 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る 締めり悪い
- 38) 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る ややしまり悪い
- 39) 10YR3/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る 締めり悪い
- 40) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る ややしまり悪い
- 41) 10YR3/4 暗褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る ややしまり悪い
- 42) 10YR3/4 暗褐色細砂混じりシルトに 10YR3/4 暗褐色礫混じりシルトブロック30%程度入る 径1cm未満の礫少量入る ややしまり悪い
- 43) 10YR4/4 暗褐色粗砂混じりシルトに 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルトブロック20%程度入る 締めり悪い ややしまり悪い
- 44) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック10%程度入る 径2cm未満の礫少量入る 締めり良い (整地層)
- 45) 10YR3/4 暗褐色細砂混じりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る 締めり悪い
- 46) 10YR4/3 暗褐色細砂混じりシルトに 地山ブロック5%程度入る 径0.5cm未満の礫少量入る 土器片入る 締めり良い
- 47) 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片多量入る ややしまり悪い
- 48) 10YR3/3 暗褐色細砂混じりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片多量入る ややしまり悪い (室町時代包含層)
- 49) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る ややしまり悪い
- 50) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る 締めり悪い ややしまり悪い
- 51) 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る 固く締まる
- 52) 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト 拳大の礫多量入る 斜め方向の摂理あり 固く締まる
- 53) 10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルト 径3cm未満の礫多量入る 斜め方向の摂理あり 固く締まる
- 54) 10YR3/3 暗褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 拳大の礫少量入る 固く締まる
- 55) 10YR4/6 褐色細砂混じりシルト 径0.5cm未満の礫少量入る マンガン粒・土器片入る 締めり悪い
- 56) 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト 径2cm未満の礫少量入る 締めり悪い
- 57) 10YR3/4 暗褐色微砂混じりシルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂ブロック20%程度入る 径2cm未満の礫多量入る ややしまり悪い
- 58) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルトに 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂ブロック20%程度入る 径0.5cm未満の礫少量入る ややしまり悪い
- 59) 10YR3/4 暗褐色粗砂混じりシルト 拳大の礫多量入る 固く締まる
- 60) 10YR3/4 暗褐色微砂混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る 締めり悪い
- 61) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルト ややしまり悪い
- 62) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る ややしまり悪い
- 63) 10YR4/3 暗褐色微砂混じりシルト 拳大の礫多量入る 固く締まる
- 64) 10YR4/6 褐色微砂混じりシルトと 地山ブロックの混合層 砂礫の流入あり
- 65) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルトに 地山ブロック30%程度入る マンガン粒・炭化物入る ややしまり悪い
- 66) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る ややしまり悪い
- 67) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルトに 地山ブロック20%程度入る マンガン粒入る 砂礫の流入あり ややしまり悪い
- 68) 10YR3/4 暗褐色砂礫 径3cm未満の礫多量入る 締めり良い
- 69) 10YR4/6 褐色微砂混じりに 10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック20%程度入る マンガン粒入る ややしまり悪い
- 70) 10YR4/6 褐色微砂混じりシルトに 10YR6/2 灰黄褐色微砂ブロック20%程度入る マンガン粒入る 固く締まる (地山)
- 71) 7.5YR4/3 褐色細砂混じりシルト マンガン粒・炭化物多量入る 上面に被熱痕跡あり 締めり良い (地山)

図8 第2調査区平・断面図 (1:100)

きるが、整地層と見られる締めりの良い土(34・35)が介在することから、築造には時期差があると推測される。基底部埋土から備前焼鉢の破片(図10-23)が出土した。室町時代以後の構築である。なお、土塁基底部を除去した平坦面は固くしまった基盤層で、表面には被熱痕跡が認められる(時期不明)。

溝(堀)211 調査区中央部で検出した大型遺構である。長く開口していたと見られ、上半部には近世～近代堆積土の流入がある(図8-1～9)。これを除去した部分が溝211で、最大幅6.5m、最大深度は2.2mを測る。断面形状は不定形な逆台形で、北底が一部地山に潜り込む。埋土が新旧に大別できることから、掘り直しがあったと見られる。北壁に残る旧埋土(51～68)は固く締まるが、新埋土(12～20)は締めりが悪く、下位への崩落が随所に認められる。このため、掘り直しの際に壁面を整形した(固めた)可能性がある。埋土からは信楽焼播鉢、土師器皿が出土した。室町時代の遺構である。

溝212 調査区北半部で検出した遺構である。残存幅は2.7m、最大深度は0.9mを測る。西肩が溝211によって切られるため、本来の規模は不明である。埋土は拳大の礫を多量に含む暗褐色微砂～礫混じり細砂で、水平方向に固く締



- 46) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルト 鉄分沈着 締まり悪い (古墳時代前期包層)
- 47) 10YR4/2 灰黄褐色細砂～粗砂 炭化物入る 締まり悪い
- 48) 10YR4/4 褐色細砂～粗砂混じりシルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロックの流入あり
- 49) 10YR4/4 褐色砂質シルト 径1cm未満の礫多量入る (古墳時代前期包層)
- 50) 10YR4/4 褐色砂質シルト 径1cm未満の礫微量入る 下方粗粒化 締まり良い (古墳時代前期包層)
- 51) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混じりシルト 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロック30%程度入る 砂質強い やや締まり悪い (古墳時代前期包層)
- 52) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混じり粘土質シルトに 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂ブロック20%程度入る 締まり良い (古墳時代前期包層)
- 53) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルトに 10YR5/2 灰黄褐色シルトブロック30%程度入る マンガン粒入る 鉄分沈着 締まり良い (古墳時代前期包層)
- 54) 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト マンガン粒入る 鉄分沈着 締まり非常に良い (古墳時代前期包層)
- 55) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘土質シルト 径1cm未満の礫少量入る 土器片入る 鉄分沈着 やや締まり悪い やや軟質 (基盤層)
- 56) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る 締まり悪い (弥生時代後期～古墳時代初期流路)
- 57) 10YR4/2 灰黄褐色礫混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る 締まり良い (弥生時代後期～古墳時代初期流路)
- 58) 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫～礫混じりシルト 拳大の礫多量入る 締まり良い (弥生時代後期～古墳時代初期流路)
- a1) 10YR4/4 褐色礫混じりシルト 拳大の礫多量入る 締まり悪い
- a2) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じり細砂～シルト 径1cm未満の礫多量入る やや締まり悪い
- b1) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片入る 締まり悪い
- b2) 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 炭化物・土器片多量入る 締まり悪い
- b3) 10YR4/4 褐色細砂混じりシルト 拳大の礫少量入る 炭化物・土器片入る 締まり悪い
- b4) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混じりシルトに 10YR5/1 褐灰色シルトブロックの流入あり 炭化物入る 締まり悪い
- c) 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 鉄分沈着 締まり悪い
- d1) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト 径5cm未満の礫多量入る 土器片入る 締まり悪い (溝314)
- d2) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂混じり砂質シルト 締まり悪い
- e) 10YR4/4 褐色礫混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る 締まり悪い
- f2) 10YR4/3 褐色粗砂混じりシルト 径1cm未満の礫少量入る 下方粗粒化 やや締まり悪い
- f3) 10YR4/6 褐色粗砂礫 径1cm未満の礫多量入る 締まり悪い
- g1) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルトに 10YR5/3 にぶい黄褐色シルトブロック30%程度入る 径3cm未満の礫少量入る ややしまり悪い (溝313)
- g2) 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混じりシルトと 10YR5/4 にぶい黄褐色シルトブロックの混合層 径1cm未満の礫多量入る 締まり悪い (溝313)
- g3) 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂～シルト やや締まり悪い (溝313)
- g4) 10YR3/4 暗褐色礫～礫混じりシルト 拳大の礫多量入る やや締まり悪い (溝313)
- h1) 10YR4/3 にぶい黄褐色微砂混じりシルトに 10YR5/1 褐灰色シルトブロック30%程度入る 径0.5cm未満の礫少量入る 鉄分沈着 やや締まり悪い
- h2) 10YR4/3 にぶい黄褐色礫混じりシルト 径1cm未満の礫多量入る やや締まり悪い
- i) 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂混じりシルト 径2cm未満の礫多量入る マンガン粒入る 鉄分沈着 やや締まり悪い

図9 第3調査区 断面図 (1:100)

まる。層上位から瓦器碗の破片が出土した。鎌倉時代の遺構である。

### 第3調査区 (図9)

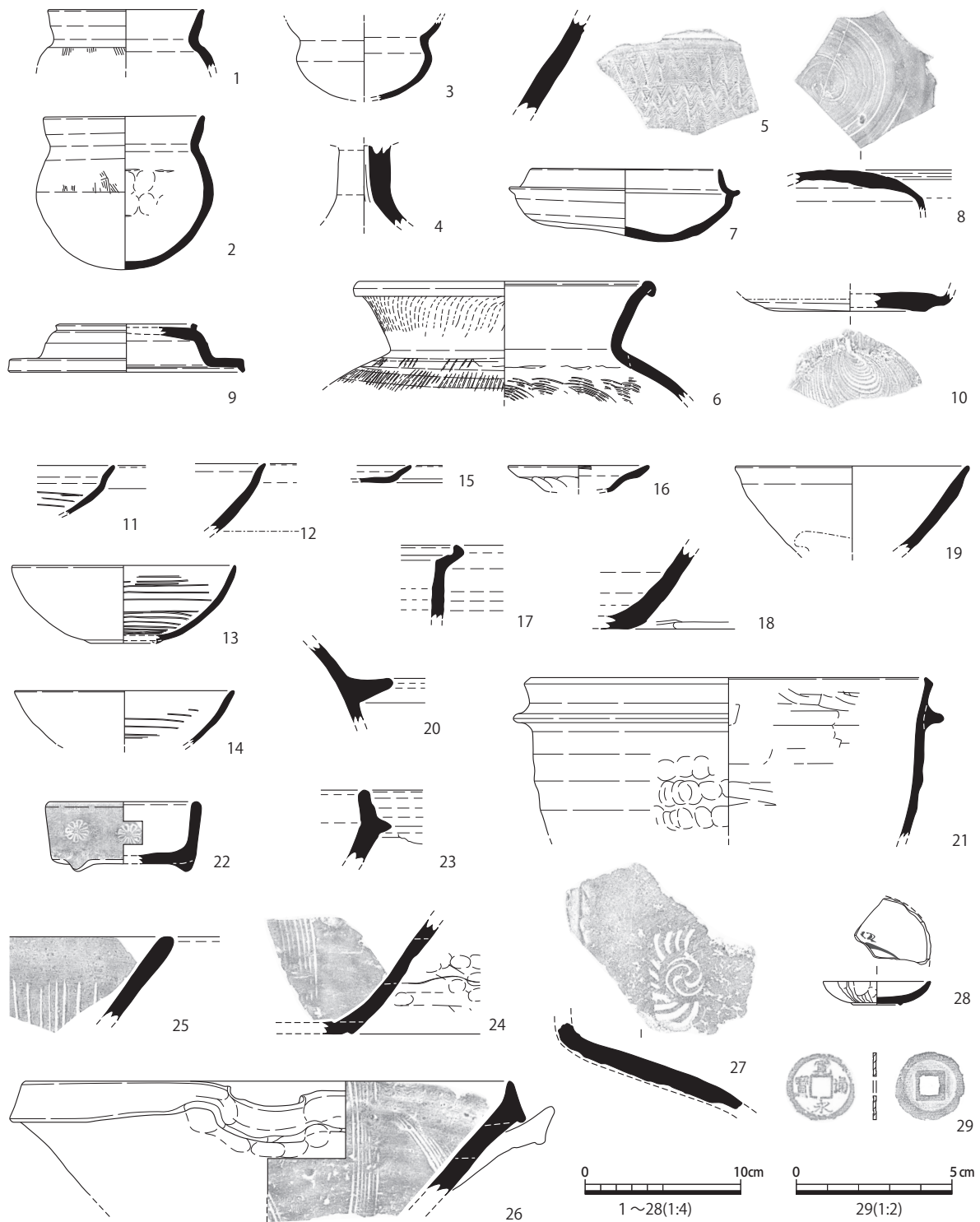
第3調査区の調査は断面観察のみに止まるが、北壁と南壁の双方に共通する土層の確認により、一連の遺構として復元できるものがある。

土壘311 (24・25層) 調査区東半部において確認できる土層の盛り上がりである。残存する基底幅は5.3m、残存高は0.4mを測る。埋土は、締まりの良いにぶい黄褐色礫混じりシルト～砂礫で、径2cm未満の礫を多量に含む。東肩には崩落と見られる微砂の流出が認められる (7層)。

土壘312 (27・28層) 調査区東端で確認した土層の盛り上がりである。残存する基底部は6.5m、残存高は0.45mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂礫～礫混じりシルトを主体とし、径2cm未満の礫を多量に含む。東肩は現存する微高地の縁辺に近く、近世の削平を受ける。

溝 (堀) 313 (g1～4層) 調査区西半部で確認した溝状の遺構である。最大幅4.0m、最大深度は0.9m以上を測る。断面形状は不定形で、壁面に崩落が認められる。埋土は、締まりの悪い暗褐色砂礫～礫混じりシルトで、拳大の礫を多量に含む。この遺構より東と西では中世遺構面に標高差があるため、区画溝の可能性がある。

溝314 (d1・d2層) 調査区西端で検出した溝である。最大幅1.9m、最大深度は0.6mを測る。断面形状は崩れた碗形で、埋土はにぶい黄褐色礫混じりシルトである。長岡京の復元では、西四坊坊間西小路の西築地ライン付近に位置しており、条坊側溝の可能性が有る。遺物の出土は確認できていない。



- |                     |                    |                   |                   |
|---------------------|--------------------|-------------------|-------------------|
| 1 : 第1 調査区南拡張区第3層上層 | 2 : 第1 調査区第3層      | 3 : 第3 調査区第4層     | 4 : 第2 調査区堀211最下層 |
| 5 : 第3 調査区第3層       | 6 : 第1 調査区竪穴建物21   | 7 : 第1 調査区竪穴建物21竈 | 8 : 第1 調査区竪穴建物21竈 |
| 9 : 第2 調査区堀211最下層   | 10 : 第2 調査区第2層     | 11 : 第1 調査区流路12   | 12 : 第2 調査区第2層    |
| 13 : 第1 調査区第2層      | 14 : 第3 調査区第2層     | 15 : 第1 調査土坑13    | 16 : 第2 調査区第1層    |
| 17 : 第2 調査区第1層      | 18 : 第2 調査区堀211最下層 | 19 : 第2 調査区第2層    | 20 : 第1 調査区第1層    |
| 21 : 第2 調査区第2層      | 22 : 第3 調査区第1層     | 23 : 第2 調査区土塁210  | 24 : 第2 調査区堀211   |
| 25 : 第3 調査区第1層      | 26 : 第1 調査土坑13     | 27 : 第1 調査区第2層    | 28・29 : 第3 調査区第1層 |

図10 出土遺物実測図 (1:4)・(1:2)

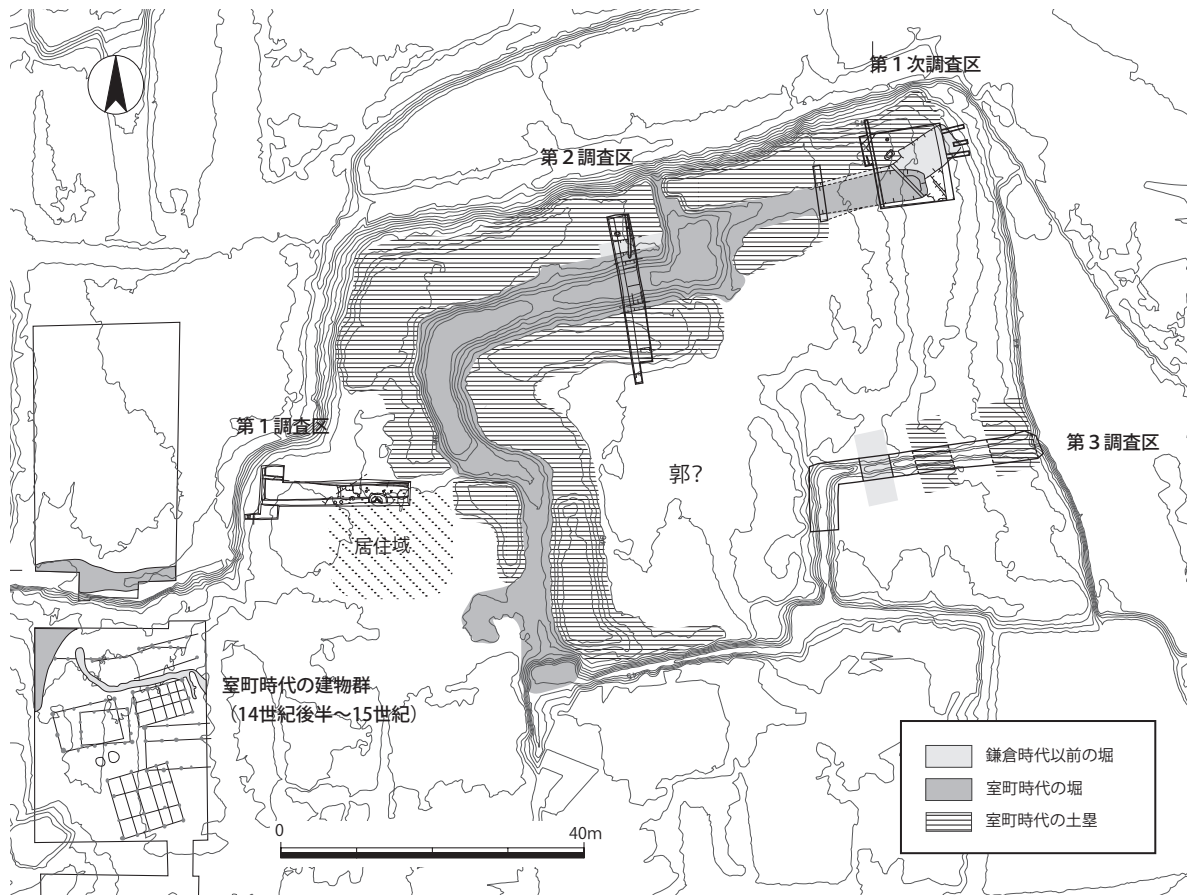


図11 石見城跡遺構復元図（1：1,000）

## 4. まとめ

以上、令和4年に実施し、令和5年に整理作業を行った範囲確認調査について記述した。

今回の調査では、石見城跡内における遺構の広がりを確認すること、さらに遺構の成立年代を把握することの2点を目的として調査を実施した。その結果、微高地西辺に設けた第1調査区では、溝や柱穴、土坑を有する遺構群を検出し、これが室町時代の所産であることを確認した。また、これらの遺構群が、鎌倉時代に埋没した流路の上位面で成立することから、遺跡西辺における土地利用の時期的変遷をつかむことができた。続く第2調査区では、現存する地表面の凹凸が鎌倉時代・室町時代の堀や室町時代の土塁を反映するものであることが確実となった。さらに第3調査区では、堆積層序を連続的に記録することにより、その形成過程を捉えた。

今回の調査により、石見城跡の現在の地形が、鎌倉時代・室町時代に行われた大規模な土地改変をそのまま継承するものであることが極めて濃厚になったと言えよう。

なお石見城跡では、令和5年度にも引き続き発掘調査を実施しており、さらなる情報を得ている。今後も調査を重ねることにより、遺跡の解明はより進むものと期待される。

（黒須亜希子）

### 註

- 1) 『野田弾正忠泰忠軍忠書』には、「上里・石見・井内館」と併記されており、「城」とは表記されていない

いが、本稿では周知の埋蔵文化財包蔵地の名勝に従い、「石見城」と呼称する。

- 2) 山下正男 『京都市内およびその近辺の中世城郭 -復元図と関連資料-』 京都大学人文学研究所 1986年
- 3) 石見城跡に関する一連の範囲確認調査成果は、『石見城跡発掘調査総括報告書』（令和7年度刊行）に掲載予定。

## 引用文献

- 調査1：(財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-2、2003年。
- 調査2：(財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-3、2003年。
- 調査3：(財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十四・十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2006-22、2007年。
- 調査4：京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 『芝古墳（芝1号墳）調査総括報告書』京都市文化市民局、2018年。
- 調査5：(財)京都市埋蔵文化財研究所 『長岡京右京一条四坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-15、2005年。
- 調査6：京都市文化市民局 「IX長岡京右京一条四坊十町跡（第1258次）、石見城跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和4年度』、2023年。

## 参考文献

- 林屋辰三郎・村井康彦 編 『京都市の地名』日本歴史地名体系第27巻 平凡社 1979年
- 玉城玲子 「第7章第2節 一揆の時代」『長岡京市史』本文編1 長岡京市史編纂委員会 編 1996

## VIII 長岡京跡隣接地（溝路遺跡）

### 1. 調査の経緯と経過

調査地は、南区久世殿城町190-1、191-1に所在する。工場建設に伴う範囲確認調査である。

周辺には弥生～室町時代の集落跡である「中久世遺跡」、向日市側には弥生～古墳時代の集落跡である「野田遺跡」や「長岡京跡」が広がっている（図1）が、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地になっていない。令和3年度に、都市計画道路向日町上鳥羽線・牛ヶ瀬馬場線の整備事業に伴い範囲確認調査を実施し、弥生～古墳時代の落込みや長岡京期の土坑などを検出した<sup>1)</sup>。

今回の調査地は道路建設に伴う工場移転の予定地であり、さらなる遺跡の展開状況を確認することを目的に行っ

た。調査は令和5年2月13日～3月3日に実施し、弥生～古墳時代の落込みや長岡京期の柱穴などを検出した。また、柱穴の展開を確認するため調査区の拡張を行った。最終的な調査面積は57㎡である。

令和3・4年度の範囲確認調査で遺構・遺物が確認されたことをふまえ、新たな遺跡の範囲を令和5年度から周知の埋蔵文化財包蔵地に追加することになった。

遺跡名は、「<sup>みぞみち</sup>溝路遺跡」である（図11）。

### 2. 遺 跡

#### (1) 位置と歴史的環境

調査地はJR向日町駅の東側に位置し、耕作地と工場が混在する平坦地であるが、北側に向かって緩やかに高くなる。北東側には「中久世遺跡」が広がり、南西側には『東寺百合文書』に「今井用水」として記録されている寺戸川<sup>2)</sup>が流れる。現在の寺戸川は、縄文時代～長岡京期前後の流路（旧

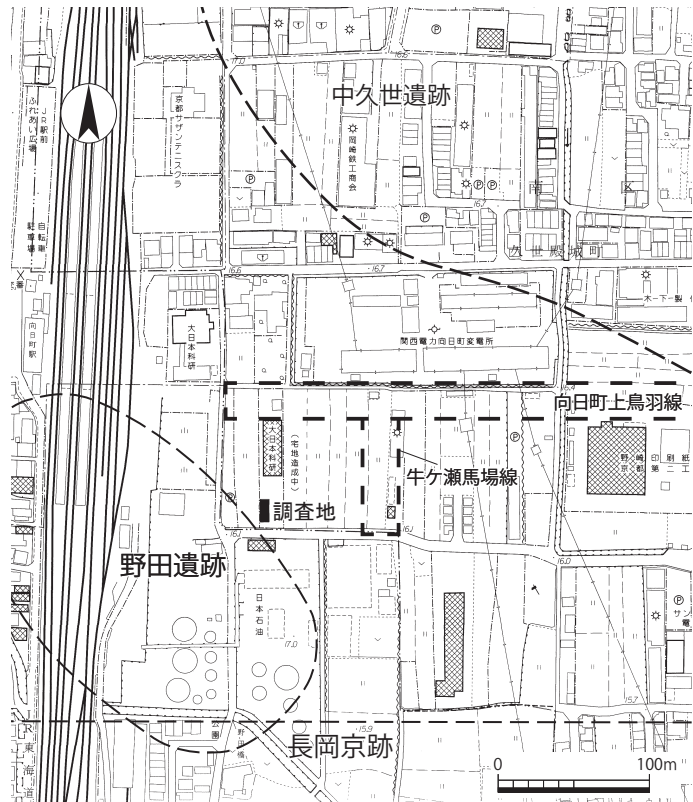


図1 調査位置図（1：5,000）

寺戸川)を概ね踏襲していると考えられている。また、本調査地は長岡京跡北限の北京極大路から約150m北側に位置しているものの、向日市域などで長岡京の北方にも長岡京期の遺構が確認されており、当該地周辺にも土地利用の可能性が推測されていた。

## (2) 周辺の調査 (図4・表1)

周辺の調査事例は、令和4年度報告書(文献12)の図・表に新たな調査成果を加え、まとめている。以下では、主要な調査について述べていく。

調査1・3・4・7・10・11・12-2・13で弥生～古墳時代の土坑や溝などを確認している。調査10で検出された土坑からは、古式土師器や完形の小形丸底壺などの遺物が出土した。調査3・4では水田耕作に使用した可能性のある流路が検出された。調査7では、古墳時代前期の水利施設を検出し、灌漑用水に関わる複合的施設が想定されている。

調査2・7では長岡京以前の流路を検出し、旧寺戸川と推定されている。北西から南東に流れていたことや、粘土や砂礫が堆積している状況を確認している。

調査4・11では、長岡京の北京極大路南北両側溝を検出している。側溝は、これまでの北京極大路の推定線よりも北側、側溝芯々間の距離は約9mであることが確認された。大路幅約24mではなく小路幅約9mと一致することから、長岡京北限の溝というには小さく、大路が別に存在している可能性が出た。また調査4では、検出された北京極大路南側溝の南側で長岡京期の庇付きの掘立柱建物数棟を検出していることから、北京極大路は調査4・11で検出された位置が示すようにこれまでよりも北へひろがる可能性がある。

さらに、調査10で長岡京期の掘立柱建物や井戸などが確認されたことから、長岡京外にも開発が及んでいたことが明らかになりつつある。

さらに、調査10で長岡京期の掘立柱建物や井戸などが確認されたことから、長岡京外にも開発が及んでいたことが明らかになりつつある。

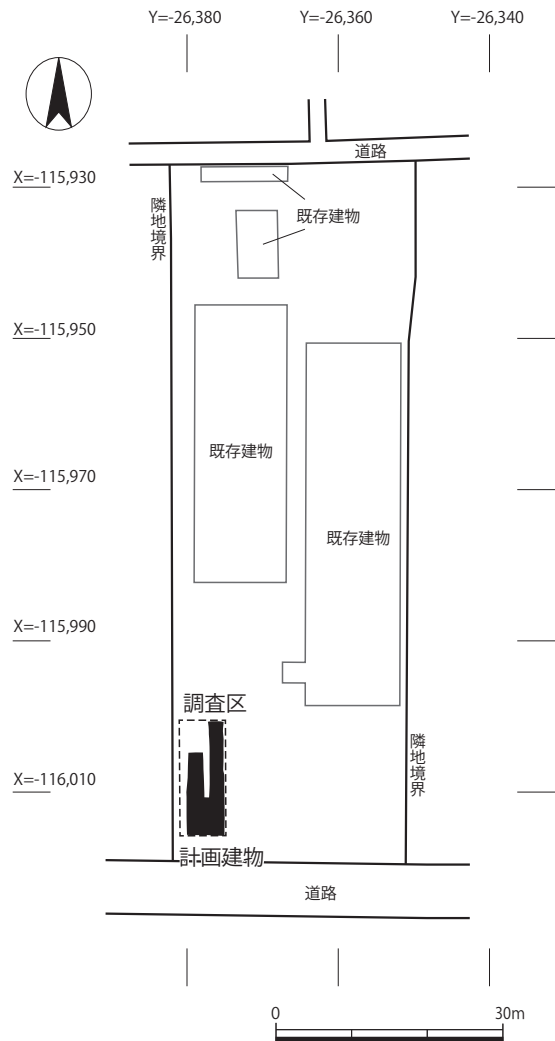
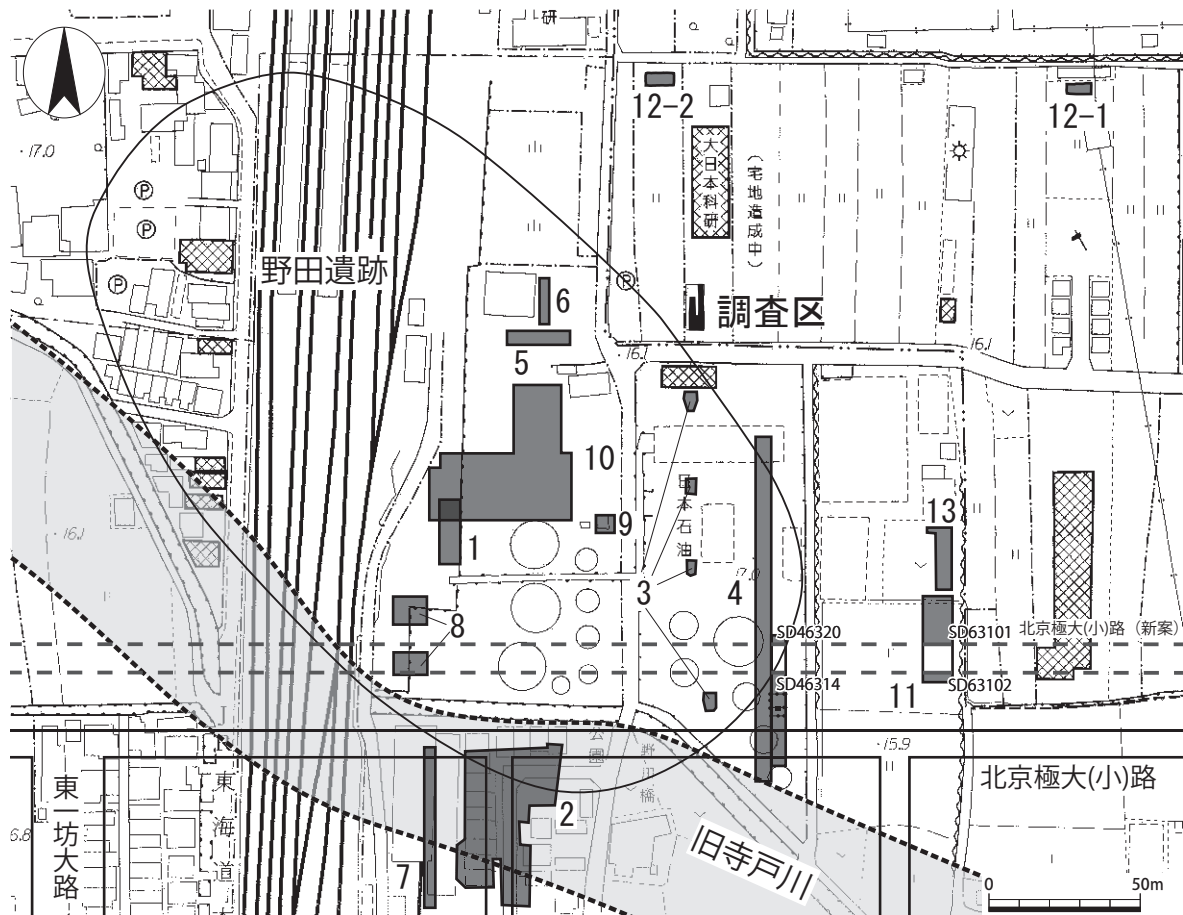


図2 調査区配置図(1:1,000)



図3 重機掘削(南東から)





※文献12掲載の図9を元に改変。

図4 周辺の調査位置図(1:2,500)

このほか、中世の土師器や瓦器を伴う遺構が各調査で確認されている。

以上から、調査地一帯は弥生時代以降、継続的に土地利用がされていたことがわかる。今回の調査においても、関連する遺構・遺物が存在する可能性がある。

文献(表1 周辺調査一覧表の文献番号に対応)

- 1 山中章「長岡京跡左京第142次(7ANDND地区)～北京極大路、野田遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集、(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会、1989年。
- 2 國下多美樹・松崎俊郎「長岡京跡左京第345次(7ANDKD-5地区)～左京北一条二坊一・四町、東二坊坊間小路、野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第62集(第1分冊)、(財)向日市埋蔵文化財センター、2004年。
- 3 國下多美樹他「長岡京跡左京第463次(7ANDND-2地区)～左京北一条二坊四町、北京極大路、野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第62集(第1分冊)、(財)向日市埋蔵文化財センター、2004年。
- 4 國下多美樹・中島信親「長岡京跡左京第464次(7ANDND-3地区)～左京北一条二坊四町、北京極大路、野田遺跡・南東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第62集(第1分冊)、(財)向日市埋蔵文化財センター、2004年。

表1 周辺調査一覧表

調査番号	調査回数	調査期間・機関	主要遺構	主要遺物	備考	文献
1	左京第142次	85/12/16～86/1/28 (向日市センター)	古墳以前：土坑・溝。平安以降：土坑・溝。	古墳：土師器甕・須恵器など。古代：土師器・平瓦。中世：土師器。		1
2	左京第345次	94/5/16～9/2 (向日市センター)	長岡京期以前：溝・流路。長岡京期：東二坊坊間西小路両側・東二坊坊間小路・土器埋納遺構。長岡京期以降：落込み・溝。	長岡京期：土師器・「廩院」墨書土器・土馬など。		2
3	左京第463次	01/5/11～6/25 (向日市センター)		縄文～弥生：縄文土器・弥生土器・磨製石器・打製石器。古墳：土師器・須恵器。長岡京期：土師器・須恵器・「伊勢口」墨書土器・製塩土器・単弁蓮華文軒丸瓦。平安：須恵器・灰釉陶器。中世：土師器・瓦器。	埋没過程の流路を水田として利用。	3
4	左京第464次	01/6/26～7/17 (向日市センター)	弥生～古墳：溝・流路。長岡京期：北京極小路両側溝・掘立柱建物・柵。中世：溝。			4
5	野田遺跡第5次	01/9/11～10/12 (向日市センター)	近世以降：溝。時期不明土坑。	古代：土師器・須恵器。		5
6	野田遺跡第6次	01/10/1～12 (向日市センター)	近現代：溝。時期不明ピット。	近世：陶磁器。		6
7	左京第471次	02/2/21～3/30 (向日市センター)	古墳時代前期：水利施設・足跡。長岡京期以前：流路。中世～古代：土坑・溝。中世：溝。	弥生：弥生土器壺・甕。古墳～中世：須恵器。	灌漑用水利に関する施設が存在が想定。	7
8	左京第475次	02/6/24～7/24 (向日市センター)	古墳：流路。古代：土坑。中世：溝・流路。	弥生：弥生土器。古墳～古代：須恵器。飛鳥：木製壺鏡。		8
9	野田遺跡第9次	06/5/16～31 (向日市センター)	近代：暗渠。			9
10	野田遺跡第10次	08/5/8～9/8 (向日市センター)	古墳：土坑。長岡京期：東二坊坊間西小路両延長側溝・掘立柱建物・柵・井戸。中世：溝。	縄文：縄文土器・石鏃。弥生：弥生土器。古墳：土師器・須恵器。長岡京期：土師器・須恵器・複弁蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦。中世：瓦器。	東二坊坊間西小路が長岡京北限とされる北京極大(小)路の北側に延長することを確認。	10
11	左京第631次	20/12/17～21/3/31 (向日市センター)	古墳以前：方形周溝墓・土坑・流路。長岡京期：北京極大(小)路両側溝。中世：溝。	縄文晩期：縄文土器・石器。古墳前期：木製品・古式土師器。長岡京期：土師器・須恵器・平瓦。平安前期：緑釉陶器。中世：瓦器。		11
12-1	長岡京跡隣接地	22/2/24～3/16 (京都市文化財保護課)	近世：ピット。時期不明：溝・柱穴・ピット。			12
12-2			弥生～古墳：落込み。長岡京期：土坑。	長岡京期～平安：須恵器。		
13	左京第663次	22/7/19～9/29 (向日市センター)	古墳以前：土坑・溝状遺構・落込み。古代以前：土坑・落込み。中世：ピット。	長岡京期：土師器・須恵器など。		13

※向日市センター：(財)向日市埋蔵文化財センター、公益財団法人向日市埋蔵文化財センター(2012年度以降)

※文献12掲載の表1を元に追加・調整。

- 5 中島信親「野田遺跡第5次(7 ANDND-4地区)～野田遺跡東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第65(第1分冊)、(財)向日市埋蔵文化財センター、2005年。
- 6 中島信親「野田遺跡第6次(7 ANDND-5地区)～野田遺跡・東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第54集、(財)向日市埋蔵文化財センター、2002年。
- 7 中島信親「長岡京跡左京第471次(7 ANDND-7地区)～左京北一条二坊一町、野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第64集(第1分冊)、(財)向日市埋蔵文化財センター、2005年。
- 8 中島信親「長岡京跡左京第475次(7 ANDND-6地区)～北京極大路、左京北一条二坊一町、野田遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第64集(第1分冊)、(財)向日市埋蔵文化財センター、2005年。
- 9 中塚良「野田遺跡第9次(7 ANDND-7地区)～野田遺跡中東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第

- 81集、(財)向日市埋蔵文化財センター、2010年。
- 10 梅本康広「野田遺跡第10次(7 ANDND-8地区)～野田遺跡中東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第88集、(財)向日市埋蔵文化財センター、2011年。
- 11 梅本康広「長岡京跡左京第631次(7 ANDND-11地区)～北京極大路、左京北一条二坊五町～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第122集、向日市教育委員会、2022年。
- 12 鈴木久史「長岡京跡隣接地」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和4年度』京都市文化市民局、2023年。
- 13 平山裕之「長岡京跡左京第633次(7 ANDND-13地区)～左京北辺～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第124集、向日市教育委員会、2023年。

### 3. 遺 構 (巻頭図版1、図版14)

#### (1) 基本層序 (図5)

現地表面は、標高約16.6mの平坦である。基本層序はGL-0.2mで褐灰色砂泥と明黄褐色砂質土の旧耕作土、-0.5mで灰白色粘質土などの遺物包含層、-0.6mで黄橙色粘質土の基盤層となる。遺物包含層からは奈良時代末～長岡京期の遺物が出土した。基盤層は、調査区北端では南から北に向かって下がる。基盤層上面で遺構検出を行い、柱穴や土坑などを確認した。

#### (2) 遺構

遺構は、長岡京期以前の落込み、長岡京期の柱列、土坑などがある。以下、主要なものについて報告する。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
長岡京期以前	落込み	弥生～古墳時代か
長岡京期	柱列(柱穴1・2)、土坑3、ピット4	

#### 落込み (図5・6)

調査区北側で検出した落込みである。南から北に向かって緩やかに下がる。検出幅は南北7.0m以上、東西4.2m以上で、深さは約0.7mである。北端で立ち上がりが確認できなかったことから、調査区外へと広がる。遺物は出土しなかったため明確な時期は特定できないが、落込みを覆う灰白色粘質土層(図5-5)から奈良時代末期～長岡京期の遺物が出土していることや、周辺の調査から弥生～古墳時代の落込みである可能性が高い。

#### 柱列 (柱穴1・2) (図6～8)

調査区西側中央で検出した柱列である。柱穴が南北方向に2基並び、柱間は約2.5mで、正方位

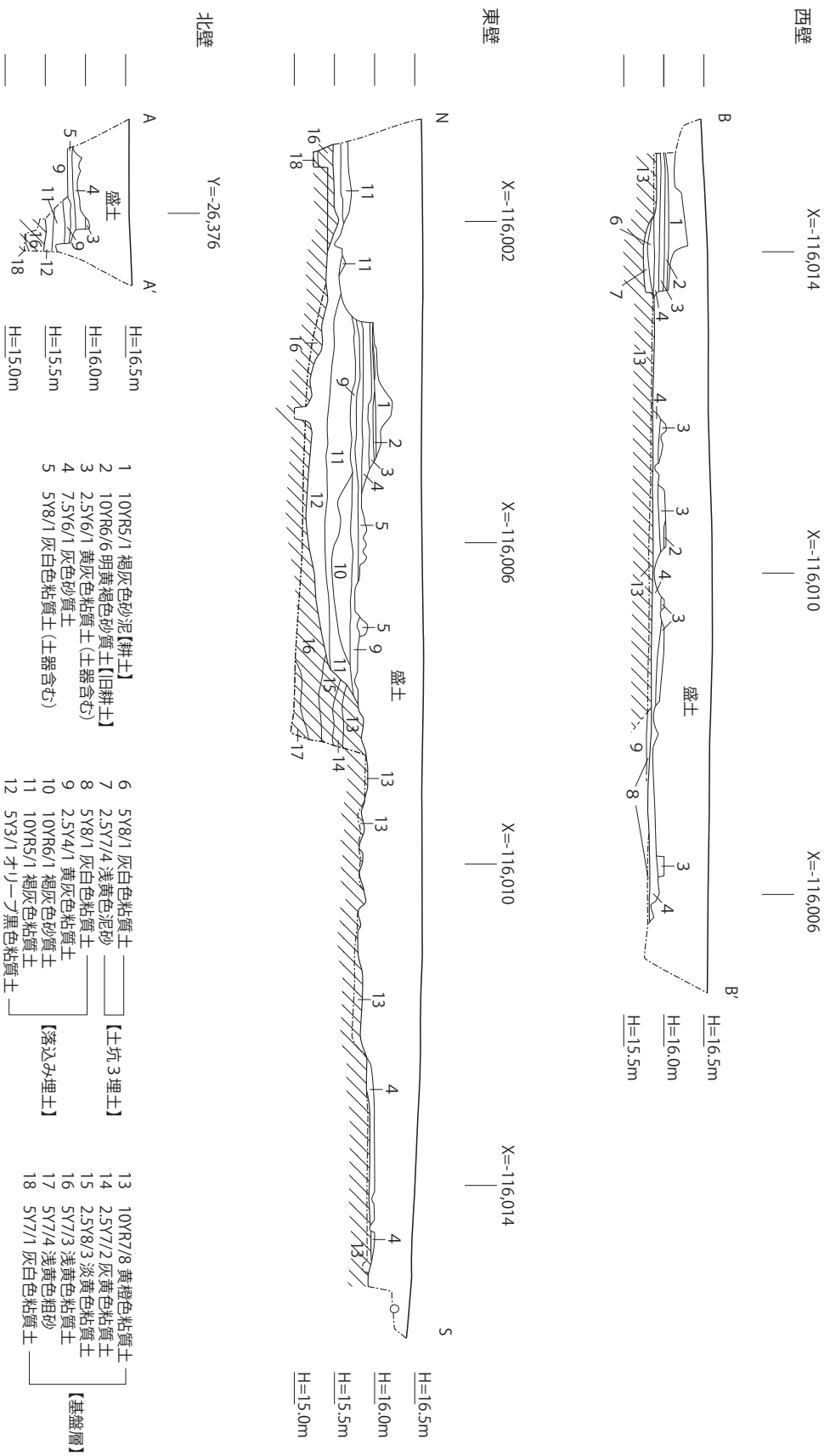


図5 調査区断面図 (1:80)

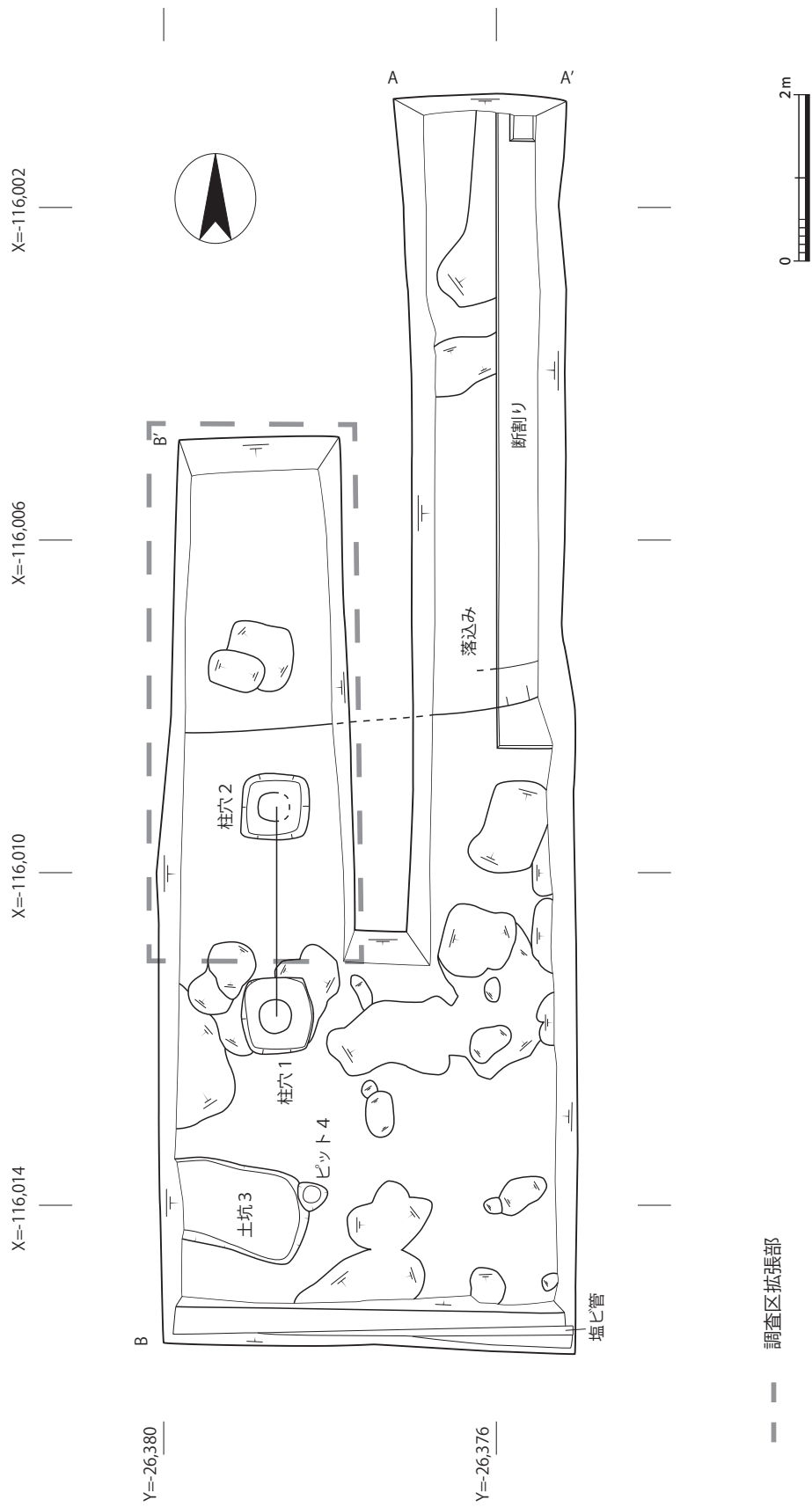


図6 調査区平面図 (1 : 80)



#### ピット4（図6）

調査区南西側で検出したピットである。土坑3を切って成立する。直径は約0.4mで、深さは約0.2mを確認した。遺物は出土しなかったが、土坑3及び、断面5層（図5）から奈良時代末～長岡京期の遺物が出土していることから、同時期のピットであると想定される。

### 4. 遺物（表3、図版14）

コンテナ1箱の遺物が出土した。遺物は、奈良時代末～長岡京期に属する須恵器・墨書土器や動物遺存体などがある。以下、図化できた資料について概要を報告する。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
奈良時代末～長岡京期	土師器・須恵器・墨書土器 ・動物遺存体・木製品		須恵器3点、墨書土器1点 動物遺存体2点		
合計		2箱	6点(1箱)		1箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

#### （1）土器（図9）

1・2は断面5層（図5）灰白色粘質土から出土した。1は須恵器杯B蓋である。2は須恵器杯Bの底部片で、貼り付け高台を有する。底径9.0cm。

3・4は、柱穴1から出土した。3は墨書土器である。須恵器杯Bの底部片で、貼り付け高台を有する。内面に墨書している。「□□ [物カ]」。底径8.2cm。3層（図7）から出土。4は須恵器壺Mの頸部～底部片である。貼り付け高台を有し、底部には糸切痕が残る。底径4.3cm、残存高7.7cm。8層（図7）から出土。

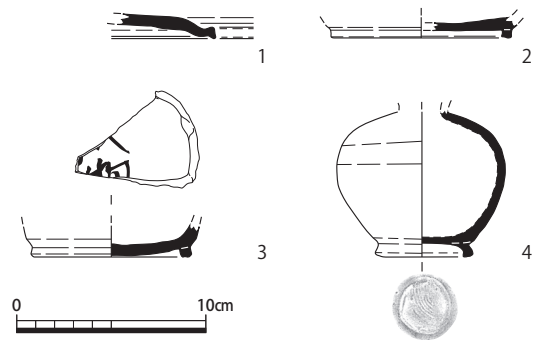


図9 出土遺物 実測図（1：4）

#### （2）動物遺存体

柱穴1の掘方埋土6層（図7）から動物遺存体が出土した。柱穴内の北側でウマの下顎骨、南側でウマの脛骨を良好な形で確認した。下顎骨の検出長は34cm、脛骨の検出長は6cmである。保存処理については公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に依頼した（図11）。分析については東海大学人文学部の丸山真史先生に依頼し、ご寄稿を賜った（附章）。

今回、柱穴1から土器と動物遺存体が出土した。掘方埋土3層（図7）から出土した杯は、内面

に墨書を施していることを確認した。破片であるため全体像は不明であるが、少なくとも2文字は存在し、その内の1つは「物」の可能性が高い。内面に文字を施していることを考慮すると、この杯は実用的なものではなく、別の用途に使われていたものと考えられる。また、ウマの下顎骨・脛骨の動物遺存体は、掘方埋土6層(図7)から出土した。柱穴に人為的に入れられた状況から、墨書土器と動物遺存体は、何らかの祭祀に用いられた可能性がある。

## 5. まとめ

都市計画道路向日町上鳥羽線・牛ヶ瀬馬場線整備予定地の西側の包蔵地外において、令和3・4年度に範囲確認調査を行った。弥生～古墳時代の落込み、長岡京期の柱穴や土坑を検出し、令和5年度から新たに遺跡を追加した。

今回の調査では、弥生～古墳時代の落込みを検出したが、周辺の調査で確認している流路や落込みが弥生～古墳時代であることから、同等のものである可能性が高い。

落込み南側の非常に安定した基盤層直上で、長岡京期の柱穴を2基検出した。柱穴は南北方向に並び東側には展開しないことから、西側の調査区外へと展開する可能性がある。また、柱穴から墨書土器や動物遺存体が出土したことから、当地で祭祀などが行われたと考えられる。

周辺でも弥生時代～長岡京期の遺構・遺物が見つかることから、調査地一帯の安定した地盤上には遺構が展開すると考えられる。

令和3・4年度の調査成果により、周知の埋蔵文化財包蔵地外に遺跡が広がっていることが明らかになったため、遺跡地図の見直しを行った。調査地を含めた範囲での新たな遺跡は「溝路(みぞみち)遺跡」(遺跡番号:786、遺跡種類:集落跡)とした(図10)。

今後、新たな遺跡範囲において調査が進むことで遺構の展開状況を確認でき、周辺との関係が見出せるかもしれない。さらなる調査に期待したい。

(八軒かほり)

今回の調査では、株式会社大日本科研、龍谷大学文学部の國下多美樹先生、東海大学人文学部の丸山真史先生に御指導・御協力を得ました。末筆ではありますが、ここに感謝の意を表します。

註

- 1) 鈴木久史「長岡京跡隣接地」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和4年度』京都市文化市民局、2023年。
- 2) 玉城玲子「桂川用水と西岡の人々 - 国宝東寺百合文書の世界より」向日市文化資料館、1997年。

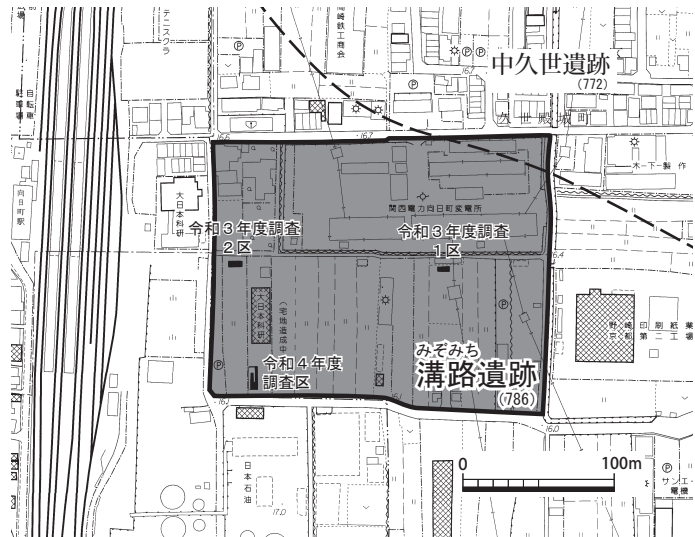


図10 新遺跡範囲(1:5,000)



## 附章. 長岡京跡隣接地（溝路遺跡）から出土した動物遺存体

東海大学人文学部 丸山真史

長岡京跡隣接地（溝路遺跡）の発掘調査において、柱穴1から動物遺存体2点が出土しており、それぞれウマの下顎骨（右）、脛骨（左）と同定される（巻頭カラー写真1・2）。柱穴1は、検出面および遺構内で伴出した土器の年代から奈良時代（長岡京期含む）と考えられ、この馬骨も同時期のものと推定される。

下顎骨は柱穴の中心より北側において、下顎体の内側（舌側）が上、外側（頬側）が下の横倒し状態で検出された。下顎枝から関節突起、筋突起は破損しており、下顎体のみが保存される。後肢の一部である脛骨は、柱穴の中心より南側で検出され、下顎骨とは離れた位置にある。これらは同一個体の可能性もあり、骨格部位の位置関係から、交連状態とは考えにくい。それぞれの骨は土台とともに取り上げたが、しばらくして乾燥とともに亀裂が生じ、下顎骨の骨質が破損するが、堅固なエナメル質に覆われた歯および歯列は形態を保持している（図11）。また、脛骨は遠位のみ出土で骨幹部と端部は癒合している。

下顎骨は第1切歯から第3切歯、第2前臼歯から第3後臼歯が保存されており、犬歯はない。検出状況の観察でも、切歯と臼歯の間に犬歯は認められず、牝馬と考えられる。左の第1切歯には、右の第1切歯の小片が付着しているが、右下顎骨は保存されていない。ウマの下顎骨は左右が口先の方で結合しており、同じ埋没条件であれば右下顎骨、特に臼歯は保存されている可能性が高い。



図11 保存処理後の動物遺存体（手前：下顎骨、奥：脛骨）

それにもかかわらず、右下顎骨がみられないことは、意図的に割られた可能性もある。

臼歯列長は体格の目安となり、歯牙の萌出や咬耗状況は死亡年齢の推定に有効である。前臼歯列は84.6mm、後臼歯列は81.2mm、全臼歯列は162.8mmを測り、日本在来の御崎馬や木曾馬などの中型馬に相当する体格と推定される。切歯の咬合面が破損しており、死亡年齢の推定には適していない。臼歯は歯根が破損しているものを含むが、年齢推定の根拠になる程度の保存状態であり、歯根の分岐部が残っているものは歯冠高を、分岐部が残っていないものは残存高を計測した。歯冠高が計測できた第2前臼歯は42.5mm、第3前臼歯は60.9mm、残存高が計測できた第4前臼歯は60.4mm、第1後臼歯は58.8mm、第2後臼歯は58.0mm、第3後臼歯は61.5mmを測る。歯冠高から死亡年齢は4～5歳と推定され、残存高でも5～7歳以下と推定されることから、働き盛りの若齢馬と考えられる。

以上のように、柱穴1で出土した動物遺存体はウマの下顎骨と脛骨であり、日本在来馬の中型馬に相当する体格の若齢の牝馬と推定される。柱穴の埋土は、シルト質で水分を多く含むため、本資料は保存状態に恵まれたと考えられるが、骨格の一部のみが出土しており、埋没中に腐植して消滅した骨格部位があることも考えられる。大阪府長原遺跡NG96-66次調査では、飛鳥時代の柱穴で牛骨が出土しており、肉が除去され、意図的に長方形に並べられた例があり、漢神祭祀との関連が指摘される(大阪市文化財協会1999)。本例は、意図的に骨を配置しているかは判然としないが、解体されたものが柱穴に納められ、祭祀・儀礼との関連も想定できる。

#### 参考文献

大阪市文化財協会『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』1999年。

## Ⅸ 山田桜谷古墳群

### 1. 調査に至る経緯・調査の経緯（図1～6）

本件は周知の埋蔵文化財包蔵地である「山田桜谷古墳群」の一基である山田桜谷1号墳（下山田下園尾古墳）の範囲確認のための発掘調査である。調査地は西京区山田桜谷町ほかの国有林内に所在し、山田桜谷共有墓地の西側に位置する。山田桜谷古墳群は、山田桜谷1号墳と山田桜谷2号墳（下山田桜谷古墳）の2基の前方後円墳から構成される。表採資料より山田桜谷1号墳が5世紀後葉、山田桜谷2号墳が5世紀中頃の築造と想定されている<sup>1)</sup>。山田桜谷1号墳は乙訓古墳群の首長墓として位置付けられている。

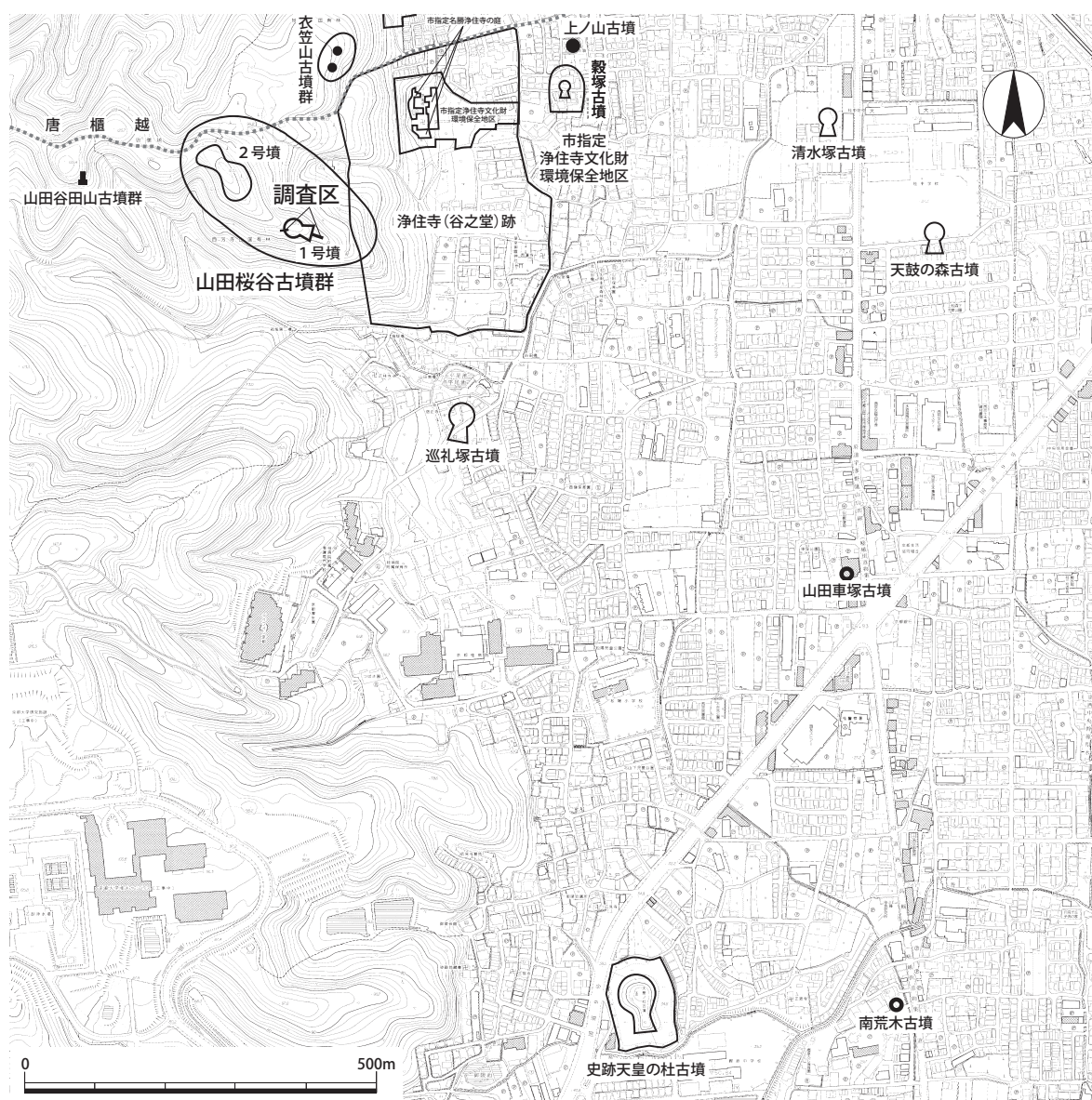


図1 調査位置図（1：10,000）

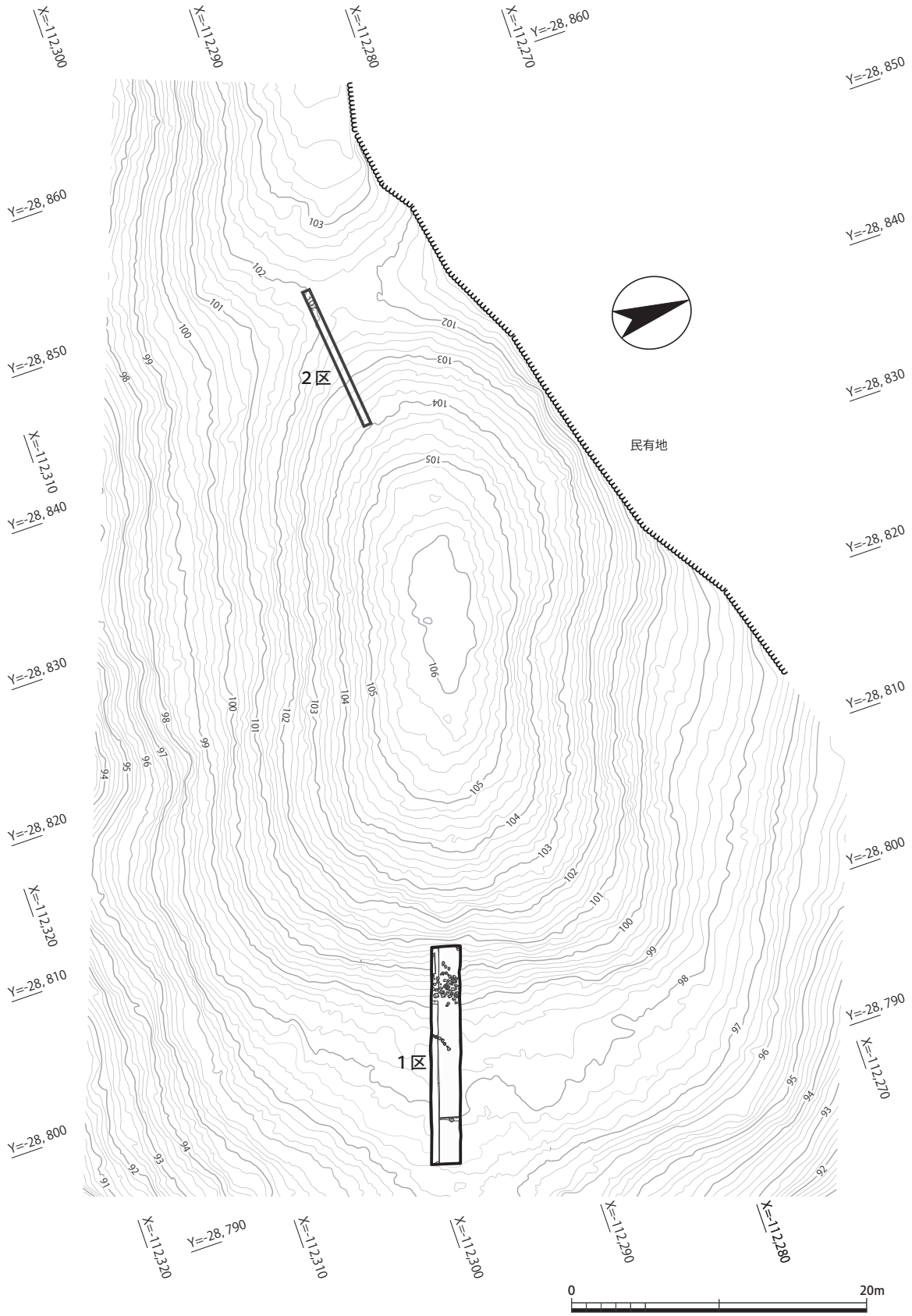


图2 調査区配置図 (1 : 400)

乙訓古墳群は、京都市・向日市・長岡京市・大山崎町の3市1町にまたがって桂川右岸・乙訓地域に広がり、古墳時代前期初頭から終末期まで首長墓が築造され続けた古墳群である。古墳時代を通して継続的に築造される古墳群は全国的に見ても希少な遺跡である<sup>2)</sup>。平成28年にその重要性が評価され、13基の古墳が国史跡に指定されている。1号墳も史跡追加指定を目的とし、乙訓地域で古墳の位置づけをする基礎資料の整備は急務であった。

しかし、1号墳は乙訓地域の首長墓であるが、これまでの複数の測量調査から前方後円墳であることは分かっていたものの、本格的な調査は行われていないことから、今回初めて1号墳の発掘調査を実施することとなった。調査区は、平成30年度に赤色立体地図を作成したことで、確認できた直線地形の痕跡、及び古墳の外表施設の状況確認をするために前方部と後円部に1か所ずつ調査区を設けた。前方部側を1区、後円部側を2区とした。調査は令和4年12月21日～令和5年2月9日に実施し、面積は37㎡である。

## 2. 地理と歴史的環境

調査地は旧葛野郡の下山田村に該当し、向日丘陵の麓に位置する。下山田村の北には桂川流域と小畑川流域を分ける嶺をたどる尾根道の唐戸越えがある。唐櫃越は山城と丹波を結ぶ最短の道として知られ、古墳時代は尾根道を主要街道として使用したと考えられている。唐櫃越の北側には衣笠山古墳群や西芳寺古墳群などの遺跡が展開する。



図3 伐採風景（南から）



図4 作業風景（南から）



図5 葺石・埴輪列養生状況（北西から）



図6 1区埋め戻し完了状況（東から）

中世には法華山寺（峰ヶ堂）の山岳寺院が創建され、室町幕府の祈願寺としても崇敬を集めた。その後、西岡支配の拠点として築城された。東側には、嵯峨天皇の勅願寺とする説のある浄住寺も所在する。明応2年（1493）に一度破却されるものの、伽藍僧房などが整備され真言律宗から黄檗宗に改められており（山城南勝誌）、現在の本堂・開山堂となる。「京都府地誌」によると、明治には筍や松茸などが特産とされており、現在も乙訓地域の特産として知られている<sup>3)</sup>。

乙訓古墳群の首長墓は北から「山田・檜原グループ」「向日グループ」「長岡グループ」の3つに区分されている。山田桜谷1号墳は「山田・檜原グループ」にグルーピングされており、現存する古墳の中で最北端に位置する。「山田・檜原グループ」の古墳は前期に一本松塚古墳や天皇ノ杜古墳などの築造に始まり、中期には巡礼塚古墳と続き、その直後に山田桜谷2号墳、山田桜谷1号墳と築造される。後期になると穀塚古墳、清水塚古墳や天鼓の森古墳といった順番で築造される。

「山田・檜原グループ」の多くの古墳は大正時代以降の土地開発によって著しく削平を受けており、様相が不明な点も多いが、山田桜谷古墳群は大半が国有林内に遺存することから大規模な開発を免れており、変化が少ないと考えられている。山田桜谷1号墳の現状は、後円部側で一部改変を受けているものの、墳丘の遺存状況は良好である。

### 3. 過去の調査

山田桜谷古墳群は昭和61年に、(財)京都市埋蔵文化財研究所の踏査中に確認されたことが発見の契機となった。採集した埴輪や須恵器から1号墳は5世紀後葉で、2号墳は5世紀中頃と想定されている<sup>4)</sup>。昭和63年には、京都大学考古学研究会が1号墳の測量調査を実施し、全長46mの規模を測る前方後円墳であることを示している。また、測量調査中に桜谷共同墓地造営時に地形改変を受けた崖の壁面で葺石や地山を確認しており、葺石を伴う古墳と想定されている<sup>5)</sup>。平成元年には、同研究室が山田桜谷2号墳の測量調査を実施し、前方後円墳の可能性を示しつつも、くびれ等の等高線が曖昧であることから、円墳の可能性もあることが示されている<sup>6)</sup>。平成30年には、京都市文化財保護課が赤色立体地図を作成し、山田桜谷1号墳の南東から東側にかけて直線地形があることを確認し、古墳造営時における造成痕跡の可能性を示した<sup>7)</sup>。令和2年には、山田桜谷1号墳・山田桜谷2号墳の詳細な測量図を作成し、平成元年の測量図と大きな変化がないことから、古墳が大きな改変なく遺存していることを確認した<sup>8)</sup>。

以上のように山田桜谷古墳群は、複数の年度にわたり測量調査が実施されているものの、本格的な発掘調査が行われておらず、外表施設などの詳細な情報については明らかでない。

## 4. 遺 構 (巻頭図版 2・3、図版 15～17)

### 1 1区 (図7～11)

調査区は前方部前面で古墳の中軸に沿って幅2m、長さ15mで設定した。調査の結果、墳丘造成状況、葺石、埴輪列、傾斜変換点を確認した。

#### 基本層序

基本層序は表土以下、GL-0.04mでにぶい黄褐色泥砂の流土(図8-1層)、-0.4mで橙色～灰白色シルトの葺石施工時の埋込土(図8-17層)、-0.5～-0.9mまで灰白色シルトの地山(図8-22層)である。なお、1号墳の墳丘は地山を削り出して形成する。

#### 遺構

**墳丘** 標高98.3～100.3mで確認した。地山を削り出して形成していると考えられる。墳丘部地山上面には固く締まる赤褐色中粒砂、拳大礫を少量含む・固く締まる明赤褐色中粒砂(図10-15・16層)の地山を母材とした墳丘構成土が確認できるため、墳丘盛土の可能性も考えられる。

**葺石** 調査区中央付近で確認した。標高はおおむね標高98.6m～99.9mで検出した。大きさは約0.28m～0.38mの人頭大の石を使用し、石材はチャート、砂岩・花崗岩である。また、石の配置に重なりが見られず、0.05～0.10mの隙間が認められる。

葺石の最下部では、4石分の石を確認した。径0.3mから0.4mの大きさで、扁平な石を配置している。この石と石の間には0.1mから0.14mの隙間が見られる。この4石は、最下部に配置されていることや上部に位置する石より、一回り大きな石を直線的に並べて配置していることから、基底石と考えられる。

葺石の設置は地山上面に配置した後に貼石状に施される。灰白色シルト、拳大礫少量含む・固く締まる明赤褐色中粒砂(図10-17・18)で埋め込んでいることから、葺石を設置する際に一緒に入れた裏込めのような土と考えられる。

なお、流土内からは、葺石に由来する多量の転落石を確認した。

**整地面** 基底石前面で幅2m以上、3.5mの範囲で確認した。黄色砂礫(図10-28層)の地山を掘り込んで成立する。埋土は明赤褐色中粒砂(図10-20層)で、深さは0.12m～0.15mである。上面はおおよそ標高98.2mで、平坦面を意識して整地されていることから、意図的に整地を行なっていると考えられる。整地面直上に堆積する流土からは、多量の円筒埴輪片や形象埴輪片、須恵器片が出土した。

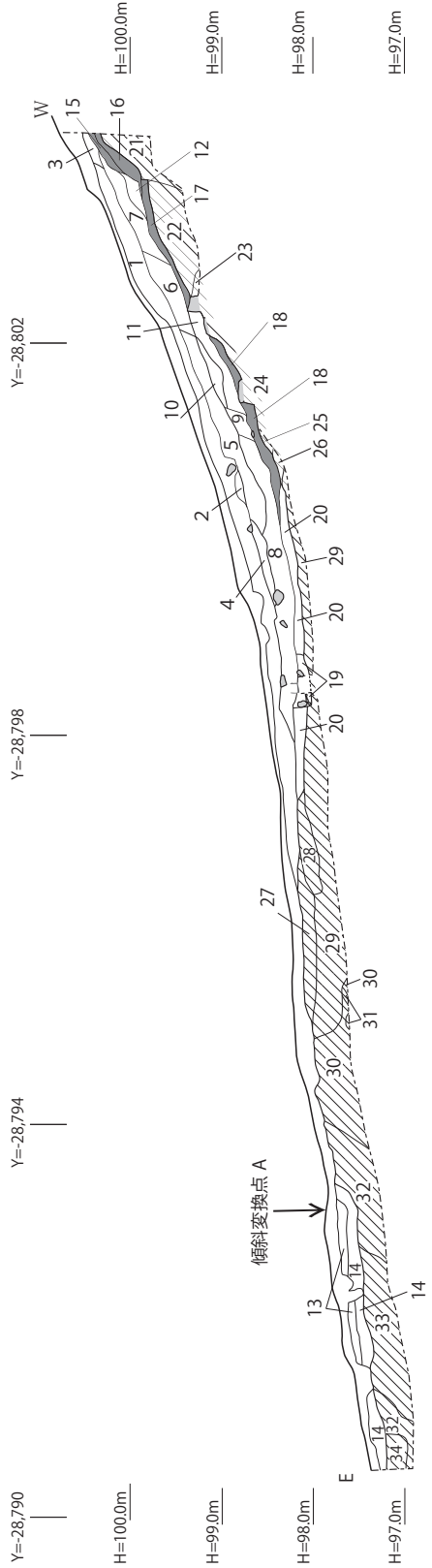
**埴輪列** 基底石の前面で検出した。整地面上面で樹立する埴輪列を1条、個体は7基確認した。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	1区:墳丘、葺石、整地土、埴輪列、傾斜変換点、平坦面 2区:墳丘	



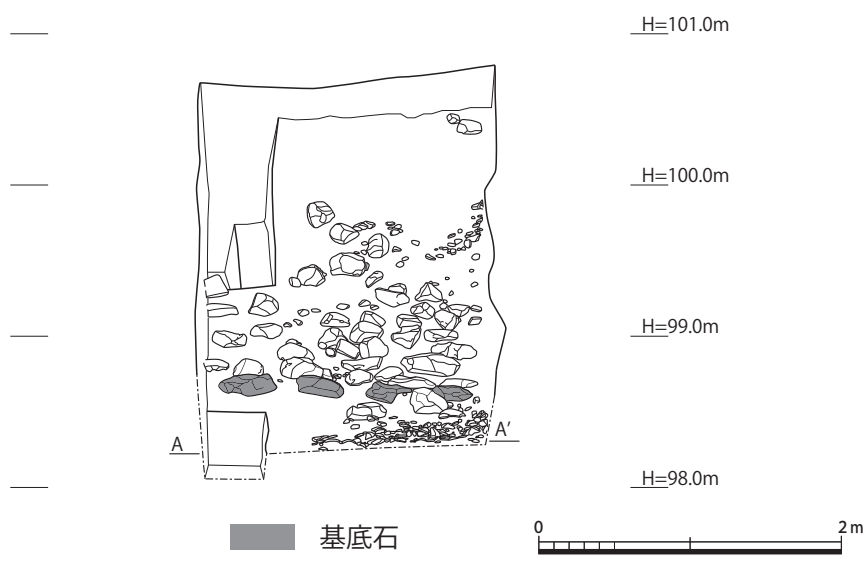
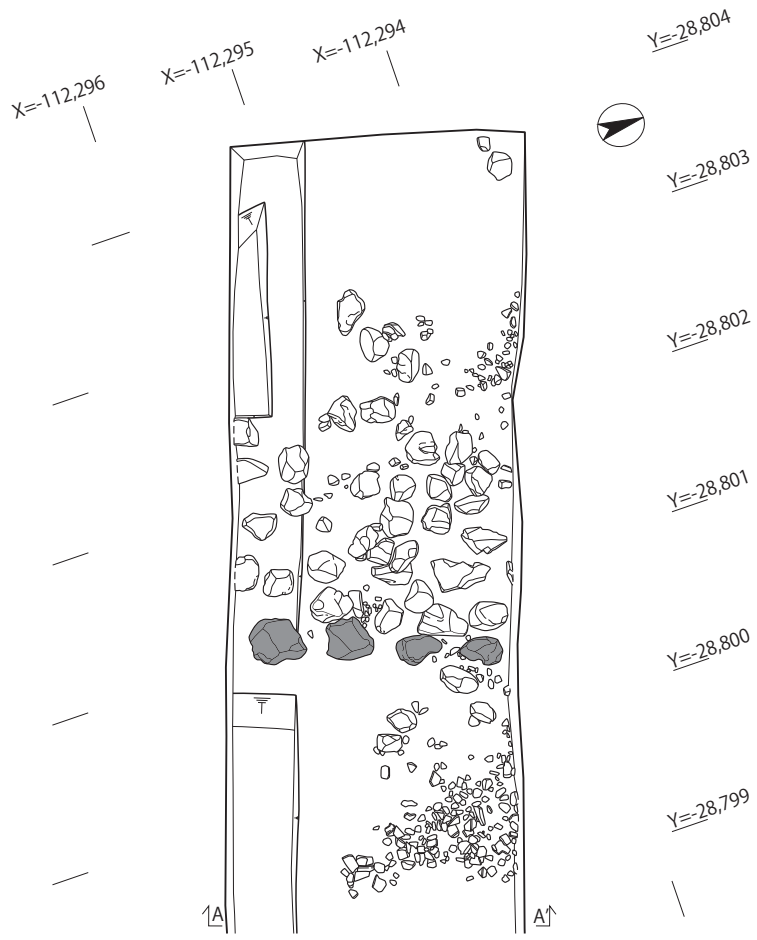




- 1 10YR5/4 にぶい、黄褐色泥砂
- 2 10YR5/4 にぶい、黄褐色泥砂～7.5YR7/6 橙色細砂
- 3 5YR4/6 赤褐色粘質土
- 4 7.5YR6/4 にぶい、橙色粘質土
- 5 7.5YR6/8 橙色粘質土～細砂
- 6 7.5YR5/6 明褐色中粒砂 (拳大礫少量含む)
- 7 7.5YR5/6 明褐色粘質土
- 8 7.5YR5/4 にぶい、褐色粘質土 (拳大礫含む)
- 9 7.5YR5/6 明褐色粘質土
- 10 5YR5/6 明赤褐色粘質土 (小礫少量含む)
- 11 10YR5/3 にぶい、黄褐色中粒砂 (小礫多く含む)
- 12 5YR4/6 赤褐色粘質土～中粒砂 (堆輪片含む・固く締まる)
- 13 7.5YR5/6 明褐色泥砂 (腐葉土多く含む)
- 14 7.5YR5/6 明褐色細砂
- 15 5YR4/6 赤褐色中粒砂 (固く締まる)
- 16 5YR5/6 明赤褐色中粒砂 (拳大礫少量含む・固く締まる)
- 17 7.5YR6/6 橙色～10YR8/1 灰白色シルト
- 18 5YR5/6 明赤褐色中粒砂 (拳大礫少量含む・固く締まる)

- 19 5YR6/6 橙色泥砂 (5Y7/1 灰白色シルトブロック多く含む) 【堆輪列堀方】
- 20 5Y5/6 明赤褐色中粒砂 (小礫少量含む) 【整地土】
- 21 7.5YR6/8 明褐色砂礫 (拳大礫多く含む・風化石含む)
- 22 7.5YR8/1 灰白色シルト
- 23 10YR6/6 明黄褐色シルト
- 24 2.5Y5/8 明赤褐色シルト
- 25 5YR5/8 明赤褐色シルト (灰白色シルトブロック含む)
- 26 7.5YR5/4 にぶい、褐色粗砂 (小礫多く含む)
- 27 7.5YR5/4 にぶい、褐色細砂
- 28 2.5Y6/4 にぶい、黄色砂礫
- 29 2.5Y6/4 にぶい、黄色砂礫
- 30 10YR7/6 明黄褐色シルト～細砂
- 31 7.5YR4/6 褐色砂礫 (風化石多く含む)
- 32 7.5YR6/8 褐色シルト
- 33 10YR8/1 灰白色シルト
- 34 10YR4/6 褐色砂礫 (小礫多く含む)

図 8 1 区南壁断面図 (1 : 80)



■ 基底石

图9 1区墓石平面图(上)·立面图(下)(1:50)

その内、埴輪1・2・3・4・5・7は底部が全周する。埴輪6については、かろうじて埴輪の底部片の一部が遺存しており、現位置を保っていると思われる。さらに埴輪1～3の間は直線状に配置されているが、埴輪4～7の間は埴輪3を軸にして、東へ45度屈曲している。掘方も同様に途中まで屈曲することが確認できるため、土圧によって原位置がずれた可能性は低い。

埴輪列の掘方は溝状を呈していることから布掘りと考えられる。小礫を少量含む明赤褐色中粒砂の整地土（図10-20層）を掘り込んで成立する。幅0.58m、深さ0.2mで、埋土は灰白色シルトブロックを多く含む橙色泥砂（図10-19層）である。さらに、断割り調査で埴輪1と埴輪2の底面のレベルを確認すると、埴輪1の標高は98.18mで、埴輪2は標高98.12mであり、0.06mの差がある。なお、今回確認した埴輪列は現地保存を行った。

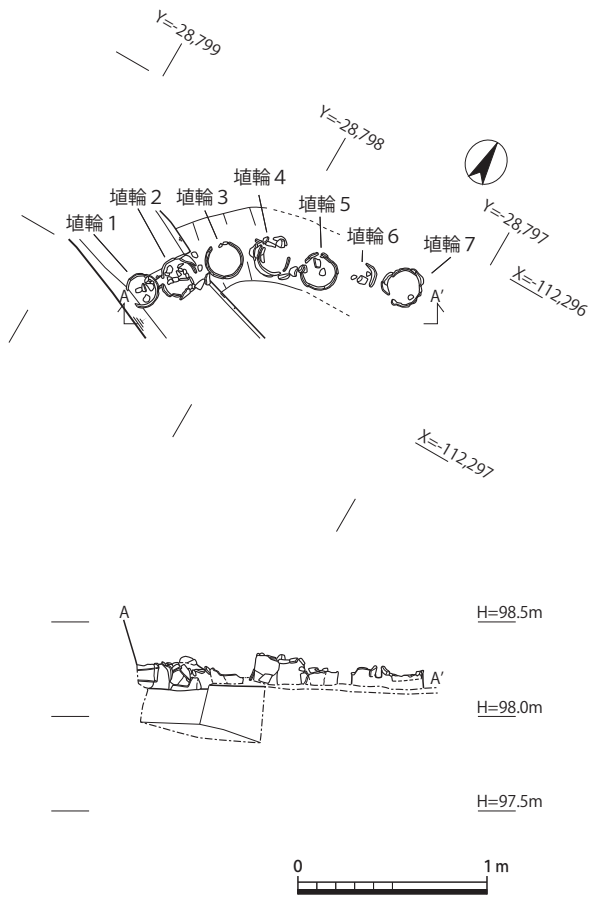


図10 埴輪列平面・立面図（1：40）

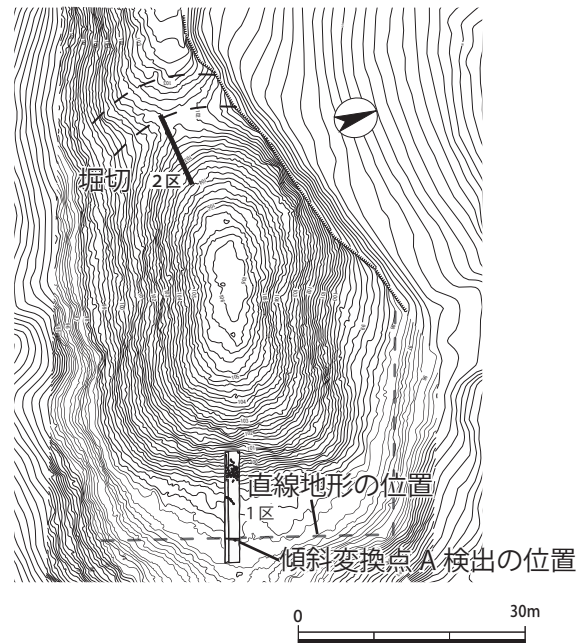
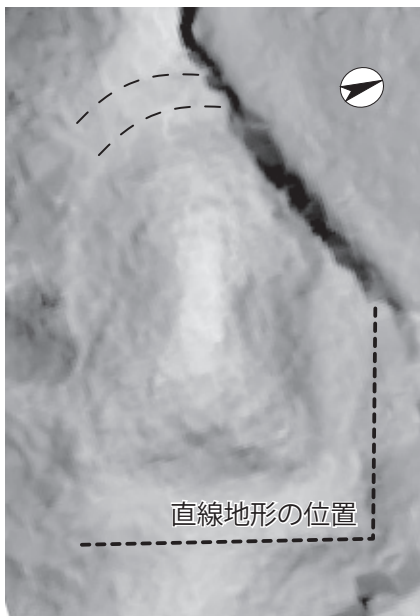


図11 赤色立体地図の重ね合わせ図（1：1,000）

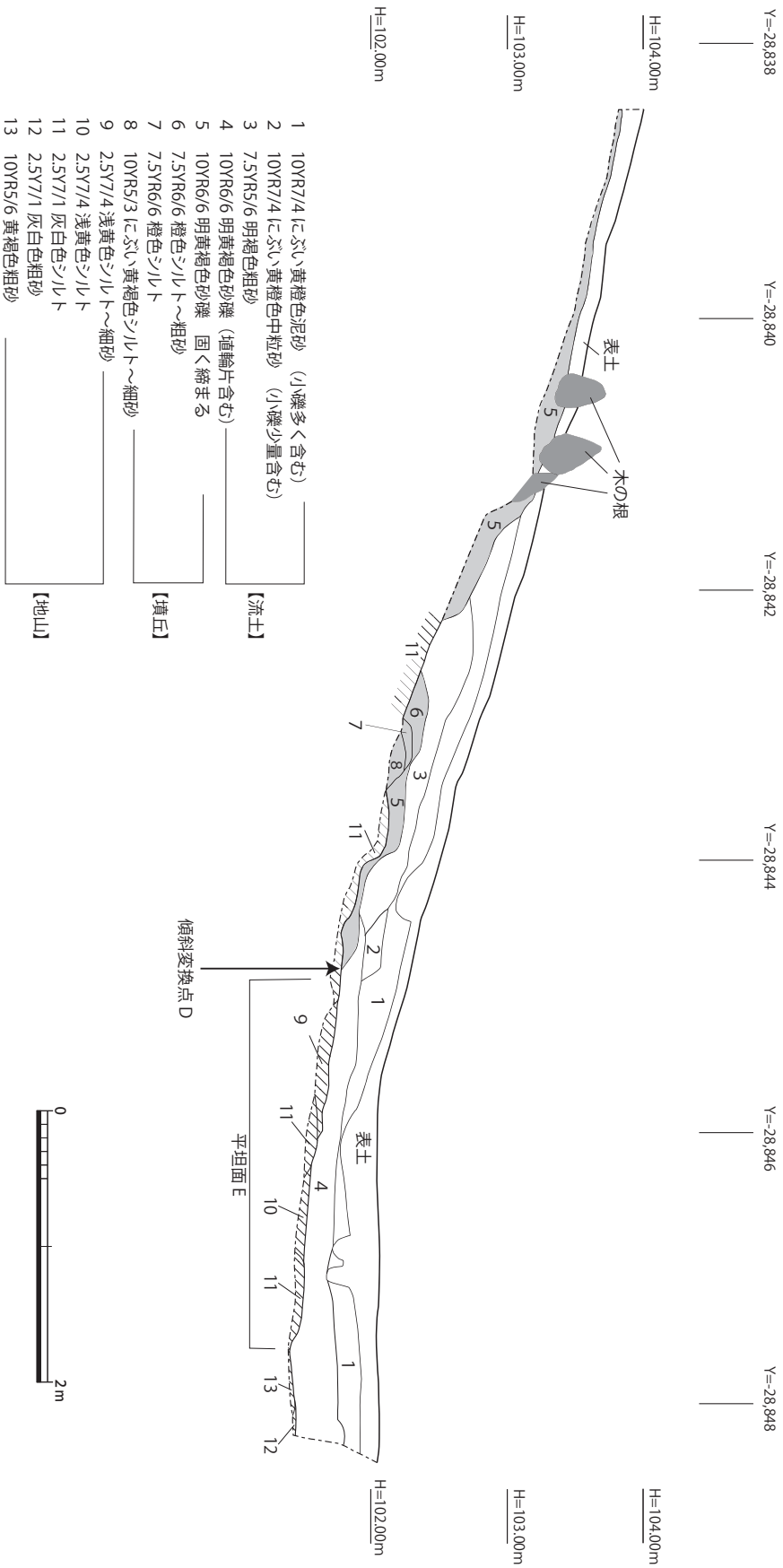


図 12 2 区断面図 (1 : 500)

傾斜変換点A 調査区東から約3.1 m地点で検出した傾斜変換点である。検出長は2 mであり、調査区の南北へ続く。平坦面Bから橙色シルト、灰白色シルト、小礫を多く含む褐色砂礫（図10-32・33・34層）の地山を0.2 m削り込む。傾斜変換点Aに堆積した土は、腐葉土を含む明褐色泥砂（図10-13層）と明褐色細砂（図10-14層）の2層に区分できる。さらに、この傾斜変換点Aの中央でピットを確認した。径0.3m、深さ0.3mである。埋土から遺物は確認できなかったものの、樹立している埴輪の底部径に近似することから、埴輪抜取痕跡の可能性はある。

また、今回確認した傾斜変換点Aの下面で平坦面Cを確認した。この平坦面Cは調査区の東端まで続く。この平坦面Cに堆積した流土内から埴輪片が多量に出土した。

今回確認した傾斜変換点Aの位置は、平成30年に赤色立体地図で確認した直線地形の位置と合致しており、測量成果を発掘調査により裏付けることができた。

## 2 2区（図12）

2区は次年度以降の調査計画策定のために設けた調査区である。後円部側の裾と想定される位置に幅0.7 m、長さ10 mで設定した。調査の結果、埴丘、傾斜変換点、平坦面、地山を確認した。なお、本調査区では葺石や葺石に由来するような転落石や埴輪が据えられた痕跡は確認できなかった。

### 基本層序

基本層序は表土以下、GL-0.1 mで小礫多く含むにぶい黄褐色泥砂、明褐色粗砂の流土（図12-1・3層）、-0.34 mで明褐色砂礫の埴丘、-0.48 mで灰白色シルトの地山である。

### 遺構

埴丘 標高102.95～103.84 mで確認した。固く締まる明黄褐色砂礫、橙色シルト～粗砂、橙色シルト、にぶい黄褐色シルト～粗砂（図12-5～8）があり、盛土の可能性も考えられる。

傾斜変換点D 標高102.95 m付近で確認した。また、傾斜変換点Dより東で平坦面Eを2.7 m確認した。さらに、平坦面Eに堆積した明黄褐色砂礫（図12-4層）から埴輪片が出土した。

## 5. 遺物（図13～17、図版18・19）

コンテナ8箱分出土した。取り上げた遺物の大半が埴輪で、流土内から出土したが、一部2号埴輪周辺で採集したのものがある。埴輪以外に須恵器と土師器が出土したが、細片である。図化できた遺

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	円筒埴輪、形象埴輪、須恵器、土師器		円筒埴輪42点、 形象埴輪8点		
合計		8箱	50点(2箱)	2箱	4箱

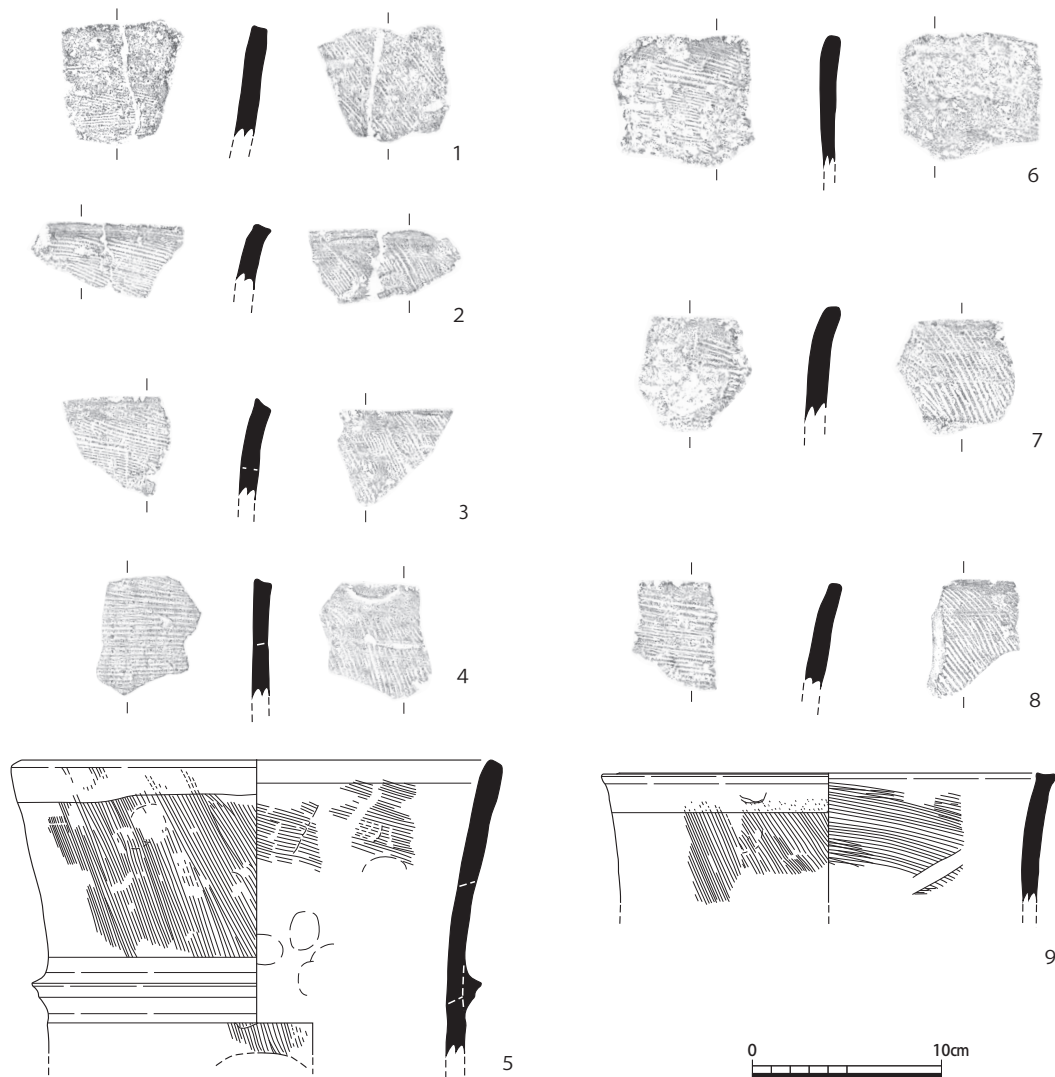


図13 出土埴輪実測図（口縁部）（1：4）

物は全て埴輪である。1～42が円筒埴輪で、43～50は形象埴輪である。

**円筒埴輪** 1～9が口縁部、10～31が胴部、32～42が底部である。径が正確に確認できるものは現地保存をおこなった埴輪列の埴輪（埴輪1～5・埴輪7）の底部である。底部径は埴輪1が18cm、埴輪2は19cm、埴輪3は18cm、埴輪4は19cm、埴輪5は18cm、埴輪7は18cmである。取り上げた埴輪は、全て欠片を復元したものであり、いずれの部位においても、径が全周するものはない。口縁部径を復元できたものは2つで、5が25cmで9が22.1cmである。底部径は13.2～18.6cmにおさまる（36～39、41・42）。5は口縁部から第一突帯までが11.8cmで、41は底部から突帯までは11cmであることが確認できた。透かし孔については完存するものはないが、30・31が孔径6～7cmに復元できる。

口縁部の形状は、直立するものが主体であるが（1、4～6、8・9）、端部が短く屈曲するものも見られる（2・3・7）。突帯が残存する埴輪（5・10～31・41）の断面形状はほとんどが

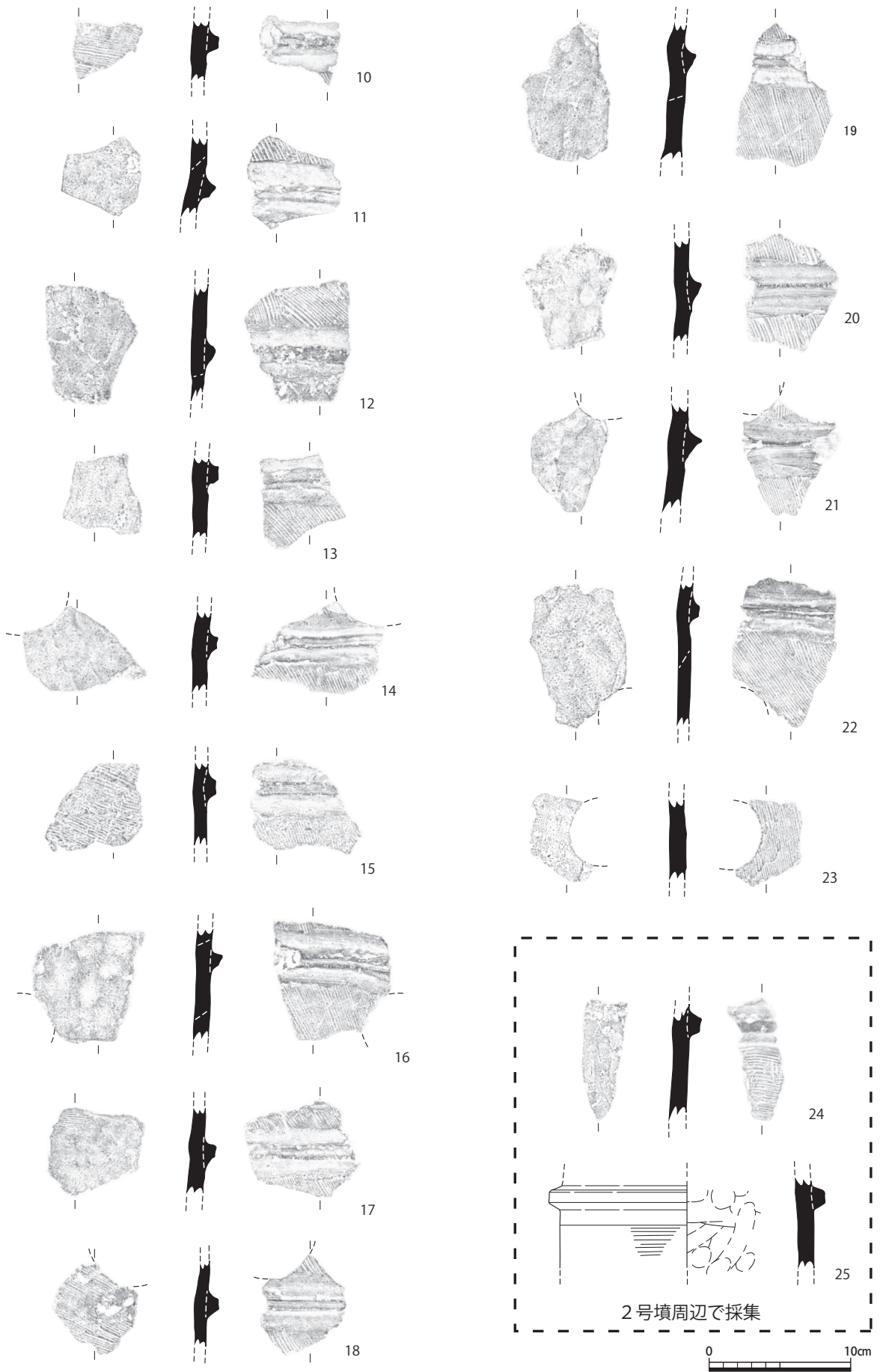


図14 埴輪実測図（胴部①）（1：4）

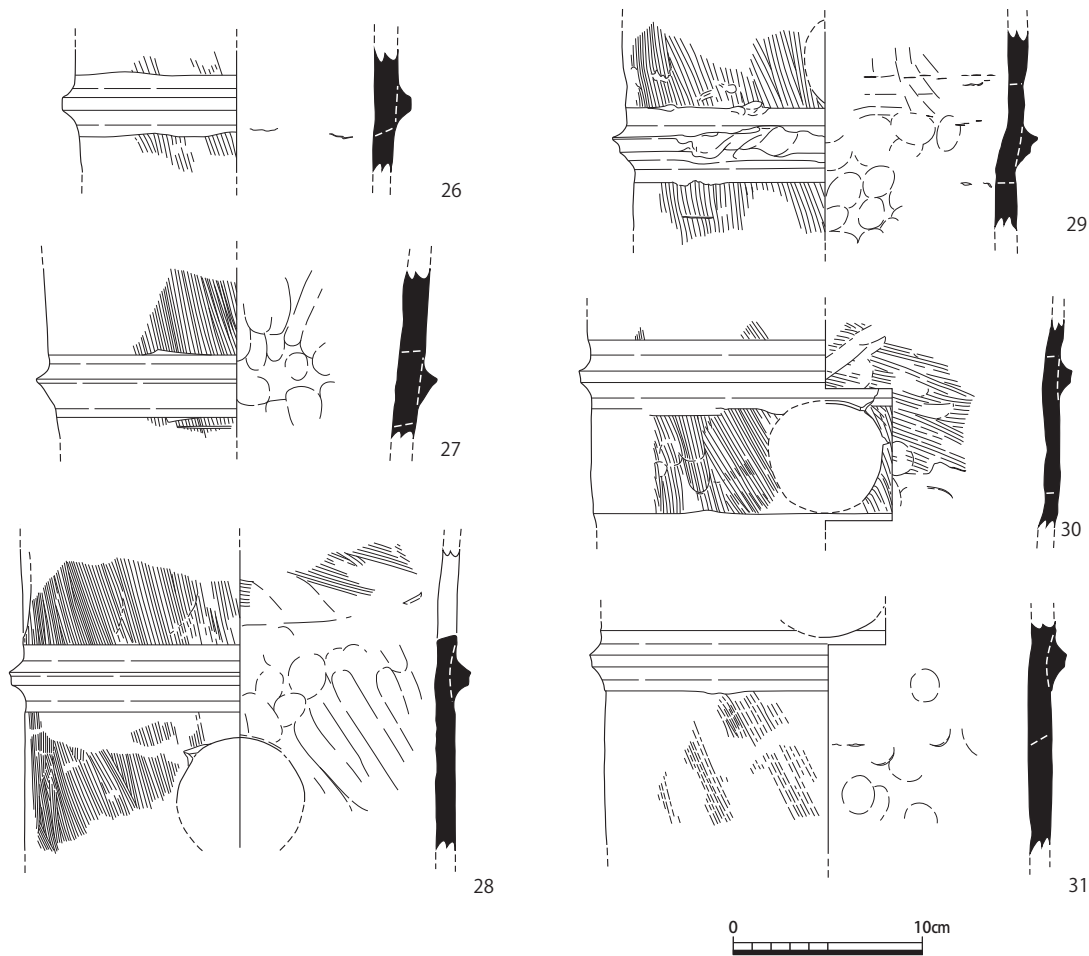


図15 出土埴輪実測図（胴部②）（1：4）

台形を呈する。5・19～21・27に関しては三角形を呈しているが、少量であることから、ナデの強さによって形が崩れている可能性がある。

焼成は穴窯焼成と考えられ、軟質（土師質）のものと硬質（須恵質）のものに区分できる。出土したほとんどが軟質のものであり、全体の98%を占める。8・9・22・29～31・35が硬質で、それ以外は軟質である。色調は、軟質がにぶい黄橙色で、硬質は外面が灰黄褐色で内面がにぶい橙色を基調とする。硬質の埴輪は焼成が良好で調整痕が明瞭に残存するが、軟質は焼成が不良のものも混在する。今回は焼成が良好なものに限って図化している。

調整は外面調整成形後にタテハケ、ナナメハケが施される。24・25は2号埴付近で採集したもので外面調整はヨコハケのみで、内面調整は口縁部から第一突帯にかけてナナメハケを施す。

胴部に関してはナデ、ユビオサエを施すものがほとんどであるが、ナナメハケが残るものもある。底部についてはユビオサエの痕跡が残り、41についてはツメの痕跡も多く残る。

刷毛目については、刷毛の条線は、7・10・13・17・26・28・29・32・36・37・41・42が（4本/cm）、2～4・6・8・9・13・14・19・22・24・25・27・30・31・34・36・40が（5本/cm）で、1・5・15～18・20・21・23・33・38が（6本/cm）が認められる。少なくとも3種類の原体が存在したと考えられる。なお、刷毛目の向きは全て左上がりである。



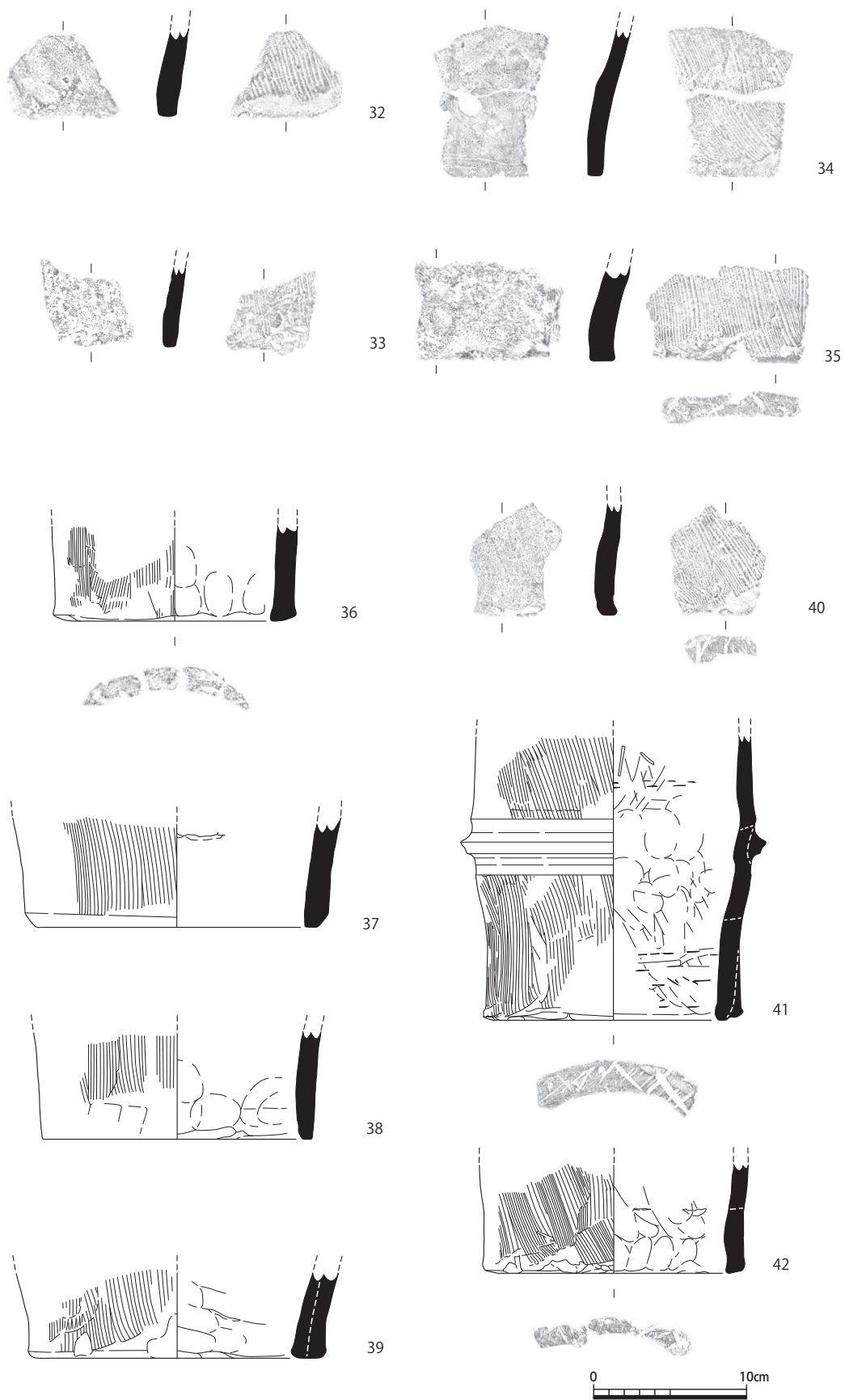


图16 出土埴輪実測図（底部）（1：4）

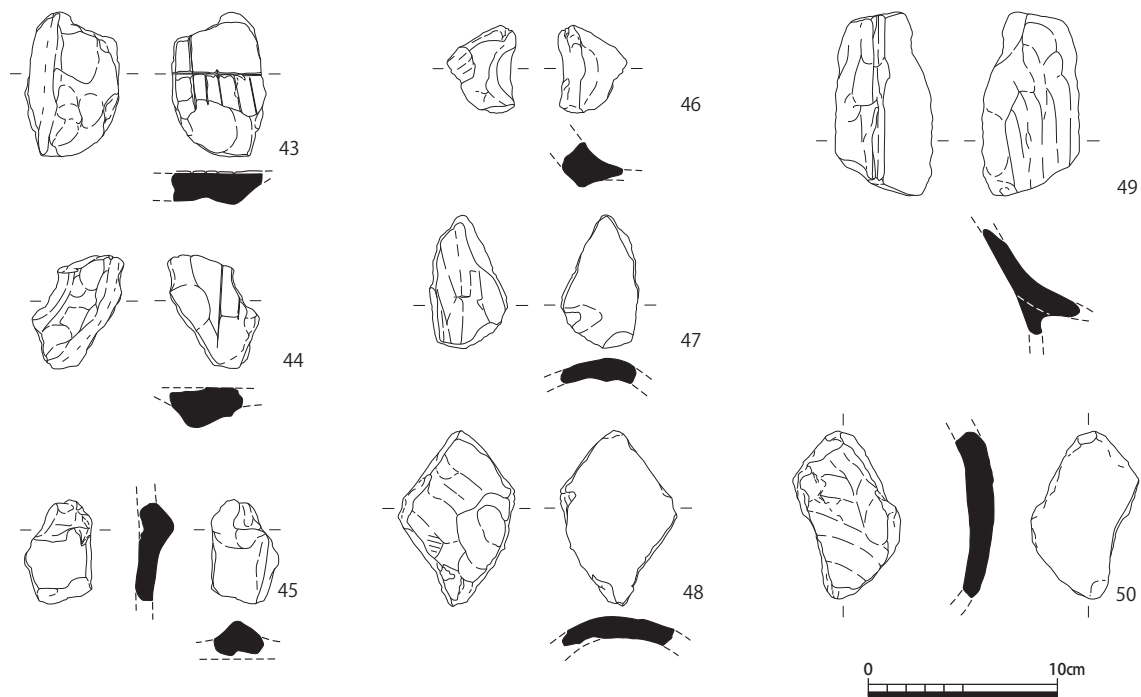


図17 出土埴輪実測図（形象埴輪）（1：4）

さらに、底部の底面に棒状の圧痕が数条見られる。軟質と硬質どちらにも認められるが、比較的硬質の方が明瞭に圧痕を確認することができる。35・36が軟質で、40・41・42が硬質である。この圧痕は作業中についたものと考えられる。

時期は古墳時代中期後葉、川西編年のIV期に位置づけられる<sup>9)</sup>。

#### 形象埴輪

形象埴輪は8点出土した。全て図化した。出土したほとんどが小片であることから、部位の確定は判断しがたい。43は縦に5条、横に1条の線刻がある。44は縦に2条の線刻が見られ、蓋形埴輪の「受皿」の可能性もある。45・46は先端が尖っており、人間か動物の体の一部分の可能性もある。47・48・50は破片が湾曲する。動物の脚部の可能性も考えられる。49はヒレがつくもので、家形埴輪の可能性もある。

## 6 まとめ（図18）

今回の調査では山田桜谷1号墳の前方部と後円部の裾部を中心に調査を実施した。

1区では墳丘、葺石、整地面、埴輪列、傾斜変換点A、平坦面B・Cを確認した。調査区南東側で確認した傾斜変換点Aについては、平成30年度の赤色立体地図で確認した直線地形の位置と整合することが明らかとなった。したがって、赤色立体地図で確認した直線地形がこの傾斜変換点Aであることが明らかとなり、古墳造営に伴う何らかの造成の可能性が考えられる。また、傾斜変換点Aに沿った位置に径0.3mのピットを確認した。このピットは現段階では、根攪乱である可能性も考えられるものの、その検出位置から埴輪の据付穴の可能性も考えられる。今回の調査区外でも赤

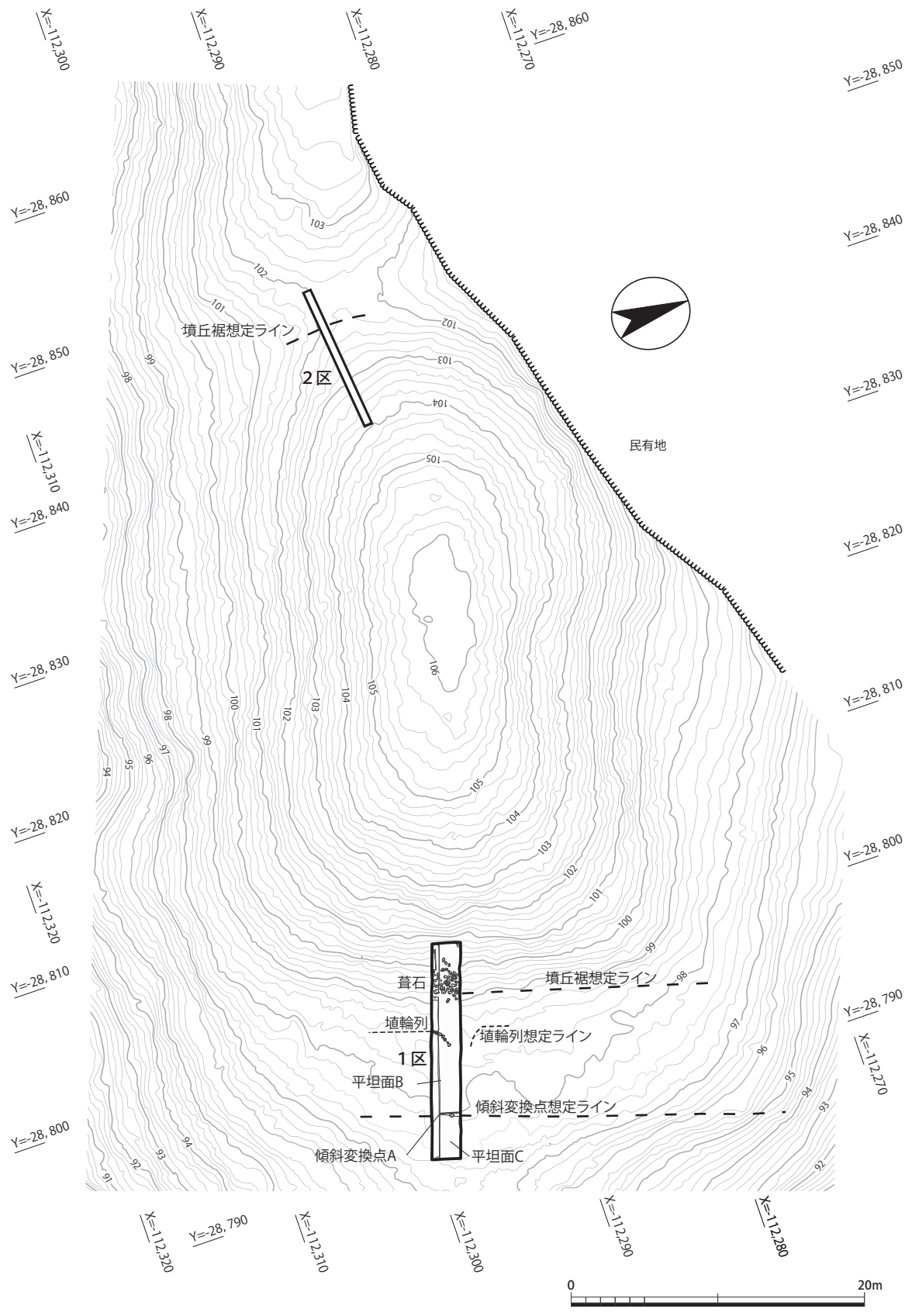


図18 墳丘復元図 (1 : 400)

色立体地図で確認した直線地形に沿った位置で同様のピットが展開する可能性も考えられる。

葺石については標高98.6 m～99.9 mの範囲で確認した。特に標高98.6 m付近で確認した4石は直線的に並べられており、上部に設置している石と比較すると一回り大きな石を使用していることから、基底石と判断できる。さらに葺石の構築方法として、墳丘ができた後、貼り石状に設置して埋め込んでいると思われる。また、今回確認した葺石には石の間に重なりが見られず隙間がある。このような設置状況の類例として、向日市の物集女車塚古墳<sup>10)</sup>や名古屋市の志段味大塚古墳<sup>11)</sup>などが挙げられる。物集女車塚古墳は6世紀前半に築造された古墳であるが、志段味大塚古墳は5世紀後半の築造とされている。葺石の衰退過程の中で石材を埋め込む技術が5世紀後半頃に出現していることが指摘されており<sup>12)・13)</sup>、今回の葺石の設置状況も5世紀後半の一資料と考えられる。

埴輪列に関しては基底石前面で7基の樹立する円筒埴輪を確認した。その内、埴輪1から埴輪3の3基は直線状に配置されているものの、埴輪3を軸にして東へ45度屈曲した状態で確認した。古墳の前方部前面に埴輪列が設けられる例として、桜井市の珠城山3号墳などがあげられる<sup>14)</sup>。前方部前面に直線的に25本の樹立する埴輪が確認された。ただし西側の2号墳との掘割りを埋め立て整地する際に樹立したものとされる。また、足利市の行基平山頂古墳では、前方部の前端から張り出したテラス状の平坦面に、原位置を留めた形象埴輪の底部が4基確認されており、形象埴輪を用いた祭祀区画があるとされる<sup>15)</sup>。

今回確認した埴輪列は東へ45度屈曲し、南東へ向く。古墳の眺望が良好に見える方向を意識している可能性がある。行基平山頂古墳は屈曲する埴輪列をなしてはいなかったが、今回の埴輪列は調査区東側で反転して屈曲する埴輪列が続く可能性も考えられ、テラス状の造出しが存在することも考えられる。また、形象埴輪は全てこの屈曲する埴輪列を確認した付近の流土から確認しており、葺石や墳丘裾付近では確認していないことから、埴輪列の周辺で形象埴輪が据えられていた可能性が考えられる。

2区では墳丘と傾斜変換点Dと平坦面Eを確認した。平坦面Eが東に2.7 m確認したことから、墳丘裾の可能性も考えられる。また、前方部の1区と比較すると、葺石・樹立した埴輪列の痕跡は確認できなかった。さらに、転落石も確認できなかったことや流土に含まれる埴輪片の出土量が少量であることから、場所によって葺石や埴輪列が施工されていない可能性が考えられる。ただし今回の調査区は狭小であるため、平面を含めたさらなる詳細な調査が求められる。

埴輪に関しては、今回出土した埴輪の大半は1区の流土内に含まれる円筒埴輪で、2区から出土した埴輪は少量である。法量は16～19 cm前後のもので、焼成が軟質と硬質に区分でき、刷毛目の原体の種類が3種類存在すること。少量であるが、底部底面に圧痕が認められること。また部位が小さいが、形象埴輪も確認することができた。線刻があるものや動物や人の可能性があるものも認められる。出土した埴輪の時期は川西編年のIV期に区分され、5世紀後半のものと判断できる。

以上、今回初めて山田桜谷1号墳の発掘調査を実施した。古墳の前方部を中心として調査を行い、古墳の裾及び外表施設を確認することができた。平成30年に作成した赤色立体地図と発掘調

査成果が整合したことで墳丘裾を明確化できたことや、遺存状態が良好な埴輪列と葺石の存在を発見できたことは大きな成果となった。今回の発掘調査成果を踏まえると、山田桜谷1号墳は現段階で図18のように復元できる。屈曲する埴輪列の展開については今後も引き続き範囲確認をしていく必要があることや、2区に引き続き、後円部側の詳細な調査を実施し墳丘裾を平面でも確認した上で、古墳の全長を確定していきたい。

(清水 早織)

## 謝辞

今回の調査及び整理作業において土地の所有者である林野庁をはじめとした多くの方々にご協力・ご指導を賜った。末筆ですが記して感謝の意を表します。

(所属・敬称略、五十音順)

京都府教育委員会、京都府京都林務事務所、(公財)向日市埋蔵文化財センター

一瀬和夫、内田真雄、梅本康弘、河内一浩、田原葉月、廣瀬覚、丸川義広、南孝雄、和田晴吾  
註

- 1) 丸川義広・上村和直「山田桜谷古墳群」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1988年。
- 2) 『乙訓古墳群調査報告書』京都府教育委員会 2015年。
- 3) 『京都市の地名 日本歴史地名体系27』平凡社 1979年。  
『史料 京都の歴史15 西京区』平凡社 1994年。に詳しい。
- 4) 1) 文献
- 5) 標智仁ほか「山田桜谷1号墳測量調査報告」『第41とれんち』京都大学考古学研究会、1989年。
- 6) 石川政澄ほか「山田桜谷地域調査報告」『第42とれんち』京都大学考古学研究会、1990年。
- 7) 清水早織・新田和央「IV - 6山田桜谷古墳群(18A006)」『京都市内詳細分布調査報告書 平成30年度』京都市文化市民局、2019年。
- 8) 清水早織「IV - 6山田桜谷古墳群(20A006)」『京都市内詳細分布調査報告書 令和2年度』京都市文化市民局、2021年。
- 9) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、1978年。
- 10) 「物集女車塚古墳」『向日市埋蔵文化財調査報告書第23集』向日市教育委員会、1988年。
- 11) 藤井康隆編『志段味大塚古墳・大久手古墳群』平成17年度大久手池周辺埋蔵文化財調査報告書、名古屋市教育委員会、2006年。
- 12) 廣瀬覚「葺石の成立・展開と地域間の交流」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会、2008年。
- 13) 「物集女車塚古墳」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第88集、(財)向日市埋蔵文化財センター、2011年。
- 14) 丹羽恵二・橋爪朝子「国史跡珠城山古墳-第4・5次調査及び史跡整備報告書-」桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書29集、桜井市教育委員会、2007年。
- 15) 『行基平山頂古墳発掘調査報告書-第1次~第4次発掘調査の調査報告- 足利市埋蔵文化財調査報告第72集』足利市教育委員会事務局、文化課、2018年。





図2 倒木状況（北東から）



図3 危険木伐採状況（北西から）



図4 倒木除去後状況（北東から）



図5 調査風景（西から）



図6 西櫓台養生状況1（北東から）



図7 西櫓台養生状況2（南東から）

今回の調査地は、大手道と推測される東側からの登城道が通る郭3の虎口（城門）である。付近には石材が点在しており、虎口を構成する石塁を伴う土塁状の高まりが指摘されていた<sup>3)</sup>。ここで倒木が発生し、石材への接触が確認されたことから、倒木及び危険木を撤去し、石垣の棄損状況及び遺構の性格の把握、崩落を防止するための緊急調査を実施することとなった（図2～7）。

調査は令和4年11月7日から樹木伐採・危険木除去を開始し、腐葉土を除去したところ、土塁状の高まりを囲う石垣を検出した。清掃、写真撮影、オルソ測量を実施した後、石垣の崩落を防止する養生、埋め戻しを行い、11月28日に現地での全ての作業を終了した。調査面積は198㎡である。

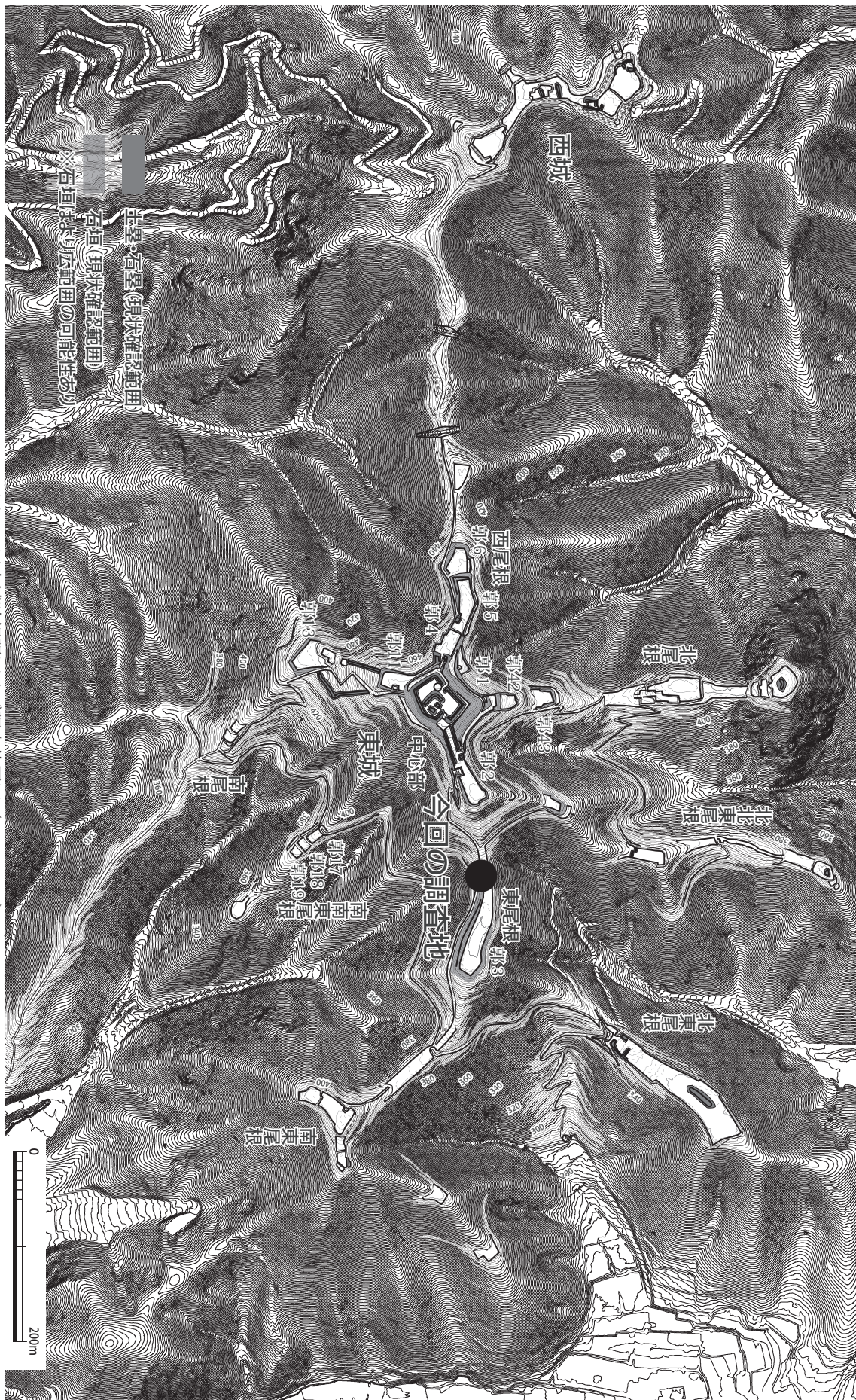


図8 周山城跡縄張り図及び調査位置図 (1 : 6,000)



## 2. 遺 跡

### (1) 位置と環境

周山城跡は、北東から流れる桂川と北北西から流れる弓削川の合流点西側、標高509.4mの黒尾山に至る丘陵尾根上に展開する東西約1.4km、南北約0.7kmに及ぶ山城である。周山城は、山麓に京都と日本海側を結ぶ長坂街道（現在の周山街道）が通るほか、近江、丹波へと続く街道を眼下に収め、水運・陸運が交差する交通の要衝に立地している。また、城の北東には禁裏御料地であった山国荘、北側の弓削川上流には中世後期に天龍寺領になった弓削荘が存在する（図1）。

周山城跡には、尾根を東西に分断するように二つの大きな堀切があり、堀切東側を「東城」、西側を「西城」とする。東城は標高約480mをピークとする丘陵頂部を「中心部」として、8つの支尾根に放射状に郭が構築されている（図8）。個々の尾根上に展開する郭の特徴については平成29年度報告書でまとめられており<sup>4)</sup>、中心部と支尾根間、郭間、また支尾根間を行き来できるような「道（城道）」の存在を明確にし、相互の連絡についても推定できるようになった。

一方の西城は、東西200mに渡って広がる郭群で、西端、中央、東端に主要な郭が分布する。東城と異なり、現状では石垣は確認されておらず、「石垣を多用」した東城に対して、西城は「土の城」と言われてきた<sup>5)</sup>。ただし、赤色立体図を検討したところ、柵形を意識した虎口空間が認められきたことから、東城と一体となった機能を有しているとの視点で捉えていく必要がある。

### (2) 周山城の歴史

周山城の歴史及び既存調査については、令和2年度報告書に詳細が記されているため、ここでは簡潔な記述に留める<sup>6)</sup>。

天正3年（1575）に始まる明智光秀の丹波侵攻前夜の旧京北町一帯は、山国荘西部の宇津郷を本貫地とする宇津氏が勢力を広げ、近隣の荘園村落に侵入を繰り返していた。16世紀前半以降、宇津氏に対し度々違乱を停止する命令が幕府より発出され、永禄12年（1569）には、宇津頼重に対し、光秀を含む織田家家臣が、禁裏領である山国荘に対する違乱を止めるよう連署状を出している。

天正3年、信長は、宇津氏・内藤氏征討のため光秀を差し向ける通達を発し、丹波侵攻を開始するが（第一次丹波侵攻）、翌年、赤井直正（荻野直正）の籠もる黒井城（兵庫県丹波市）攻めに失敗、一時撤退する。光秀は、同5年に再度丹波侵攻を開始し（第二次丹波侵攻）、同7年には八上城（兵庫県丹波篠山市）、宇津城、黒井城を落城させ、丹波・丹後の攻略を果たしている。

この功により丹波一国を拝領した光秀は、口丹波に築いていた亀山城を領国支配の拠点とし、丹波各所に一族や重臣を置き、支配の強化を図っている。中丹波は八上城に明智光忠、福知山城に明智秀満、西丹波は黒井城に齋藤利三を配し、東丹波の拠点として築城したのが周山城である。

周山城について触れた同時代史料は極めて少なく、『津田宗久茶湯日記』天正9年（1581）8月条に、津田宗久が明智光秀に招かれて月見と連歌会を催したことがわかるほか、『兼見卿記』天正

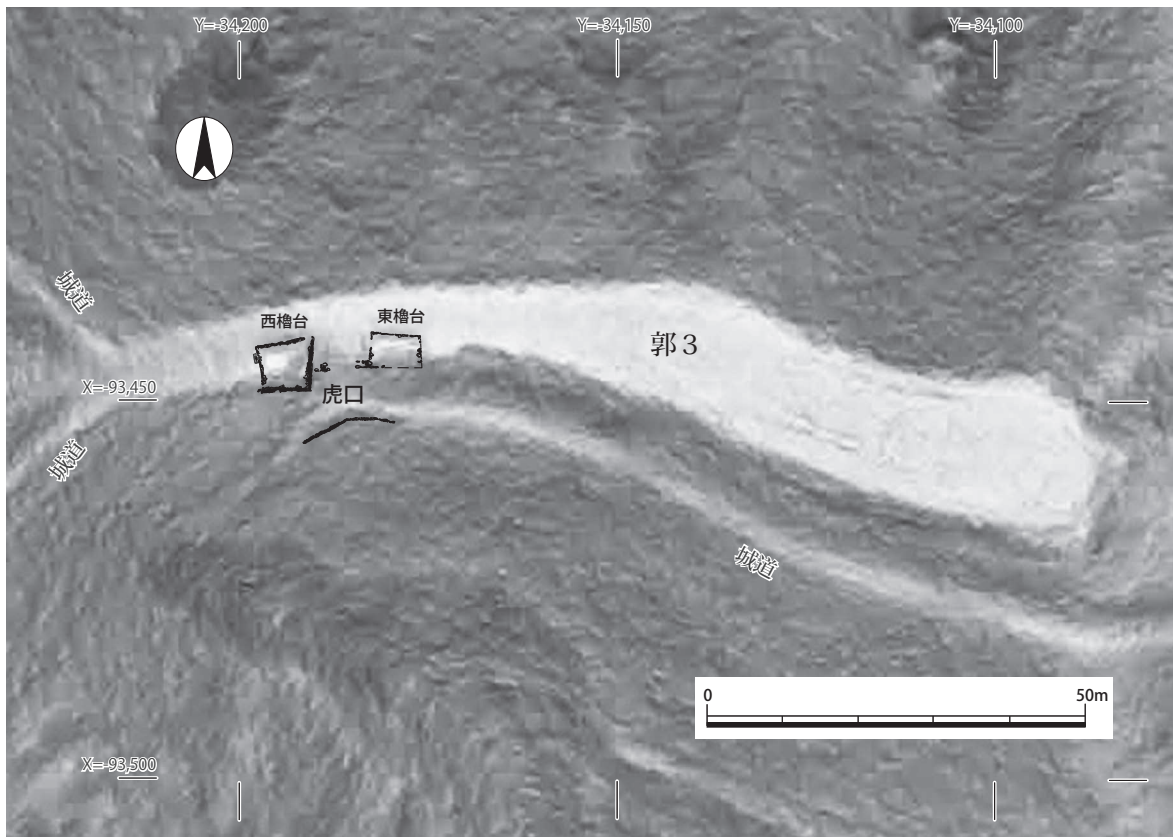


図9 遺構位置図（1：1,000）

12年（1584）2月4日条に、羽柴（のち豊臣）秀吉が周山城に向かったことが分かる程度である。上記史料からは、周山城が同9年には築城されていたこと、光秀が同10年（1582）6月13日の山崎の合戦で敗れた後も、少なくとも同12年頃までは存続していたと考えられる。

また、年号不明なもの光秀の娘、玉（ガラシャ）を母とする細川忠利（1586～1641）の書状に、周山城を明智源七郎に預けていたことが記されており、周山城にも一族を配し重要視されていたことがわかる<sup>7)</sup>。

郭3については、これまで調査事例は無いが、京北小中学校所蔵『周山図』では「兵糧蔵」、初川家所蔵の『周山城図』では「長蔵□」に比定できる郭である。

### 3. 遺 構（巻頭図版4・5、図9～16、図版20～22）

郭3は東西長約122m、南北幅最大約20mで東西に細長く、方形を意識した平面形を呈する。本丸から東に延びる尾根を利用して平坦面を成形しており、周囲を石垣が巡る。郭3は、東側から本丸へと向かう大手道と想定される城道が通ることに加え、北北東尾根、南東尾根、南南東尾根へと城道が通じている。虎口は、郭南西隅の尾根の付け根に築かれており、東西に一部石材が露出した

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
安土桃山時代	櫓台、櫓台階段、虎口階段、土坑、下段石垣	



図10 調査区平面図 (1 : 150)

土塁状の高まりが残る。倒木は西側の高まりの一角で発生したため、遺構の毀損状況及び性格、被害状況の把握を目的に、西側の高まりを中心に調査区を設定した。倒木撤去後の高まりは、大半が土砂に覆われていたが、表土直下で石垣及び裏込めを検出、東西の高まりは石垣が四周を巡る櫓台であることを確認した。その後、虎口南斜面の城道沿いの石垣下段石垣にも倒木の影響が認められたため、状況確認のため石垣の清掃を行った。

### 郭3 虎口 (図9～16)

虎口は、東西の櫓台及び階段、下段石垣から構成される。東からの城道に対し、西櫓台南面は東櫓台に比べ約3.5 m南側に張り出す。なお、石垣に使用された石材は、付近で採取可能なチャート



图11 西榭台平面图 (1 : 80)

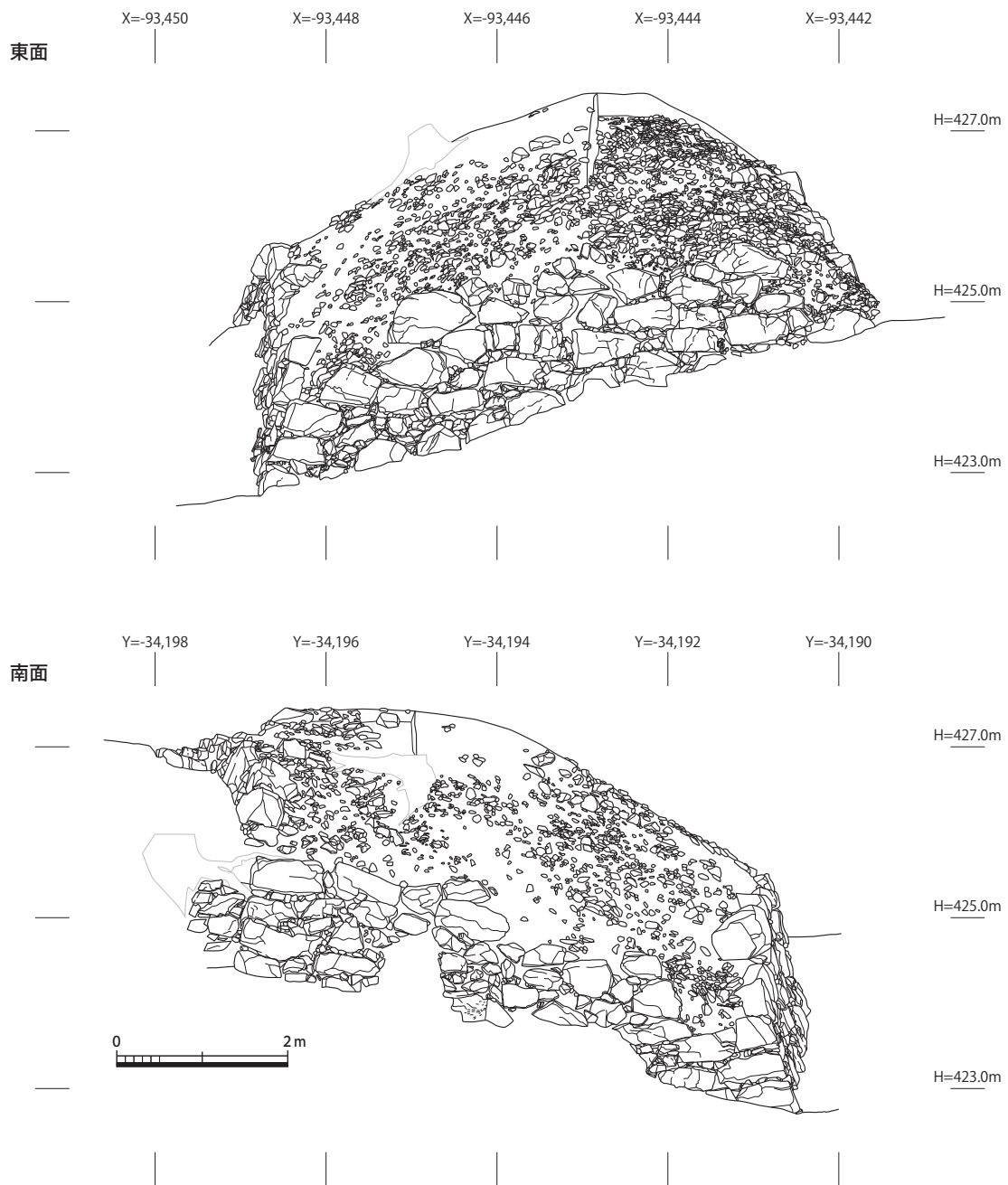


図12 西櫓台石垣立面図1 (1:80)

の割石を主体とし、一部に砂岩が認められる。矢穴が残る石材は認められなかった。

西櫓台 四周に石垣が巡り、北面7.8m、南面6.6m、西面6.2m、東面7.2mのやや歪な方形を呈する櫓台である。西面南西隅角部付近で郭2へと続く城道に沿った石垣と入隅をなす。櫓台内部は中央部が盛り上がり、表土直下で、チャートの角礫、円礫が充填されている状況を確認した。礫は各面石垣の裏側1.5m付近を境に径が異なり、石垣沿いには長径10～15cm、櫓台中央部は長径5～10cmのものを主体とすることから、石垣直近の礫は裏込めの栗石と判断できる。櫓台上面では明確な建物遺構は認められなかったが、西面に郭内から櫓台に上るための階段を備える。

東面の石垣は最大で4段、高さ1.8mが残る。勾配は75度である。南東隅には3段残り、隅部は稜線が通る。角石は稜線が明瞭に残る。北東隅の上部は崩され、長軸80cmの基底石のみが残る。築

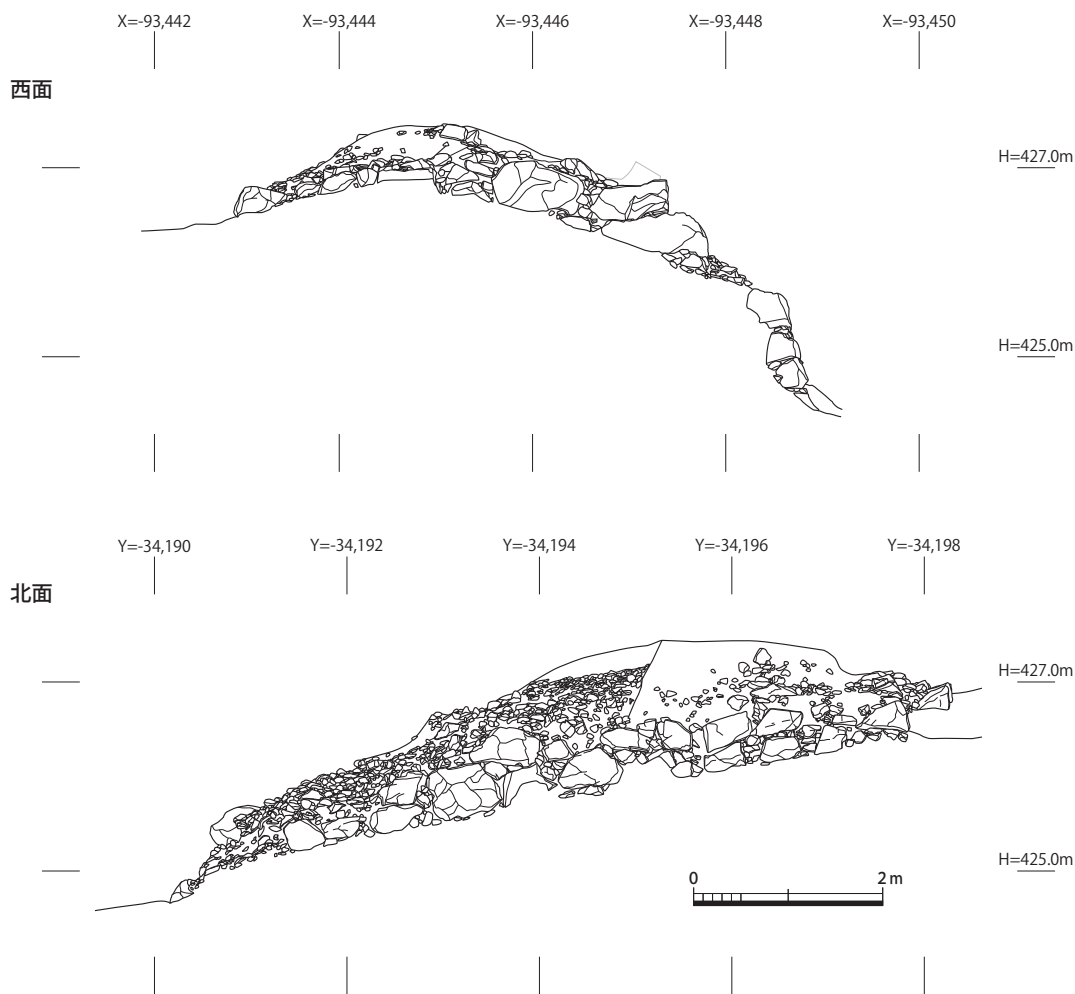


図13 西櫓台石垣立面図2 (1:80)

石は長径35～60cm、短径25～40cmのものを主体とするが、60～100cmの大振りのものも多い。部分的に水平方向に目地が通る。間詰石は、長径5～15cmの角礫を用い、間隙は少なく密である。東面石垣は崩落が著しく、前面に築石や裏込め由来の石材が多数転落している。

南面の石垣は最大で5段、高さ2.4mが残る。勾配は75度である。南西隅には4段残り、隅部の稜線が通る。角石は稜線が明瞭に残る。基底部から順に短軸、長軸を互い違いに組み合わせているが角脇石は認められない。短軸は55cm前後、長軸は75～80cm前後である。築石は長径40～60cm、短径20～40cmのものを主体とする。目地は通らない。間詰石は長径5～15cmの角礫を用い、間隙は少なく密である。南面石垣は崩落が著しく、前面に築石や裏込め由来の石材が多数転落している。

西面の石垣は最大で2段、高さ0.3mが残る。北端寄りには郭内から櫓台に登るため、階段が張り出す。階段の幅は1.2m、出は0.6mで、3段で石垣に取り付く。踏面は20cm前後、蹴上は15～20cmである。踏石には長径20～55cmの不揃いの石材を使用している。築石は長径20～100cm、短径15～50cmを測る。間詰石は少なく、間隙が多い。

北面の石垣は最大で2段、高さ0.8mが残る。勾配は74度である。北西隅には長軸50cmの基底

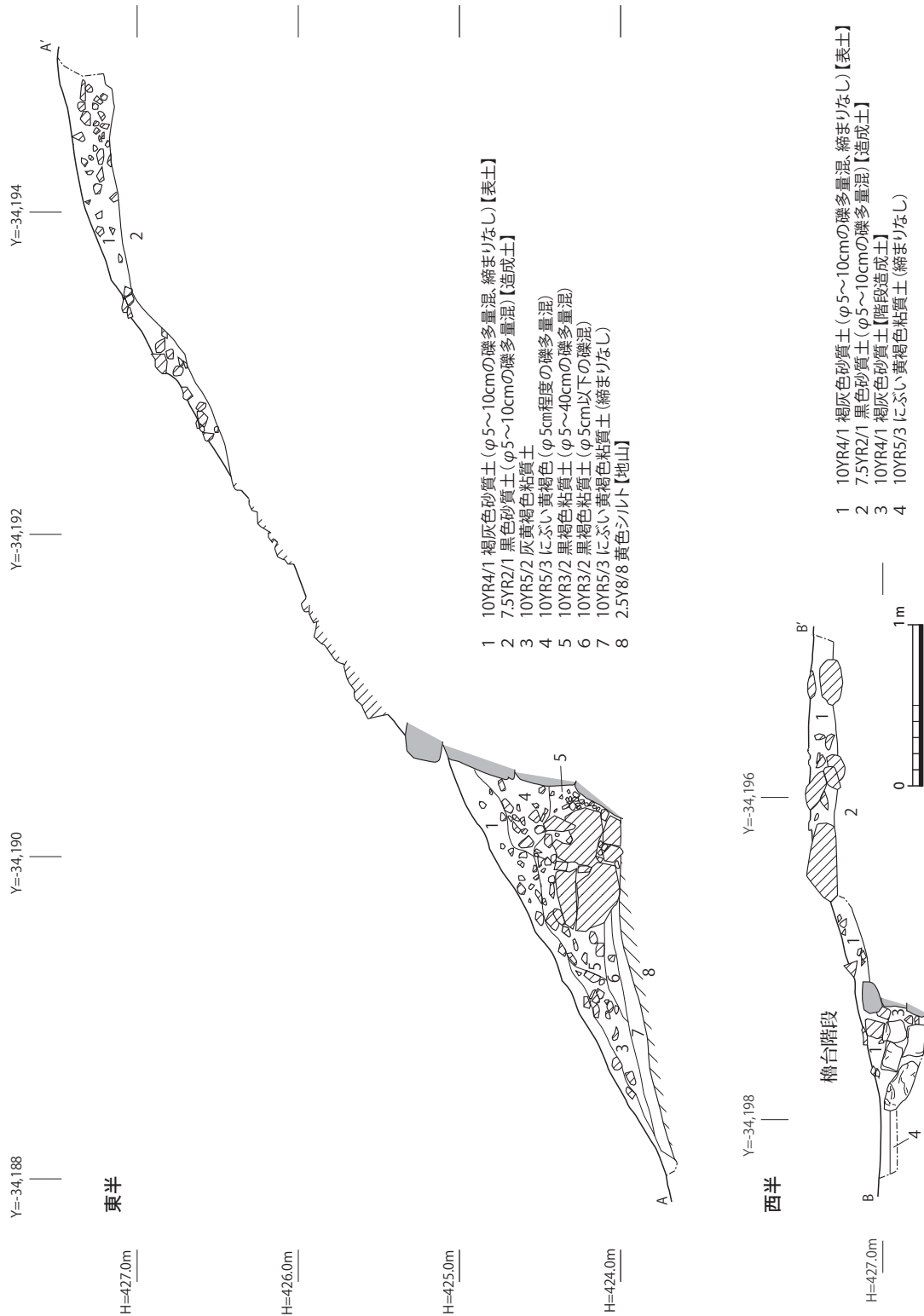
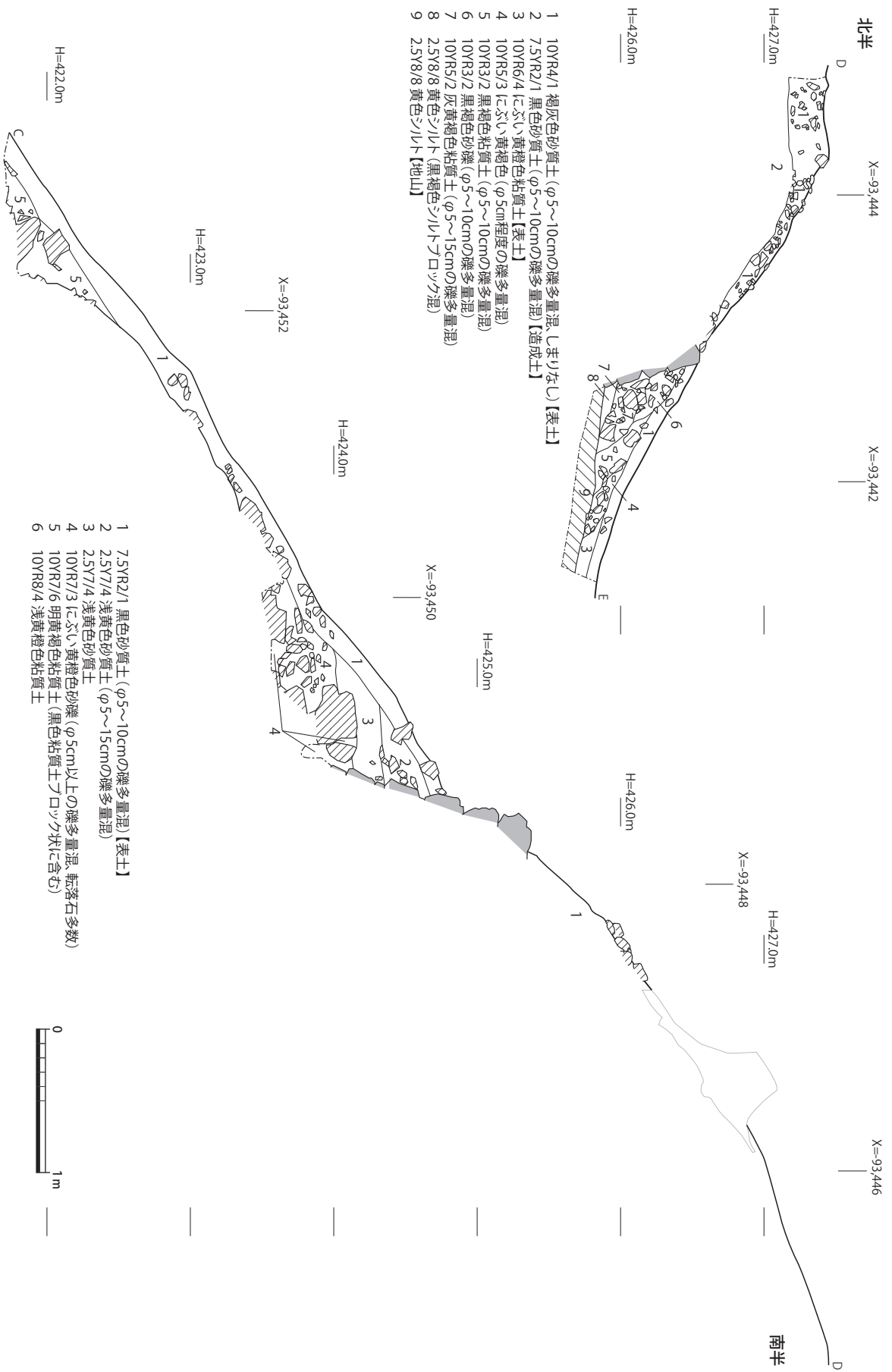


図14 西櫓台東西セクション (A-A'・B-B') 図 (1:40)

石のみが残る。築石は長径30~50cm、短径20~30cmのものを主体とし、大きいものでは長径60cmを測る。築石の間には長径15cm前後のチャートの角礫を用いて間詰石としているが、間隙が目立つ。断割りを行なった北面中央部分では、築石基底部は削り出した地山直上に栗石を置き、築石長軸を据え、地山由来の明黄褐色シルトで築石裾部を覆うことを確認した。

東櫓台 東櫓台は、後述する虎口階段の幅を確認するため西面のみ表土を除去し、石垣の清掃に



- 1 10YR4/1 褐色砂質土 (φ5~10cmの礫多量混、しまりなし)【表土】
- 2 7.5YR2/1 黒色砂質土 (φ5~10cmの礫多量混)【造成土】
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土【表土】
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色 (φ5cm程度の礫多量混)
- 5 10YR3/2 黒褐色粘質土 (φ5~10cmの礫多量混)
- 6 10YR3/2 黒褐色砂礫 (φ5~10cmの礫多量混)
- 7 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (φ5~15cmの礫多量混)
- 8 2.5YR/8 黄色シルト (黒褐色シルトヲロットク混)
- 9 2.5YR/8 黄色シルト【地山】

- 1 7.5YR2/1 黒色砂質土 (φ5~10cmの礫多量混)【表土】
- 2 2.5Y7/4 浅黄色砂質土 (φ5~15cmの礫多量混)
- 3 2.5Y7/4 浅黄色砂質土
- 4 10YR7/3 にぶい黄褐色砂礫 (φ5cm以上の礫多量混、転落石多数)
- 5 10YR7/6 明黄褐色粘質土 (黒色粘質土ヲロットク状に含む)
- 6 10YR8/4 浅黄褐色粘質土



図 15 西櫓台南北セクション (C-D-E) 図 (1 : 40)



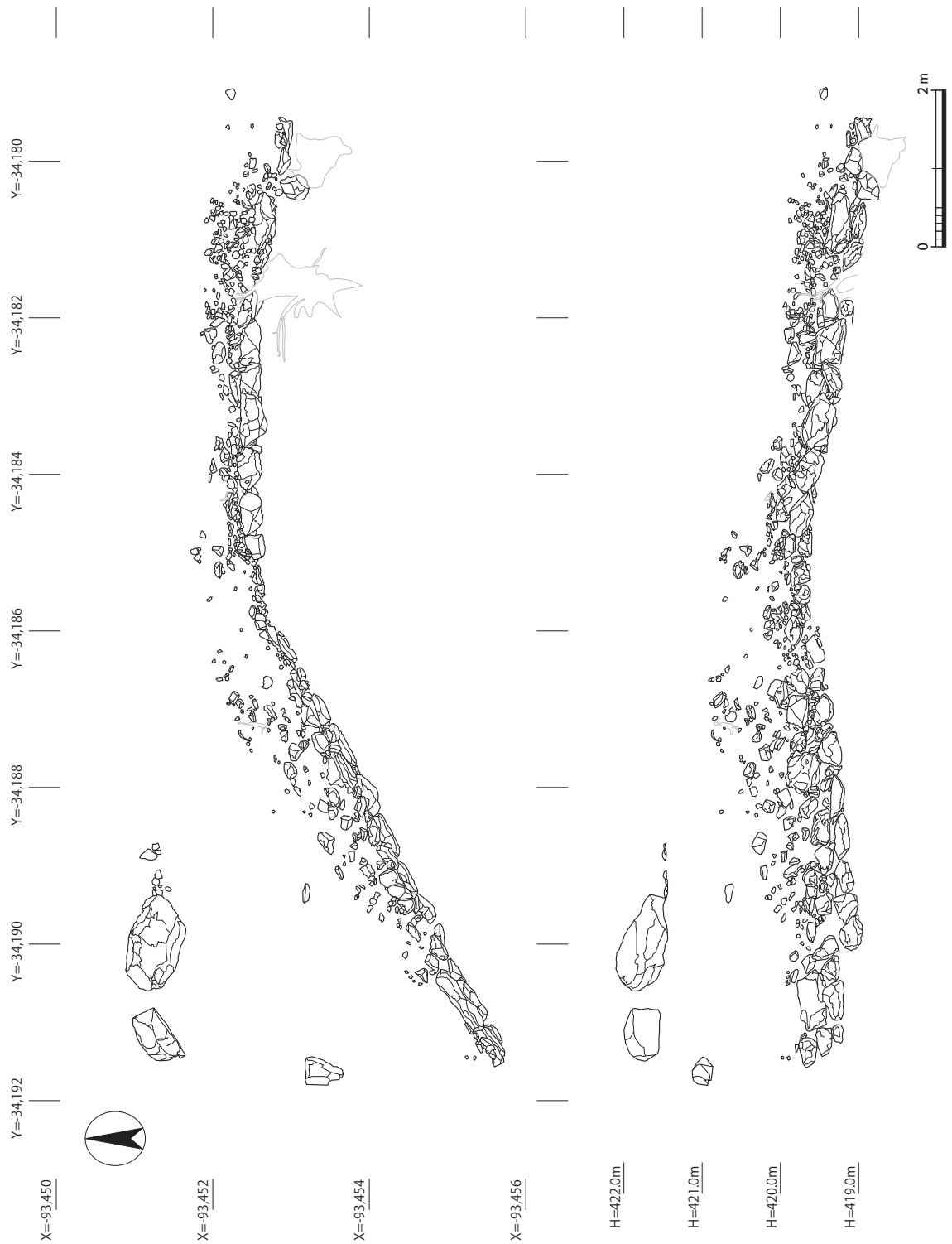


図16 下段石垣実測図 (1 : 80)

留めた。櫓台の平面形は台形を呈し、東西6.5～7.0m、南北4.0～4.6mを測る。土塁状の高まりは約1m分の高さが残る。四周に石垣が巡るが、南面は石垣の崩落が著しい。南東隅各部付近で郭3南面の石垣に接続すると考えられるが、土砂に覆われ、確認できなかった。西面の石垣は1段分のみ確認でき、長径40～75cmのチャートの割石を用いる。

虎口階段 東西の櫓台に挟まれた石製階段である。2段分が確認できた。東西櫓台間は7.3mを測るが、石材は東西櫓台側でのみ残存し、中央部分は流出している。踏石は長径20～70cm、短径

30～55cmの不揃いの角礫、円礫を用い、平坦面を踏面とし長径側の辺を揃える。蹴上は20～30cm、踏面は55cmである。

土坑1 西櫓台北西隅東側に位置する土坑である。南北2m、東西1.5m以上の円形を呈する。5～15cmの角礫が充填されている。1基のみの検出に留まるが、虎口に伴う門施設の礎石根固めの可能性が考えられる。

下段石垣 東からの城道沿いに構築された石垣である。長さ12m分の清掃を実施した。西端で石垣は途切れるが、東側へは城道に沿ってさらに続く。東半は城道に並行しているが、西端から4m付近で南西方向に約30度屈曲する。石垣上部に地山を削り出した幅80cm以上の平坦面が作り出されていることから、南南東尾根とを結ぶ城道を補強するものと判断できる。石垣の高さは0.35～0.75mで、最大3段が残る。築石にはチャートの自然石を用いる。石材は長径20～75cm、短径15～35cmのものを用いるが、不揃いである。間詰石にはチャートの角礫を用いるが、間隙も多い。基底石は斜面を平坦に成形した上に長径の辺を揃え、直接据え付けられている。築石背後には20cm以下のチャートの角礫が露出する部分が認められ、裏込めを伴うものと考えられる。

## 4. 遺物 (表2・図17)

出土した遺物は瓦片及び鉄釘のみである。1は丸瓦である。凸面に縦ケズリを施し、凹面に布目と吊り紐痕が残る。側面側及び側面は縦ナデを施す。焼成は良好で硬質、胎土に黒色砂粒を少量含む。虎口南の下段石垣外側の斜面から表採したものである。2は西櫓台北外側表土から出土した平瓦である。凹面はナデ、側面、凸面はケズリを施す。厚さ2.2cmを測る。焼成は良好で硬質、胎土に1mm以下の砂粒を含む。3は鉄釘である。体部の断面形状は一辺0.37～0.4cmの四角形で、下半は欠損する。上半を折り曲げて頭部としている。西櫓台北西隅外側表土から出土した。

## 5. まとめ

郭3は、大手道と目される東側からの城道が二之丸(郭2)、本丸(郭1)の中心部へと向かう際に通る必要があることに加え、北北東尾根、南東尾根、南南東尾根へと城道が通ずる防御上極めて重要な立地とされる<sup>8)</sup>。今回、倒木発生に伴う緊急調査によって、土砂に被覆されていた虎口について詳細な情報を得ることができた。ここでは、その特徴について述べ、まとめとしたい。

### 郭3虎口について

郭3虎口は、塁線に沿った石垣と接続する東西2箇所櫓台と櫓台に挟まれた階段で構成され

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
安土桃山時代	瓦類・金属製品		瓦2点、釘1点		
合計		1箱	3点(1箱)	1箱	

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

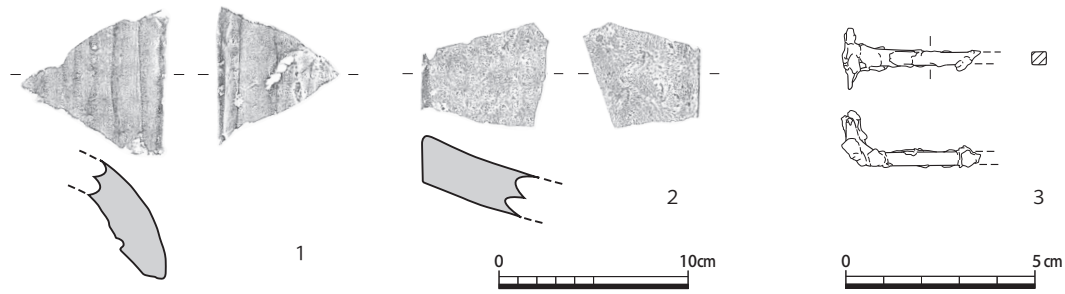


図17 遺物実測図（瓦1：4、金属製品1：2）

る。階段上部の径1.5m以上ある土坑1が礎石根固め痕であるとすれば、相応の規模を持つ城門の存在が想定できる。また、西櫓台は東櫓台より約3.5m南に張り出し、郭内から西櫓台へ上がる階段が取り付くことから、上部に何らかの構造物が存在していたことも明らかとなった。調査成果を踏まえると、郭3虎口は、石塁を備えた土塁という単純な構造ではなく、横矢掛けを可能とするいわゆる「喰い違い虎口」の機能を備える強固な防御施設と判明した。防御上の要となる郭3の重要性を裏付ける成果といえよう。

なお、今回の調査で、本丸が所在する中心部以外では初めて瓦の出土を確認した。しかし、丸瓦、平瓦が1点ずつの確認に留まることから、郭3における瓦葺き建物の存在は不明瞭である。

#### 西櫓台について

西櫓台は、四周を石垣で囲う東西7.8～6.6m、南北6.2～7.2mのやや歪な方形を呈する。西櫓台の構造の特徴は以下の通りである。

石垣 使用された石材は、付近で産出されるチャートの自然石が大半であり、一部砂岩が用いられる。東面では水平方向に横目地が通る箇所も認められるが、全面に及ぶものではない。築石には、長径30～50cm、短径20～40cmの石材を多用しているが、東からの城道から視認される東面には、60～100cmを測る大振り of 石材が多数用いられる。西櫓台南東隅下の斜面には、鏡石の機能を備えたであろう1.2mを超える転落石が残る（図版22-3）。築石の隙間には、長径5～15cmの角礫が間詰石として使用されている。石垣の裏込めについては、各面の内側約1.5m厚で櫓台中央部の礫と径が異なり、石垣裏側は長径10～15cm（櫓台中央部は長径5～10cm）と一回り大きく、裏込めの栗石と判断できる。

石垣の高さについては、西櫓台が平坦面隅部の地形変換点に立地することから各面によって異なり、機能時の地表面からの比高は西・北面で0.3～0.8m、東・南面で1.8～2.4mと大きく異なる。一方、櫓台上面の現地表面との比高は、北面で1.1～2.7m、西面で0.6～1.1m、東面で2.7～4.7m、南面で3.7～4.7mを測ることから、本来は南面で最大で約5m程度の高さがあったと想定される。石垣の勾配は概ね75度前後となる。

隅角部については、稜線を持つ石材を選択して角石としている。特に南西隅では、基底部から順に短軸、長軸を互い違いに組み合わせており、いわゆる「算木積み」を意識した構築方法といえる。一方で角脇石は認められず、複数の小石や築石で代用されるほか、南東隅部では角石に長短軸の重ね積みは一部しか認められないことから、「算木積み」への発展段階を示すものといえよう。

櫓台の平面系が歪な方形を呈することや隅角部の構築方法から、西櫓台も天正年間に築造されたものと考えられる。

破城について 四面の隅角部はいずれもV字状の欠落部分が顕著である。これは隅角部を破壊することで、石垣の修復を困難とし、その機能を大きく低下させるために行う破城特有の行為である。南東面下部には、多数の築石や角石と捉えられる石材が多く認められ、これを裏付けている。転落石は機能面直上で数多く認められたことから、廃城後間もなく破城されたことを示している(図版21-1)。

下段石垣について 虎口南斜面で確認した城道沿いの石垣は、東から郭3へと続く城道と郭3から南南東尾根の郭17～19へ続く城道に沿ったものと理解されており、調査でも南西に折れる石垣上部に沿って平坦面を形成することから、城道を補強するための石垣と捉えられる。一方、石垣は西端で明確に途切れており、虎口と一体となった土留めの役割も兼ねていると考えられよう。

以上、倒木による緊急調査であるが、郭3虎口について多くの情報を得ることができた。周山城跡の調査は途に就いたばかりである。中枢部の本丸・二の丸にも虎口空間が認められることから、今後の調査によって虎口の比較も可能となる。継続的な調査成果を積み重ねることで、周山城の価値を示していく必要がある。

(西森正晃)

調査や報告書執筆にあたり、周山城址を守る会、京北文化遺産を守る会、大山崎町歴史資料館館長福島克彦氏、京都先端科学技術大学准教授 中西裕樹氏、石川県金沢城調査研究所長 北垣聰一郎氏などから多くの御協力、御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

#### 註

- 1) 馬瀬智光「IV-8 周山城跡(16A011)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』京都市文化市民局、2018年。
- 2) 熊谷舞子「VI 周山城跡(20A008)」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和3年度』京都市文化市民局、京都市民文化局、2022年。
- 3) 福島克彦「丹波周山城について」『城館史科学』第5号、城館史科学会、2008年。
- 4・5) 註1。
- 6) 註2。
- 7) 『細川忠利自筆書状』年不明4月4日条「(前略)我々しんるい介九良事、日向周山のしろをあげ候ておき申候、明知源七良子にて、母にて候人のためには介九良はいとこにて候よし二候、(後略)」『松井文庫古文書調査報告書7』、八代市立博物館未来の森、2003年。  
大山崎歴史資料館館長福島克彦氏の御教示によると、報告書では「明石源七良」と報告されているが、原文の写しを確認したところ、「明知」と読めるとのこと。介九良について、光秀の娘である玉(ガラシャ)を母とする忠利が親類と認識していることから、光秀の親族である可能性が高い。日向守(光秀)が周山城を一族に預けていたことを示していよう。
- 8) 註1

版 圖



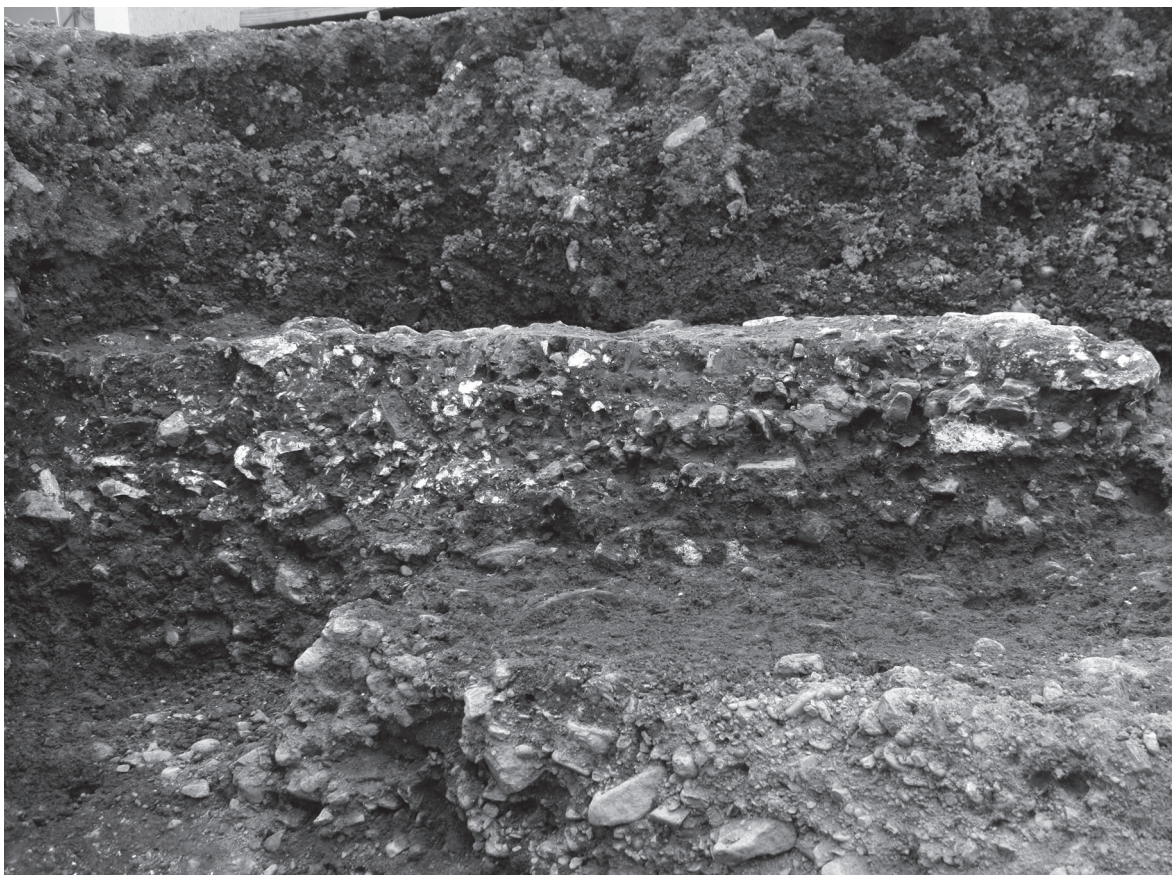


1 3区第一面全景(北東から)

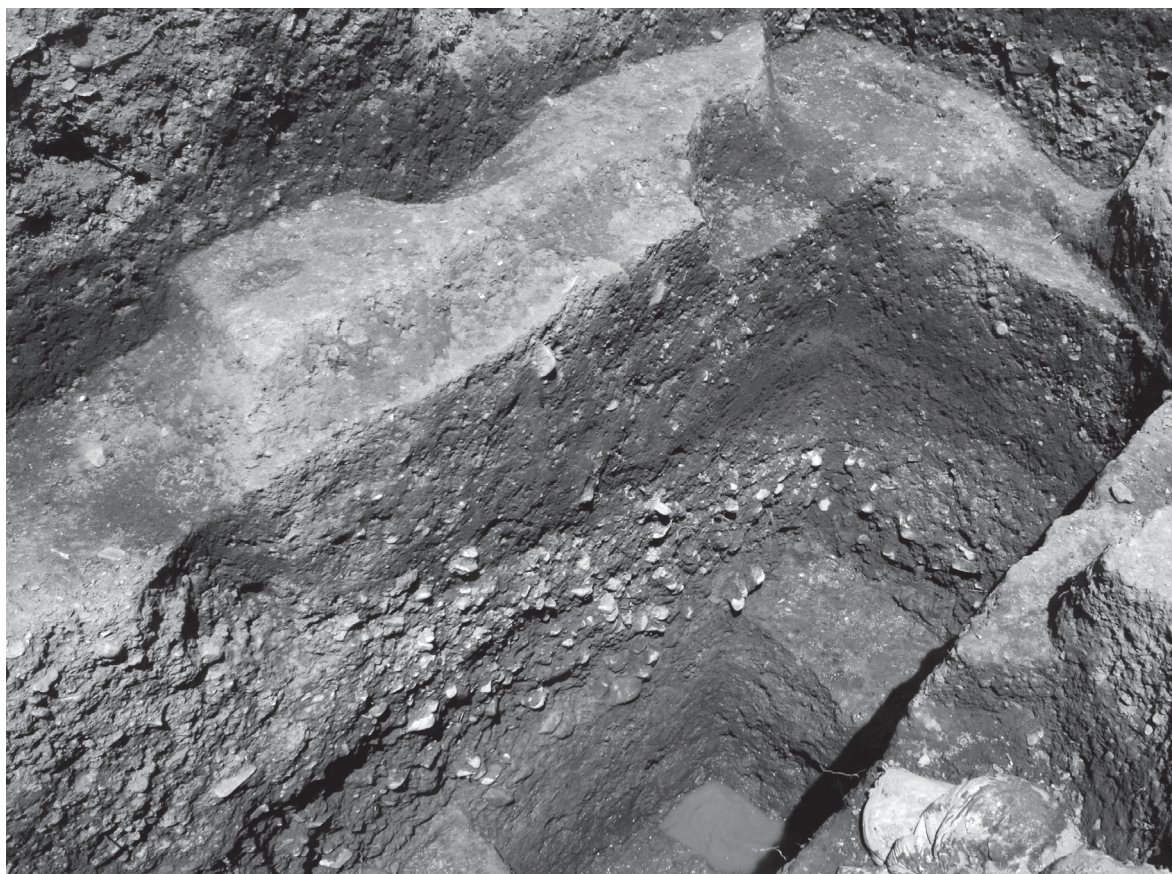


2 3区瓦溜まり検出状況(北東から)

図版2 平安宮大極殿院跡・聚楽遺跡(1) 遺構



1 3区整地土断面(西から)



2 1区西壁断面(南東から)



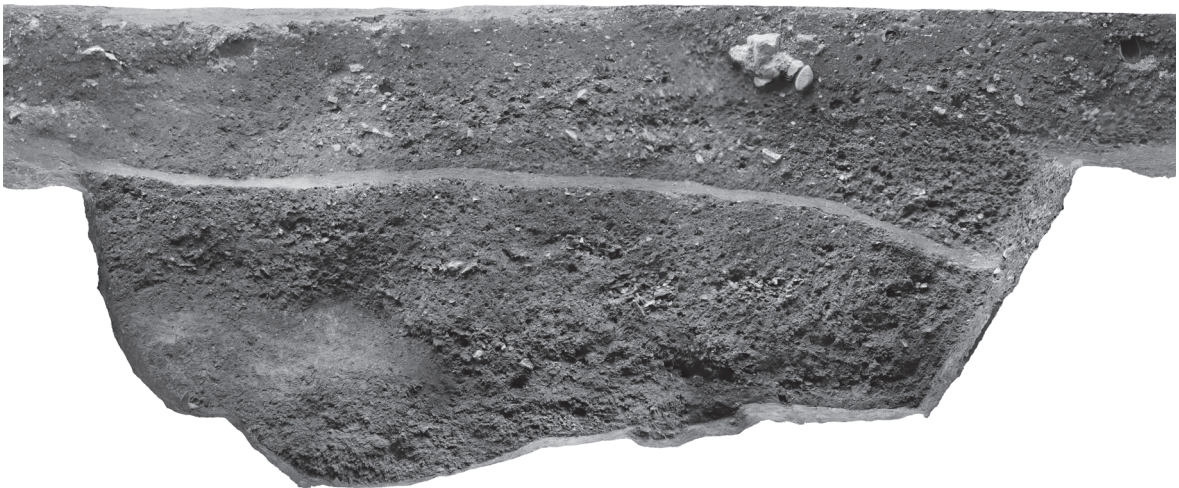
図版3 平安宮大極殿院跡、聚楽遺跡(2) 遺構



1 1区第1面全景(北から)



2 1・2区下層確認トレンチ全景(南東から)



3 1・2区西壁断面 オルソ図面

図版4 円宗寺跡 遺構



1 1区第2面全景（東から）



2 1区第3面全景（東から）